

転生美女世紀末伝説

大岡 ひじき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

北斗の拳での、妄想短編集。

北斗の世界に転生した美しい女性達が、未来を変えたり変えなかったり。

※タグのボーイズラブは保険です。

目次

哀離（一応これが本編）

哀離くタイトル詐欺という悪徳く

真実哉く原作美女の弟に転生しちゃいました、つて甘栗むいちゃい
ましたみたく言うなく

愁く転生したら種モミのジーサン以上にモブだった件

前編

25

後編

35

真く多分、始まらない物語

前編

47

後編

55

うぬの名はく或る女官の拳王様観察記（愛ある脳内ツツコミ）

1

70

2

79

3

85

4

95

5

105

6

114

7

123

8

132

9

141

10

150

11

163

12

170

13

178

その時、彼女たちは						
幕間く15+(プラス)						222
17						210
16						201
15						193
14						184
真・そして私の覇業への道く1						231
真・そして私の覇業への道く2						239
真・そして私の覇業への道く3						244
愉舵・いつか迎える最高の晚餐く1						249
愉舵・いつか迎える最高の晚餐く2						255

哀離（一応これが本編）

哀離くタイトル詐欺という悪徳く

「フツ…確かに美しい。」

この俺にふさわしい美しさだ！」

その男の顔を見た瞬間わたしは…『オレ』は、思い出した。

かつて生きてきた世界と、当時の自分のことを。

そして今いるこの世界が、その人生で子供の頃に読んでいた、漫画の世界だったという事に、それと同時に気がついた。

いや待て。だが何故こいつがここにいる。

『オレ』の記憶が確かなら、『わたし』の前に現れるのは、この男ではない筈だ。

☆☆☆

漫画『北斗の拳』は、戦争によって荒廃した暴力が支配する世界で、一子相伝の暗殺拳・北斗神拳の継承者であるケンシロウが、関わる人々を救っていく物語である。

まあ後半以降からはほぼ身内の戦いとなっていくがそれはさておき。

暴力が支配する世界が舞台であるこの物語で、力無き者は当然のように蹂躪される。

女たちの存在など言わずもがな。

平和な世界ならば幸福をもたらすであろう美貌も、この世界では不幸しか呼ばない。

美しい女は捕らえられ穢され、獣のような男たちの所有物とされる。

時には物品の代わりに売り買いが行われて、所有する男が入れ替わるものの、その扱いは変わらない。

所有者の気分次第で命を落とすことさえ珍しくないのだ。

そんなこの物語に、ユダという敵キャラが登場する。

南斗六星、南斗紅鶴拳の使い手。

裏切りと知略を司る妖星を宿命に持ち、南斗六星拳を崩壊に導く男。

そして、主人公ケンシロウとの友情を育みながらそれ故にその宿敵ラオウに命の期限を切られた同じ南斗六星のレイの、最後の敵となる男。

そのレイが最後に愛した女性であるマミヤの、心と身体に消えない傷を与える男。

この時代の女にとっては忌まわしい『美』に執着するナルシストである彼だが、心から美しいと感じたこの男女の前に敗北を喫し、『自分より強く美しい』と認めたレイの胸でその命を終える。

…といったこれらは、物語の通りに進めば、恐らくは未来に起こりうる事態である。

先述したマミヤという女性は、男勝りな女戦士という役柄として登場する。

その彼女はレイやケンシロウと出会う以前、やはりこの時代の美女の宿命として、男の所有物として一度捕らえられており、その経験が彼女を戦いの道へと進ませるのだが、その彼女を捕らえた男こそがユダだった。

その過去が彼女を死の運命へと導き、その運命からはレイの献身と愛により免れる事となる。

…そして、今『わたし』の前に現れた男こそが、そのユダなわけなのだが。

つまり、ユダが捕らえにくる女性は、物語の通りならば『マミヤ』でなければならぬ。

間違っても

『アイリ』じゃない。

☆☆☆

一応、アイリという女性についても説明しておこう。

物語での彼女は、この時代の美女の不幸を体現する存在である。

結婚を間近に控えた幸せの絶頂の時期に、アイリはそこから叩き落される。

攫われ、穢され、売り飛ばされて、転々と所有者が変わる中で、抗えない運命に翻弄される事に疲れ果て絶望した彼女は、目に薬を浴びて世界から己が光と心を閉ざす。

だがずっと彼女を探していた兄がとある野盗一味の恨みを買った事で、彼に対する人質として探し出され、その結果として兄のもとに戻ると同時に、兄と行動していた主人公ケンシロウの手で、その目にも光を取り戻す流れなのだが、その彼女の兄というのが、先述したレイなのである。

そして彼女を攫った男というのが、実は主人公ケンシロウの兄の一人、ジャギだ。

レイとアイリの両親はその時に殺されていたが、物語では婚約者の行方については語られない。

恐らくはやはりジャギに殺されたか、そうでなければ己の命を惜しんで婚約者であるアイリを見捨てて逃げたのだろうが、どちらにしろ、彼女を守る事はできなかったという事だ。

だがしかしこれはあくまで『北斗の拳』という漫画の中で描かれている『アイリ』だ。

今ここで前世の記憶が蘇って混乱している『アイリ』はまだ14歳、婚約者どころかまだ彼氏すらいない。

更に漫画のアイリは無抵抗で従順、運命に流されて生きる無力な女性（それでも途中から戦うことを知る）だった筈だが、今の『わたし』の趣味は鍛錬、特技は乗馬。

バイクや車の運転もお手の物だ。

まだ幼い時分に、7歳離れた兄に護身術を教えてもらってからすっかり身体を動かす事が好きになって、教えたのは自分のくせに兄が『おまえのおてんばにも困ったものだ』と苦笑いするようになったのはいつからだっただか。

多分今、村でわたしに勝てる男は、もう兄くらいしかいないだろうという程度には、わたしは強くなったと思っっている。

超絶美少女（自称）であるにもかかわらず喪女街道をひたすら突き進んでいる理由は、今の今まで思い出しもしなかったが、前世が格闘漫画好きの（享年）42歳児だった事が性格と行動に影響した結果なのだろう。

けどそれでも、それは村の中だけの話。

兄を含め、達人レベルの技を持つ男たちに敵わないことは、充分に理解できているわけで。

少なくとも今ここでわたしに顎クイしている、真つ赤な髪のド派手な化粧をした男に、わたし程度の腕で勝てるはずがない。

てゆーかなんで『アイリ』なんだよ！

漫画の世界に転生って、普通はチート満載の強キャラになるのが常識だろ！

この後男達の慰みものとなって、一度視力を失って、そこから救い出された後、たった一人の兄を失う？

そんな人生が待つてるとか酷い！

せつかく前世ならハアハアペロペロな美少女に生まれてきたのに、それ故に幸せになれないとか酷すぎる！

美しさの代償なんて言葉で納得できるのは、ブスと前世の『オレ』並のキモオタだけだよドチクシヨウ!!

…ぜえはあぜえはあ。

いやとりあえず落ち着け『わたし』。

「…待つてー！」

抵抗はしませんから両親に手は出さないで!!」

とりあえず、娘を離せとこちらに詰め寄ってくる両親を手で制すると同時に、両親に向かって伸ばそうとした彼の手を、しがみつくようにして抑えて訴える。

漫画と状況が違うとはいえ、これはママヤの場合を参考にしていい事態だろう。

抵抗したが最後、背中から開きにされて人生終了だ。

そんな終わりを現世の両親に迎えさせたくない。

「…いいだろう」

一見清楚で大人しそうな美少女が、自分の目を真っ直ぐに見返してそう告げた事にいくらか驚いたのだろう、ユダはあっさり腕を下げた。

これでいい。

この男は美しい女を集めて侍らせるのを好むが、どれほど美しくとも人形のように従順な女に心を動かされる事は実はない。

そんな女でいては、肌を傷ひとつついた瞬間に捨てられ、部下達に下げ渡された拳銃、死ぬまで犯されるのがオチだ。

彼が真に美しいと思いい心を動かされるのは『強く美しい』者。

芯に強いものを秘めたマミヤ然り、最後の生命の灯火を光り輝かせて彼と戦い勝利したレイ然り。

レイに対してはその嫉妬や憎しみは、己自身消化しきれない恋慕に似た感情の、明らかな裏返しだったではないか。

「…ありがとうございます。」

どうか質問をお許しください。

あなた様は、先ごろ南斗紅鶴拳を正式に継承なされた、ユダ様でいらつしやいますね？」

とりあえず両親には家の中で控えているよう指示して、わたしはその男と向き合った。

客として扱うなら家の中に招いて茶くらい出すべきなのだろうが、この訪問はそんな穏やかなものではない。

下手に出てはつけ上がらせるだけだ。

それにもう少ししたら兄が帰ってくる。

ならば、兄がわたし達を見つけやすい外にいた方が何かと都合がいいだろう。

わたしが原作通りの弱つちい、怯えるだけしか出来ない女であったならば、そのまま連れ去られているのだろうが、そうでないと判ればこの男は、わたしの話くらいは聞くはずだ。

「フツ、知っていたか。その通りだ」

原作登場時に比べると確実に若い綺麗な顔が、わたしに向かってニヤリと不敵に笑う。

幼い頃から超イケメンの兄がそばにいたわたしにとっては、見惚れるほどの代物ではないが。

「ではわたしが、同じく南斗水鳥拳を継承した、レイの妹であるということはお聞きでしたか？」

そのレイの名を出した瞬間、その頬に緊張が走ったのをわたしは見逃さなかった。

だがユダはそれを隠そうとしてか、先ほどよりも口角を上げて、形だけの笑みを深くする。

「勿論知っている、アイリ。」

だからこそ、おまえを手に入れようとここに来たのだ」

わたしが原作通りの『アイリ』であったなら、掌中の珠の如く大事に守られていただろう『アイリ』の存在を、ユダが知る事はなかったろう。

だがアクティブに動き回っていた今のわたしは、兄の修業仲間や友人には大概顔を知られている。

わたしの事は、何度も兄を訪ねて行った南斗の修業場で見かけていたのだろう。

多分、修業中のレイの技に見惚れた己を恥じ、レイに憎しみを抱いた出来事の、今は直後あたり。

妹のわたしを奪い取る事は、彼にとってはその意趣返しという意図に違いない。だが。

「まあ……」

そんな情熱的な告白を受けたのは初めてですわ。

不束者ですが、喜んでお受け致します。

では慣例通り、交際期間を1年、婚約期間を1年設けた形にして、結婚式はわたしが16歳となる2年後という事でよろしいでしょうか？」

その程度の浅い考えなど遠くのお空に飛ばす勢いで、わたしは爆弾を投下した。

恥ずかしげに頬に手を当てるフリをして軽く揉み、白い肌に薄っすらと血の気を帯びさせる。

そうして少しだけ困ったように微笑めば、そこにいるのは突然のプロポーズに戸惑いながらも、嬉しげに頬を染める可憐な美少女の姿だ。

「え……結婚？いやちよつと待て、それは」

違う、と言おうとするユダの言葉を遮り、今度は悲しげに目を潤ませてその顔を見上げる。

「…違いますの？」

まさか14歳の小娘を愛人に据えようとか、そんな鬼畜な事を仰るおつもりではないのでしょうか？

そんな事をすれば世間からロリコンの謗りを受けて、社会的に人生終了のお知らせですわよ？

それにそんな事は、絶対に兄が許しません。

兄の前でそんな事一言でも仰ったら、その瞬間にあなた、兄の手で三枚おろしにされましてよ？」

ユダがマミヤを連れ去ったのは彼女が二十歳となったその日だった筈。

つまり、ユダは決してロリコンではない。

そんな言いがかりをつけられるのは本意ではない筈だ。

それに…

「…けれど正式に婚約が成されたとなれば、その兄とて文句のあろうはずがありません。

むしろ兄として友として、あなた様を遇する筈。

なりたくありません？

レイの『義弟』に？」

ユダがレイに憎しみを抱くのは、叶わぬ相手に心を奪われてしまったが故。

だがその想う相手に、形は違っても大切なものとして認識される事が叶う。

身を焦がすほど激しい恋を胸に秘めた者が、その誘惑に、はたして抗し切れるだろうか？

「アイリ！俺と結婚してくれ!!」

わたしの悪魔の囁きを耳にしたユダは、わたしの手を取ると、それを己が胸に引き寄せて、言った。

「はい、ユダ様!!」

こうして婚約は成された。

目の前に現れた男と、思い出した前世の知識。

そこから導き出される、己の運命。

それらを考え合わせた結果、わたしは短い時間の中で決断した。

この機を逃せば、わたしは原作通りジャギに攫われ、兄はわたしを探さず中、修羅の世界に身を投じる。

そうして巡り合ったケンシロウとの友情が、ひいてはその死を運命付ける事になる。

つまりわたしを探さず事態にならなければ、兄が命を落とす事はないのではないか。

何年後かは知らないが、その時婚約している筈の男は、ジャギの手からわたしを守れなかった。

そもそも見も知らぬそんな弱い男に操を立てる気などない。

この男なら、きつとわたしを守れる。

ならば、男の所有物として生きる結果が同じだとしても、この男の方が306倍マシだ。

だからその手を取った。

この世界では、美しい女はそれだけで不幸を宿命づけられる。

だがそんなのは間違っている。

せつかく超絶美少女として生まれ変わったのだ。

わたしは、絶対に幸せになつてやる。

☆☆☆

さすがは裏切りの星と呼ばれる妖星の宿命を持つ男だった。

レイに義弟として可愛がられる為に、ユダはきつとわたしを最低限でも大事にしてくれるだろうというわたしの目論見は、意外な形で裏切られた。

「アイリ…意志の強さを表すように光り輝くおまえの瞳は、ダイヤモンドより美しい宝石だ。

いや、おまえの存在こそが至宝だ。

空に輝く太陽だ。

ああ、アイリ、俺の女神。

その瞳に俺を映してくれ」

「やめれ気色悪い！」

「ああ…その冷たい、軽蔑しきった視線がたまらない。

もっと睨んでくれ。そして罵ってくれ。

いや、いつそその足で俺を踏んでくれ」

あの性格だし、隠れMなのはわかってた。

それにユダに捨てられたら、一気に転落人生なのもわかってたから、彼がわたしに飽きないよう、その辺を軽くつついた態度で、気をひくようにしていたのは確かだ。

だが、どうやらわたしはやりすぎたらしい。

ジャギの村への襲撃も無事回避され、結婚式を挙げる頃には、ユダはレイへの淡い想いなどどこへともなく消しとばして、わたしに夢中になっていた。

それでもはや隠す事もなくなった堂々としたドMとして、今もわたしの足元から、期待を込めた眼差しで見上げている。

「なんだ、またやってるのかユダ。

アイリは優しい子だ。あまり困らせるなよ」

「ああ、アイリは優しい。この世の天使だ。

アイリが罵るのも踏むのも、俺に対してだけだ。

その榮譽を与えられる事を、俺は誇りに思う」

「助けて兄さん!!」

わたしを、主に社会的な死から!!」

わたし達のそんな様子を見て困ったような、それでいて優しい笑みをそのイケメン顔に浮かべるレイは、先日婚約が決まったばかりだ。

商人の護衛を頼まれて同行した先の村で、一目惚れをして数ヶ月かけてようやく口説き落とすとしたという、わたしの義理の姉になる女性の名前は、マミヤというらしい。

…今のわたしは、多分

この世界で一番幸せな美女だろう。

真実哉く原作美女の弟に転生しちゃいました、って甘栗むいちゃいましたみたく言うなく

ある日突然気がついた。

あ、これ北斗の拳じゃん、と。

つかヤバイ。まじでヤバすぎる。

漫画『北斗の拳』には、主人公ケンシロウと旅を共にするバットという少年がいる。

そのバットの育ての親である老婆が野盗に殺され、彼同様その老婆に育てられていた身寄りのない子供達の、面倒を見てくれる先を探す必要があり、老婆を殺した野盗一味をケンシロウが壊滅させている間に、それを申し出ていた豊かな村があった。

だがその村は豊かである事で野盗たちに狙われており、その野盗たちを退治する事が、子供たちを引き取る条件だった。

ケンシロウが村に入った時、かつて失った恋人と瓜二つの女性が登場する。

彼女の名はマミヤ。

この村は亡き彼女の両親が作り上げた村で、彼女は村のリーダーとして、戦う術を身につけていた。

さらにそこにレイという男が加わり、最初は村を狙う野盗に送り込まれた彼が紆余曲折の末ケンシロウについて、彼ら3人は野盗との、そして更にその先へと続く戦いに踏み込んで、巻き込まれていくのである。

まあ、それはいずれ未来に起こる出来事なわけで。

物語の通りに進むならば、村は野盗たちに蹂躪される事なく、この先も存在し続けるのだが、そこに至る道筋に犠牲者が出なかつたわけではなく。

なにがヤバイって、ケンシロウたちが野盗と本格的にことを構えるきっかけになる、その犠牲者が俺だって事だ。

俺の名前は、コウ。

この村の創始者夫婦の息子にして、村のリーダーであるマミヤの弟だ。

☆☆☆

さつき思い出した前世の記憶では、少なくとも俺は50歳までは生きていた筈だ。

なんで死んだかまでは思い出せないが、今の自分には関係ない事だから気にしないことにしておく。

それよりも未来の話だ。

現在、俺は10歳。

両親は健在で、9歳年上の姉は、この村だけじゃなく近隣の村からも縁談がひっきりなしに持って来られるほど、評判の美女。

俺の記憶が確かで、この世界が北斗の拳で、俺の姉があの話の中のマミヤで、弟の俺が同じくコウだとするなら、うちの姉は20歳の誕生日にユダに連れ去られ、止めようとした両親がその時彼に殺される。

マミヤは数日後、ポロポロに負傷した姿で村へ戻ってくるが、それ以降は女としての幸せを諦め、女戦士としての道を歩き始める。

そして俺はその後、レイの裏切りにより仲間を失った牙一族に、報復としてとっ捕まってぶった斬られて殺されるってわけだ。

年齢について明記はされていなかったが、死んだ時のコウは少年として描かれていたから、恐らくは13〜15歳の頃の話になるだろう。

ならばその頃マミヤは22〜24歳くらいとなっているから、拉致イベントを考えても計算は合う。

くは、最長でもあと5年の命とかwww

いや、草生やしてる場合じゃない。

「どうしたの、コウ?」

畑にまく種モミを握りしめたまま固まってる俺に、姉さんが声をかけてきた。

その声を聞いた瞬間、わけがわからなくなって、気がついたら涙がポロポロこぼれていた。

姉さんは驚いた顔をしたものの、次には頭を撫でてくれた。

「…姉さんっ」

いろんなことが怖くなって、今日の前にいる姉さんにしがみつくと、もう我慢できずに大声で泣いた。

姉さんはおっぱいが大きかった。

・・・

俺はモブキャラだ。

多分物語を変える力なんてない。

きつと俺が死ぬのは避けられないだろう。

だけど姉さんは…マミヤにだけは、幸せになってほしい。

マミヤは優しく、強く、美しい。

そして何より

おっぱいが大きい

繰り返そう。

おっぱいが大きい

大事なことだからもう一度言おう。

おっぱいが大きい

その姉さんが幸せになれないなら、それはこの世界が間違ってる。

だっておっぱいはこの世の絶対正義だから。

俺が死んでも、この魂は姉さんに残そう。

そしてこの身は、姉さんの幸せの為に捨てよう。

…なんかラオウと戦う前のトキのセリフみたくなってるけど。

パクリとか言うな。

……………それはそれとして、姉さんの幸せとは何だろう。

そう思っただけ聞いてみたら、マミヤはにっこり笑ってこう答えた。

「そうね…お父さんやお母さん、そしてコウがそばにいてくれて、笑っていてくれるのが一番幸せよ」

うん、それが一番ハードル高えわよ姉さん。

・・・

つまりだ。

マミヤが女としての幸せを諦めるのは、ユダに攫われて心と体に、

消えない傷を負わされて以降。

ケンシロウと出会い、ほんの少しだけ女としての感情を取り戻しはするものの、自身に真っ直ぐ向けられるレイの無償の愛情には、どこか恐れのようなものを感じていた筈だ。

まあ、童貞としてその気持ちもわからなくはない…つてやかましいわ前世はともかく今世はまだ10歳だし当たり前だわ言わせんな。

それはさておき決して返ってこないだろう一方通行の思慕、いわゆる片思いって、開き直れば相手の気持ちを考えずに済む分、責任なくて気楽なんだよ。

それに慣れると、自分に向けられる強い愛情を自身の中で受け止めきれなくなるし、自分にはそんな資格がないと思ってる事もあって、ママヤはあんな反応になってたんだと思う。

だからまずは、ユダに攫われる事だけはなんとしても阻止しよう。あの出来事による心の傷さえなければ、ママヤはもう少し恋愛に向きになれるだろうし、そうなれば俺や両親が死んでしまっただけも、その時に寄り添う相手がいれば、心の傷もいつかは癒えて、最終的には幸せになれる。

その為には、二十歳の誕生日を迎えるその前に、ママヤを守れる強い男と娶せるのが、一番の選択ではないかと思うのだ。

ひよっとしたらそれで、両親も殺されずに済むかもしれないし。俺が戦う力を身につけるのもアリだとは思いますが、ユダが現れるその日まであと1年もないことを考えれば、あまり現実的ではない。

だが、『戦う力を身につける為に、師事する先生が必要だ』という理由をつければ、強い男をママヤと出会わせる事はとても自然な形になる。

よし、まずは師匠探しをしよう。

『じゃあ、姉さんを守りたいから強くなる』

と言ったら、ママヤは一瞬ぼかんとしたあと、

『かつ可愛い〜っ!!』

と叫んで抱きついてきた。

とりあえずおっぱいで窒息して死んでもいいと思ったのは一生俺

だけの秘密にしておこうと思う。

次の日、旅の行商人を通じて『強い人を紹介してほしい』という内容のことを、近隣や少し遠くの村まで広めてもらうことにした。

「身を守る術を学ぶ事は、今の世では必要だと思っけれど、強くても怪しい人を村に引き入れるのは嫌だわ」

とママヤは少し表情を曇らせていたが、これも姉さんを幸せにする為なんだ。

それに人選はしつかり行うつもりだから安心して。

そう思っていた後日。

行商人が護衛として連れてきた、その男を見て愕然とした。

え…待って？

確かにこれ以上の男とか居ないけど、この人の登場って今じゃなくない？

「おまえがコウか。話は聞いている。

この村を、家族を守る為に、戦う力をつけたいそうだな。

立派な志だ。おれでよければ力になろう」

そう言って微笑んだ、無駄にツヤツヤの長い黒髪を靡かせた細マツチヨの男は、義の星の宿命を持つ男、南斗水鳥拳のレイだった。

…うわイケメンオーラ半端ねえ。

……って呆けてる場合じゃない！

時期は確実におかしいけど、レイがこの村に入ってくる目的って、確か野盗集団を引き入れる為とかじゃなかった!?

て事は、俺の死亡フラグ前倒し!?

ああああ!!そりゃ短い人生と諦めて死ぬ覚悟はできてたけど、それ今じゃないいいいい!!

「…すまん。怖がらせてしまったようだな」

どうやら内心の動揺が滲み出て、涙目になっていたらしい。

けど、そう言っつて俺の顔を覗き込むその表情には、本当にすまなそうな色しか見えなかった。

騙されてるかもしれないけど、どう見ても原作登場時のいかにも悪人なレイの顔じゃない。

むしろケンシロウとの友情を育んでいた時の顔に近いが、それよりも表情は柔らかい気がする。

時間軸的なことを考えると、レイの妹のアイリがジャギに攫われるより前なのではないだろうか。

だとすれば、心配する事はないかもしれない。

「…ごめんさい、そういうんじゃないんですけど。」

あなたみたいな強そうな人を見たのが初めてだったから」

とりあえず滲んだ目頭を拭いながら、もつともらしい事を割と適当に言ったのだが、

「…思ったよりも見込みがありそうだな。」

その年齢で、相手の強さを見極めるだけでも、なかなかのものだと思っぞぞ」

と何故か変な方向に誤解されてしまった。

「ごめん、これ単なる原作知識で、ある意味ズルだから。と、

「ちよつと！」

私の弟を泣かせるなんてどういうつもり!？」

俺を背中から抱きしめながらママヤがレイを睨みつけた。

後頭部に当たる柔らかい感触が気持ちいいです姉さん。

「あ、違うんだ姉さん。なんでもないから」

そう言っつて見上げたママヤの表情には、納得のいかないという表情が浮かんでいたけれど。

「…ママヤをじつと見つめるレイの表情はそれどころの騒ぎじゃなかった。」

引き締まった頬に血の色が浮かび、目も僅かに潤んでいるように見える。

あ、これ完全に、一目で恋に落ちましたな。

そうだろうそうだろう。

ママヤは美女だ。そして巨乳だ。

そして、レイにとっては運命の女性だ。

「俺、この人がいい。」

この人ならきつと…俺のこと、強くしてくれる」

まだレイを睨んでいるマミヤを見上げて、そう告げる。
惚れた女には命懸けの献身を捧げる男だ。

この様子ならレイは、マミヤを大事に守ってくれる。

「おれの名はレイ……よろしく頼む」

そう言ったレイは、一応顔こそこちらへ向けていたが、目はしっかりとマミヤの方を向いていた。

・・・

俺の稽古は体力づくりから入った。

レイはずっと滞在できたわけではなく、短くて3日、長くて一週間ほどうちの村に滞在しては、用の済んだ行商人たちの護衛をして自分の村へ帰っていくのだが、その間に実力に見合った鍛錬方法を提案して、『次に会う時には、これができてるように』と小さく宿題を出していく。

レイの指導は適切な上丁寧で、俺でも入っていきやすかった。

「7つ下の妹がいて、これが結構おてんばでな。

子供の頃、せがまれて護身術を教えていた。

こうしていると、その頃のことを思い出すな」

などと、少し嬉しげに語るレイは、やはりその目に濁りなど見えな
い。

てゆーかアイリ、子供の頃はおてんばだったのか。意外。

それはそれとして俺の鍛錬の合間に、レイは結構どストレートにマ
ミヤにアプローチするのだが、どうもマミヤはレイに冷たい。

これまで数多の求婚を蹴ってきた経緯があり、両親などは早く結婚
して安心させてほしいとか密かに言ったりするし、その両親の目か
らも、レイは合格物件であるようなので、早くまとまってほしいとこ
ろなのだが。

「やあ、マミヤ。

今日のそのドレス、よく似合っている。

やはり君には淡い色も似合うな。

白のドレスだけは、おれの花嫁となるその日まで取っておいて欲しいところだが」

「な、何を調子のいいことを言っているのよ！

というか、あなたの為に着たわけではないわ！

勘違いしないでちょうだい!!」

……なんだただのツンデレか。

☆☆☆

そうして、レイが俺の指導を始めてから半年ほど経ったある日のこと。

「…そういえばこの村は、養蚕も盛んだと言っていたな。

今の時期でも製品があるならば、是非見ていきたいところだ」

「いいですよ。案内しますから、これ終わったら一緒に行きましょう！

…姉へのプレゼントですか？」

ちよつと揶揄うくらいは、弟の立場として許されるだろう。

だが、俺の言葉に少しは動揺するかと思っただけ、レイは、ありがとうと小さく言った後、なんだか嬉しそうに微笑んだ。

「…いや。妹にな。

もうすぐ結婚するので、最高の花嫁のケープをプレゼントしたいと思っっている。

この村でなら見つけれそうさ。

あのおてんばでは、見初めてくれる者など居ないと思っていたが、蓋を開けてみれば最高の相手を捕まえてくれた。

…まあ、性格に難がないとは言えないが、その手綱をしっかりと握っているあたり、あれで相性はいいのだろう。

2年の婚約期間は長すぎると言いながらも、手を出さずに守ってくれているようだしな。

あの男になれば、妹を安心して任せられる」

………ああつ！そうだった!!

レイが、野盗と手を組む前にママヤに惚れさせればフラグ折れると思っただけとそれじゃ足りない！

確かレイの妹のアイリって、結婚式の前に村を襲ってきたジャギに、両親を殺されて自分は攫われ、その出来事がレイを修羅の道へと

進ませるのだ。

いかにマミヤに惚れていようと、大事な妹が賊に攫われて、その後
にこの村でマミヤと幸せに暮らしてくれる筈もない！

絶対、その行方を探す旅に出てしまつて、マミヤを守る男がまたい
なくなる！

「け…結婚式を挙げるのは、いつですか？」

「ん？」

アイリの16の誕生日だから、二週間後だ。

済まないが、おれは来週にはここを発たなければならぬし、それ
から2ヶ月はこちらへ来る事ができないと思うから、たつぷり課題
を用意しておくぞ？」

「いやいやいや！」

そういう事なら今すぐ行きましょう！

そして一刻も早く持つて帰りましょう！！」

アイリさんが攫われる事になるタイミングはよく覚えていないが、
なんか花嫁のケープとかめつちやフラグな気がする！！

だって、原作のレイが確かそんなもの持つて歩いてたハズ！

賊が村を襲撃するのがレイ不在の間なわけで、すぐ戻つても間に合
うかはわからないけど、少なくともレイが考えるタイミングで戻つた
ら絶対に間に合わない事だけは確かだ！

「コウ、どうしたの!？」

なにかこの男に無茶な課題でも出された!？」

「あー姉さんちようどいいところへ!!」

レイさんの妹さんが二週間後に結婚するんで、この村で花嫁のケ
ープを調達したいんだって！

一緒に行つて選んであげてくれないかな？」

間に合う可能性は半々だ。

間に合わなくてもせめてマミヤとの絆を強めておくべきだと思い、
俺はこの件をマミヤに丸投げする。

大人2人がえつて顔をして俺を見つめ、しばし固まった。

…先に復活したのはマミヤだった。

「…一週間後ですって!？」

あなた確か昨日、この村を発つのは一週間後と言っていたじゃないの。

あちらの村まで、行商の馬車だと途中の寄り道を考えたら、一週間にかかるのでしょうか？

そんなギリギリに持って帰って、ドレスとデザインが合わなかったらどうする気なの!？」

刺繍とか刺し直すのも日数がかかるのに、妹さんの一生に一度の大切な日を、不本意な衣装で迎えさせたら、あなた一生恨まれるわよ!!

本当、男の人ってこういう事に無頓着なのね!

いいわ、私が一緒に最高のものを選んであげる!

そして調達したらすぐに私のバイクで、あなたの村まで送ってあげるわ!!」

まさかの女性視点からのダメ出しである。

そのまま手を掴まれ、村の絹の工房へ引っ張っていかれたレイの目が、ちよつと涙目に見えたのは気付かなかった事にしようと俺は固く心に誓った。

・・・

「正直、大きく手直しする必要はなかったみたい。

若い花嫁さんだから、もつと華やかなドレスなのではないかと思っ
ていたら、結構シンプルなデザインだったの。

けどケープのデザインに感銘を受けたお針子さんが、襟元の刺繍を
少し、似たようなイメージで刺し直すんですって。

あれに、私とレイが選んだケープをリアヴェールにして被れば、
とても神聖なイメージになるわ。

また、レイの妹さんが、すごく綺麗な子だったのよ。

旦那さんになる人には会えなかったけど、彼は幸せ者ね。

結婚式まで滞在して祝って行ってくれと引きとめられて、ちよつと
心は動いたんだけど、滞在中のお世話をかけるのも何だし、何より結
婚式に参列できるような服を持ってきていないからと断って、断腸の
思いで帰ってきたわ!」

2日後、自分のバイクで村に戻ってきたマミヤがうつとりと語った話を聞く限り、レイの帰還はどうやら間に合ったらしい。

まあ、その結婚式が開かれる事になるかは判らないが、アイリさんが攫われるフラグは折れたと、安心していいんじゃないだろうか。

☆☆☆

そしてとうとう運命の日、マミヤの20歳の誕生日がやってきた。その日、恐れていた赤い髪の男が、遂にこの村を訪れた……レイに伴われて。

いやいやいや、お前何してくれちゃってんの!?

せつかく破滅フラグ折れたと思ってたのに、これもう運命の修正力には逆らえないってやつ!?

思わず涙目になった俺に気づかず、レイがイケメン顔を微笑ませて言う。

「マミヤ、コウ、紹介しよう。」

妹のアイリと、その夫のユダだ」

……………はい?」

見れば、そのド派手な赤い髪の男の蔭に、隠れるように側に立つ、サラサラストレートの金髪が眩しい、綺麗な女の子が微笑んでいる。

…多分だが姉さんより胸は小さい。

つか、え? アイリの夫がユダ?

なにこの珍妙なカップリング??

俺が混乱して固まってる、アイリがパツと笑顔を輝かせた。

俺の隣に立つ姉さんに向かって駆けてきて、その胸に飛び込む。

「マミヤさん、お久しぶりです!」

お誕生日おめでとうございます!!」

美女と美少女が抱き合う光景とか、もう眩しくて目が潰れそうだ。

誰だバルスとか唱えたの。

なんかアイリさんが『うわ超柔らけえ』とか呟いた気がしたがきつと気のせいだ。

その横に、違う意味で目が潰れそうな派手男が、やはりマミヤに声をかける。

「貴方がママヤか。」

レイやアイリから話は聞いていたが、確かに美し……ぐっ!!

ア、アイリ、なんでいきなり俺の手の甲を抓るんだ?」

ギギギ、と音が鳴るような動きでユダが見下ろす先に、上目遣いで睨む彼の新妻が、押し殺したような低い声で言う。

「…レイの奥さんに一目惚れでもしたわけ?」

それを聞いてママヤが『奥さんだなんて、まだ、そんな』とか言つて頬を赤らめたが、レイのプロポーズを受ける事にしたと、俺と両親が夕食の席に聞かされたのはまさに昨日の話だ。

しかし…アイリのその言葉は、ちよつと無視できない。

実際そうであれば、ユダはママヤを奪い取ろうとして、結局は悲劇が起きるのではないか。

だが、次に起きたのは、こらえきれず吹き出したような、ユダの笑い声だった。

「…ククツ。そんなわけがないだろう。」

さすがにレイが選んだ女性だと思つていただけだぞ?

フツ……なんだ、ヤキモチか?

俺は、こんなにアイリに夢中だというのに。

まあ、アイリはそんなところも可愛いがな。

ところで……」

「…なに?」

「俺は、抓られるよりも踏まれる方が好」

「滅ベド変態!!」

「ほおすとおうっ!!」

次の瞬間、アイリのローキックを脛に受けたユダはその場に崩折れたが、その表情にはありありと歓喜が表れていた。

…なんだこの2人の関係性。

後で話を聞いたところ、結婚式は無事に執り行われたらしいが、その前に野盗の襲撃はやはりあったそうだ。

それも、結婚式の前日の話だそうで、それが予期せず行われたものであれば、結婚式どころの騒ぎではなかったのだが、実はアイリとの

婚約期間中、ユダがそのあたり一帯のチンピラを掌握しており、『悪そうなやつは大体友達』状態になっていて、新参の野盗集団である『仮面の男』の一味は、現れた時から目をつけられていたらしい。

その動向を逐一報告されて、自分でも頭目の『仮面の男』に接触してみたところ、よりによって婚約者の村に襲撃をかけようと計画している事を知り、酒で酔わせて聞き出した襲撃時には、レイと2人準備万端で待ち伏せしていたとの事だ。

「な、なんだテメエ、裏切りやがったのかよ!？」

「裏切りではない、これは知略だ!そして愛だ!!」

そう言つて『仮面の男』を背中から開きにする光景は壮絶なものであったという。

「俺のアイリに手を出そうとしたのだから、当然の報いだ。」

…だがあの男、ここに来る以前、南斗孤鷲拳のシンに接触していたという情報が入っている。

彼奴は北斗に最も近い男、もう少し調べる必要があるかな

うわあ、ユダさんメツチャ有能。

そしてアイリさんすげえ愛されてるし。

...

「ねえ、コウ君?」

「はい?」

「…あなたもこの村も、勿論ママヤさんも、きっとレイが守ってくれる。」

…けど念の為当分は、村の外に一人で出ないようにしてくださいね。

そう…村の外の、掃除が済むまでね」

レイの妹のアイリさんが、そんな謎めいた言葉をかけてきてから数日後、村の周辺を根城にしていた野盗集団が、やはりレイとユダによつて壊滅させられた。

…完全にみじん切りにされてたんで分かりづらかったが、例の俺の死亡フラグ、牙一族で間違いないぽい。

それからすぐにママヤとレイは結婚式を挙げ、2人の愛のセレモ

ニーを見届けた後、ユダとアイリさんは自分の村へと帰っていった。姉さんは、きつと幸せになるだろう。

俺もいつか、このひと達のような幸せをつかめるのだろうか。

とりあえず、嫁さんになる人は巨乳美人がいい。

☆☆☆

…これは後日、義兄レイと、その義弟であるユダから聞いた話だ。

これからの乱世に向けて南斗の立ち位置を考えようと、南斗六星拳を招集した『南斗サミット』が行われた。

但し、『最後の将』は事情により欠席、南斗孤鷲拳のシンも、北斗とのトラブルで身を隠しており連絡がつかず欠席で、六星のうちの四星のみで行われたそうだが。

議題は勿論、覇権か和平か。

この時勢に覇権をと主張する、南斗鳳凰拳サウザーに対して、和平派の南斗白鷲拳のシユウは、

「私たちの子が平穏に暮らし、その平和は父たちが作り上げたものだと、誇れる世界を作っていききたい」

と語り、新婚のレイは勿論同意したそうだ。

途中、ユダがどうやら流されかけ、フラフラ覇権派につきそうになつたものの、

「オイタをしてアイリに叱られたいのだろうが、そうなつたらアイリは、叱る前におまえを捨てるぞ」

とレイに言われて、改めて和平派につくと宣言したらしい。

アイリさんすげえ。

こうして、和平派が多数を占めた南斗サミットは、サウザーの『リア充滅べ』の声とともに閉会したという。

新たな時代が幕を開けようとしていた。

愁く転生したら種モミのジーサン以上にモブだった件

前編

物心ついた時には、自分が異世界に転生したと気がついていた。

けど、前世の多分2世紀は前くらいの、中国っぽい雰囲気の世界なんだとしか認識していなかった。

その人と会うまでは。

あたしの祖父は、あたしが暮らすこの村を作った人だが、その祖父が生きていた頃から、孫のあたしが割と持て余されてる事は知っていた。

あたしは、母が野盗に攫われ、取り戻した時に身籠っていた子供だったからだ。

その時恋人を野盗に殺された母は、連れ戻した時には気が触れており、あたしをその恋人との間の子だと思い込んだままあたしを産み、数年前に、人目に触れぬよう閉じ込められていた地下の部屋から逃げ出して、崖から落ちて死んだ。

その頃既に病に冒されていた祖父はそこで自身の死期を悟り、いずれはひとり遺されるあたしの身を案じて、自分の親友だった男の息子に村長を任せる代わりに、あたしの事を頼むと言って亡くなったらしい。

あたしは村長となった彼の息子の婚約者となり、日々すくすくと成長していった。

4つ年上の婚約者とは兄妹のように育った為、恋愛感情みたいなものは持ちようがなかったけど、それだけにお互い気負うことのない、いい関係を築けていたと思う。

：村の創設者の孫で次期村長の嫁（予定）であるあたしが、村の名産として化粧品作りを提案して、それが軌道に乗るまでは。

化粧品と言っても、植物の蔓から抽出して作った化粧水や整髪料、或いはやはり植物の種の胚をすり潰してオイルで練った白粉とか

いった、おままごどのような拙い商品ではあったが、物のない辺鄙な田舎のこと、そんな物でも近隣の町や村の女性たちの、心の琴線には触れたのだ。

それは元々、あたしの母のように野盗の被害に遭い、命は助かったものの婚姻の機会を奪われた女性たちが、自ら活計を立てる手段として提案したものだ。

だが評判になったそれは生産量と作り手を徐々に増やしていき、村の女性たちの殆どがそれに携わるようになってくると、村が豊かになると同時に、女性たちの発言力が大きくなった。

となると、それを面白く思わない年配男性たちから、あたしは密かに疎まれるようになったわけで、その空気は次第に婚約者父子の、あたしへの感情も変えていった。

元々持て余された子供だったあたしは、結局最初の立ち位置に戻ったわけだ。

もつとも、それはあくまで男性視点での立ち位置であり、職と収入と立場を得た女性たちにとっては、あたしは英雄だった。

「すまない、ミサキ。

おまえが悪いわけじゃないのはわかってる。

だけどおまえとの婚約、解消させてほしい」

そのあたしが特に親身になって仕事を回していた子持ち女性に手をつけて孕ませたという、兄とも思っていた婚約者である彼にそう言われて、祖父と暮らしていた家にあたしが戻ってから3日も経たない頃に、養父であり義父となるはずだった村長に連れられて来た男性は、年の頃は30代前半、光を失った両目の、獣の爪にでも引き裂かれたように残る傷が、未だ生々しい状態だった。

「この長老の家はワシが管理していたし、キミは引き続きうちに住むだろうし、住む者がないと傷むと思つて、彼に貸すつもりでいたんだ。まさかタイキの奴が勝手に婚約解消などと言い出すと思わなかったから。

なあ、ミサキ。頼む。

キミの住むところはこちらで手配するから、もう少しうちに居て、

ワシの顔を立ててここはまだワシに貸しといてくれんか」

そう言つて、義父になる筈だったその人が、まだ16の小娘であるあたしに両手を合わせる。

こないだまでは、長老との約束がなかったらとつくに放り出してるとか、村のオッサン達の前で、これ見よがしに言つてたくせに。

というかここことかそことか最近急激に育つてきたあたしを、変な目で見始めてるの知つてましたからね。

息子の嫁になる娘だからと自重してただろうけど、その枷が取つ払われたらどうなるかわかつたもんじゃないと思つたからこそ、さつさとあの家を出たわけですから、戻れつて言われても困ります。

「いやいや、婚約関係でなくなったなら、あたしがそちらのお宅に厄介になる理由もないでしょう。」

今までお世話になりました。

こちらのかたの事は、新村長であるあたしが責任持つてお預かりいたしますので、どうぞご心配なく」

「はっ。」

「いや、だつてあたしを最終的に自分の娘にする約束で、祖父に村長を任されたんですよ？」

その約束が反故になつたんですから、本来なら継ぐ筈だったあたしに返してもらうのが道理ですよね？」

大丈夫、今のあたしなら充分やつていきますから。

女性たちが村の収益を担うようになって肩身が狭くなつた頭の固いオッサン達はさておき、今や村の稼ぎ頭である女性たちは、ほぼ全員あたしの味方です。

彼女たちの協力があれば、立派にこの村を治めていきます。

それに、母屋に住んではいなくても畑は使つてたし、家畜小屋だったところを改装して作業場にしたの知つてますよね？」

職場を奪えばまた、女性を家に閉じ込めて威張り散らせる生活が戻つてくると、オッサン連中に唆されたんでしょう？」

けどそこで生産されてるあれらが村の名産として利益を上げてる以上、その利益を損なう背任行為と認定されてもおかしくなかつたん

ですよ？

その場合、巻き込まれたこのかたにだつて迷惑がかかるところだつたじゃありませんか。

そうなる前にあたしがここに住み始めていて本当に良かった。

タイキには是非、婚約を破棄してくれてありがとうとお伝えください。

ええ勿論、今まで育てていただいた恩もありますから、あなた方父子をこの村から追い出すような真似はしませんよ。

あなた方のあの家で、今まで通り暮らしていつていただいて結構です。

もつとも収益は村長のあたしのところに集められて、皆さんの働きに応じて然るべく分配しますから、今までのように搾取して甘い汁を吸う事はできなくなりますが、父子ふたり、質素に暮らしていけば生活できますよね？

あ、もうすぐ4人、いや5人になるんですけどっけ。

お疲れ様でした、前村長殿」

一方的に言つて、なにやら喚き始めた養父だったオツサンを無理矢理外に追い出す。

少し欲を出してしまいあたしから婚約者を奪つた形になった、あたしの代わりに嫁入りすることになる彼女には申し訳ないが、彼女を仲間外れにしないでやって欲しいと他の働き手たちに既に手を回してあるから、これまで通りあたしの下で仕事はしてくれるだろうし、その収入があればオツサンはともかく、夫婦と子供ふたりなら、暮らしに困ることは無いと思う。

そんなあたしたちのやり取りを聞いていた、その場に取り残されたそのひとは、申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

「わたしが来たせいで、なんだかともない事になつてしまったようだね…」

「いいえ。こちらの方こそお見苦しいところを…いえ、あの、もと村長を頼つていらしたのでしょように、こんな事になつていて、本当に申し訳ありません」

目の見えない人に『お見苦しい』はなかりうと思ひ、慌てて訂正する。

しかし、彼は特に気にした様子もなく、ゆっくりと首を横に振った。「いや、わたしが頼ったのは彼ではなく、こちらの村を作った長老殿なのだ。」

…よもや亡くなっているとは思ひもよらず。

その家が住む者もなく荒れそうだと聞かされて、ならば住まわせて欲しいと甘えたのがいけなかった。

どうかわたしの事は気になさらず。

このように光を失った身ではあるが、これはこれで、自分の身の回りのことは一通り行なえるゆえ、滞在先などは自分で探しましょう」穏やかに話す落ち着いた声に、大人の男性としての思慮深さを感じさせ、あたしはこのひとに好感を抱いた。

それに、真つ先目につくその顔の傷ですっかりわかりにくくなっているが、よく見れば鼻筋の通った、ちよつとそこいらでは見えないようなスッキリしたイケメン顔ではないか。

服装も清潔感のある趣味のいいものを身につけていて、少なくともこの村よりははるかに開けた街で生活していた人であっただろうし、なぜこんな傷を負うことになったかはさておき、それ以前はきつと女性にもてていたに違いない。

だからというわけでは勿論ないし、直感でしかなかったが、あたしはこの男の人を、信用のおける人物と判断した。

「いいえ。」

祖父を頼って来てくださったのなら、あなたはあたしの客人です。

どうぞごゆるりと滞在なさってください。

この母屋は女一人では広いと、ちよつと思つていたところですが、だがあたしの言葉に、彼は再び首を横に振る。

「…それは、外間的に良くはないでしょう。」

うら若き女性が、村の外から来た男を家に引き入れたと、良くない噂でも立てられては…」

おやまあ、なんという紳士。

先程まで村長だったあのオツサンに、爪の垢でも煎じて飲ませたくなる。

もつともその男らしい大きな手の指先の、平たい爪は綺麗に短く切りそろえられており、恐らく垢など一欠片も残ってないだろうが。

「さつきのもと村長の息子に、婚約破棄されたばかりの女ですよ。

今更落ちる名誉も何ありません」

自分を心配してくれるその紳士に、見えていないと知りつつも胸を張ってみせる。

見えていない筈なのに、彼は空気だけは感じ取ったものか、フツと唇に笑みを浮かべて、言った。

「…その男は、馬鹿だな。

この世に二つと無い宝を労せずに入れられたのに、それを自ら捨てるとは」

「……は?」

「わたしにはわかる。

あなたは、身も心も美しい人だ。

これから村を背負って立つあなたの姿は、さながらドラクロワの絵の女神の如くなのだろうな。

この目にそれを映せないのが、残念だ。

ならばせめて、それを守る騎士としての栄誉を、賜わらせていただくか」

そう言うと、大人の男性である彼が小娘のあたしの前に跪き、あたしの手を取って指先に口づける。

えええっ!?

この世界でも前世でも、素面でこんなことをするような男性と接したことのないあたしは、その慣れない賛辞と行為に、一瞬で顔面に血がのぼった。

「いい、いいいやいや、あたしなんぞただの、そこらへんの村娘ですから。

ああええと、じ、自己紹介が遅れましたが、長老の孫娘で今日から

村長を務めさせていただきます、ミサキと申します。

よよ、よろしく願いしましゅ」

うああ噛んだ。メツチャ噛んだ。

動揺して滑舌が怪しくなったあたしの挨拶に、だがその人はますます優しい笑みを返してくる。

「わたしは…」

「おやまあ！誰かと思ったらシユウ君じゃないの！」

と、そこに場違いに明るい声が響いてきて、あたしだけでなくその人もそちらへ顔を向ける。

そこに居たのはエルマさんという、現在化粧品製造のスタッフを取りまとめてくれている人だ。

他のスタッフの夫たちが嫌な顔をするという相談を受けるたびに、『そうやって威張ろうとするアンタの旦那だって、よその綺麗なお姉さんには進んで尻に敷かれにいくんだよ？』

私ら嫁が綺麗になれば、旦那方はへこへこして擦り寄って来るに決まってるさ！

ここはその、綺麗になる為のものを作る場所だよ！

胸張っていないさいな！』

と励ましてくれたりする。

(ちなみに製造に携わるスタッフは化粧品使い放題。最近年齢がいつっていても肌のきれいな女性が増えて、近隣からは美人が多い村だと評判になっているとか)

今回あたしが婚約破棄された事にも一番心を痛めてくれ、例のあたしから婚約者を奪った彼女を叱り飛ばしてくれたわけだが、その彼女がこの先村八分にならないようにと、一番気を配ってくれているのもこの人だ。

「エルマどの。永らく無沙汰を致しておりました」

「おやおや。すっかり男前が上がっちゃったみたいだけど、そういう堅っ苦しいところは変わらないんだね、シユウ君は」

気軽な調子で笑うエルマさんの介入に、少し落ち着いたアタマが情報を整理する。

：そうか、このハンサムでジエントルマンなスカーフェイスはシュウという名前なのね。

祖父の知り合いだったというし、エルマさんのこの反応からすると、かつてこの村に住んでいたか、少なくとも滞在していた事のある人なのかもしれない。

「エルマさんは、このかたをどこ存知なの？」

「どこ存知もなにも、この人はアンタのお母さんを連れ戻してくれた人だよ」

言われてその人を振り返ると、彼はなにかを言おうと口を開いた。

だがその声は、発するより前にエルマさんに遮られる。

「ねえシュウ君。」

アンタはあの頃、ユキトが殺されてミハルが攫われた事に、後悔しかないって言ってたけど、あの時ミハルの胎にいた子がこんなに大きくなって、今じゃこの村を支えてるんだ。

運命ってのは不思議なもんだよねえ」

：ミハルというのはあたしの母の名だ。

話の流れからすると、ユキトというのは、その時母の恋人だったという人の名前なんだろう。

あたしが生まれたのが16年前で、野盗に攫われた母が連れ戻された時には既にあたしを身籠っていた。

この人のおおよその年齢を考えると、当時はまだあたしと同じくらいか、下手すりやそれより下の少年だった筈だ。

エルマさんの言葉に、シュウと呼ばれた人が、感慨深げに息をついたのがわかった。

と、唐突にエルマさんがあたしの肩を掴み、シュウ様の方へと向き合わせる。

「ねえミサキちゃん。」

シュウ君は頭もいいし、なんとかかっていう拳法の達人でとっても強いのに、それを鼻にかける事もない、昔から本当にいい子なんだよ！アンタとは歳は離れてるけど、タイキ坊なんかよりよっぽどいい男だと思っよう？

この村に滞在してる間に、モノにしちまう事をお勧めするね！」

「なっ！エルマどの、それは冗談にしてはたちが悪い！」

「おや、私は割と本気で言ってるんだけど？」

エルマさんとシユウ様があたしを挟んで言い合いを始めたが、あたしはそれどころじゃなかった。

今、耳に入ってきたワードにより、突然閃いた記憶が、水門を開いたように溢れてきたからだ。

何とか…拳法………南斗、聖拳。

攫われる子供たち。

聖帝の名の下に築かれる南斗十字陵。

愛を否定し葬ろうとする帝王。

その前に立ち塞がる盲目のレジスタンス。

光を閉ざした両目三条の傷跡は、いずれ世を救う少年の未来を守った証。

仁の宿命を星に持つ男、南斗白鷺拳のシユウ。

記憶にある漫画で見たその姿が、目の前にいる人と重なる。

蘇った記憶に、あたしはようやく理解した。

ここ、北斗の拳の世界だったんだ…と。

しかも恐らくは、核戦争前の。

つまりあたしは、その中の名もなきモブだ。

「…ミサキどの。」

先程は自己紹介が途中で止まってしまったが、わたしの名はシユウ。

かつてこの村で暮らしており、君の母上とも顔見知りだった。

親戚のおじさんか何かだと思って、必要なことがあればなんでも申し付けてくれていい。

しばらく厄介をかけるが、よろしくお願い致します。

………ミサキどの？」

…ねえ、あたし泣いていいですか。

この世界のモブって、普通に死ぬやつやん。

言ったら、汚物消毒されて死ぬやつやん。

そして、あたしの意識はブラックアウトした。

後編

…抱き上げた身体は、思ったより骨格も肉付きもしっかりしていた。

彼女の母親という人が小柄で華奢な少女だったせいか、耳にした声がかつて知っていたその人の声とよく似た声質だったことで、無意識に同じイメージを抱いていたから、少しだけ驚いた。

それでもわたしの腕に重すぎるといふこともなく、エルマどのに言われるままその誘導に従い、彼女の寝室らしい部屋へと運ぶ。

寝台の上にその身体を横えてすぐに、着替えさせるからとその部屋を追い出され、わたしは閉じられた扉の前で待つことにした。

そうだな、見えていないとはいえ、男の前で若い娘の肌を晒すなど出来るはずもない。

それにしても、いきなり倒れるとはどうしたことだろう。
どこか身体が悪いのではないだろうか。

だが、しばらく待つて出てきたエルマどのにそういった内容のことを訊ねると、彼女はそれを否定した。

「私もお医者様じゃないから確かな事は言えないけど、この子は健康優良児だよ。

けどこここのところ色々あったから、いい加減疲れてたんだろかねえ。

精神的にも、身体もさ。

すっかりしているようだけど、この子だつて本来はまだまだ、親の庇護の下にあつてもいい年頃なんだ。

時には甘えたい事だつてあるだろうにねえ。

…じゃあ、あとは頼んだよシユウ君。

日中は作業場に居るから、なんかあつたら呼んでちょうだい」

…そうか。

生まれ故に幼い頃は持て余されていたようだし、最近婚約破棄をされたと言っていたし、どうやら今はこの村の女性のリーダー格という事のようにだし、更にこれから女の細い肩に村ひとつ背負って立つとい

うのだ。

気苦労もさぞ多かろう。

傷が癒え、北斗が持ち込んだあの件のほとぼりが冷めるまでの間、滞在させてもらおうと思っていたかつて暮らしていた村。

いつまで居ることになるかはわからないが、ここでこの少女と関わりあったのも何かの縁なのだろう。

常に誰かに頼られながら、自身は頼るものを持たぬこの少女の、せめて心の支えになろうと、わたしは密かに決意した。

かつて、救えなかった女性ひとの忘れ形見である彼女の。

☆☆☆

目が覚めたあたしは、とりあえず地下室を改装することにした。

今は倉庫として使っているが、かつては気の触れたあたしの母を祖父が閉じ込めていた部屋だ。

これだけ聞くとうちの祖父が相当人でなしのようだが、母が生まれたばかりの赤ん坊のあたしを抱いて離さず、それでいて授乳もオムツ替えもせずについて、このままでは赤ん坊が死んでしまうと判断して無理矢理引き離れたところ、次には泣いているあたしを見つけては連れ出して何度も殺しかけたので、やむなく閉じ込めることにしたのだとか。

死んだ時には、河の水音や崖に吹く風の音を、赤ちゃんの声と思い込んで行ったのではないかと言われていた。

母が生きている間、祖父はあたしをここに近づけないようにしていたので、あたしは母の顔をほとんど覚えていない。

遺体が発見された時の状態が酷かったとのことで、死に顔すら見せられず茶毘に付された。

それはそれとしてあたしはここを、災害時の避難場所にしようと考えていた：平たく言えば、核シェルターを作ろうと。

都会から離れた山のふもとにあるこの村は、出来た当初は電気の供給が安定しなかった為、頼りにならない電気冷蔵庫よりも、冬場に山から切り出した氷を貯蔵しておける地下室をもつ家が多かった。

今ほどの家も倉庫として使っているだろうが、そういった家の地下

室を全部、核シェルターにしてしまおうという計画だ。

モブであるあたしに、核戦争を止める事はできない。

物語の通りに事が運ぶならば、この地上は間違いなく一度、核の影響下に晒される。

生き残った人類は秩序も法もない、暴力が支配する世界の中で生きる事となる。

救世主が現れるのは未来であり、今を生きるあたしたちにはその恩恵はもたらされない。

あたしたちは、あたしたちで生き抜くしかないのだ。

幸い、新村長としての最初の仕事として、そういった災害時の備えを提案したところ、村人からはあっさり受け入れられ、村の収益からその費用を賄うこととなった。

相変わらず男性たちは、小娘になにができるかと最初は馬鹿にした様子だったが、しばらく経つとその風当たりは徐々に緩まっていた。

あたしの家に滞在するシウウ様が、男性たちとの折衝を引き受けてくれた事が大きかったのだ。

「彼女を小娘と侮りたい気持ちもわからなくはないが、それではここにいる大人の男の中に1人でも、ミサキの半分もの功績を挙げられる者がいるかね？」

若さというのは可能性だ。

それに対して我々年長者がすべき事は、駆けつけて道を踏み外す前にその道を整備する事であって、道を閉ざす事ではない。

むしろあなた方の奥さんが、何故あなた方よりもミサキを支持するのか、一度考えてみた方がいい。

理解したものを受け入れられれば、あなた方の奥さんは、再びあなた方を、尽くすに相応しい価値のある存在と、認めてくれるかもしれない」

そう先制パンチを食らわした後で、一人一人と男同士で話をし、彼らの中のコンプレックスを本人達に理解させて、その心を解きほぐしていった。

結局人間てのは単純なもので、好きになってもらえば、大抵のことは許してくれるものなのだ。

シユウ様がその人徳を發揮して村のみんな一通りの心を掌握したほぼ1年あまりで、村長としてのあたしの足場もしっかりと固まっていた、化粧品作りもますます村の発展に貢献する中、一時は深まっていた男性と女性の間の溝が、いつのまにかなくなっていた。

「一番側にいる人と、言いたいこと言い合いながら手が繋げる幸せなんて、私らの世代には、考えてみりや誰も教えてくれなかつたんだよねえ。

親たちは、女は男に従って生きるのが当たり前だとしか教えてくれなかつたし、誰もがそれを疑問に思わずに生きてきた。

あんた達が仲良く幸せそうにしてるの見て、そういえば自分にもそうなる筈の相手がいたと、改めて思った奴らが、私ら夫婦以外にもたくさんいるのさ。

このままあと10年の後には、今の倍には子供の数も増えてるだろねえ。

……まずはあんた達が先だろうけど」

などとエルマさんが言う通り、夫婦仲が改善された家庭がかなりあつたらしい。

あんた達という意味は、なにげに気付いてはいるが、あまり考えないことにした。

ところで一緒に生活してみると、ある程度の介助は必要だと思っていたシユウ様は、本当は見えてるんじゃないのってくらい、自分の身のまわりの事やそれ以上、最初に自分で言っていた以上に何でもできるひとだった。

一通りの仕事が大引いて帰宅が遅くなった時、あたしの好きなものばかりのおいしいごはんを用意して待ってくれていた時は、思わずテーブルの前に立ち尽くしたものだ。

他にも、化粧品の材料となる植物の畑の維持管理を引き受けてくれたり、それまでは手が回らないからと諦めていた家畜を入れてその世話もしてくれたり、気がつけばあたしの生活に、なくてはならない

存在になっていた。

シユウ様はもはや物語の登場人物ではなく、あたしの大切な家族だった。

：あたしの母がシユウ様の初恋の人だと聞かされた時には、なにか言いようのない感情で胸が騒ついたのを確かに感じた。

勿論最初は本人の口から聞いたわけではなく、当時を知る大人が口を滑らせた事で知った（その人は直後にエルマさんから脳天にチョップを食らっていた）のだが、どうしても気になって本人に聞いてみたら、意外にあっさり白状した。

「修業をしている間に、伝える機会を失い、気付けば彼女は他の男と恋をしていた。

時間というのは時として残酷なものだ。

いつか必ずと思つたものを、手にできると思つた頃にはもう、届かなくなっていたりもする。

わたしが村から離れている間に、君のお母さんが攫われて、その恋人が殺された時、わたしはその残酷さを身にしみて感じたよ」

：けど、母がシユウ様を選んでいたら、あたしは生まれてこれなかった。

あたしは、祖父にそっくりと言われたことはあるが、母に似ているとは一度も言われた事がないので、きつと似ていないのだと思う。

そもそも母は小柄で華奢な人だったと聞いているが、あたしは女にしては骨太で背も高い方だ。

少しでも似たところがあれば、こんなモヤモヤした気持ちにならずに済むのだろうか。

わからないけど、胸が、痛い。

☆☆☆

その日、シユウ様は隣村へ商品を届けに出かけていて、あたしは珍しく大した仕事もなく作業場の掃除をしていた時に、もと婚約者のタイキが訪ねてきた。

彼の父親は今や軽蔑していたが、兄妹とも思っていた彼のことは別に嫌いではなかったから、特に考えることなく家に上げたが、確かに

今考えると軽率だったとは思う。

「フウカが子供ふたりとも置いて出ていった」

フウカというのは、あたしの代わりに彼と結婚した女性の名だ。

確かに今日はこちらにも来ていなかったが、出ていったって何？

「次期村長じゃない俺には用がないんだとき。」

結婚すれば楽できると思ったのに、当てが外れたとか言いやがった。

子供を抱えて一生懸命生きてる、健気な女だと思ってたのに、本当、騙された」

とかなんとかグググ言ってるけど。

「…一番可哀想なのは子供じゃない。」

アンタももう父親なんだから、一人でもしっかり育てないと」

「上は俺の子じゃねえよ！」

…今となつちや下だって、本当に俺の子かどうかなんてわかったもんじゃない」

「絶対そうじゃないって言い切れない事はしたわけですよ？

子供に罪はないってのが、この村の方針だよ。

あたしだってそう育てられたし、そこはアンタ達父子に感謝してるよ」

正確には祖父の考えだ。

祖父がそう思っていてくれなければ、あたしはここまで大きくなれなかったし、仮に生きてこられても、年頃になったあたりで村の男たちの共有物になっていたらう。

祖父が自身が亡き後のあたしの事を考えてくれたからこそ、あたしは今ここにこうしている。

だから、自分が長として立った以上、そこは貫いていくつもりだ。

このタイキだって思春期の頃は、妹同然のあたしに小さな悪戯程度の事はしてくれたものだが、彼の存在があたしを守ってくれたから、もと村長に手を出されることもなかったし。

あたしが言うのを聞き、タイキはひとつため息をつくど、あたしの目を見つめて言った。

「なあ、ミサキ。」

もう一度、俺とやり直さないか？」

…なんだろう。今、宇宙語が聞こえた気がする。

「はあ？」

「村長の仕事は続けてくれて構わない。」

この家は、あのオッサンに譲ればいいだろ。

俺と結婚して、2人で子供育てよう。

大丈夫、おまえは立派な母親になれるさ」

宇宙語はまだ続いている。

翻訳して、どう好意的に解釈しようとしても、その方が都合がいいからお前に押し付けたいとしか聞こえない。

メダマドコーみたい感じになったあたしが、思わず口にした言葉がこれだった。

「……アタマ、大丈夫？」

そんな風に言われると思っただけだったというように、タイキが眉を顰める。

「なんでそうなるかな。俺は本気だけど？」

「うん、本気で言ったのが判ったから大丈夫か聞いた。」

そう言われてあたしが戻ると、本気で思ってる？

だとすると、随分馬鹿にされてると思うんだけど？」

妹のような存在のあたしに対して甘えが多少あるにしても、これはひどい。

多分同じ状況に立たされた女のうち、10人中10人はそう思っってくれる筈。

なのにタイキは、心底信じられないという顔であたしを見つめた。

「…俺のこと、もう好きじゃないのか？」

ああ、つまりそういうことか。

確かに、その人の事が好きであれば大抵のことは許してもらえる。

けど、信用を裏切るという行為は、その『大抵のこと』の範囲を大きく逸脱するものだ。

それに。

「正直な話、タイキを好きだったことなんて無いよ。

一緒に育つて、兄さんみたいには思ってたけどね」

そもそも、前提が間違っているのだ。

あたしは、恋を知る前にタイキと婚約させられた。

だから、漫然とこの人と結婚するのだと思っただけで、本人を好きだと思ったことはない。

「タイキだって、あたしを好きになれなかったから、フウカさんに惹かれたんでしよう？」

お互いに、今更だと思わない？」

少なくとも今のタイキはあたしと違い、人を好きになることを知っている。

ならば、好きでもない人と結婚して、妥協の人生を送るような真似はさせたくない。

その程度の情ならあたしにだってあるのだ。

「…そんなに俺より、あのオツサンがいいのかよ」

…けどタイキは、あたしを恨めしげに睨むと、押し殺したような低い声でそう言った。

「……へ？」

「一緒に暮らしてた頃には、しなかった顔を最近するよな。

初めて見た時、ハツとした。

あんない顔で笑う女だったのだった。

そして、そのいい笑顔の一番近くにいるのは、いつもあいつだ。

おまえが俺の前であの顔で笑っていてくれたなら、俺はあんな女に惑わされたりしなかった！

なんでアイツなんだ？

なんで俺じゃないんだよ!!」

タイキはそう言うのと、あたしの上腕を掴んだ。

爪が肉に食い込んで痛い。

「ちよ……やめてよ、タイキ！離して!!」

「…おまえは俺のものだった筈だ。

今なら、まだ取り返せるよな…!？」

…そう言つて胸に引き寄せられた瞬間、

「うっ……!!」

「えっ、ええっ!!!? ……ぎゃあああああっ!!!」

なにかものすごい吐き気を覚えて、次の瞬間あたしは嘔吐した。

……この場面、キラキラエフェクトのモザイク処理でお送りしております。

胸元をあたしの吐瀉ぶ…キラキラエフェクトまみれにされたタイキが、呆然とその場に座り込む。

ああうんそうなるよねー。

襲おうとした相手がいきなり嘔吐したら、余程の特殊性癖の持ち主でもない限り、それ以上なにかしようとか思わないよねー。

うええ、気持ち悪い。

「……なにをしているんだ」

と、どこか呆れたような声が聞こえた方に目を向けると、シユウ様が居間の入口に立っていた。

・・・

「まずは、浴室で洗つてくるといい。

わたしの服を貸すから、今日はそれを着て家に帰りたまえ。

君の服はこちらで洗濯して、後日わたしが家まで届けよう。

…ミサキ、大丈夫か?」

多分何となく状況を察したであろうシユウ様は、さりげなくあたしとタイキを引き離すと、そう言つてあたしの肩を抱く。

その手の温かさに、あたしは安堵した。

ここにいればもう大丈夫。

「ここはわたしが片付けるから、君も着替えてきなさい。

身体を冷やしては差し障りがある。

無理をしてはいけないよ、大切な身体なのだからね」

「えっ」

いつもより近い距離から、シユウ様が優しげに囁く声に、思わずあたしはどきりとした。

だが、その言い回しはまるで…。

「後で、きつぱりとした飲み物でもつくってあげよう。」

酸味の効いた果汁を使った果実水がいいかな」

そうシユウ様が囁くのを聞いたタイキが、その場に立ち尽くして震えているのがわかる。

「……ま、まさか」

タイキのようやく絞り出したような声に、シユウ様は今気づきましたというように、振り返りながら答えた。

「…ん？君は、まだそこにいたのか？」

「し、失礼しました〜！」

キラキラエフェクトをつけたまま、タイキがその場から走り去る。

見えていない筈のその情けない姿に、シユウ様の口角がちよつと悪そうに上がったのがわかった。

「……シユウ様。」

あのひと、メツチャ誤解したと思うんですけど」

「やれやれ。」

別にわたしは、ひとつも嘘は言っていないのだがね」

「嘘は言ってなくとも誘導はしましたよね？」

「…それより、彼が浴室を使わないならば、君が使ってくるといい。」

その間に、ここはわたしが片付けておくから」

キラキラエフェクトは大体タイキが引き受けてくれて、うちの床はほとんど汚れてはいなかった。

だから甘えることにして、頷いてシユウ様から身体を離れた瞬間…

何故か膝から力が抜けて、あたしはその場にへたり込んだ。

「ミサキ!？」

「……安心したら、なんか、腰が抜けました」

…実に不本意ながら、あたしは入浴と着替えを、シユウ様に手伝わせることとなった。

シユウ様はエルマさんか他の誰か女性を呼んでこようと言ったのだが、どうしてこの状況に陥ったかを外のひとに知られなくなかった。

「タイキの事は…好きでもなんでもなかったけど、あの人の妻になる

と思っていたから、いずれそうなるものだと思ってたんです。

：けど、実際に手を触れられたら、気持ち悪いと思ってしまう。
この手じゃないと、思ってしまったんです」

直接肌に触れないよう注意して、優しくタオルで身体を洗ってくれるシユウ様に、ぽつぽつとそう溢す。

「…あたしに初めて触れるひとは、シユウ様じゃなきや嫌だと…思ってしまったんです」

そして気がつけばとても自然に、その言葉が口から出ていた。

「…ミサキ。」

わたしは、君にそんな風に思ってもらえるような男ではない」
シユウ様の手が止まり、苦しげな声が、背中越しに耳に届く。

「…わたしはね、ミサキ。」

本当はとても、心の狭い男なんだ。

独占欲が強く、束縛が激しい。

あの男が君に触れたと判った時には、彼を殺してやりたいとすら思った。

この手が君に触れてしまえば…わたしは、君を離せなくなる」

呟く言葉に熱を感じて、胸の奥が歓喜に満ち溢れた。

同時に、胸のモヤモヤが晴れた気がした。

あたしは、この人に求められたいと思っていた。

この人を愛してしまっていた。

「…それ、なんて天国ですか」

そう呟いた瞬間、背中から回された腕に、強く抱きしめられた。

頬を引き寄せられ、唇に待ち望んでいたそれが降ってきて…その後の記憶は割と朧げだ。

シユウ様が誘導したタイキの誤解が本当になったのは、それから間もなくの話だった。

☆☆☆

…丈夫だった彼女は、子を産んでからはよく寝込むようになり、シバと名付けた息子が歩き始めた頃に、あの核戦争が勃発した。

そして迎えた運命の日。

彼女の提案で設置したシエルターで、村人の殆どがああ瞬間を生き残ったが、作物は育たなくなり、豊かな時代が終わりを告げた。

地上は暴力が支配する世界となり、拳王の進軍が始まった頃、彼女は、時折咳き込んで血を吐くようになった。

共に過ごせる時間が、徐々に終わりに近づいている事は、もはや明らかだった。

「いつか、あなた達を残して逝く事になるとわかっていたから、それはもういいの。

あなたと出会って、恋をして結ばれて、可愛い子供にも恵まれた。

これ以上なくらいに、あたしは幸せだったわ。

もつと、もつと望んでしまいうくらい…終わるのが悲しいと思うくらい、幸せだった…」

意識のある彼女と最後に過ごした夜、抱きしめた腕の中で囁く言葉に、盲いてもなお枯れぬ涙が、その細い肩に落ちるのをわたしは止められなかった。

「ただ、ひとつだけ。

どうしても、言っておきたいことがあるの。

どうしてもあつたしの中で、納得のいかないことが。

お願い。シバが、自分の意志で戦えるようになったら、必ず伝えてちょうだい。

…ダイナマイトは、火をつけたら、投げて使うものだ」と

…最後の言葉は、意識が混濁していたのだと信じたい。

そう言い残した後、眠るように意識を失って3日後。

わたしの愛した彼女は、永遠の安息の世界へと旅立った。

幸せそうに、微笑みながら。

真く多分、始まらない物語

前編

読者目線で見ていた時には、確かに何でかなーと思っていた。

己の敵にすら慈愛のまなぎしを注ぎ、それが故に誰からも愛される女性であるユリアが、恋人のケンシロウとその瞬間までは友人関係であった筈のシンの告白に、『そう思われていると知っただけで死にたくなる』とまで言い放つほどに、彼を嫌っていた理由。

「…ねえ、シンちゃん」

「シンちゃん呼ぶな……なんだ」

「いつも言ってる事だけど、好きな女の子に嫌がらせで気をひこうとするとか、今どき小学生でもやらないと思うよ」

「…うるやうー」

ただの幼馴染のくせに、おれの行動にいちいち口出しするな！」

「……………チツ……………童貞が」

「貴様今、一番言ってはならん事を言わなかったか!!？」

「気のせいです。」

あと、キミの師匠が、授業が終わったら修練場に来るようにと」

「それを早く言え!!」

足音も荒くそこから立ち去る青年の名はシン。

愛に殉じる星『殉星』の宿命を持ち、後に南斗六星拳のひとつ、南斗孤鷲拳の継承者となるこの男は……この世界に転生して、彼の幼馴染としてその身近で育った私の目から見れば、ただの初恋と童貞拗らせた痛い若者だった。

☆☆☆☆

「ごめんなさいユリアちゃん。

いつもいつも、うちのバカな弟分が」

「いいえ……マツリさんのせいではありませんもの」

…弟分と言ったが、正確にはシンは私よりひとつ年上だ。

しかし幼い時分から、アイツがバカやらかしては私がフォローする

という関係性をずっと維持してきた為、私自身もそうだが周囲も、シンを私の弟分であると認識している。

認めていないのはシン本人くらいのものだ。

しかも思春期を過ぎた頃からやけに私に逆らうようになってきて、若干手を焼いているのが現状だったりする。

そして同時期からずっと、誰がどう見ても好きで気になってるユリアちゃんに、持ち物を隠したり嫌いな生き物を投げつけたりといった童貞アプローチを続けるシンに、真つ当な苦言を呈するたびに喧嘩になるのが黄金パターン。

この反抗期はいつまで続くのやら。

そして童貞…もといシンが嫌がらせをして泣かせるたびに謝りに行くのが私というルーティンを確立した結果、同い年だった事もあって私とユリアちゃんはとつても仲良しになった。

もつとも、とある事情からそれが始まる前から、私とユリアちゃんは既に顔見知りだったわけだけど。

フン、どうだ。羨ましいか童貞。

こうしてちよつと手を伸ばせば、ユリアちゃんのサラサラふわふわの黒髪に触り放題なんだぜい。

…アイツのストレートの金髪も、子供の頃は癖毛の私には羨ましくてよく触ってたもんだけど、ある程度体格差が出てきてからは嫌がられるようになった。

ちよつとだけ寂しいとかは思っていない、絶対。

「ふふっ。くすぐりたいです、マツリさん」

見よ、こちらは嫌がるどころか、ちよつと恥ずかしそうに、尚且つ嬉しそうに見上げてくるユリアちゃんの、この清楚系美少女っぷりのなんと貴いことか。

刮目して同時に目エ潰れる童貞。

同性の私ですら道を踏み外しそうになるほど破壊力のある微笑みに私は、心の中で歯齧みをして悔しがる弟分に向けて薄い胸を張った…ってやかましいわ。

「ユリア」

と、唐突に彼女を呼ぼう声が聞こえ、私たちはそちらに顔を向ける。そのひとと目が合った瞬間、パアアという幻聴が聞こえ、微笑みの段階でさえ眩しかったユリアちゃん的笑顔が満開になった。

「ケンー！」

「お疲れ様です、ケンシロウくん」

私が挨拶すると、ユリアちゃんの彼氏のケンシロウくん…この世界の主人公であり後の救世主、北斗神拳伝承者…になる予定の、今はまだ素朴で優しげな青年…は、少しだけ目を瞠った。

「マツリさん…う…という事はシンが、また？」

…：ほらみる童貞。

既にケンシロウくんにまでパターンが覚えられてるじゃないか。

割とこの子（いや、彼も私たちよりいつこ上なんだが）、鈍感の部類に入る人種なのに。

まあ、だから比較的神経質で気の短いシンと、親友なんてやってられるんだらうけど。

「ええ。今回は机の中に、虫の入った箱が。」

いかにも怪しげだったので、ユリアちゃんが開ける前に私が回収しましたが。

どうやら休前日に仕込まれたもののようで、開けるまでに既に2日経過しており、意図した事ではないのですが、発見した時には若干蠱毒状態になっていたので、南斗の上層部に連絡して適切な処理を行なってもらいました。

その際アイツの師匠にも連絡が行くようにしておいたので、今頃はこつてり説教食らってることと思います」

「…さつき、修練場で正座させられてたのはそういう事だったのか…。」

まったく、あいつはいつもいつも、一体何がしたいのやら…。「割と何にも考えてないと思います。」

…毎度の事ながら、御迷惑をおかけして申し訳ありません」

「マツリさんのせいではないだろう」

苦笑しつつ、さつきユリアちゃんが言ったのと全く同じことを言っ

てくるケンシロウくんは、物語の中の無口で無表情で無愛想な最強拳士の面影はなく、ユリアちゃんのそばで優しく笑ってる顔からは、むしろ気弱な印象すら受ける。

もつとも本人曰く、

『幼い頃に口の力に驕った結果、命を落とすところを助けてくれた人に、一生消えない傷を負わせてしまった』

事を自戒としていて、自信はあっても表に出さないようにしてるんだとか。

：方向性としては微妙に間違ってる気がするけど。

そういうところが核戦争終結後の世界になってからの、

『ケンシロウでは、ユリアを守れない』

という印象に繋がって、シンがジャギの悪魔の囁きに耳を傾ける理由になっちゃったんじゃないのかなあ。

私が言っても仕方ないから言わないけど。

正直な話今のケンシロウくんを見る限り、ユリアちゃんは彼が力をつけるまでの間は、ラオウのところにいるのが一番安全だと思う。

女に手を出す事になんの呵責も覚えない小悪党どもが、まさかユリアちゃん欲しさに拳王に喧嘩を売るなどと、命知らずな真似はしないだろうし、ラオウはユリアちゃんが否と言っている間は、その誇りにかけて決して手を出すことはないだろうから。

ラオウはレ○プなんてしない、と原作者が言ってたそうだし。知らんけど。

あのオッサンも大概初恋拗らせてるからね。

今、トウ姐さん（海のリハクさんのお嬢さん。華やか系の美人でボン、キュツ、ボンの超グラマー。羨ましくなんかない）がめっちゃアタックかけてると、南斗の女官の皆さんの間で専らの噂だが、まあそれは余談だ。

それはさておき、だがシン、おまえはダメだ。

何がダメってユリアちゃん本人は大嫌いのところまでいったとしても、シンが最愛のケンシロウくんの親友という事もあって、そこにある程度の情けが入る余地があるとところに問題がある。

優しいユリアちゃんは、自分の為に手を血に染めていくシンに心を傷め（多分だが相手がラオウであれば、ここまでのショックは受けな
いと思う）、それが身体を損なう引金になったに違いないからだ。

ユリアちゃんには、若干だが癒しの力がある。

後のトキほどに病状が進んでしまっていたなら治しようがないだろうが、初期段階での進行ならば、その気があれば抑えられた筈だ。

そうしなかったのは、シンに連れ去られた時点で彼女が絶望しきっていたからで、さすがに少年誌で連載されていた作品故に描写はされなかつたが、その時に手を出されていた事が想像に難くない事を思えば、理由は明らか。

つまり、原作でユリアちゃんを死なせたのはやはりシンだったのだと、私は思ってる。

…この世界が核の影響で一変し、暴力が支配する世界になってしま
う事は避けようがないにしろ、出来ればシンがユリアちゃんを奪い去
る展開は阻止したいと思ってるのだが…現状では如何ともし難い
ようだ。

…

「ところでマツリさん、新作はまだ書かないんですか？」

「……………鋭意制作準備中です」

「うふふ、楽しみに待ってますね♪」

「……………新作？」

「女の子同士の内緒話ですよ、ケンシロウくん」

「そ……………そうなのか。済まない」

…実は前世の私は、『攻めの反対語は？』と聞かれて迷わず『受け』
と答えるタイプの人種だった。

この世界には私の求める萌えがないと諦めていた時、たまたまシン
にいつも通りのパターンで小言を言い、何がスイッチだったか忘れた
がいつもよりキレられて暴言を吐かれた事があり、その腹いせにアイ
ツ受けのBL小説をこっそり書いて溜飲を下げてたらそれが癖に
なった。

萌えがないなら作ればいいじゃない、というよくわからない天啓が

降った一瞬だった。

気がつけばノート一冊丸々使って7作目まで書いたあたりで、それをうっかりユリアちゃんに見られてしまい、結構なハードコアだったので絶対にドン引きされると思ったのに、

『続きが気になるからもつと読ませて欲しい』

と強請^{ねだ}られた衝撃は今も忘れられない。

南斗六星の最後の将にしてこの世界のヒロインを、私のうっかりのせいでほんのり腐らせてしまった事は、この世界における私の最大の、しかも取り返しのない失敗である。

閑話休題。

☆☆☆

「お疲れ様、シンちゃん。

…その様子だと、本当にこつてり絞られたみたいだね」

ユリアちゃんがケンシロウくんと一緒に帰った後、私が南斗の修練場に足を運ぶと、ちょうどそこから出てきたばかりのシンと目があつた。

心なしか、さつき会った時よりも寡れたように見え、顔色も若干良くない。

さすがに心配になって側まで駆け寄ると、シンは少しだけ躊躇った後、徐ろに口を開いた。

「…そんな事より。おまえは知っていたのか？」

「……………何を？」

「ユリアが……………南斗正当血統の女だという事をだ」

ああ、それか。

ひよつとして師匠の説教の中に、ユリアちゃんに懸想している事も含まれていたのだろうか。

いずれは判る事だと思っていたし、それを知ったところでシンの気持ちは変わらないだろうと思っただから、せめてもう少し夢を見せてもいいかと、黙っていたのだが。

「…なれば、それは北斗との絆を結ぶ存在。

それが故に、南斗とは結ばれ得ぬと。

おまえは、その事を知っていたのか？」

その口調に、責めるようなニュアンスが混じる。

それにほんの少しムカついて、私は彼をまっすぐ睨み返ししながら言った。

「逆に聞くけど、キミはあの方とその兄弟たちを、何者だと思っていたのかな？」

ただ南斗に庇護された孤児たちだとも？」

ユリアちゃんには実兄と異母兄がおり、どちらも稀有なる拳の才の持ち主だ。

生まれたのが南斗正当血統、つまり母系の家でなければ、どちらも立派な南斗の継承者となったのであろうというくらい。

「…本来補佐に当たるべき【白鷺】が傍を離れたことが大きいのか【鳳凰】に若干キナ臭い動きがある上に、北斗の次期継承者がまだ決定していないので、公にはできない事実だけだね。

ユリア様が今の時点でケンシロウさんと恋仲であるという事自体異例中の異例なんだけど、ユリア様はご自分の未来は見えないらしいから、それがあの方の未来視の能力故なのか、本当にただ好き合っているだけなのか、本人にすら判らない。

だから、上層部でも見守るしかないってわけ。

私としては前者であって欲しいけれど。

後者であれば、ケンシロウくん以外で決定してしまえば、ユリア様にとつてお辛い事になるから」

もつとも私には前世で見たこの物語の知識があるから、そうはならない事を知っている。

そもそもほんの幼子だった頃に、なんの考えもなしに口にしたその知識の断片のせいで、私は今この場所にいるのだし。

…辺境の片田舎の小さな村に生まれた私が、まだほんの幼児の頃に南斗に引き取られたのは、うっかり口にした僅かな原作知識により、私こそが『そう』だと思われたからだ。

何代か前の先祖に正当血統に生まれた男がひとり入っていた事が、その誤解に説得力を与えてしまったらしい。

何せ『本物』のユリアちゃんは、『母親の胎内に一切の感情と言葉を置き忘れてきた』と言われるくらい、何に対しても反応を示さない、人形のような少女だったので、その力を有していると、周囲に認識されるのが遅れたのだ。

後から『本物』が現れた事で私は本来なら用済みだったけど、だからといって放り出す訳にもいかず、偶然同い年でもあった事でいざとなれば身代わりにすべく、同じ教育を受けさせられて今に至る。

『本物』と同様、その正体は上層部以外には秘匿され、トウ姐さんを筆頭とする南斗の巫女の1人という扱いになっているが、実は私はユリアちゃんの【影】なのだ。

その事実は勿論、ユリアちゃん本人には知らされていない事だが。

「……そうか。」

…おれは、とんだ道化だったというわけだ」

シンは自嘲するようにそう言って、哀しげな表情を浮かべて笑った。

その日を境にユリアちゃんへの嫌がらせ攻撃は終了したが、シンが彼女を見る瞳の奥に、どこか仄暗いものが混じっているのを、私は懸命に見ないふりをし続けた。

やがてシンは正式に南斗孤鷲拳の継承者に決定し、【紅鶴】の取りなしにより【鳳凰】がその活動を沈静化させて、北斗の継承者の選定が大詰めを迎えた、それから数年経った、ある日。

世界は、核の炎に包まれた。

後編

…この世界は、かつて私が生きてきた日本より文化的には遅れている（今いるここは比較的都会なのでまだましだが、私の生まれた村などは、前世の一、二世紀前の中国くらいの生活レベルだったはず）が、何故か防災や避難に関する意識だけは、あちらに比べてずっと高かった。

だから小さな村でも最低ひとつは避難シェルターが設置されており、この街には調べたら東西南北合わせて12基ものシェルターがあった。

だからこそこの世界の人類は、核戦争後も生き延びる事ができただろう。

もつとも、全てが同じ規格で作られているわけではないらしくその規模はまちまちであり、修練場から一番近い場所にあるそれは、規模的には比較的大きいものだが学校や孤児院も近くにある為、近隣住民や施設の職員、そして子供たちが一斉にそこに集まってしまえば、すぐに一杯になる事が事前の調査で分かっていた。

恐らく物語の中で、トキがケンシロウとユリアを導いて連れてきたのはここだったに違いない。

子供、やたらとたくさんいた筈だし。

3人はシェルターへたどり着いたものの、どう詰めても2人までしか入れないと言われてしまう。

そこから他に移動する時間的余裕もなく、トキは突き飛ばすようにして2人の中に入れると、自身は外からシェルターの扉を閉め、死の灰をその身に受ける事となるのだ。

なので、世界情勢がキナ臭い事になり始めた頃から、私とユリアちゃんは災害時の避難経路について何度もシミュレーションしており、その必要が生じた場合には西地区側にあるそこではなく、幾らか遠いが収容人数が更に多い北地区側のシェルターで落ち合おうと、事前に話し合いがなされていた。

時々ケンシロウくんもそれに混じって聞いていたから、2人が実際

のその時に忘れていなければ、たとえトキさんと一緒に避難してきたとしても、トキさん1人が弾き出される事態にはならない筈だった。街にアラートが鳴り響き、人々が家族や恋人の手を取って、避難シエルターを目指して走る。

打ち合わせておいた北地区の方角に向かって走り出そうとした私は、程なく誰かに肩を掴んで止められた。

「おいー！」

…振り返ると、私より頭一つ半も高い視点から、金髪のイケメンが見下ろしている。

「シンちゃん!？」

「…この非常時においてすら、まともに名前も呼べんのか貴様は。」

まあいい、どこへ行くつもりだ」

ここ数年でコイツは随分身長が伸びたが、私はそういう体質なのか成長しても小柄で痩せっぽちのままほとんど変わらなかった。

ちなみに清楚可憐な美少女だったユリアちゃんは安定の聖女系美女になり、身長もスタイルも追い越されてしまっている。

【影】として、体格差があまり出ないように同じものを食べさせられていた筈なのに、どうしてこんなに差がつくんだ。

まあ、そんな事は今はいい。

「…いや避難するに決まってるでしょ!!」

立ち止まってる暇なんかないから!

アンタも早く……」

「そっちは北側だ!

貴様の短い足で全速力で向かって間にも合うわけがなからう!おれと一緒に来い!!」

「失礼過ぎるわ!……って、えっ!？」

シンは私を荷物のように抱え上げると、そのまま何事もなく走り出した……西側へ。

ちよつと待て、まずい。

トキさんがユリアちゃん達と一緒にならいいが、そうでなく1人だった場合、やはりこっちに向かっている可能性が高い。

そうなる私たちが行けば、どうしたって一人あぶれる計算になり、あのひとの性格上、私たちを中に入れてやはり自分が出て行く事になりかねないのだ。

「ちよつと待ってーそっちは駄…」

「舌を噛みたくなければ黙っている!!」

説得を試みたもののシンの足は止まらず。

私たちは西地区のシエルターに無事避難を終えた。

…トキさんは来なかったようで、それだけは安心したが、ひとり人抱えて全力疾走しゼーゼーと息を乱したシンに、

「なんであんなに北側に固執した」

と鋭い目つきで問い詰められる事になった。

仕方なくユリアちゃんとの約束だったのだと正直に説明したら、

「…貴様が心配せずとも、ユリアはケンシロウが守るだろう」

と、少し苦しげな表情で言われた。

そりやそうだろうけど。

その後、『肩を貸せ』と私に凭れて目を閉じたシンが少し震えていたのを、私だけが知っていた。

……2週間後によくシエルターから出ることができ、その間食べる時も眠る時も何故か私を傍から離さなかったシンが止める手を振り切って、北側のシエルターを目指した私は、大切な友人達と再会できたのと同時に、物語の強制力をひしひしと感じる事になる。

あれほど綿密に打ち合わせをした私が、いつまで待ってもあちらのシエルターに現れない事を心配したユリアちゃんのかわりに、トキさんが私を探しにシエルターを出て、死の灰を浴びてしまったのだという。

「気に病むことはない。これも運命だったのだ。

あなたが無事で本当に良かった」

そう言って粗末な寝台の上で咳き込みながら言うトキさんの、こんな時にも変わらない穏やかな優しい微笑みに、私は涙を禁じ得なかった。

そうして、南斗の上層部と北斗の師父様の間で、満場一致で内定し

ていたトキさんが伝承者決定レースから姿を消し、残り3人の候補者の中から、ほぼ消去法でケンシロウくんが、北斗神拳伝承者として正式に決定した。

予定調和の如くこうなった事を思えば、やはりここはケンシロウくんを主人公とする世界という事なのかもしれない。

彼が伝承者にならなければ、物語が始まらないのだから。

その直後、北斗の師父様が病で急死されたとの報が伝えられ（実際にはラオウが手を下したと私は知っているが、それを誰かに伝える手段も、必要も私にはない）、ケンシロウくんとユリアちゃんは婚姻を正式に結ぶ為、ユリアちゃんの故郷の街へと旅立つ事になった。

その事を私に伝えに来た2人の表情には、そこに至るまでの経緯を思わせる翳は確かにあったものの、それでもようやく結ばれる喜びもちゃんと現れていた。

「あなた達の幸せを守る為に、たくさんの思いが動いています。

どこに行っても、それを忘れないで。

そしてケンシロウくん。

何があっても、ユリアちゃんを守り抜いてください」

「判っている。この命に代えても」

「命には代えないでください！

あなたが生きてくれなければ、ユリアちゃんは幸せにはなれません
!!

「……マツリさんには敵わないな」

そんな会話があつて、別れを済ませたその夜。

一度寝床に入ったものの、眠れずに外の空気を吸いに出ると、修練場の屋上に、2人の人影が佇んでいるのが見えた。

1人は、長い髪を風に靡かせた若い男。

もう1人は、仮面を被った男。

間違いない。

ケンシロウくんの3人の兄の1人、ジャギだ。

そうだ、こいつの存在があつたんだつた。

…末弟と侮っていたケンシロウに伝承者の座を奪われて、それを返

上してこいと暴力をもって脅したところ、返り討ちにあつた事でその憎しみを深めたジャギは、ケンシロウの恋人であるユリアに懸想するシンを唆して、そのユリアを奪わせる。

今はまさしくそのシーンなのだろう。

このままいけば明日の朝早く旅立つ予定の2人の前にシンが現れ、ケンシロウくんに瀕死の重傷を負わせた拳句、ユリアちゃんを攫つて逃げる展開が待っている。

けど、ユリアちゃんの最終的な幸せの為には、たとえひと時ラオウには奪われても、シンにだけは渡すわけにいかない。

私はユリアちゃんを守る為に生きてきた。

その最後の仕事として、この略奪劇は、なんとしてでも阻止しなければ。

とはいえトキさんの例がある。

物語の強制力が、どこまで及ぶのかは判らない。

私が動いたところで無駄なのかもしれないが、気付いたからには動かねばならない。

：考えがまとまるまでの間、どれだけ呆けていたものか、気がつけば屋上の人影は居なくなっており、既に塔から出てきていたシンの背中が遠ざかろうとしている。

——止めなきや。

そう思つてその背に駆け寄り、声をかけ……ようとしたところで、後ろから伸びてきた誰かの手に、私は捕らえられ、口を塞がれた。

「よう、マツリ。

夜の散歩とは、なかなか洒落てるな。

ここで会えたのも何かの縁だ。

せっつかくだから、おれに付き合えよ」

くぐもつた声は腹の立つ事に、前を歩くシンには届かない音量で、私の耳元に囁かれる。

故にその背中は止まる事なく遠ざかり、角を曲がって見えなくなつた。

駄目、行かないで……こぼれ出ようとした言葉が、口を塞いだ手の中

に消える。

「……よし、行ったな」

そう言っただけで背後の人物が、ようやく私の口を覆う手を離す。

自由になった顔だけ上げて背後の男を見上げれば、不気味な仮面の下でぎよろりと動く目と、視線が絡んだ。

「…ジャギさんね。なんのつもりなの？」

「声で判ったか？」

…シンは、ケンシロウからユリアを奪いに行っただぞ？おまえを捨ててな。

ユリアに懸想してるのは知ってたが、ちよつと焚きつけただけで、こうも容易く動いてくれるとは」

仮面の下で、ジャギは揶揄うように喉の奥で笑う。

自分の策がハマった事に、ご満悦なのだろう。

そんな、自分の手を汚さずにケンシロウくんへの意趣を返そうとする彼のやり口に、私は、嫌悪を覚えずにはいられなかった。

…しかも、その手段にシンを使うなんて。

「アンタがけしかけたんでしよう、卑怯者！

絶対にそんな事させないから!!」

「健気だねえ…そういう女も嫌いじゃねえ。

どうだ、シンのことは忘れて、おれの女になるってのは？

大人しくいうこと聞いてりや、ちよつとくらいなら贅沢させてやるぜ？」

言いながら、ジャギの手が私の薄い胸を弄ぐ。

その動きだけで吐き気がするくらい気持ち悪い。

「お断りです！

どうせ大人しくいうこと聞いてたって、いいだけ弄んで飽きたら売っ払う胆はたらでしょう!!」

その手から逃れようと身をよじらせながら、私はジャギの仮面の下の目を睨みつけた。

だが私のそんな小さな抵抗を、ジャギは鼻で笑う。

「女は、少しくらい馬鹿の方が幸せになれるもんだぜ？」

…まあ、しかし残念だ。

黙って頷いてさえいれば、おれに飽きられるまでの間は、いい思いをさせてやったのにな」

「え？」

…次の瞬間、ジャギは声を張り上げて叫んだ。

「……この女は、お前らにくれてやる！」

言葉と同時に、突き飛ばされた私の身体が地面に転がる。

そして。

「ヒヤッハ——ッ!!!」

どこに隠れていたものか、唐突に数人の男が現れて、倒れた私を取り囲んだ。

「せいぜいせいっすらに可愛がってもらうんだな。

あばよ、マツリ」

言いながら背を向け、めんどくさそうに手を振りながら、ジャギはシンが去ったのと反対側の方へと歩いていった。

数人の男達に押さえつけられ、身体を弄ぐられながら、バイクのエンジン音が遠ざかっていくのを、漠然と耳にとらえていた。

…今、私はこの世界に自分を落とした何かの存在を、初めて恨んでいた。

…こんな思いをするくらいなら、生まれて来なければ良かった。

……会わなければ良かった。

……好きに、ならなければ、良かったのに。

この期に及んで、ようやく理解した。

ユリアちゃんの幸せの為、なんてとんだ詭弁だ。

確かにシンの狂愛は誰一人として幸せにしない。

それを望んだシン本人ですら。

だから阻止したかった。

けど、それだけじゃなかった。

私が、嫌だった。我慢できなかったのだ。

…シンが、ユリアちゃんを選ぶことが。

だって、私が一番近くにいた。

私が一番、彼を理解していた。

私が一番、彼のことを好きだったのだから。

一番卑怯なのは、私。

だとすれば、これは罰なのだろうか。

自分勝手な恋心だけで、物語を変えようとした、その罪の。

押さえつけられた手脚の痛みと、屈辱に涙が滲む。

そして私は無意識に、脳裏に浮かんだその男の名を呼んでいた。

「……………シン…ッ…!!」

刹那。

「ぐふっ…?!?」

私にのしかかろうとしていた男の胸元から、4本の突起が突き出ていた。

一瞬の間があって、そこから赤い血が吹き出し、私の服と顔を汚す。

その突起が引っ込んだかと思うと、男の身体が傾いで倒れ、その後、ここにいる筈のない男が右手を血に塗れさせて、鬼のような形相で立っていた。

「てっ、てめえ!?!」

私を押さえつけていた男が、何が起きたのか信じられないといった様子でそれに対峙し…

……………そこから、地獄が展開された。

茫然としたまま、次に我に返った時には、自分の身体の周辺に血だまりと肉塊が散乱しており、目の前に立つ、返り血に身を染めた金色の長髪の男が、私を見下ろしながら、酷薄な笑みを浮かべていた。

「酷い顔だぞ。

こんなもんしか無いが、せめて顔を拭け」

ぱさり、と胸元に何か落とされ、それが薄手のマフラーかストー

ルのようなものと気付く。

これで顔を拭けと言われて躊躇っていると、シンの手がそれを私の手から奪って、やや乱暴に顔を拭いた。

「まったく、世話の焼けることだ」

「……顔が汚れたのは誰のせいだと」

「…そうだな。だが、間に合っただろうか?」

言われて、自分の身体を見下ろす。

押さえつけられていた手脚に若干の擦り傷と、服の胸元にやや乱れがあるものの、それ以上の被害はないようだ。

それでも思い出すと身が震え、涙が溢れそうになる。

それをぐつと堪えて目の前の男を見上げ、一言、口にした。

「……助けてくれて、ありがとう」

「なんだ、言えるんじゃないか。」

おまえの辞書に『ありがとう』と『ごめんなさい』は無いらんかと思っ
ていたぞ」

「どんな暴君よそれは」

…いつも通りのノリに安心した次の瞬間頭を掴まれ、顔が無理矢理、硬いものに押し付けられた。

それがシンの胸板だという事に、一瞬遅れて気がつく。

なんだこれ、どういう状況。

「……シンちゃん?あの…服、汚れるよ?」

顔は拭われたものの、髪や服にはまだ奴らの血が付いている筈だ。

だがそう訴えても、シンの腕は緩まなかった。

「このまま黙って聞け。」

…おれは、確かにユリアが好きだった。

ジャギに言われるまでもなく、ケンシロウがユリアを守れないのならば、おれが奪ってやろうと、本当についさつきまで思っていた。

…だが、おまえが奪われると思った時、それに耐えられないと思うおれも、確かにいた。

……マツリ。

恐らくおれは長く、おまえと共に居すぎたのだ。

今更離れる事が、想像できなくなるほどに。

そしてそれは、おまえも同様なんじゃないか？」

そう言っつてシンはようやく、胸から私を離れた。

と言っつても、その手は私の両肩に置かれ、青い瞳は真っ直ぐに私を見据えている。

「シン…ちゃん…それは」

「おれは、おまえの事も好きなのだと思う。」

ユリアの事は『欲しい』と思うが、おまえの事は『必要』だと思う。

おまえが居なければ、きつとおれは駄目になる」

…それはちよつとだけ私も思う。だけど。

「…勝手な事を言っつているのは判っつている。」

だが、おれの我儘なんぞ、おまえにとつてはいつもの事だろう？

これから、おれの側にいろ、マツリ。

おまえの事は、おれが守っつてやる」

…心臓が、震えた。

初めて見る熱のこもつた瞳と、じわじわと詰められる互いの距離。だけど。

「…卑怯者」

「なに!？」

その目を睨みつけながら私が放つた言葉に、シンの形のいい眉が寄せられる。

「今、私が怖いめにあつてたのは知っつてるよね？」

吊り橋効果つて知っつてる？

怖いめにあつて助けられた直後に、その相手にそんな事言われて、冷静な判断が下せるわけないじゃん。

惚れてなくても、惚れたと勘違いしちゃう状況じゃん…そんなの、

卑怯だよ…!」

それは本気にして縋り付いて、全てを受け入れたくなるくらい魅力的な言葉。

けど、私はユリアちゃんの身代わりだ。

誰にとつても、きつと彼にとつても。

そう思うと、胸が潰れそうなほど苦しくなるのを、確かに感じた。だから、この気持ちは偽りだ。

きつと吊り橋効果なのだ。

…そう思えなければ、彼がそれに気がついた瞬間に私は壊れてしま
う。

自分が一番卑怯なのは判っていて、八つ当たりのように言い放った
言葉を、だが、シンは鼻で笑った。

「構わん。」

勘違いしてるうちに、本当に惚れさせてやる」

グダグダな私の気持ちなどお構いなしにシンはそう言って、私の頬
に手を触れる。

幼い頃は繋いだ事もある筈の、その手の大きさに、今更驚く。

そして、ある程度大きくなってからは許されなかった近い距離に、
心臓が先ほどよりもうるさく跳ねた。

「…とはいえ、その必要もないかな。」

おまえは元々、おれに惚れている筈だ」

「何を根拠に!!？」

だが続いた言葉にムカついて、またその青い目を睨みつける。

シンは今度はそれに動じる事なく、かつて見た事もないくらい優し
く、私に微笑んでみせた。

「…名を、呼んだらう？」

一番、助けが必要な時に…他の誰でもなく、おれの名を」

…かあつ、と頬に血が集まるのを感じた。

確かにあの状況下なら、助けてくれるなら誰でも良かった筈だ。

けど、あの瞬間の私の脳裏には、シンの顔しか浮かばなかった。

そして、本当にシンが助けに来てくれたと判った時、その瞬間に死
んでもいいとすら思ったのだ。

動揺のあまり動きの止まった私は、シンの次の行動を止められな
かった。

シンの指先が私の前髪を払い、額に温かい感触が落ちてきて…それ
が彼の唇であると、理解した時に既にそれは離れていた。

気がつけば私の身体は、シンの細く見える腕に、軽々と抱き上げられていた。

「マツリ、おれを愛していると言ってみろ」

「むり」

反射的にそう答えるも、シンの余裕の表情は揺らがない。

「…おれはこう見えて、惚れた相手には尽くすタイプだぞ?」

「いや謝れ。これまでの行動をすべて振り返った上で、ユリアちゃんに土下座して謝れ」

「あれはあいつがあまりにも、おれに関心がなかったからだ。

途中から泣かれて罵倒されるのも快感になってきたし、今思えばおまえに後から、心底呆れたような顔で小言を言われるのも割と…」

「へんたああい!!止まれえええ!!!」

…半泣きになって叫ぶ私に、変態^{シン}は喉の奥でくつくつ笑った。

そうだった、今更だよ!

よく考えたらコイツ、嫌がられれば嫌がられるほどその方向に固執する上、はては好きな女の精巧な人形作つちやう程度には変態だった

——っ!!

「…冗談だ、馬鹿」

…笑いながら、じたばた抵抗する手足をやんわり拘束され、さつき額に落ちていた温もりに唇を塞がれた時…私はこの若き荒鷲の爪に、完全に捕らえられたことを悟った。

その捕獲はあまりに甘美で、全て貪り尽くされるまで、私はその甘さに溺れきった。

…

「…考えたんだけど」

自室の狭い寝台の上でシンの胸板に頬を埋め、その体温を全身に直接感じながら、私は言葉を発する。

その私の癖のある髪の毛を、くるくると絡ませ、弄んでいたシンの指の動きが止まった。

「……………うん?」

「今から、私の名前はユリア」

「…何を言っている?」

「あまりに唐突に言われたせいで、意味がわからなかつたのだろう。シンは明らかに怪訝な顔をして、私を抱く腕に力を込めた。

…心配しなくとも、どこにも行きませんで。

「いい? キミはジャギの目論見通り、ケンシロウくんからユリア様を奪って逃げたの。」

そして、ユリア様を欲しているのはキミだけじゃない。

その中で、最も恐ろしいひとが誰か、キミもわかつてる筈」

私が言うと、シンはぐくりと喉を鳴らし、その名を躊躇いつつ口にした。

「……………ラオウ」

「正解。」

ユリア様を守る為ならば五車星も動くから、ケンシロウくん自身の力と五車星がいれば、野生のヒヤツハーくらいからならば、十分にユリア様を守る。

けれどラオウが動けば、今の彼らの力では絶対に勝てない」

…少し前までの私なら、いつそユリアちゃんはラオウに捕らえられた方がその身が安全だと思っていた。

今でもそれは変わらないが…それでも今の私にできる、最低限の抵抗はすべきだと思う。

ケンシロウがラオウと対等に戦える力をつけるまで、彼らには潜伏していてもらわなければならぬ。

それまでできる限り長く、ラオウの目をこちらに引きつけておきたいのだ。

今度こそ本当に、ユリアちゃんの幸せの為に。

「野生のヒヤツハーの意味は判らんが…つまり、おまえがユリアの影武者になろうというのか!」

「…………私は、元々ユリア様の影だから。」

ユリア様を守りきれなければ、自分をそこから解放できない気がして。

これは、私が、真の私を取り戻すための戦い。

それが終わったら、本当の私自身で、あなたの胸に飛び込むつもり。だから、シン。

今は「ユリア」を連れて、どこまでも逃げて。

一生どこへでも、ついていくから」

私がそう言っつて、シンの青い瞳を見つめると、彼は心底『しようのないやつだ』とでも言いたげな、けど明らかに愛おしげな目を私に向けて、言った。

「……………勿論だ。【ユリア】」

☆☆☆

数年後。

シンと私が作り上げたサザンクロスという街で、攻め込んできた拳王軍の前に、私とシンは立ちはだかった。

私をユリアと呼ぶシンに、怪訝な表情を隠さずに、ラオウが予想した通りの質問をする。

「ユリアはどこにいる」と。

私は自分を抱きしめるシンに『任せて』と触れるだけの口づけをしつてから、馬上のラオウを見上げて、彼にだけ聞こえるトーンで言った。

「…御覧の通り、私はユリア様ではありません。」

ユリア様は、シンに連れられての旅の途中で、病を得て儂くなられました。

シンはその事実を受け入れられず、私をユリア様と思い込んでいます。

……………夢は、いつの日にか醒めましょう。

けれど出来るだけ長く、彼のそばで、夢を見続けさせてあげたいのです。

どうかこのままお引きになり、私と彼が共に静かに暮らすことをお許しいただけないでしょうか？」

…ユリアちゃんが亡くなったと聞いて、さすがのラオウもショックを受けたらしい。

だからこそ、涙まで浮かべた私のその嘘八百でも、恐怖の世紀末覇

王に届いたのだと思う。

「…ユリアでなくば、奪う意味もない。

おれの覇業の邪魔にならぬならば、勝手にするがよい」

…そう言つて、自軍を率いて去つていく拳王の背を見送つた時、急に膝の力が抜け、シンに支えられて顔を見合わせると、途端に渴いた笑いがこみ上げた。

私の「影」としての仕事はここで終わった。

これからはシンのそばで、本当の私として生きていく。

…救世主は、多分現れない。

故に未来がどうなるかは、誰にもわからない。

けど、愛する人の隣で生きていける私は、今はこれ以上なく幸せだ。

うぬの名はく或る女官の拳王様観察記（愛ある脳内
ツツコミ）

1

…よくあるネタですがわたくし、異世界転生していたらしいので
す。

ええ、『北斗の拳』という漫画の世界ですわ。

わたくしの前世だった男子高校生が生きていた時には、既に30年
も前の作品だったのですが、友達に薦められて読んだ最初の1巻で厨
二心ハートがいい感じに刺激されて、初めてのバイト代を使って文庫版で
全巻揃えましたの。ええ、Amazonで。

と申しましたが、最後まで読み終えられなかったのですけど…。
転生、という言葉でおわकारの通り、その世界のわたくしは若くし
て死んだのです。

寝坊して、慌てて走って登校していたら、信号無視のトラックに撥
ねられて衝撃と共に宙を舞い、次に硬いアスファルトに頭部を打ちつ
けられた瞬間は、思い出すと寒気がいたします。

あ、ちなみに前世が男性だったからといって、その記憶が蘇ってい
きなり男性の意識に塗り変わる、なんて事はありませんわ。当然で
しょう？

確かに前世の記憶は戻りましたが、この肉体で生まれた時から女と
して20年以上生きてきて、今のわたくしにはこの人生こそが現実。
現世の肉体で体験していない記憶なんて、眠っている間にみる夢の
ようなものですもの。

ああ、失礼。お話を戻しましょうか。

わたくし、元々は辺境にある大きな街の、割と裕福な商家の出身で
したの。

その頃のわたくしときたら、お恥ずかしい話ですが甘やかされた一
人娘で、まるで自分がこの世で一番美しい女であるとばかりに調子に
乗っております。

…ええまあ、お察しですわね。

あの核の炎が世界を包み込んだあの日、わたくしの世界も一変しました。

暴力が支配し、力無き者を蹂躪する、それまでの常識が一切通用しない世界。

お金なんて『ケツを拭く紙にもならねえ』ただの四角い紙束となり、ちよつと見てくれるのいいだけの甘やかされた小娘など、こうなればなんの役にも立ちません。

それでもわたくしにとって運が良かった事は、ある程度の資源があったわたくしの住む街が早々に拳王軍の支配下となった事で、有象無象のヒヤツハー集団……もとい無頼の者たちに蹂躪されずに済んだ事と、忠誠を示すための沢山の貢物と共に、その地区で一番美人だったわたくしが、拳王様に献上された事です。

…ええ、地区一番の美人とか言われても、わたくしなんぞ町内会主催のミスコンレベルだったということをそこで早々に思い知らされ、その時点でまだわずかに残っていた鼻っ柱が、ぽつきり折られたところか完全に倒壊いたしましたとも。

わたくしより先にここに来て、既に拳王様や幹部の方々のお世話係の任をいただいていた女官さん全員、わたくしの目から見れば『天使、いや女神か！ここは天上界か！』つてくらいの美人さん揃いでしたからね。

聞けばわたくし同様、制圧した街から献上された、その街で評判の美女達だったようですが、都会の女性たちは辺境育ちのわたくしなんかよりも、ずっと垢抜けておりましたわ。

案の定、担当を振り分けた兵士さんが、わたくしをひと目見た途端、ちよつとがっかりしたような顔で、居城の管理というか要するに下働きの、掃除やらなんやら雑務を担当する部署に、わたくしを案内してくださいました…ちよつと！

配属部署はともかく『街一番の美人と聞いてたけど、辺境の街の女のレベルなんてこんなもんか』とか呟いたの聞こえてましょよ!!

むしろ権力で集められた美女に目が慣れすぎではありませんこと

!?

……思い出すと今もムカツ腹が立ってきますがそれはさておき滅べ。

与えられた仕事を日々こなして、かつてはツヤツヤだった爪や、ささくれのひとつすら無かった手指が、見る影もなく荒れてきた頃、他の下働きの子たちと一緒に兵士さんの服を繕っていたわたくしは、見るともなしに見た作業部屋の窓から、遠目に見えた拳王様の騎馬姿に、忘れていた前世を思い出したのです。

そして、その瞬間まで嘆いていた自身の境遇に、危うく感謝しそうになりました。

——ちよ！本物のラオウじゃん!!

：そう。厨二心ハイトの持ち主だった前世のわたくしは、『北斗の拳』の中でも『ラオウ』が大好きだったのです。

その日から騎馬で居城を出て行く、かの御方の姿を、遠くから見送るのがわたくしの、毎日の習慣となりました。

そんなことをしているわたくしに同僚のマユが、

「えっ・ちよつとりア!？」

「アンタまさか拳王様に懸想してるの!?恐くない?」

と心配そうに声をかけてきましたが、わたくしの感情はそういうものではありません。

推しというのは、見ているだけで日々の活力となります。

彼女にはその後『推し』という概念をしつかり叩き込んでおきました、今マユは拳王軍の幹部のひとりであるバルガ將軍に夢中です。

いや趣味渋すぎるでしょう。

ちなみに『いや待って無理無理貴い心臓痛い好きすぎて死ぬ』ってタイプ。

☆☆☆

そんなわたくしに転機が訪れたのは、ここで働き始めて1年も経った、2週に一度だけ許されたお洗濯の日のことでした。

何せこの世界、水はとても貴重です。

拳王の居城には大きな井戸があり、一軍の喉を潤し煮炊きができる

程度には豊かなのですが、それでも水をざぶざぶ使い捨てる洗濯という行為は、確実に贅沢の範囲なのです。

ぶつちやけ水飲まなきや生きられないけど、服くらい汚れても死にませんし。

ですがやはり、洗って干したものを身につけるのは気持ちがよく、この日ばかりは下働きだけではなく兵士さんたちも、手の空いている方は手伝いに来てくださいます。

拳王軍も、地方に散らばる末端の組織などはいわゆる三下ヒヤッハーの集まりですが、直属の正規兵は規律がしっかりしている為、わたくし達下働きの娘たちに悪さを仕掛けるような方はいらっしやいませんの。

むしろ皆さんとても御親切ですわ。

：どちらかというとな官さん達が……ええ、御自分に自信のある方々が多いせいか、あわよくば拳王様の御寵愛を賜ろうと考える数人が互いに牽制し合っており、そこに他の女官さんが取り巻きで着くみたいな形となって、派閥みたいなものが出来上がりつつありますので、正直あの辺は、あまり空気がよろしくありません。

まあ、拳王様は見た目も性格も恐ろしい方ですが、ほぼこの時代最強と言つて良い御方です。

その方を選ばれた女は、望むもの全てを手に行けるでしょう。

：今その席が空いているのは、ただお一人の為だけなのでしょうけれど、それを知るのは拳王様御本人のみですし。

まあ、また話が逸れてしまいましたわ。

ええと、そうそう。お洗濯の日の事ですわね。

あの日は朝からわたくし達下働きは、沢山の汚れた服を相手に大わらわでした。

とにかく量が多いので、洗いはすぐに真っ黒になってしまい、何回かに一度交代で、洗い桶の水を取り替える為、井戸の水を汲みにいきます。

それがわたくしの番になり、両手に水桶を2つぶら下げて戻ったわたくしにマユが声をかけてきました。

「ねえリア。アヤ見なかった?」

結構前に水汲みに行つた筈なんだけど、まだ戻つてこないのよ。」
アヤというのは最近下働きに入つてきた子で、なんでも既に親は亡く、2人の弟と共に聖帝軍の末端兵士に捕まりそうになつていたところを、たまたま通りかかったリユウガ將軍に助けられて連れてこられたそうで、その弟達は少し離れたところで、女官さん達の制服を踏み洗いしているようです。

…なんか『このやろう』『化粧オバケ』『くそババア』とか聞こえるのは気のせいでしょうか。

ひよつとしたら持ち主の女官さんに、意地悪でも言われたのかもしれない。

子供は正直ですから気をつけた方がいいです。

「だから、ひとつでいいって言ったのに。」

あの子細くてちっこいし、この仕事まだ慣れてないから、大丈夫と自分では言つたけど、やっぱり水桶ふたつは辛かったのかも。

ここはあたしがやつとくからリア、あんたもう一回行つて、運ぶの手伝つてあげてくれない？」

そう頼まれて井戸のところまで戻ると、黒い巨大な生き物の姿が、わたくしの目に入ってきました。

それはまさしく拳王様の愛馬・黒王号です。

よく見ればそのそばに、拳王様御自身もいらつしやるではありませんか。

まあまあ、相変わらずの丈夫振りですこと。

今日もわたくしの推しが貴いですわ。

「小娘が！貴様、何とということをしてくれるのだ!!」

「も、申し訳ございません…!!」

そしてそのそばには怒鳴り声を上げる小男がおり、その足元の濡れた地面に、じかに跪く少女がどうやらアヤのようです。

小男は厩番のコウケツという男でしょう。

幹部の方々には媚を売るくせに下働きの者にはやけに尊大なので、同僚や先輩のお姉さん方（下は20代後半、上は50代半ばまで）の間では、女官さん達以上に嫌われておりますわ。

…それにしてもこれはどういう状況なのでしょう。

水桶が転がっているところを見ると、濡れた地面は汲んだ水桶を、転んだか何かでひっくり返してしまっただけでしょうが、ともかくにもそのままにしておけず、わたくしはアヤの側まで寄ると、その肩に手を置きました。

アヤは一瞬、ビクツと肩を震わせます。

「リアさん……い」

ですが、触れた手がわたくしのものだという事がわかると、アヤは泣きながら、わたくしにしがみついています。

「わたし、拳王様の足元で躓いて転んでしまって、おみ足に泥水を……!!」

「まずは落ち着きなさい。」

貴人の御前で、所作を乱すものではありませんわ」

濡れた地面に座り込んでいた為、アヤの服も手足も泥だらけですし、それにしがみつかれたわたくしまで、同じことになってしまっています。

今日がお洗濯の日で良かったです。

もつともそうでなければ、そもそもこんな事にはなっていないのでしようけれど。

「…拳王様。」

この度は大変な御無礼を致しまして、申し訳ございません。

本来ならばこの場にて御沙汰を待つところではございますが、このようにお見苦しい姿でお言葉をいただくのも不敬と存じます。

後ほど改めて、侍従長と共に伺い致しますので、ひとたびこの者を下げる事をお許しく下さい」

「……不要。この程度、すぐに乾く。」

このラオウ、女子供の些細な不手際などに、いちいち立てるほどの小さな腹など持ち合わせぬわ。去ね」

…初めて自分にかけられた推しのお言葉は、意識すれば『貴様等アリが靴に噛み付いたところで気にもならん』というものでした。

「寛大なる御言葉、感謝いたします。御前失礼を」

それでも、『気にしない』という言葉質が取れた事を幸い、わたくしは早々にこの場を辞すべく、アヤを立ち上がらせませす。

「リアさあん！ぐすつ、えぐうつ…」

「落ち着きなさいと言っているでしょう。」

戻って着替えをしたら、お洗濯の続きですわよ。

まだまだたくさん残っているのですからね」

彼女を引っ張って水桶を拾い、ついでにちらりと拳王様を盗み見ると、何やら驚いた様なお顔で、こちらを見つめております…え？

「ああつ、ラオウ様！お靴が汚れております!!」

と、その時コウケツが、さも今気がついたとでも言うように、拳王様に駆け寄りました。

その足元に縋り付くようにして、泥のはねたブーツを、手にした布で拭きます。

拳王様は特に止めるでもなく、されるがままコウケツを見下ろしておりました。

「このような端女にお靴を汚され、さぞご不快だった事でしょう。」

さあ、きれいになりました！

私は馬係のコウケツと申します、拳王様」

ひとの失敗を踏み台にして拳王様に自分を売り込もうとするこの男は、見た目よりも野心家であるようです。

けど、魂胆があまりにも見え透いていますわ。

「…何故、おれに媚を売る。」

おれの歡心を買って、出世でもしたいのか!？」

そして、はたから見てもバレバレな魂胆が、拳王本人に気付かれなはずもなく。

御機嫌取りをしようとしたその行動は、却って拳王様の怒りを買う結果になったようです。

「媚など男には不要！」

このラオウに必要なものは戦士だ!!」

拳王様はコウケツの顎を無造作に掴む（大きさの対比的に、つまむと言った方が近いかもしれません）と、そのまま掴み上げて、苛立つ

たように言いました。

「下衆なドブネズミめ!!二度とおれの前に顔を見せるな!!」

次の瞬間、手を離されたコウケツは、一度べしつと地面に叩きつけられました。が、さほどのダメージもなかったようで、情けない悲鳴をあげて、素早くその場から逃げ出していきました。

……うん。何という理不尽。

怒りのスイツチが判り辛すぎますわ。

コウケツは拳王軍での出世を望んでいたようですが、わたくしだったら絶対に御免です。

こんなひとの側に仕えていたら命がいくつあっても足りません。

機嫌を損ねる事に最大注意を払ってるうちに多分過労死フラグ立ちます。

推しは遠くから愛でるもの。うん名言ですわね!

「待て女……名をなんと叫びた?」

若干現実逃避をしながら、見なかった事にしてその場を去ろうとする背に、何故か声がかけられました。

幻聴と思いたかったのですが、ギギギ、と音がしそうなぎこちない動きで振り返ると、拳王様は間違いなくこちらを向いております。

女……この場合、ここにはそれに相当する者が2人おりますが、拳王様が仰っているのは、さて、どっちでしょう。

ふと隣を見れば、アヤが今にも泣きそうな顔で、生まれたての仔馬かってくらい震えております。

「……あとから来た方だ」

わたくしの心の声に応じたかのようなタイミングで、拳王様が付け加えました。

こうなると、問われて答えないわけには参りません。

「……リアと申します、拳王様」

「リア……か。うぬは今日より、おれの専属だ。」

おれの身の回りの事を賄うが良い。」

「……………」

理解不能な言語を聞いたような気がして、わたくしは間拔けな声を

発する事しかできませんでした。

「さっきのドブネズミほどあからさまではないが、おれに媚びようとする女どもには、いい加減うんざりしていたところだ。

うぬはおれを前にして、へりくだ遜りはしても、媚を売ろうとはしなかった。

何より、おれを恐れもせず、堂々とした態度でこの場を収めようとした。

これほど胆はらの据わった女の方が、おれの側仕えには都合がよからう」

いや今、都合いいとか言わなかったかこのオッサン!!

……失礼いたしました。

……けど多分というか絶対に、今言った理由なんて後付けでしょう。拳王様が最初に気になったのは、恐らくわたくしのこの名前ですわ。

拳王様にとっては、意中の女性の名前の一字抜きですものね。

アタマントコちよつと足りない……つてやかましいわ。

あら、またまた失礼いたしましたホホホ。

そんなわけで拳王様の独断により、その日よりわたくしは下働きから、いきなり拳王様付きの女官に格上げになったのでした。

この拳王軍の居城に於いて女官という仕事は、拳王様や幹部たちの衣食の世話をする為の存在です。

着替えや食事の配膳、ぶつちやけ毒味係なんて仕事もあるわけですが、それらの業務は基本交代制で、割とランダムな組み合わせの2人ひと組で回すシステムを採用しているようです。原則では。

ですが。

わたくしは、かの御方のお世話を今、ひとりで任されておりませぬ。

『今日からこのリアをおれの専属として側仕えに置く。』

他の女官は一切おれに近付けるな。鬱陶しい』

という謎の命令によつて、です。

そんな拳王様の突然な気紛れで、下働きから専属の女官となったわたくしですが、慣れてしまえば拳王様のお世話自体は、それほど大変ではございませんでした。

拳王様のわたくしの起用に、女除け以上の意味があつたわけではなく、なので普段の着替えなどは持つていけば御自分でなさいませし、入浴もバスタブとお湯の用意さえ整えておけば後は下がらせてくださいませぬので。

∴この点は安心いたしました。

身体を洗えなどと言われたら、刺激の強さに卒倒する自信がございますもの。

漫画でのシンの登場時、入浴後の身体を半裸の美女たちに、抱きつかれるようにして拭かれている場面があり、女官とはそういうことまでしなければいけないのかと、内心ヒヤヒヤしておりましたし。

そういうのが必要ならば他にもっと適任の人材がわんさかおりましてよ？

ええもう、前世の男子高校生だった頃であれば、匂いだけで勃起したくらいスタイル抜群の美女が、ここにはたくさんおりますのでね。

あと女官の制服として支給されている服は、何故か肩やデコルテな

ど露出度が高い上に布地も薄いのです。

わたくしには割と標準的なサイズ感ですが、他の女官さん達を着て、どの部分とは申し上げませんが薄布を暴力的なまでに押し上げている光景は、さぞかし男性の目を楽しませているものと思いますわ。滅べ。

それでも拳王様はそもそも初恋拗らせた一途な方ですから、心の奥に棲まわせるただおひとりへの想いを大切にされていらっしやるのでしよう。

以前から薄物を纏った美女がアピールしてきても、プライベートな部分には踏み込ませなかったわけで、専属としてスカウトしたわたくしに対して、特に距離感が変わらないというわけですわ。

なので、拳王様のお側での仕事は、先ほど申し上げた通り大変ではないのです。

……ただ、わたくし的には非常に心臓によろしくないのですけれど。

推しは遠くから愛でるもの。

過剰摂取は、身体には良くないのです。

状況によっては、生命の危険すらありますのよ。

ほら、よく言いますでしょう？

『仰げば尊死』って。

・・・

「またうぬはろくでもない事でも考えているようだな」

と、低く押し殺した声に、どこか面白そうな響きをもって、隣から声がかけられます。

反射的にその声の方向を見遣ると、出撃前の武装を整える為、兵士の皆さんが介助するに身体を任せて椅子に座っている、拳王様と目が合いました。

……ちなみにわたくしはと申しますと、この拳王様の傍に立って、武装が全て整った後、最後に頭を飾る兜を、隣でずっと持たされております……ええ、これがメツチャ重たいんですけどね！

「…本当に、肝の太い女よ。」

並の女であれば、そのようにおれを見返す事などできはすまい。

：まあ、斯様な女でなくば、あの鬱陶スズメしい女官どもを、3日で掌握するなど叶わぬか。

うぬを側に置いたのは、暇さえあればすり寄って来ようとするあやつらを寄せぬ事のみで、他に何も期待してはおらなんだが、なかなかどうして、思わぬ拾い物であったわ」

「……恐縮ごんじゆくにございます」

いつも通りの悪そうな顔で、何故かニヤリと微笑みながらそう声をかけてくる拳王様に、わたくしは慌ててこうべを垂れます。

：けど、掌握したとか些か人聞きが悪いですわ。

それこそ最初はこの大抜擢とも呼べる人事に対して、不満たらたらのおっぱいの森：もとい女官さん達に取り囲まれて脅しをかけられたりもしましたけれど、誠心誠意のお話し合いの結果、皆さんが仲良くなれただけでございます。

その内容が休憩時間を使つての、3日にわたる『推し』と『萌え』の概念の説明会であつたとしても。

『：本当は私、拳王様よりもリュウガ様の方が好みなんです』

その説明会の後、割と中心人物的な一人の女官さんが、頬を赤らめてそう口にして、それから皆さんが次々に『実は：』『私も：』と、修学旅行の夜の大告白大会みたいになリ。

互いの『推し』を語る事により、皆さま今までよりも打ち解けてお話ができるようになったようで、それまで対立しあつてギスギスしていた空気が嘘のように、今では女官同士、仲良く仕事できておりますわ。

ちなみに女官さん達の一番人気はリュウガ様で、二番手はソウガ様のようです。

尚、こちらには渋好みのお嬢さんはいらっしやらなかつたようで、バルガ様やザク様のお名前は上がりませんでした。

とにかく職場の雰囲気が和やかなのはいいことですわ。

職場環境の改善にわたくしが一役買えたのだとしたら、光栄なことに存じます。

…けど、昨日の休憩時間に女官詰所に戻ったら一部の方々が『ザクソウ』？とか『リュウバル』？とかの暗号を使って、顔を赤らめながら話をしている、声をかけたら何やら慌てたように話をやめて、取り繕うような笑顔で対応されたので、まだどこか距離を置かれている気はいたしますが。

…などと考えているうちに拳王様の武装が整ったようで、視界の端に黒王号が引かれてくる姿が見え、拳王様が立ち上がりました。

黒王号に向かって歩を進める拳王様に従って、重たい兜を手にしたまま、わたくしも数歩後ろをついていきます。

…こうして見ると確かに背はお高いのですが、物語ではとんでもない巨人として描かれていた筈の拳王様の身長は、わたくしの見る限り恐らく2メートル強くらいです。

多分ですがすごく大きく見える時は、闘気の質量が可視する状態にまでなっており、それにより実際よりも身体が大きく見える的な、オーラシャイアント大豪院○鬼現象でも起きているのでしょう。

数歩で黒王号の傍に立った拳王様は、その倍の歩数をかけて傍まで寄ったわたくしの方に手を伸ばされ、わたくしの手から兜を受け取ってくださいました。

…この無駄とも言える一連の流れは、わたくしにはさっぱり理解できませんが、わたくしが一応は『拳王様を選んだ女』であるが故に、必要な流れなのだそうです。

そもそもこの世界の男尊女卑著しい感覚によれば、力ある男にとつては、女性も財産のひとつらしく、女性の存在は力を誇示する手段になり得るものであるようです。

確かに物語では主人公ケンシロウの最初の強敵ともであったシンや、短い時間でケンシロウと友情を育んだレイの最後の強敵ともとなったユダも、心の奥に思う相手を棲まわせているにもかかわらず、自分の居城で複数の女性を侍らせていましたものね。

また、軍をより強大にしていく中で、状況によっては武勲を立てた兵などに、女たちは下賜される可能性もあるわけ。

現時点で『拳王様のお手付き』という認識を与えて、全軍にわたく

しの顔を売っておくことで、下賜の必要が生じた時に、まだ『お手付き』のままであればわたくしは選ばれないし、既に手放された状況であれば、『お手付き』だったという過去がわたくしに付加価値を与えて、より高価な褒賞とする事ができるといいうわけです。

……とんだ風評被害ですけどね！

手はついとらんわ失礼な!!

ああ、よりにもよってこの世界で、何故わたくしは女などに生まれてきてしまったのでしょうか。

……いえ止しましょう。言っても仕方ありません。

それにこの世界でもし男に生まれていたら、違う意味で今よりもっと、惨めな気持ちになるに決まっていますわ。

強くなければ純愛すら貫けないこんな世の中じゃ。

強い男の庇護下に、早い段階で入ることができたわたくしは幸運なのです。

(そんな中で、聖帝軍の子供狩りの噂を聞いて、聖帝サウザーはどうやらお稚児趣味らしいと、こちらの兵士が軽口を叩いているのを聞いたことがあります。いや、実際には子供たちは労働力として集めているだけで、サウザーの趣味嗜好の話ではないのですけれども。ここで本人が耳にすることは絶対にはいにして、心臓に悪いんでやめてもらっていますか)

……ようやく重たいものが手から離れ、空っぽになった手に何故か空虚さを覚えつつ、拳王様を見上げたわたくしの口から、次には考えるよりも先に、言葉がこぼれ出ておりました。

「……御武運を」

……それを聞いた拳王様は、少しだけ目を瞠きました。

それから口角を笑みの形に吊り上げ、馬鹿にしたようにフンと鼻を鳴らします。

「……なにに祈るつもりだ。

おれは神に戦いを挑んでおる身。

祈りなど捧げようがどこにも届きはせぬわ」

その微笑みがどこか優しげに映ったわたくしの目は、相当この状況

に毒されていたに違いありません。

「だが、リア。うぬの望みはおれが叶えてやろう。」

武運は神ではなくこのラオウに祈るがいい」

更にはありえない幻聴まで聞こえてまいりました。

驚いてわたくしが顔を上げると、纏ったマントがぼさりと広がり、拳王様の姿が一瞬、それに覆い隠されました。

次の瞬間には黒王号に跨っていた拳王様が出撃の合図を出すと、拳王軍の兵士たちが鬨の声で応え、わたくしは戦いに出ていく男たちの後ろ姿を、見えなくなるまで見送っております。

……………その日。

戦闘員の大半が辺境の制圧に向かった拳王軍の居城は野盗集団の襲撃を受け、待機組の兵士と非戦闘員が協力して、一応は撃退したものの、生き残って撤退したならず者たちに数名の女たちが拐われました。

……………今、わたくしは。

周囲からすすり泣きの声が聞こえる中、トラックの荷台に乗せられています。

はい、拐われちゃいました。てへ。

『てへ』じゃねええ——ッ!!!
なんだこの絶体絶命の危機!!

「さすが拳王軍。いい女を揃えてやがったな」

「ああ。もつと連れてきたかったが、さすがにこれくらいが限界か。奴らここ近年で、無駄に規模だけは大きくなってきたからな。

根こそぎ奪ったらさすがに睨まれる」

「なあに、他から拐ってきた分も併せて、これだけ居りゃあ充分だろ。

GORANの連中なら、纏めていい値で買ってくれるだろうぜ。

特に拳王の城から奪ってきた女たちなら、一人でも最低、食料2カ月分にはなるさ」

どうやら一時休憩となるらしく車の揺れが止まって、外から聞こえるならず者達の会話に耳をすませますと、何やら不穏なやりとりが聞こえてまいりました。

ゴランというと、原作序盤の時点で主人公のケンシロウに倒された、もと軍隊のカルト暴力集団ではなかったでしょうか。

彼らが壊滅していないということは、今は時系列的には序盤か、或いは原作開始前の可能性もあります。

そして、どうやらわたくし達はそこに売られる運命のようです。

救いは期待できそうにないでしょう。

残っていた兵士の皆さんが必死に戦ってくださいましたお陰で皆の被害は最小限。

彼らの言う通り、女数人奪われた程度、拳王様にとっては痛くも痒くもないでしょうから。はは。

……とにかくにもかくにも、美女だろうが子供だろうがならず者だろうが、生きている以上睡眠と飲食、更には排泄の必要が生じます。

ここで休憩を決めたならず者達は、わたくし達にも僅かな食料と水を与えました。

そして屈辱のトイレタイム（と言ってもそれに相当する施設があるわけではないので、ぶつちやけ野に放つしかないのですが）はと申しますと、2人ひと組順番で檻から出されて、片手同士を結びあわされ、監視の目から互いの身体を隠して、なんとかそれを行なっているわけ

です。

「……絶対に見ないから、早く済ませてくれ」

…わたくしと手首を繋がれた、年の頃13、4歳ほどの少年は、そう言つて精一杯、首をあさつての方に向けています。

彼は一人で旅をしていて、たまたまたどり着いた街で、若い女と間違われて拐われたそうです。

子供らしいふつくらとした頬をした可愛らしい顔な上に、癖の強い長めの黒髪はつややかで、まだ出来上がらない細身の身体つきの彼は、確かに黙つていれば女性に見えないこともありません。

男たちもよく見もせずに、他の女の子たちと一緒に捕まえて、まとめて檻に放り込んだのでしようね。

それに、先に捕まっていた女性の一人が気がついて、男の子だとバレルとその場で殺されるからと、咄嗟に自分が身につけていたショールを被せてくれたのだそうです。

その方はうちの居城を襲撃する前に立ち寄った町で、物持ちの男に是非にと請われて買われたそうで、わたくしどもが捕まった時には既に、この車には乗つていなかったそうですが。

「いえ、あなたはここでお逃げなさい。」

わたくしが、必ず見張りを食い止めますわ」

言つて、見張りの目からは少年の身体で隠される角度で、手首を繋がれている紐を解ほどこうと試みます。

「なに!？」

「…大きな声を出さないで。」

このまま目的地に着いてしまったらもう、あなたが男性である事を隠し通す事は不可能でしょう。

そのシヨールの方が仰つていた通り、露見すれば殺されるだけです」

ひよつとしたらそういう嗜好の男に宛てがわれれば、命を奪われる事なく済むかも知れませんが、どちらにしろろくな事にはなりません。

まあそれは言わなくてもいい事でしょう。

わたくし1人のしかも片手ではなかなか結び目が解ほどけず、彼にも紐の端を摘んでもらいながら話を続けると、少年は困ったように首を横に振りました。

「で、でもそんな事をしたら…あんたが」

「あの男たちは、わたくし達を商品として見ています。」

あなた1人を逃がす手伝いをしたところで、女であるわたくしはきつと殺されはしません」

多分、見せしめとして相当酷い目にはあわされるでしょうが…それも口には出さないことにいたします。

「…まあ心配であれば落ち延びた先で、わたくしの無事を神にでも祈っていてくださいませ」

そんな本心を隠して、少し冗談めかして笑ってみせましたが、わたくしのその言葉に、少年は唐突に怒りの感情に顔を歪めました。

「神など…：祈りなどなんの救いにもならぬ！」

ましてオレは神に復讐する為に生きているのだ」
…すぐく厨二臭い台詞はさておき、密談の最中に声を荒げるのやめてもらっていいでしょうか。

とりあえず、これがわたくしでなければ少年のこの豹変に、ビクツとくらいはしたかもしれませんが、わたくしは半日前まで、もつと恐ろしい人を間近でお世話していたのです。

子供の癩癩程度にビビる細かい神経は持ち合わせておりません。

「…まあ、奇遇ですこと。」

わたくしの主人あるじも似たような事を仰いましてよ」

「えっ？」

「自分は神に戦いを挑む身ゆえ、祈りは神には届かないのですって。」

戦いに向かう前に武運を祈る言葉を口にしたら、神ではなくおれに祈れと笑っていらつしやいましたわ」

最後に別れた時に見た、こちらを馬鹿にしたような凄味のある笑みが思い出され、胸がつくんと痛みました。

…この後わたくしは他の女性達への見せしめの為、恐らくはGORANに売られる前に、あの男たちの慰みものにされるでしょう。

工口同人みたいに。工口同人みたいに。
今ならば、拳王様に迫っていた女官さん達の気持ち判る気がします。

彼女らも、どうせ愛もなく奪われるのであれば、己が知りうる最も強い男に…と願った筈です。

極限状態における、それは女という生き物の本能ですもの。

女が自由に生きられないこの世界、今となっては叶わぬ望みですが、せめて最初だけはこれと決めた男に抱かれておきたかったものですわ。

そう。もしも、わたくしが選べるのならば……。

覚えず艶めいた溜め息が、状況を無視して出かかった時、

「……なんか、凄いな。あんたの旦那さん」

「はい？」

と、なんか変な事を言い出した少年の大きな目が、わたくしをまじまじと見つめている事に気がつきました。

わたくしは今、拳王様の話をしていたつもりでしたが、旦那さんって誰のことでしょう。

ですがそうこうしているうちになんとか結び目が緩み、わたくしと彼の両手が離れます。

「さあ、お行きなさい！」

「……必ず助けに戻る」

「不要です。」

それよりも、神に挑むならばまずは生きる事ですわ。

強くおなりなさい、若き天そらへの叛逆者」

あのひとのように……と、心で呟いた言葉は無視しましょう。

「おお、随分時間がかかっているなあ？」

出ねえんなら手伝ってやろうかあ？」

そこに下卑た声を上げながら、見張りの男が近寄ってきたところで、少年の背中を押したと同時に、

「きゃあああ——ッ!!!」

わたくしは悲鳴を上げながら、その男の腕の中に倒れ込みました。

男は腕の中のわたくしと、駆け出す少年の背中を交互に見て、一瞬固まったようです。

この機を逃す手はありませんわ。

「なっ!?お、おい、待てっ!!」

「いやあ〜・離して、離してくださいませっ!!」

誰かあ!誰か助けてえ〜っ!!!」

殊更に大声で叫びつつ、男の腕をしつかりと捕まえて、巻きつけるように己が身体に回します。

この状態で悲鳴を上げながら身動みじろげば、傍目からは男がわたくしを、無理矢理抱き込んでるように見える筈です。

「何してる!」

「てめえ、売りモンに手エ出しやがったのか!」

そして案の定、わたくしの悲鳴を聞いて駆けつけてきた男の仲間
は、彼に疑いの目を向けました。

「え?ええっ??」

「い、いや違う!それよりひとり逃げ…」

「この人がっ、この人がわたくしをっ!!」

「やっぱり手エ出そうとして紐解ほどきやがったな!」

「違——うっ!!てゅーか離せえ!!」

……うん、なかなかほどよいカオスになっております。

ここで情報が錯綜しているうちは、彼に追手はかからないでしょう。

わたくしの行動は後になって、彼らが冷静になった時に怪しいと気がつくでしょうが、それは今考えなくても良いことです。

…ここまでは、わたくしが想定した通りでした。

予想から外れてきていたのは、どのタイミングからだだったのでしよう。

大地が割れるような地響き。

近づいてくる蹄の音。

夜の闇を切り裂いて現れ、一瞬にして男十数人を踏み潰す黒い巨体。

漆黒の悪魔の背にありて、其を駆るのは……！

「……我が砦の周辺で小煩く飛び回る蠅どもが。

蠅なら蠅らしく、喰らい残しの屍肉にでもたかつておれば良いものを、この拳王を、随分と見縊ってくれたものよな」

……どうやらわたくしは、推しが恋しすぎて幻覚まで見えるようになつたようです。

我ながら妄想激しすぎますわね。

その推しの幻は巨大な馬の背から微動だにせず、ギロリと生き残つたならず者たちを見据えます。

「はわわ……け、拳王!!」

「バツ、バカな！」

いい歳の男たちが、恐怖もあらわに身を震わせ……あら？おかしいですわね。

何故この者たちにまで、わたくしが見ているのと同じ幻覚が見えているのでしょうか？

「……おい！拳王は女に執着してないから、女数人盗まれたくらいでわざわざ動かねえって、てめえ言つてたじゃねえか!!」

そしてひとりが幻の後ろに向かつて声をかけ、そこに居た顔に傷のある禿頭とくとうの、額にビンディみたいな石の飾りを何故か3つもつけるという意味不明のオシヤレをした巨漢が狼狽し始めました。

「なっ！ばっ、馬鹿!!」

「…フン。おれの不在時に砦を襲撃するなど、やけに間の良いことと思えば、手引きした者が居たとは。

いずれはこの首をと狙っていたのであろうが、まさに虫ケラ並の浅知恵よな」

「くっ……」

「これほど大きな毒虫が入り込んでおつた事、気づかずにはいた事は業腹だが、その事は後で考えよう。

よりにもよつてこの拳王の女を奪つたがうぬらの運の尽きよ！

今まさに天へと昇らんとする龍を蛟と見誤ったが愚、その血と命で贖うが良いわ!!」

…なにを言っているのかさっぱりわかりませんが。とりあえずこの幻は、どうやら拳王軍内部にいた裏切り者と対峙しているようです。

そして、離れたところでは既に解放された、わたくしと一緒に捕まっていた女官さん達が『キヤー！拳王様ステキ——ッ!!』などと黄色い声を上げており、引率してるザク様そっくりの幻がちよつと困ってるぽいです。

ええと、つまり、今わたくしが目になっている雄々しい姿は、わたくしにだけ見えている幻とかではなく…？

「くくっ……ぬうおお——っ!!」

と、どうやら開き直ったらしい裏切り者が、手にしていた鎌なのか槍なのか薙刀なのかよくわからない武器を振りかぶったかと思うと、拳王様と黒王に向かって突進してきました。

どうやら体格だけでなく、そこそ腕に覚えもある相手だったようです。が。

「うぬの軟弱な技でこの拳王が倒せると思ったか!!」

我が手を触れるまでもなく打ち砕いてくれるわ!!

北斗剛掌波!!!」

……次の瞬間、拳王様が軽く掌を突き出しただけで、15歳以下のお子様には見せられない光景が展開されました。

「…たぶりゃあっ!!」

無造作に繰り出されたように見えるそれは圧倒的な『鬨気』。

それが奇妙な断末魔をあげる男の巨体を捉えたかと思えば、次には内側から砕けるように、バラバラの肉塊と化したのです。

…不意に、何か温かいものがわたくしに、背中から抱きついてきました。

仲良くしてくれていた女官さんでしょうか。

それにしても感触が固い気がします。

「……す、凄え!!」

……ん？女性にしてはやや掠れた声と口調に違和感を覚え、肩越しに振り返った間近にあった顔は、先ほど別れたばかりの紅顔の美少年の、呆然とした顔でした。

……っ！

この光景は15禁暴力描写だと（あくまで心の中で）言っているでしょう、子供は見てはいけません！

というか逃げてなかったんですか!!?

なんで戻ってきてるんですか!!

「……あなたの事がどうしても気になったんだ。

けど、戻って良かった。

ひよっとして、あの人が……!?!」

わたくしの視線の意味を察したのか、少年は最初は言い訳のように、それから徐々に熱い想いを乗せて言葉を発しました。これは。

「……はい。あの方こそこの乱世を統べるお方。

わたくしの主人あるじでもある拳王ことラオウ様ですわ!」

「まさしく……まさしくあれこそが、神を超えた男の姿だ……!!」

相変わらず発言が厨二臭いですが、どうやら少年は拳王様のその強さに度肝を抜かれているようです。

そうでしょうそうですね。

あれこそまさに男が惚れる丈夫ますらおぶり。

子供には刺激の強いシーンだった筈ですが、心に傷を負っていないようで何よりですね。

と、少年がわたくしの身体から手を離れたかと思うと、何故か真っ直ぐその足で、拳王様のもとに駆け寄りました。

「待ってくださいー!」

その……オレは、あの女性ひとに助けられた者です!」

そこを兵士たちに取り囲まれ、跪きながら少年は、わたくしを指差します。

拳王様の視線が一瞬こちらを向き、それから再び、少年の方へと戻りました。

「お……お願いです!!オレにその拳を!!」

「どうか、その拳を教えてください!!」

叫ぶ彼を一瞥し、拳王様は手の動きだけで兵士たちを下がらせま
す。

「……何故!?!」

「ハ……ハイ!」

妹を奪った、神に……仇を討ちたいのです!!」

……あら?」

どうやら彼の『神に復讐する』発言はただの厨二病ではなく、なん
らかの事情がありそうですね。

その真剣な瞳に何か感じるものがあつたのか、拳王様はひとつ息を
ついて領きました。

「名を、なんと申す」

「オレはバランといいます!」

「……良からう、バラン。共を許す。

ただし我が拳は一子相伝。教える事はできぬ。盗め!!」

拳王様はそう言うのと黒王の頭をこちらに向けて、歩を進ませます。
元氣にお返事をした『バラン』を再び兵が取り囲みましたが、それ
は拳王軍として、若き兵を迎え入れる動きでした。

……バランと名乗った少年は、この瞬間に拳王様に心酔したのでしょ
う。

ということとは、拳王様推しのわたくしとは同士なのですわ!

これから先、拳王様への想いを熱く語れる相手ができると思うと、
なんだかワクワクして参ります。

そんな期待を胸に、生ぬるい視線を少年に向けておりましたら、わ
たくしの太ももの倍の太さもあるろう黒王の前足が、わたくしのすぐ横
で止まりました。

次にはズンと音を立てて、その背にあつた長い脚が地面へ降り立ち
ます。

「リア」

頭上から名を呼ばれ、反射的に見上げると、兜の下の表情が、半日
前に見たのと同じように、どこか楽しそうに微笑んでいるのがわかり

ました。

「面白いやつを捕まえてきたな。御苦労だった」

…別に、わたくしがスカウトしたわけではございませんが。

それでも直々にお言葉をかけられて、わたくしは黒王の足元で礼をとります。

「…勿体ないお言葉にございます」

…その礼の形から再び顔を上げた瞬間、背中をまるで丸太に叩かれたかのような感覚を覚えた後、気付けば拳王様の腕に抱きかかえられておりました。

「げふおっ！」

…ああこの体勢！思い出しましたわ!!

確か子供に折り鶴折ってあげてたユリアをいきなり腕に抱きしめて『ケンシロウを捨てろ』とか言った時のやつ！こんな感じだったんですのね！

正直、一瞬息止まりましたし！

これ抱擁じゃありません、鯖折りですわ鯖折り!!

あれ下手したらユリアさん潰されてもおかしくありませんでしたわよ！

愛を知らない男は、女を優しく抱きしめることも知らないようですわね!!

「…：褒美にこの拳王の見ている世界を、ひと時共に見せてやろう。」

黒王の背から見る世界をな」

そして動けずにいるわたくしを軽々と片手で抱えたまま、拳王様は再び黒王の背に戻ったのです。

落ちないように拳王様の身体にしがみつくと事しかできなかつたわたくしに、景色を堪能する余裕などある筈もなく。

…それでも、触れ合った場所から伝わってくる熱い体温と男の匂いが、この世で一番安全な場所がここである事を、否応なく伝えてくるのを感じておりました。

あれから半年。

あの日、わたくしを含め拐われた女官たちとバラン、ついでにあのならず者たちが他からかき集めてきた女性たちも連れて、居城に戻って参りました。

女性たちはひとまず下働きに回され、そこで適性を見てから女官を選定するようです。

というのも、これまで割と容姿だけで選定していた女官が、わたくしが拳王様の専属として抜擢された後に『ある程度実務能力のある人材持ってきた方が俺らの仕事、楽じゃね?』という事に幹部の皆様が気付いたことで、選定基準の見直しがかねてより検討されていたそうなのです。

わたくし自身は大した仕事をしているわけではないので、何かの折にそう言ったところ、

「リア殿が女官達を仕切ってくれるおかげで、彼女らの間でのトラブルや足の引っ張り合いもなくなり、こちらに余計な仕事が回ってくる事がなくなりましたからな。」

我ら男にとつて、それがどれほど有難い事であるか、まだ貴女にはお判りいただけないらしい」

と、マユが見たら気絶しそうなイケオジ顔で仰ったバルガ將軍の言葉に、他の皆様がうんうんと頷いていたあたり、なんかものすごい過大評価されてる気がいたします。

仕切ってなんかおりませんわよ?

相変わらず女官さん達は、内緒話にわたくしを混ぜてはくさいませんし。

：そういえば最近聞くようになった『ラオバラ』ってなんのことかしら?

皆さん、聞いても教えてくさいませんし、深く追求しようとしたら『特殊な掛け算のお話よ』ってよくわからない言葉で誤魔化されましたもの。

特殊な掛け算って何ですか!?!知りたいですわ!!

というか仲間に入れて!?!さみしい!!

…それはさておき、一応はその功績を買われたのか、単に面倒を押し付けられたのかは判りませんが、

「うぬが拾ってきたのだ、責任もって世話をせよ」

と拳王様の命令を受けて、従兵士として所属する形となったバランスの面倒をみる事になり、またこれまで通り拳王様御自身のお世話にも追われて、わたくしは以前より忙しい日々を送っております。

いや拾ってねえわ!?!むしろ逃がしたのにアイツが懐いてきたただけだわ!!…と、失礼いたしました。

バランスは拳王様に側付きを許されておりますので、この際だからと彼には拳王様のお世話を、しっかりと仕込む事にいたしましたの。

戦士ではないわたくしは戦場には付いてゆけませんので、代わりをバランスが務めてくれれば、拳王様は戦地においても、城にいる時と同様とまではいかずとも、そこそこ快適にお過ごしになれるかと思っております。

ええ、決して腹いせではございませんとも。

そんなバランスは、勿論当初の目的も忘れてはおらず、日々拳王様のお側で、北斗神拳の研究も続けているそうです。

ちなみに彼、食べるものが変わったせいかわそれとも単に成長期だったのか、この半年でみるみる成長してきました。

出会ったときにはわたくしとそう変わらなかった身長が、あつという間に追い越されてしまいましたわ。

細身だった体格も鍛錬により筋肉がついて、少しずつですが逞しくなってきましたし、可愛いだけだった顔立ちにも最近はどこか精悍さが出てきたので、今はもう女の子と間違えられる事はないかと思えます。

言ってることはまだ時々厨二臭いのですがね。

それはそれとして、一緒にいる時間が多い中で気がついたのが、バランスはどうも女に夢見すぎというか、女は皆等しくか弱く純粋で、守らなければならぬ存在だと思込んでいるフシがあるという事で

した。

過去に妹さんを亡くしているそうで、特に自分より年下の女の子には、妹さんを思い出してつい絆され、世話を焼きたくなるようなのです。

こういう事は、ちよつとズルい子にはすぐに見抜かれて、いいように利用されてしまう心配があります。

実際、わたくしと一緒に手伝いに行つたこの前の洗濯の日には、気がつけば順番に行く筈の水汲みをひとり何往復もさせられていて、さすがに注意いたしましたもの。

…そろそろ弟のように思えてきてる子が将来女で躓くとか、あまり想像したい事態ではありませんから。

…まあ、そんな折でしたわ。

サザンクロスという新しい町の噂が、拳王軍にもたらされたのは。

☆☆☆

サザンクロスとは、K I N Gと名乗る男が作り上げた町で、彼が率いるその組織もまた同じ名で呼ばれております。

その正体は誰も知らず、得体の知れない拳法を使う事で恐れられていて、その力をもって最近急激に広まったその名は、前世であれば検索急上昇ワード1位といったところでしょうか。

何せ近隣を根城に暴れ回る多数の集団を、アタマを潰しては己が傘下に吸収して力をつけてきて、最近是我が拳王軍の末端との小競り合いの報告が、幾度となく上がってくるにあつては、この世に覇権を目指す拳王軍としては、ちよつと放つてはおけない事態なわけで。

今は小物と言つていい規模でも、この調子で拡大を続けていけば、いずれは拳王様の前に大きな障害として立ちはだかるやもしれません。

…と、ここまでがこの世界に生を受け、紆余曲折の末に拳王様専属女官となった『リア』としての知識なわけですが。

「…どうか、今しばらく軍を離れる許可を」

リュウガ將軍がそう仰つて拳王様の前に、跪いてこうべを垂れたのは、そのサザンクロスの情報が最初に入ってきた二週間後の事でした。

た。

「……何ゆえに？」

まあ常識的には、休暇申請に理由は必要ないのですが、それでも拳王様が問うてしまったのは、そのリュウガ將軍の目に、どこか思いつめた光が見えたからでしょう。

もつともこの方、伏せ気味の長いまつ毛のせいで、少し俯くだけで割と悲壮感出る顔だちなんですけど、それにしたって今日のは出し過ぎですから。

拳王様が思わず心配になってしまうのも、決しておかしくはありません。

「それは……私的な事情につき御容赦を」

ですが、少しだけ悩んだ様子を見せながら、リュウガ様はゆっくりと首を横に振ります。

……ここからは『リア』ではなく前世の知識ですが、リュウガ様には妹さんがいらつしやいます。

その方こそがこの世界のヒロイン、南斗最後の将にして主人公ケンシロウの恋人であるユリア様です。

かのひとの守護星は南斗慈母星。

それは南斗と北斗の絆を結ぶ宿命を持ち、その宿命に導かれるようにケンシロウと惹かれあつた彼女は、本来ならそのままケンシロウと結ばれ、その愛と優しさと、そして伴侶となるケンシロウの強さをもつて、この荒廃した世界を平和に導く筈だったのでしよう。

ですから、南斗が乱れたと同時に北斗の星までが割れた時、彼女の運命も動かすにはいませんでした。

ジャギの甘言に乗せられたシンが、ケンシロウからユリアを奪って逃げ、その彼女の心を掴もうとあさつての方向に向かったシンの努力？の結果が、先述したサザンクロスの町です。

そう、KINGの正体こそまさにそのシンであり、サザンクロスはユリアの為に作られた町なのです。

…つかぶつちやけ、高価なだけで好みに合わないプレゼントって、普通に迷惑なだけですわよね。

完成した町を見下ろす塔の上でボンボンの童貞アプローチの如くドヤ顔をするシンの傍で、ユリアはその贈り物を喜ぶどころかドン引きしてその目に涙を溜め、この町が作られた過程で流された血と、これからも流されるであろう新たなそれに絶望して、そこから身を投げ：ケンシロウがシンと対決した時には、ユリアはこの世の人ではありませんでした。

…いえ、実は生きてるんですけど。

まあ、今はその話はよいのですわ。

とにかく最近になってやけに耳にするようになった、サザンクロスとKINGの名。

そんな折の、このリュウガ様の嘆願。

まったくの無関係であるとは思えません。

恐らくリュウガ様は独自にKINGの正体を探り、それが妹を拐った男である事を突き止めたのではないのでしょうか。

「…サザンクロスへ、行かれるのですか？」

ならば兄の心情として、己の意志を無視して奪われたであろう妹を救けにいこうと考えるのは、決して不自然な事ではないように思います。

そう感じて口にしたわたくしの言葉に、跪いたまま視線を上げたリュウガ様は、ひとをそれだけで射殺せるんじゃないかってくらい鋭く冷たい目を、明らかにわたくしに向けました。

ひいい、恐いです。何かまずかったですか。

瞬間、その視線の圧力から守ろうとするように balan がわたくしの前に進み出て、2人が一瞬睨み合います。おいばかやめろ。

「ほう……？」

と、その視線のやりとりでわたくしの言う事が正解であると察したらしい拳王様が、それ以上に凶悪な顔でリュウガ様をぎろりと睨みましました。

その瞬間、リュウガ様の視線の圧力がふっと消え、それまで詰めていた息が、balanの口から漏れたのがわかります。

彼も本当は怖かったのでしょうね。

わたくしをそれでも守ろうとしてくれたバランスの気持ち嬉しくて、手を伸ばして頭をポンポンしたら、『子供扱いするな』とちよつと嫌がられました。解せぬ。

「リュウガよ。」

サザンクロス
「奴等を叩くのであれば、拳王軍として動くになんの差し障りもありません。」

今一度問う。何ゆえ、うぬが単独で動く必要がある?」

多分ですが、拳王様はリュウガ様の、心からの忠誠を信じてはおりません。

それは彼の頂く天狼星の運命ゆえ、その孤高の星が自身の前に膝を折った事、むしろ不自然であると感じているようにすら思えます。

実際、『リュウガ』は『ラオウ』に仕えていても、その心は『ラオウ』と『ケンシロウ』どちらが乱世に必要な大木であるかを、その狼の目で見定める役どころなわけで。

ぶっちゃけ妹と恋仲でありながら易々と他の男に奪われた『ケンシロウ』よりも『ラオウ』寄りなのは仕方ないでしょうが、それでも乱世において北斗を戦いへ誘う宿命を抱く男としては、ある程度公平な視点で見る必要があるのです。

また、南斗と北斗を結ぶ絆として生まれた妹の選んだ男が『ケンシロウ』であつた事も、それがただの恋なのかそれとも運命なのか、わからないまでも考慮に入れないわけにはいかなかったのだと思います。

：そこまで考えて、はたと気付きました。

単独でサザンクロスを攻めたいリュウガ様の意図に。

拳王軍としてユリア様を奪還してしまえば、確かに確実にユリア様は取り戻せますが、そうなると必然的に、ユリア様の身柄は拳王様のものとなります。

だって『ラオウ』もまた、『ユリア』を欲しているのですから。

ですがそれではユリア様に、シンのもとにいる時と状況は変わらないわけで、兄であるリュウガ様は、ただでさえ辛い思いを味わつた筈の妹を、更に追い詰めるような真似はしたくなかつたのでしよう。

彼が求める時代を導く巨木。

『ラオウ』がそうであるが見極めたならば、妹を与える事もやぶさかではないのでしようが、まだ見極めのつかない今は、密かに己ひとりのもとに『ユリア』を保護しておきたかったのだと、わたくしは今、この期に及んで気がついてしまいました。

本当にごめんなさい。

ですが、実際ここで拳王軍を動かそうが動かすまいが、この時点で拳王軍が、ユリア様の身柄を確保する事はできないのです。

物語の通りであるならば、拳王軍がサザンクロスに攻め入った時には、ユリア様はドヤ顔のシンを尻目に絶望の涙を流しながら、高い塔の上から身を投げたところを、彼女を守る五車星に助けられており、一足違いで連れ出されて死んだ事にされているのですから。

…結局、拳王様に再度問い詰められて事情をゲロつたりユウガ様は、改めてサザンクロスの攻略を拳王様に命じられるとともに、『ユリア』の名を聞いて歓喜する拳王様も、その行軍に同行することになりました。

………なんだか胸の奥にモヤモヤする感覚をおぼえたのは、気にしない事にいたしますわ。

…数日後、なんの成果もなく戻ってきたリユウガ様の部隊と拳王様は、いつもは滾らんばかりの闘気オーラを纏った身体に、お葬式のような空気を漂わせておりました。

同行していた balan によれば、KING と名乗る男は確かに女性を侍らせてはいたものの、肝心の『ユリア様』は既に亡くなっていたとのことです。

物語は、確かに進行しているようですね。

今頃はユリア様は密かに南斗の都へ匿われ、そこから時代の流れを、ただ静かに見つめているのでしょうか。

…なんだかホツといたしました。

ええ、その、万が一物語の通りにならず、ユリア様の身柄が拳王様に渡ってしまったらと考えると、何だか判りませんが胸の奥が締め付

けられるように痛くなるので。

☆☆☆

「……………リアか。今は、おれに構うな」

多分、めつちやテンション上げて奪いに行った意中の女性の死を聞かされ、喜んだ分落ち込みが激しいのであろう拳王様にそう言われて、わたくしは着替えとお湯の支度だけをして、そのまま退がる事にいたしました。

「…かしこまりました」

出来れば着替えをさせて脱いだものは回収したいのですが、洗濯の日までもうしばらくありますし、それは明日でもいいでしょう。

今回の件はさすがの拳王様でも、落ち込みたくなる事態なのでしょうし、今はそつとしておいて差し上げますわ。

「……………うぬは、本当におれに構わぬのだな」

ですが、一礼して退がろうといたしましたところ、その拳王様から、思わぬ声がかかりました。

振り返ると兜すら脱がないまま、その下から恨めしそうな目がこちらを見つめております。

「……………そういう御命令でしたので」

拳王様は割と余計な真似は嫌う方ですもの。

わたくしとしては、ベストな選択をしたつもりでしたが、何かお気に召さなかったようです。

仕方なく御命令を待つ事にして、再びお側に控えましたが、拳王様は数瞬の沈黙の後、吐き捨てるように仰いました。

「……………もういい。下がるが良い」

「はい。失礼いたします」

「待てい！ほんとに下がる気か!!」

えええええ……………

…ええと。

あくまで心の中だけでキレてもいいでしょうか。

めんどくせえ！拳王様めんどくせえわ!!

彼女か！おまえは察してちゃんな彼女か!!

『わたしのことが好きならわかる筈』的なやつか！

いい歳したオツサンがやっても可愛くねえわ!!

……ぜえはあぜえはあ。

と、とりあえず落ち着きましよう。

いくら心の中だけの叫びとはいえ、推しに対する言葉ではありませんでしたわ。

「……矮小な身のわたくしには、拳王様がなにを求めていらっしやるのか、測りかねます。

わたくしにさせたい事がありなものでしたら、いつもどおりご命じくださればそのようにいたしますわ」

そういえば前世の何かで、会話の中に男は解決策を求め、女は共感と肯定を求めるといふものがありましたわね。

女が単に聞いて欲しいだけの事を、男は無意識に相談と受け止めてしまい、『これはそうじゃない』『こうした方がいい』などと意見を述べてしまうし、男が解決策を求めて相談しても、女からは的確な答えが返ってこないというすれ違いは、いつだって起こりうる事なのですわ。

ならばここはお互いの為に、というかわたくし自身の為にも、問題をはつきりさせておく必要があります。

「……ならば、今宵は伽を命じる」

「はえっ!?!」

そして、拳王様がようやく口にした言葉は、わたくしにとっては意外すぎるものでした。

驚きの声が、まるで北斗神拳を受けて倒れるヒヤッハー雑魚の悲鳴のように口からこぼれます。

言葉の意味が徐々に理解できると比例して、わたくしの顔に血がのぼっていくのが、自身でよくわかりました。

その……つまり、そういう事ですわよね？

「命じればそのようにするのであろう?..」

たった今、自分でそう言ったではないか」

拳王様は言いながらわたくしの肩を、その大きな手で掴んで引き寄

せました。

…次の日、わたくしは全ての業務を、バランスに任せてお休みをいただきます。

夜はほぼ一睡もできなかったばかりか寝台の上に座らされ、拳王様の頭を一晩中乗せられていた脚が痺れて立てず、腰にも痛みが出て、とても仕事にならなかったのものであります。

…：膝枕だけだったのかと？とんでもない!!

あれは膝枕などではなく石抱き石抱きとは、江戸時代に行われた拷問のひとつ。笞打に屈しない未決囚に施された拷問。牢間と呼ばれて、正規の拷問の前段階として行われた。まず囚人は後手に緊縛される。囚衣の裾をはだけて脚部を露出させ、十露盤（そろばん）板と呼ばれる三角形の木を並べた台の上に正座させ、背後の柱にしっかりと括り付ける。この時わずかに後ろにのけぞるようになり縛り付ける。石が胸部を圧迫しないようにするためである。三角の木材の鋭角の稜線が体重で脛に食い込んで苦痛を与える仕組みとなっている。さらにその太ももの上に石を載せる。石の重みで脛の部分に三角木材の稜線がさらに食い込み、非常な苦痛を味わわせることになる。

『憂菱奇弊泥阿』よりですわ、石抱き!!

あれから何度目かの石抱きの拷問膝枕の夜を経て、ようやく拳王様の頭の重みからの圧の逃し方を覚えてきた頃、2人きりの寝台の上（という言葉の響きほど色気のある状況ではございませんが）でわたくしは、拳王様から衝撃の告白をされました。

「…一部の限られた者しか知らぬ事だが、おれには子がひとり居る」

……ええっ!? 拳王様にまさかの隠し子!!?

そんな設定があつたのですか!?

もしかして前世で読みきれなかった分で、そんなお話があつたのでしょうか。

ラオウ関連のエピソードは全部読んだと思つておりましたのに!

どちらにしろ、拳王様はユリア様一筋と思つていたので、何だかシヨックですわ。

「男児だ。名を、リユウという。」

ちようど、うぬを女官に引き上げる直前くらいに生まれておるから、もう半年ほどになる。

生まれてすぐに手を回して、母親には死産したと思わせて確保し、信用できる者に預けて密かに育てさせておる。

万が一にもおれの弱味として敵対する者の手に渡るようでは、おれの覇道に障りが出るゆえな」

「母親を騙して子供を取り上げたつて事ですの!？」

「仕方あるまい。」

昔から知っておるが、本人はともかく血統的に、少し面倒な背景のある女だ。

一度だけ気紛れに誘いに乗つてやったが、この状況下にておれの血を預けておけば、後々それを利用されかねん。

幸い、女は身籠つた事を、己のただ1人の身内である父親にすら隠し、一人で産み育てようとしておつたから、秘密裏に子を確保することができたがな。

もつとも潜入させておいた手の者に話を聞けば、女は待ち望んだ子

を死産したと聞いて意識を失った後は、おれの子を身籠った事すら記憶から消してしまつたらしい」

しかも話を詳しく聞けば、思つてたよりずっと酷い話でした。

というかその女性、思い当たる人物が1人いるのですが（名前忘れただけど）、そうだとすればそのリュウ様の存在、ユリア様に比べれば背景は弱いものの、既に北斗と南斗がひとつになつたその結晶の筈です。

：覇道の障害となり得ると認識しつつも、拳王様が彼を殺さず保護したのは、恐らくはそれ故なのでしょう。

もう10年も早く生まれてきていたならば、彼こそがきつとこの世界の救世主になり得たかもしれない存在なのですから。

彼女もそのつもりでいたからこそ、それを失つた絶望から、心を守る為にその存在自体を、なかつたことにしてしまつたのでしようね。

「おれの身に何ごとかあつた時には、
「いやです」

わたくしの思案をよそに、何やら縁起でもないことを仰ろうとした拳王様のお言葉を制して、わたくしは即答いたしました。

「せめて最後まで聞いてから断れ!!」

拳王様は苛立つたように文句を仰いましたが……なんだか感情的には少しモヤるんですもの。

あと、言つてる事と態度が全然違う自覚はありました？

膝の上から睨まれて多少声を荒げられても、全然怖くありませんからね？

つか、子供か！……失礼いたしました。

☆☆☆

「……リアさん。オレの話、聞いてるか？」

「勿論聞いていますよ。」

けど balan、あなたも戻つたばかりで疲れているでしょう。

明日も早いのですからそろそろお部屋に戻りなさいな」

拳王軍が遠征から戻つた夜は、わたくしが拳王様の湯殿や着替えの支度を整えている間、馬たちの世話を終えた balan（厩番は例のあの

時に拳王様が追い出してしまいましたので、しばらくは交代制になっていた筈ですが、いつの間にか彼の仕事になったようです。は、いつもわたくしのもとにやってきては、戦場での拳王様の様子を細かく報告してくれます。

それは、制圧した村の奇妙な習慣に怒りを露わにした話であったり、制圧しようとした村の長が、自分の片足を切り落としてまで戦いを避けた、その覚悟を買ってただ通り過ぎたという話であったり、赤い髪の派手な男が訪ねてきて少し話をして送り出した後、ずっと不機嫌な顔をしていたとか、そんなこまごまとした事です。

あの方方は、多分わたくしも知っている人物かと思えます。

多分ですが拳王様は賢しく策を弄してかかる者がお嫌いなので、役に立つとは思っていても、感情的には受け入れていないのですわ。

逆に、ある種の覚悟をもって真剣に向かってくる相手には、無意識に敬意を払ってしまうところがおありのようです。

幸いにもわたくしと balan は、そう思われて傍に置かれておりますわね。

「…今夜も拳王様のお召しなのか」

「恐らくはそうなりますわ。」

わたくしの膝が余程お気に召したもので、最近は遠征から戻った日は、必ずお呼びがかかりますから」

「…もつと疲れさせておくんだった…」

「？何か仰いましたか？」

「…いや」

「ほら、ここはいいからあなたはもう休みなさい。」

しっかりと食べてしっかりと眠って、もつともつと大きくならなくて
は」

「子供扱いするなといつも言ってるだろう。」

オレはもう17だぞ。あんたと5歳しか変わらない」

「そうでしたわねえ…」

初めて会った時は華奢で女の子のようだった balan を、わたくしは13、4歳くらいだと漠然と思っておりますが、適度な運動と栄養

の摂取により急激に背が伸び始めた彼が、わたくしの見たてよりも年上だと知ったのは割と最近の事です。

なので頭では判っていても、それまでの認識と行動を、急に変える事は難しいのですわ。

「けれど、あなたから見ての5歳上って、結構な年齢差でしょうに」
「今はな。けど、40歳と45歳なら、もうそれほどの差じゃないだろう?」

「そんなに長く、わたくしと居るつもりですか!」

彼のことはなんとなく弟のように思えてきてはいても、わたくし達はほんとの姉弟ではないのですから、人生のどこかの時点でお別れする事になる筈です。

「というかほんとの姉弟だって、そんなに長く一緒には居ないでしょう。」

こんな小姑がずっと近くにいたら、将来彼の奥さんになる人が可哀想ですし、わたくしだって嫌ですわ。

「あんたが将来、拳王様に飽きられた時に、オレが空いてる状態で近くに居なきゃ困るだろう?」

「なんの話をしていますの?」

「拳王様に捨てられたら、オレが貰ってやるって言ってるんだ」

「余計なお世話ですわよ!!」

まったく、こんな生意気な口をきくようになったのは誰の影響なのでしょうか。

探し出してやるべきか、一瞬本気で悩みましたわ。

そんな軽口を叩いていたと思ったら、バランスの表情が唐突に引き締まりました。

「……最近、妹の顔が思い出せないんだ」

……?」

なんででしょう、急に話が飛んだ気がしますが。

ちなみにバランスの妹さんの話も、割と最近になってから詳しく聞かされました。

幼いながらとても信心深かった彼女は、病に伏しながらも『神が許

ささないから』と、 balan が他人を傷つけてまで手に入れてきた薬を飲むことを拒み、ただひたすら神に祈り続けた末に、その幼い命を召されたのだと。

「正確には、病に苦しんでいた時や死んだ時の顔……オレが神への憎しみを新たにし続ける縁よすがだったそれらが思い出せず……思い出すのは元気だった頃、今日はこのような善行を積んだとか、祈ることで心が澄みきったと言って、嬉しそうに微笑んでいた顔だけだ。

そしてそれらは、あんたが拳王様の事を話している時と、同じ顔だったと気がついた。

だから、判ったんだ。

妹にとっての神とは、あんたにとっての拳王様と、同じ存在だったんだと」

……まあ、推しは確かにわたくし達にとって、神のようなものですからね。

「……妹を奪った神への憎しみが、オレの中から消えたわけではない。けど、もしかしたら神がユウカを……妹を奪ったのではなく、ユウカがオレよりも、神を選んだということなのかもしれない、最近ではそんなふう……思えてならない」

堪えていたものを吐き出すようにそう言う彼の、ウエーブのかかった長い髪を、ほぼ無意識に指で梳くと、balan はそのわたくしの手を止めるように掴み、何故か指を絡めてきます。

「……ひとつ、答えてくれないか。

その、もしもの話として聞いてほしいのだが。

オレが……オレが拳王様より強くなれたとして、その上であんたに求愛したら、あんたはそれを受けてくれるか？」

「はへっ!!?」

「だから、もしもの話だ……どうなんだ!?!」

そうですか。もしもの話ですね。

ものすごい真剣な顔で言うからびっくりしました。

うん、ちよつとだけドキドキしましたよ。けど……

「……無理でしょうね」

「やはりそうだろう。そういうことだ。」

：オレは今まで、オレが神よりも強ければ、ユウカはオレの言うことをきいてあの薬を飲み、命を存ながらえた筈だと、ずっと思ってきた。

けど、例え神以上の強さを手に入れても、ユウカはそれでも神を選んだかもしれない。

……あんたが、それでも拳王様を選ぶように。

つまり、今オレがやっていることは、全くの無意味だということだ」
： balan は、神を憎むと同時に、自分自身を責め続けてもいたのでしよう。

その思いを、強くなるという目標に変えて、これまで努力してきた筈です。

それが無意味に思えた時、彼の心は絶望に染まってしまっているのではないだろうか。

……けれど、そんなことにはさせません。だって。

「…無意味ではない、と思いますわよ？」

「え？」

「あなたが忘れている事がひとつあります。」

…ひとの心は、力のみに従うものではないという事です。

この時代を生きていると、つい忘れてしまう事かもしれませんが」
「……っ!？」

たとえばどこから発した思いであれ、balan がこれまで必死に努力してきた事を、否定していい筈がありません。

それがbalan 本人であろうとも、そんな事はわたくしが許しませんわ。

「ひとの心を動かすのは、やはりひとの心。」

それは恐怖であったり、憎しみであったり、悲しみであったり……
愛であったり。

あなたは力のみを求めて、ここにたどり着いたかもしれませんが、
けど、これからはもっとひとの心に目を向けて、生きていけばいい
のではないかしら。

あなたは、こんなにも若いのですもの。

回り道をする時間は、まだまだたくさんありますわよ」
そう言つて、目をまん丸く睜いているバランスの頬を、両掌で包みま
す。

男の子なのに、やはり若いから肌の感触がぷりぷりですわ。

……まあ、今はそれはいいのです。

嫉妬なんかしてません。ええ、全然。

「それに、神なんてものは実際のところ、己の中にある良心とか道徳と
いったものを、わかりやすく擬人化した存在に過ぎませんのよ？」

祈れば願いを叶えてくれるような都合のいい存在などではなく。

神にすぎるといふことは、己の中にそれがあつた事を再認識して、安
らぎを得る事。

それだつて結局はひとの心じゃありませんの」

「ひとの……心」

まあ、この考え方は前世日本人、信仰が生活に密着していない、世
界で見れば特殊な思考の民族であつた故のものではあるのですよ
うが。

「…先ほどの問いの答えですけれど。」

あなたの強さが拳王様を超えただけであれば、わたくしはあなたを
選びはしないでしょう。

けれど、あなたの心がわたくしの心を動かす事ができたなら、その
時は違う答えを出す可能性もあります。

…バランス。『いい男』に、おなりなさい。

必ず、なれる筈ですわ。あなたは、優しい子だもの」

泣きそうに潤んだ目を見つめて微笑んでやれば、バランスは微かに唇
を動かして、なにかを言いかけてました。

けれどそれは言葉にはならず、吐息としてわたくし達の間の空間に
溶け、わたくしはバランスの両頬から、そつと掌を離します。と、

「愛と優しさだけでは、この時代を生き抜く事はできぬ」

背後から聞こえた地を這うような低い声に、わたくしとバランスが
ハツとして振り返ると、そこには圧倒的な質量の、この世で最も完璧
な肉体が立っておりました。

「拳王様……！」

確かにここは拳王様のお部屋なので、居ること自体は不思議ではないのですが、遠征後の幹部ミーティングが終わっていた事に、わたくし達は話し込んでいて気がついていませんでした。

拳王様は一体いつから、わたくし達の話を聞いていたのでしょうか。

「だが、うぬがそれでも生き延びる事ができたなら……その上で、まだ心が変わらなかつたならば、その時はこの拳王に、命懸けで戦いを挑むがよい。」

…よいか、殺すつもりで来ねば、おれからはなにも奪えぬぞ」

拳王様は真つ直ぐにバランを見据えており、バランもまた、拳王様を真つ直ぐ見返しております。

いつも思いますが、この子の胆力は半端ないです。

そうして、見つめ合うこと暫し。

バランは口元に笑みを浮かべると、『はい』と一言だけ答え、一礼してその場を後にしました。

どういう事かと拳王様を見上げて視線で問えば、拳王様もまた、似たような笑みを浮かべております。

「女には判らぬ、男同士の話だ。」

それより、今宵もまたうぬに伽を命じる。

おれが湯を使った頃に合わせて、またここに戻って来い」

……はい『いつものやつ』入りました——！

☆☆☆

…バランは翌日、新たな修業の旅に出ると言つて拳王軍を離れました。

…それから数ヶ月後、旅のヒヤッハーが居城に届けてきたわたくし宛の手紙には、差出人のところに『バラン』の署名があり…そこに書かれていた内容に、わたくしは肝をつぶすことになります。

旅の途中でたどり着いた村に、北斗神拳に似た医術を使う男がいた事。

彼の人柄に惚れ込んで、弟子入りを志願した事。

師となった男は病に侵されており、今日明日ということではないものの、限られた命をひとを助ける為に生きている事を知り、いつか彼の意志を継ぐと共に、その最期を看取る決心をした事。

あと、その師が留守にしている時に村を襲撃してきた賊を倒し、更になんか知らないけど師が帰ってきたふりをして村に入ってきた怪しい男を、とりあえず秘密裏に始末したら、どうも拳王軍の関係者だったぽいのでちよつとまずい気がして、わたくしから拳王様にとりなして欲しいとの事。

……って！

それ多分、拳王様の実弟とそれ装った偽物!!

てゆうか、原作主人公がそのうち倒す筈の敵キャラを、なんであなたがサクツと始末しちゃってるの!?

「…それは、恐らくはアミバという男であろう。」

一時期確かにおれのもとで北斗神拳を学んでおり、拳を盗む才には balan より余程長けておったが、ひとつのことに集中するのがとにかく不得手な男であった。

拳も上っ面だけ修めたところで、飽きたとみえて勝手にどこぞへと行きおったわ。

返事をするならば、すでに拳王軍とは縁のない男だから、気にするなと伝えておくがよい」

とりあえずトキ様の存在だけは伏せた上で、balan の手紙にあった頼み事を打ち明けたところ、balan がトラブった相手の特徴を聞くや、拳王様は心底どうでもいいとでも言うように、そう吐き捨てておしまいになりました。

原作でトキが、『アミバは拳王の部下で、命令通りに動いていた』的な説明をしていた筈ですが、どうやらそれ、トキ様の勘違いだったようですわね。

少なくとも拳王様的には、既に自分の手を離れた者という認識ではないみたいですし、アミバ的には昔年の逆恨みを晴らそうと近づいただけなのでしょう。

「…それにしても、balan め。」

よりにもよって、そうきたか。

ヤツが神を憎んだのは、病の妹を救って欲しいと願った祈りが届かず、その命を奪われたがゆえ。

神が為しえなかつた奇跡を、それに成り代わって行なう事こそ、ヤツが選んだ神への復讐という事なのだな。

まあ良い。おれの覇道の邪魔にならぬのであれば、せいぜい好きに生きるが良いわ」

「……あれ？なんか、balan の現状と拳王様の認識に、微妙な齟齬が生じている気がいたしますが？」

というか、北斗神拳を医術として使うことを最初に考えたのはトキ

様ですけど？

そういえば原作の展開では、ラオウはケンシロウとトキが再会するのを阻止する為に、トキの身柄をカサンドラの牢獄に送っており、そのトキの代わりに奇跡の村に送り込まれたのがアミバだと思っていたのですが、バランからの手紙にある情報だけで判断する限りだと、もう奇跡の村にアミバが現れたタイミングであるにもかかわらず、トキ様は拳王軍に捕らえられているわけではなさそうです。

一体どういう事なのでしょう？

まあでも、原作には登場しないとリアさんは思っています。バランがトキ様に弟子入りしたという時点で、物語が変化しているという事なのかもしれませんけれども。バランがリアさんへの手紙を託した旅のヒヤツハーは、一応は拳王軍の末端に所属する兵士です。

彼らは各地を放浪しながら、様々な情報を拾っては、拳王軍にそれを報告しています。

今回たまたまその地にいた彼らは、本来の物語の流れならば、その時点で奇跡の村の噂を聞いて、ラオウが探しているトキの存在をそこに確認していた筈でした。

ですがこの時空においては、病を治す奇跡を起こすと評判の村に、最近までラオウのもとで修業していたバランがいました。

バランは北斗神拳の下地は理解しており、完璧とまではいかずとも、この時点である程度の身体の不調は治すことができるようになっていきますので、バランの存在がカムフラージュとなって、旅のヒヤツハーはこの奇跡の村を、バランがつくつたのだと勘違いしたのです。

バラン自身に拳王軍に敵対する意志はなく、それ故に制圧の必要もない、むしろ拳王配下の村として機能していると判断された結果、本当に偶然ですがトキの存在を、拳王軍の目から隠す結果に。

また情報を流す可能性があったアミバを、そんなつもりもなくその前にサクツと始末した件も、その一助となっております。

リアさんに自覚はありませんが、彼女がバランと関わり合わなければ起きなかつた事態なので、間違いなく彼女の存在が引き起こしたバタフライエフエクトでした。

まあでも、わたくしは本来、居城の外のことは何もわからないだけの女官。

余計な事は言わない方がいいのでしょね。

☆☆☆

気がつけば拳王軍で働くようになってから既に2年、拳王様の傍に仕え始めてから1年ほどの時が経ちました。

その間、例のならず者たちに拐われた時を除けば、ほとんど拳王軍の居城の敷地から外に出ることのなかったわたくしは今、リュウガ様の馬に同乗させていただいた状態で、夜の闇の中を駆けております。

「疲れてはおらぬか、リア殿」

「……ええ、大丈夫ですわ」

わたくしは乗馬の経験がありませんので、ただリュウガ様に支えられて乗せていただいているだけなのです。

けど、一応は揺れに合わせて体のバランスを取ったりもしておりますので、正直そろそろお尻が痛いのですが……さすがに場所が場所だけにそこは少し言いくいのですわ。

「こんな茶番に付き合わせる事になって、本当に申し訳なく思っている」

「茶番などと。リュウガ様がすぐに行動してくださらないければ、女のわたくし共は今頃、無事ではいられませんでしたもの」

その2日前にいつも通り軍を率いて、小規模ながら水も人々の生活も豊かだと聞き及んだ辺境の村に攻め入った拳王様が、そこであろうことか強敵と相打ちして、重傷をおわれたとの報せが、居城に届いたのは今朝の事でした。

…ええ、つまりは原作通りの展開なわけですね。

わたくしは詳細を聞かされてはおりませんが、あの拳王様に重傷をおわせられる相手となれば、原作主人公以外には居ないでしょう。

いつもならば、ザク様が代わりに兵たちの指揮をとり、情報統制などの事後処理にかかったのでしょうか。

ですが今回はたまたま、彼がカサンドラへ出向いており不在で、ほかの幹部の方々もそれぞれ、他の支配地域の視察、または対抗勢力の

支配地を偵察に行っていた為、その時拳王様が伴っていたのは、地元ヒヤツハーを中心とした末端兵士達の一軍のみでした。

豊かであるとはいえ小さな村ひとつ、落とすのはわけないと判断しての事だったのでしよう。

実際、ケンシロウとの戦いが起きなければ問題はなかった筈なのです。

その末端兵士たちですが、拳王様が目の前で傷つき倒れたのを見た瞬間、それまでの統率を失い、散り散りに逃走してしまいました。

更に厄介な事に奴らは、『拳王倒れる』の情報を各地に流してくれやがりました。

その何が問題かと申しますと…拳王軍は、基本的には恐怖支配により成り立っております。

その情報が各地に流れる事で、恐怖の対象である拳王様という巨大な重石が取り除かれ、支配地域の統制がままならなくなる可能性が出てきたという事です。

端的に言うなら、地域の地元ヒヤツハーが羽目を外して、暴走する事態が考えられるわけですね。

皆さん誤解してらっしゃるようですが、本来なら弱者が当たり前にすり潰されるこの時代において、強大な力によって支配されている拳王軍所属の町や村は、恐怖という名の秩序に守られているのですよ。

そうでなければ小さな村ならば、僅かな水や食料の為にだけに皆殺しにされる事だって、有り得ない事ではないのですもの。

そんなわけでリュウガ様は今、その火消しに奔走しているのです。

具体的には拳王配下の地域を巡って、一旦はその町や村を、彼の支配下に置き直すというやり方で。

そうしておけば、拳王様が戻った際、彼が改めて恭順する形をとれば、元通りの形に戻るだけなので。

そして、その支配を最初に受けた態^{てい}となつたのが、わたくし達が暮らしておりました居城でした。

この場合、兵士たちの逃亡や暴動が起きないうちに策略が練られ、留守を任されていたソウガ様がリュウガ様と戦い敗れた形をとって、

現在はその配下となったソウガ様直属の軍が目を光らせております。なので女官や下働きの女たちが、恐怖から解き放たれた兵士たちの、不当な暴力に晒される心配は当面ありません。

その状況で、何故わたくしだけがリュウガ様に同行しているのかと、いいますと、わたくしに関しては『他の者には任せられない』からだと思いますわ。

リュウガ様のこの火消し行動は、あくまで自軍の内部崩壊を防ぐためのもので、敵対勢力に対してはその限りではありません。

これまでは正面からこちらとぶつかる事を避けてきたUD軍や、権力の象徴を建築するのに忙しい聖帝軍などが、わたくしの存在に目をつける可能性もあるのだと。

『拳王様がこのまま退くとは、奴等も考えてはいまい。』

ならば弱っている今のうちにと、何らかの手を打ってこぬとも限らない。

そして、対外的に貴女は拳王様の寵姫だ。

唯一の弱味であると判断され、狙われる可能性も考えなければならぬ。

だが、ソウガはそれが判っていても、貴女の為には動くまい。

むしろその可能性に気がつけば危険の芽を摘むべく、後に拳王様に肅清される覚悟をもってでも、自ら貴女を手にかけてよう。

その点に於いて、わたしは誰も信用してはおらぬ』

実際にはわたくしが死のうが捕まろうがどうなろうが、拳王様が心を痛める事はないでしょうけど、自分のものを奪われる事にプライドを刺激されて動く可能性は確かにありますからね。

何せ『自分の女を取り戻す為に自ら動いた』前科が、あの方には確かにございますので。

…というか、わたくし密かに生命の危機に直面していたのですわね。

救っていただきありがとうございます、リュウガ様。

「この世には支配という名の巨木が必要なのだ」

途中の荒野で野営となり、簡単に腹ごしらえをした焚き火の前で、

夜空を見上げながらリュウガ様が呟いたのは、原作に於いて何度も口にした言葉です。

たとえ恐怖支配であったとしても無法状態のままよりは、統治された状態に置けば、その地域の安全はある程度保障されるわけで。

決して暴力を正当化するわけではないのですけれども、前世のわたくしが序盤しか読めなかった、バットとリンが大きくなくなってからの話では、せつかく取り戻した平和な時代は数年で去り、再び暴力の時代に突入したという描写がございました。

あれは、暴力の時代を愛によって打ち砕いた筈の救世主が、本来ならばそれを引き継ぐ形で統治せねばならなかった世界のその責任を放り出して、病に侵された命短い恋人と、さっさと荒野へ逃げたからなのですわ。

揺るがぬ巨木は、必要なのです。

人が、心を殺さずに生きていくためにも。

愛を感じるのも、恐怖を感じるのも人の心。

けれど願わくば恐怖により根付いた平和の中にも、一輪でもいい、愛の花が咲きますように。

恐らくは神ではないものにわたくしが祈ったその時、

「その枝に咲く大輪の花に、貴女はなれるのか、それとも……」

まるでわたくしの心を読んだようなりゅうガ様の呟きに、わたくしはハツとしてその人を見つめます。

その伏せ気味の長い睫毛に覆われた瞳は閉じられて、わたくしを見てはおりませんでした。

☆☆☆

リュウガ様がわたくしの体力に一応は考慮してくださり、一昼夜かけて連れてこられたのは、重傷を負った拳王様を静養させている砦でした。

砦と言っても、小さな村くらいの広さの場所に、兵が滞在する為の小屋や厩なども設置されており（入りきらなかったらしい黒王はその外におりました。わたくしが着いたときはお食事中だったようです）、恐らくは地元ヒヤッハーに蹂躪され逃げたか殺されたかして、人

の居なくなつた村の跡地を利用してあるものと思われれます。

リュウガ様はそこにわたくしを置いて去り、この後また支配地域の視察（という名の襲撃）に行くのだそうです。

ここにリュウガ様直属の数人の兵が待機しており、わたくしを迎え入れてくださいました。

「こちらに、拳王様がいらつしやいます。

出血が酷く、まだお目覚めにはなられません…」

簡単な食事と水を出されて人心地ついたところで、そう言われて通された、粗末ながらもしつかりとした寝台のある部屋には、全身に巻かれた包帯が痛々しい拳王様が、見たこともないほど青ざめた顔色で、目を閉じて横たわつていらつしやいました。

胸元が微かに上下していることで、生きていると確認できましたが、それ以外はまるで死んでるみたいです。

ほら、手だつてこんなに冷た……てゆーか！

「冷え切っているではありませんの！

毛布か何かございませんの!!?

出血が多かつたのでしょうか？

このままでは体温が下がつて、最悪死んでしまいますわよ!!」

なんで手当ては完璧なのに、むき出しの状態で置いておくかな！

わたくしの言葉に兵士の方が、慌てて数枚の毛布を持ってきてくださいました…まさかとは思いますが、この大きな身体に止血や手当てを施すのに手間取つて、それが全部済んだら達成感みたいなのが出て、そのあとのケアを忘れたとかではないでしょうね。

核戦争より前のこの世界は、前世よりも文化的には遅れておりましたが、防災に関しての意識は前世よりも高かつたので、わたくしも救命救急の講習などは、3ヶ月に一度くらいは授業で受けておりました。

…ええと、こういう場合、手足といった末端から急激に温めると、心臓に負担がかかり最悪ショック死の危険があると聞いた気がします。

なので、湯たんぽ的なものの使用は却下です。

意識があれば温かい飲み物をゆつくりと服^のませ、内側からじんわり

体温を上げていくのが望ましいのですが、意識がない場合はそうはいきませんわね。

無理矢理飲ませたら窒息してしまいますもの。

まあ、拳王様は元々は丈夫で血の気の多い方ですし、大きな生き物はそう簡単には死なないというのはわたくしの持論ですが、これ以上冷えなければ大丈夫な気がいたします。

「……うむ。ならばあとはリア殿が添い寝して温めてくだされば大丈夫でしょうな。」

今宵はこのまま、ごゆつくりお休みください。

我々はこの場で失礼いたします」

「はいい!？」

「何かありましたら遠慮なく、外の兵士に声をおかけください。では」
…と安心していたら、その場で一番位が高そうな兵士の方がそう言っつて、一礼して退出していきます。

それに倣つて他の方々も部屋を出ていって、部屋には相変わらず寝台に身を横たえる拳王様と、わたくしだけが残されました。

……待つて!これ決定事項なんですよ!？」

ひよつとしてわたくし、この為に連れてこられたんですよ!!？」

…とはいえ。

多分この砦に、わたくし1人の為に用意できる部屋はないでしょうし、その必要があるとも思われていないでしょう。

リュウガ様が余裕をもって駆けてくださったとはいえ、旅慣れていないわたくしには、ここまでの移動はやはり辛い行程で、そう気がついた途端、今になってドツと疲れが出てきております。

わたくしの眠る場所が拳王様のお隣しか用意されていないのであれば、そこで寝るより他にありません。

そう、わたくしはとても眠いのです。パトラッシュ。

意を決して、着の身着のまま出てきた女官服の、腰紐だけを外して、わたくしは拳王様の毛布に潜り込みます。

「……おやすみなさい、拳王様……」

まだひんやりとした拳王様の身体に、少しでも体温が伝わるように

身を寄せると、睡魔の導きに従い、わたくしはそのまま眠りに落ちました。

…その翌朝、

「男の寝台に自分から潜り込んでおいて、何事もなく済むとは思ってはおるまい？」

と目を覚ました拳王様に起こされて、『傷に障る』と必死に説得するも虚しく美味しくいただけれてしまうことになるのですが、その時のわたくしにそれを知る術はありません。

…あれのどこら辺が瀕死の怪我人だったんですの!!?

わたくしの方が死ぬかと思いましたがわよ!!

…わたくしが『自分から抱かれにきた』というのがどうやら誤解だったと気がついた拳王様は、その後は特に手を出しては来られませんが。

「本気で嫌がる女に手を出したところで勃たぬわ」
との事です。

わたくしの必死の抵抗が無かったことにされている事実には、思わず半目で抗議したら、

「駄目だとは確かに言っていたようだが、嫌だとは一言も言わなかったではないか」

としれつと言われましたわ。えええ……。

…まあ、考えてみれば問題はないのですよ。

この時代、女の運命は割と悲惨です。

強い男のもとで庇護されなければ、明日の命とて知れないのです。なれば、気紛れでも想う殿方にお情けをいただいで、初めてを捧げられた事は、とても幸運なことなのですわ。

…本当に死ぬかと思いましたがね！

…そう割り切れるつもりでいたのは、前世が男だった記憶が残っていたからかもしれません。

初めてを想う方に捧げられた、その思い出があればそれでいい……そう思っていたのに。

『身体だけの、割り切った関係』『セ〇レ』なんてのは男の幻想なのだと、今ならばわかります。

そもそも女は、強引に奪われる場合は別として、原則的には僅かにでも想いを抱かない相手とは、そういう事態には至らないものなのだと。

情を交わせば、その僅かにでも抱いた想いが強くなってしまいう生き物だなどは、この時までわたくしは知りませんでした。

いざそうなってしまうえば、それ以上を求めてしまう気持ちが止められないのです。

愛し愛されたい、ともに生きてゆきたいと、大それたことを願ってしまうのです。

拳王様のお心には、未だにユリア様がいらつしゃいます。

現時点でユリア様は亡くなったものと思い、今はお忘れになろうとしていらつしゃいますが、いずれはその生存を知り、長年の想いが再燃します。

…それはそれでもいいのです。

そんな一途なところも、あの方の魅力でございます。

そして多分ですが、ユリア様を手に入れられた暁には、わたくしはそのお世話も任される事となりましょう。

それくらいあの方に信頼されているという自負はございます。

ですから少なくとも、わたくしが用済みとして拳王様から離される事はない筈です。

『女』として可愛がられるだけではいずれは飽きられるのですから、お側には居られるのであれば、それでいいのです。

問題は……

拳王様はいずれは、ケンシロウとの戦いの末に、その命を天へと還すのです。

そうなった時に、こんなにも拳王様でいっばいになってしまったわたくしは、その後どうなるのでしょうか。

…その時になってみなければ、わかりません。

けれど、無力なわたくしに、それを止める術がないことくらいは、嫌でもわかりますわ。

……いつそ、共に逝けたなら良いのに。

ああ、そうですわ。

死ぬかと思ったあの瞬間に死んでおけば良かったのですわね。はは。

…

そんなモヤモヤを抱えながら、わたくしは未だ砦に滞在して、拳王様のお世話をしております。

大きな傷はさすがにまだ残っているのですが、動くのに支障がない程度には快復しつつあります。

最近では体慣らしにと、3日に一度は黒王と遠駆けをなさっております。

先日はわたくしも連れていってくださり、八割がた完成しているという聖帝十字陵を、遠くからですが見てきました。

未完成ながらもその荘厳にして威圧的な巨大建造物を目にし、拳王様は『必ずまた戻る』との決意を新たにされたようでございます。

兵士の方々が仰るには、メデイスンシティーへ送った使者が戻らず、頼んだ薬がまだ届かないとの事でしたが、とりあえず在庫は充分ございますし、このまま順調にいけば、それを使い切らぬうちに拳王様は完全快復されるのではないでしょうか。

：というか確かあの町を任せていた犬好きヒヤツハーは、あの戦いの次の日か遅くともその次の日にはケンシロウとレイに始末されていたリアさんは知らない事ですが、実はとある事情により、この時空でこのエピソードは起きていません。つまりこの町の住人は、この時点ではまだ狗法眼ガルフに虐げられている状況であり、送った拳王軍の使者も彼の一味に殺されています。筈なので、ひよつとしたらそのせいで町が混乱しているのかもしれないですね。

リュウガ様は恐らくあちらにも立ち寄られるでしょうから、それもすぐに治安を取り戻す事でしょうけど。

やはりリュウガ様一人では手が足りないのですわね。

ちなみにそのリュウガ様と戦った時の傷がもとでソウガ様が亡くなられたそうで(?!)先日妹のレイナ様が悲痛な面持ちで、かの方が最後に残されたというお手紙を届けにいらっしやいました。

わたくしは席を外すよう言われたので部屋の外に出ておりましたが、普段クールビューティーのイメージを崩さない女剣士の感情的な声が『許せない』『リュウガに復讐する』と叫んでいるのが、部屋の外まで漏れ聞こえてきました。

それに答える拳王様の言葉までは聞き取れませんでしたでしたが、多分何やら宥めていたのでしょう。

ひよっとしたらレイナ様は、あれがお芝居であると聞かされていなかったのでしょうか。

けど、実際にソウガ様は亡くなられているわけですし、どういう事なのでしょう？

……ともあれ数十分後、泣き腫らした顔で出てきたレイナ様に、冷たい水で濡らしたサラシを差し出したところ、一瞬だけ驚いた顔をされたものの、次には少し寂しそうにですが笑ってくださいました。

「…ラオウの事、頼んだわ」

そう言つて馬を駆り砦を去っていくレイナ様を見送りながら、ああこの方、拳王様とはお名前を呼び捨てにできる関係だったんだなと、割とどうでもいい事を考えていました。

「……ソウガは病に侵されておつたのだ。

だからリュウガの策にも乗つたのであろう。

奴は病よりも、戦いの中に斃れることを望み、その通りに逝きおつた」

その夜、砦の建物の屋上でそう言つた拳王様の、代わりに泣くような星が一筋、見上げた夜空に流れました。

☆☆☆☆

「……そばゆい。息を吹きかけるな」

「そちらではない、もつと下、その反対側だ。

同じ箇所ばかり擦つてどうする」

「もつと丁寧に扱え。」

「ここは身体の中でも、鍛えることのできぬ繊細な場所だ」

「…そう。そうだ、上手いぞ。それで良い。

フフツ、やればできるではないか。

うむ。ようやく心地良くなってきたわ」

「……け、拳王、様？」

「……………ん？」

……この砦にやってきてから数週間。

ザク様が拳王様に御目通りを求め通されたのは、わたくしが拳王様の耳掃除をしているタイミングでした。

…いえその、実はその前、居城とは比べ物にならない簡素な内容の夕食を済ませた後で、この砦に備蓄してあるワインを一本持つて来るよう、拳王様が兵士のひとりに命じたのです。

ですが、まだ怪我が治りきっていないのだからと、わたくしが却下しております。

少し機嫌を損ねた拳王様（子供か!!）に仕方なく、この砦に滞在してからはまだ行なっていないかった膝枕を申し出たら、どうせならばと命じられたもので。

「ザク様。お久しぶりにございます」

入ってきた瞬間、明らかに見てはいけないものを見たような顔をしていたザク様に、ここは狼狽えたら負けだと判断して先に御挨拶いたしますと、ザク様は目を睜みひらいてわたくしを凝視しました。

「……リア殿か!? ご無事だったのですな!」

リュウガ將軍に拐われたと聞いておりましたが

…そういえばザク様は、リュウガ様とソウガ様が居城にて戦われた際、カサンドラ方面に出向いており、あの場にいらっしやいませんでした。

おふたりのこの度の計略について、レイナ様同様聞かされていなかったのでしょうか。

というか、ならばリュウガ様に早々にネタバラシされて連れ出されたわたくしの立場って一体…?

まあそんなこんなで説明が面倒だなと少し考えていたら、拳王様に『力を抜け、固い』と文句を言われました。

どうやら無意識に身体に力が入ったようです。

「…おれが居らぬ間を繋がんが為の、リュウガとソウガが仕組んだひと芝居に巻き込まれたそうだ。

おれが居らねば危うい立場の女ゆえな、それも仕方あるまい。

それよりザクよ、どうした。なにかあったのか」

わたくしの膝から、わたくしに代わって答える拳王様のちよつとめんどくさそうな問いに、ザク様は跪きながら、何かはわからないけど確実に何かを諦めたような目をして答えました。

「は……ケンシロウが、サウザーに戦いを…」

「なに!!」

さつきまでの気怠げな態度は何処へやら、一瞬にして緊張感を纏った拳王様が身体を起こし、わたくしはその勢いで床に背中をぶつけます。痛い。

「なにを寝転がっておる。」

リア、すぐにおれの外出そとでの支度をせい!

クツ、馬鹿め!

まだ早い! やつではサウザーには勝てぬ!!」

…寝転がったわけではなく、それまで膝に乗ってた誰かさんの頭の重みが、急になくなった反動なんですけどね!

どういう状況なのかまったくわからないまま、命じられるままに簡単な身支度を整えて、ザク様と黒王と拳王様を送り出したわたくしは、薬や替えの包帯の用意をしておくことにしました。

まだ拳王様のお身体は完治されてはいないので。

あの様子では何かあつて、傷が開くことにならないとも限りませんから。

無茶をされなければいいのですが。

…

……ですが、わたくしがそれらを使い手当てを施したのは、数時間のちに戻られた拳王様御本人ではありませんでした。

「さすがだな。用意がいいではないか。」

ならばこの男の手当てはリア、うぬに任せる。

…こやつにはこの拳王の為、サウザーの身体の謎を解いてもらわねばならん!」

そう言われてわたくしの前に横たえられた血塗れの男性こそは、北斗神拳正規伝承者にしてこの世界の主人公、ケンシロウだったので。

そういえば確かに、一度サウザーに挑んで敗れたケンシロウが、ラオウに助けられるシーンがありましたわ。

つまり、今がその場面なのでしょう。

てゆうか拳王様、自分で調べる気ゼロなんですのね。

ちなみに聖帝サウザーにケンシロウが敗れたのは、臓器や秘孔の位置が全て左右逆だったから、みたいな理由だった筈です。

シユウがケンシロウに『南斗聖拳ではサウザーを倒せない』的なことを言ってた記憶があるのですが、こういう特異体質っぽい敵の場合、むしろ北斗神拳よりも南斗聖拳の方が相性いいんじゃないかと思っただ事も覚えております。

……それにしても。

止血の為の秘孔は押しであるとの事でしたので、纏わりついているだけの布切れと化したシャツは切って捨て、血と泥にまみれた身体を綺麗に清拭して、兵士の方々にも手伝っていただいて然るべき処置を施しながら、しみじみ思います。

こうして見るとケンシロウ、イケメンですわね。

しかも、普段拳王様を見慣れているわたくしからすると、非常に目に優しい気がします。

拳王様基準を捨てて見れば、普通に背も高く手脚も長いし。

いえ、わたくしの好みは勿論拳王様なのですが。

…あ、結構まつげ長い。

「ユリア……」

ん？

このイケメン主人公、今、何か眩きましたわね？

と思っっていたら突然、ガシツと手を掴まれ、

「えっ!?……きゃ」

いきなり腕を引かれ、バランスを崩したわたくしの身体は、唐突に身を起こしたケンシロウの腕に、一瞬にして抱きこまれました。

「ユリア……来て、くれたのだな……!」

…あ、これ完全に寝ぼけてますわね。

まさかあの冷徹無表情DS主人公が、実は寝起きが悪いタイプだったとは知りませんでした。

そして、

ガコオツ
!!!!!!

…次の瞬間、なにやら衝撃と共にケンシロウの身体が足元に沈み、その側に、デカイ拳を握りしめた拳王様が立っております。

あの…わたくしの見間違いでなければ今、拳王様、ケンシロウの脳天にげんこつ落しませんでした？

「……………もたもたするな。」

こやつが眠っておる間に、さっさと済ませてしまえ」

「いやいや今明らかに、拳による実力行使で眠らせましたわよね!? むしろ眠ってるではなく、気絶してますわよね!?!」

「この拳王の女に手を出そうとしたのだ。」

この程度ならば、逆に温情が過ぎるといふものであろうが」

「今の感じからすると寝ぼけただけでしよう!?!」

というか、今ので治療すべき箇所、いっこ増えましたからね!」

「問題ない。いいからさっさと済ませろというのに。」

終わったらまた、元のところに捨ててくる。

…念のため言っておくが、おれの時のような保温は必要ない」

「いやそこは必要あるわ!」

放り出すつもりならば毛布か、せめて新しいシャツの1枚なりとも着せて差し上げて下さい!!

てゆーか、助けたいのか殺したいのかどっちなんですの!?!」

「フ…その質問に敢えて答えるなら、両方やもしれぬな……………!」

「ちよつとかつこよさげに答えてますけど誤魔化されませんかからね!?!」

よくばるんじゃないやありません、どっちかひとつにしなさい!!」

「リ、リア殿。毛布とシャツを持って参りましたので、もうそのくらいで」

気がついたら妙な言い合いになっているわたくしと拳王様の会話に、焦ったように割って入ってきたザク様の手を借りて、新しいシャツを着せた(サイズは少し大きかったです)が逆に着せやすかったです)ケンシロウを冷えないように毛布で包んだ頃には、東から朝陽が昇りかけておりました。

…よく考えたら、初めて顔を合わせた頃からは考えられないくらいわたくし、拳王様に言いたい放題言ってますわよね。

ザク様は、これ以上わたくしが拳王様のお怒りに触れないように、気を遣ってくださいだったのでしよう。

顔は厳ついですが優しい方なのですわ。

もっともその拳王様はといえば、ザク様がちよつと慌ててたつばいのに気がつくつと、

「構わぬ。何を言い出すか判らないところも、おれがこやつを気に入っておる理由のひとつよ」

とか笑って仰っていましたけど。

・・・

「…あの男はケンシロウといい、先の戦いで拳王様に、リア殿も目にされたでしょう、あの傷を負わせた男です。」

拳王様にとっては、かつて拳を争った相手であり、おとうと義弟であり、いずれは倒すべき宿敵でもあるのです。

ですが、拳王様自身決して口には出されませんが、共に育ち拳を学ぶ過程で、兄としての感情を、全く抱かなかつたわけではないのでしよう。

彼奴に対しては、様々なものの混じり合った、複雑な思いを抱いておる筈です。

今回はケンシロウに、サウザーの謎を解かせる為とは仰いましたが、なればこそ聖帝ごときに殺させるわけにはいかないというのも、偽らざる本音でありましょうな」

先の宣言通り、手当てが終わったケンシロウを乗せて黒王を駆る拳王様に、今度は同行せず砦に残されたザク様が、そう説明してくださいるのを、わたくしはどこか遠くに聞いておりました。

拳王様は、この先に待ち受ける御自分の運命にある程度気付いて、それに精一杯抗おうとしていらつしやるのかも…ふと心を掠めたそんな思いに、その時のわたくしは、深く、とらわれていたのです。

それからまる一日経った朝。

聖帝軍が動き出したとの情報が砦に入ってきました。

どうやら聖帝十字陵が完成間近で、サウザーはそれを機にレジスタンスを一掃するつもりようです。

「…あれが完成してしまえば、奴らの士気が最高潮に高まるであろうが、今は仕方がない。

おれの身体も、完全に癒えるにはもう少しかかるうし、ケンシロウも今は動けぬであろう。

奴らを叩くのは、後でもいい」

拳王様がそう仰った為、十字陵^あ付^ち近^らは凄^あい戦^あいになつているのでしようが、砦の周辺は静かなものです。

わたくしと拳王様が砦の物見台の上で、見えもしないその方向を何となく眺めていた時、息を切らせて階段を駆け上ってきたザク様が、拳王様の前に跪きました。

「ケンシロウが、再び聖帝のもとに向かいました!!」

どうやらレジスタンスの拠点を見張らせていた兵から伝令があったらしく、一瞬にして緊張を纏わせた拳王様が、座っていた椅子から立ち上がります。

「バカめ…なぜ死に急ぐ、ケンシロウ。

まだサウザーの体の謎を解いてはおるまい」

確かこの時ケンシロウは、シユウの拠点に回収された後で一度目を覚まし、その後また葉で眠らされて地下水路から逃がされていた筈です。

その後サウザーとの戦いにシユウが敗れ、その魂の叫びによって目を覚ました流れの筈ですので、今はシユウが深傷を負った状態で聖帝十字陵を登るといふ、ストーリー中屈指の号泣シーンが展開されている最中なのでしょう。

となるとこの後、拳王様はケンシロウとサウザーの戦いを見届けるべく、聖帝十字陵へと向かうのでしょうか…

「だが……二度は助けぬ!!」

…一度は立ち上がったものの、わたくしの視線に気がついた拳王様は、何故か元どおり椅子に戻っておしまいになりました。あれえ？

「…なにをボーツと見ておるのだ。
暇ならおれの膝にでも座るか、飲み物でも持つてくるが良い」
「かしこまりました」

今何かサラツと変なこと言われた気がしますが、これは飲み物の所望であると解釈して、わたくしは一礼してその場を下がります。

…いやだって怪我人の膝の上に座るなんてできる筈がないでしょうに。

拳王様の冗談は判りづらくて困りますわ。

…しかも、なんで舌打ちしたんですの今。

☆☆☆

「リアさんー!」

敷地内の井戸から水を汲み上げているわたくしの背中に聞き覚えのある声がかかり、振り返ろうとした刹那、背中から固いものに抱きつかれました。

「久しぶりだな、元気だったか?」

その声が聞こえる位置に、無理くり顔を振り向かせると、そろそろ懐かしい顔が微笑んでいるのが目に入ります。

別れた時点で既に大きくなっていったのに、あの時より更に顔の位置が高いようです。

「…ええ、おかげさまで。」

「あなたも元気そうで何よりですわ、 balan」
「良かった。」

「ちゃんとオレの顔を覚えていてくれたようだな」
「忘れるわけがないでしょう?」

拳王軍を離れた今も、あなたの事は、わたくしの弟のようなものだと思いますよ。

…けど、最後に見た時よりも、随分と遅くなりましたのね」
背丈だけでなくその顔も、部品の高さも配置も変わらないのに、女の

子のようだった可愛らしさが、男らしい精悍さに、確実に変わってきています。

「弟、ね…まあ、いいけど。で、どうだ？」

オレも少しはあんたの言う『いい男』になれたか？」

「それは、もう少し大人にならないとなんとも」

軽口に軽口で返しながら、思春期男子の成長速度に驚異を感じると同時に、やはり男の子は大きくなると可愛くなくなるのだと、その瞬間のわたくしは、割と失礼な事を考えておりました。と、

「 balan。感動の再会も結構だが、目的を忘れてもらっては困るぞ」
「先生」

わたくし達の更に後ろから、落ち着いた大人の声が聞こえてきて、balanがそれに答えます。

わたくしも振り返ろうとしましたが、背中から抱きついたままのbalanが邪魔で見えません。

わたくしのそんな様子に気がついたものか、落ち着いた声はフフツと小さく笑い声を発しました。

「そういうところはまだまだ子供だな、balan」
「えっ!?!」

「まあ、子供だから許される距離というものもある。

どちらを選ぶかはおまえ次第だが、彼女に一人前の男として認められたいと思うのであれば、まずは一旦子供の距離を、卒業しなければいけないのではないかな」

「うっ…わ、わかりました…!」

その声に促され、balanがようやくわたくしから手を離します。

ようやく振り返ると、そこには思った通りのひとが、優しげな微笑みを浮かべて立っていました。

「はじめまして、リアさん。

わたしの名は、トキ。…弟子が、失礼を」

それは間違いなく、北斗四兄弟の次兄にして、拳王様の血の繋がった弟であるトキその人でした。

けど穏やかにそう言いながら、わたくしに頭を下げるその男性は、

頭には白いものが混じっているものの髭は綺麗にあたられていて、スツキリしたお顔は不思議とわたくしが知っている姿よりも若く見えます。6話でも説明した通り、本来の流れであれば途中でトキに成り代わるアミバを別人と見破って balan が始末してしまった事と、奇跡の村の存在がやはり balan によってカムフラージュされた事で、この時空のトキはカサンドラに投獄されてません。

ラオウも最初はそのつもりでトキの行方を搜索させていたものの、あまりにも見つからないので途中で諦めました。

更にトキ不在時に起きる筈だった奇跡の村の悲劇も、お留守番の balan がいた為に回避されており、それによる深い絶望も味わってません。

そんなわけでこの時空のトキの病は、進行はしているものの原作よりやや遅いのです。

「リアさん。」

この人が手紙にも書いた、オレの師匠だ」

「貴女の事は、balan からよく聞かされている。

なんでも、拳王の信頼の篤い女性かたであるとか。

…なれば、お会いして早々に不躰で申し訳ないが、どうかラオウ…拳王に、トキが会いに来たとお伝え願いたい」

トキ様がそう言って頭を下げるのに、わたくしは一瞬狼狽えました。

この方は拳王様に、一応は敵対する立場である筈です。

balan も今は拳王軍を離れておりますし、女官の立場としては、まずは本人よりもザク様か、最低でも兵士の方におうかがいを立てるべきなのですが、そうしてしまうと2人の身の安全が危ぶまれることになります。

「それは…」

「その必要はない」

ですが、逡巡するわたくしの言葉を遮って、拳王様本人が姿を現します。

…飲み物を持ってくると言って少し時間がかかったのは認めます

が、井戸から冷たいお水を汲んでくるまで、おとなしく待っていていられなかったのでしょうか。

いえ、この場合は助かりましたけれども。

「 balanよ、久しいな。」

うぬが、トキと共にいるとは思わなんだぞ。

…それにしても、よくここがわかったな。

この砦はまだ、balanに教えていなかった筈だが」

「フツ…死期が近づくと何故か勘が冴えてな」

睨みつける拳王様の肌を刺すような視線を、受け流すようにトキ様がふわりと微笑みます。

実の弟であるからかもしれませんが、この方の心臓はどうなっているのでしょうか。

「拳王様、御無沙汰しております」

そしてもう1人、心臓に確実に毛が生えているのだろう子が、拳王軍で習った礼を拳王様に向けて取り、何やら妙な間が、2人の間に流れたのがわかりました。

ですが、次の瞬間にはまたトキ様の穏やかな声が、その妙な間に割って入ります。

「リアさん。わたしは、ラオウと話がある。」

話し相手にbalanを残して置くゆえ、暫し席を外していただけるだろうか」

そして、柔らかな物言いと態度でありつつ割と強引に話を進めるトキ様の言葉に、わたくしは思わず拳王様に視線を向けました。

「……ついてこい、トキ。話は中で聞く。」

リア。うぬはbalanと共にここで待つが良い」

「かしこまりました」

判断を拳王様に丸投げする形でわたくしは一礼して、砦の中に入っていく2人の背中を見送ります。

そう、わたくしは拳王様の女官ですもの。

主を飛び越してお客様の要望を聞くわけにはいきませぬわ。

と、そのままトキ様を伴い建物の扉をくぐっていくかに見えた拳王

様が、一度こちらを振り返りました。

「…ケンシロウの時にも思った事だが、うぬは無防備過ぎる。

他の男などに、その身を易々と触れさせるでないわ。

ましてや、下心のある相手に対してはな」

「はい？」

ケンシロウさんに抱きつかれた時、あの方は寝ぼけていただけで、別に下心はなかったと思いますけど!?

わたくしが混乱して、心の中だけで激しくツツコミを入れている間に、拳王様は、今度は balan へと向き直ります。

「balanよ。」

判っているとは思いますが、リアそれはまだおれの女だ。

おれに挑んで勝つまでは、適切な距離は保て」

「承知致しております」

物理的な力さえ持つと錯覚するくらい強い視線で、拳王様は balan を睨みつけてそう仰いましたが…：当の balan はやはりそれを、師匠と同様に涼風のように受け流して一礼しました。

いやなんなんだこの師弟。

というか拳王様、『適切な距離』とか仰るあたり、先ほどまでの会話を聞いていらっしやったのですわね。

けど、balanの下心って…？

彼は、子供と言われて凹む程度にはまだ子供ですし、それこそ誤解ではないかと思えますわよ？

「…拳王様の出陣の準備、しておいた方がいいぞ。

オレも手伝う。」

黒王の支度の方が時間がかかるだろうしな」

2人の姿が今度こそ砦の中に消えたと同時に、balanが服の袖を捲りながら、わたくしの背に声をかけました。

「えっ？」

「トキ先生はそのつもりで、拳王様に会いに来たんだ。

2人はこれから、聖帝十字陵へ向かう。

どうやらうちの師匠は、聖帝の不死身の肉体の秘密を御存知らし

い」

……思い出しましたわ！

ラオウが聖帝十字陵へ赴くのは、トキがそれを知っていたからなのでした!!

ケンシロウを倒したと思ったサウザーに、『おまえの体の謎はトキが知っておるわ』と、自慢にもならないことをドヤ顔で言ったシーン、ネットで割とつっこまれてた記憶が確かにあります！

……バランが言った通り、トキ様に促された拳王様は、わたくしに支度を命じられました。

そして、バランがしっかりと鞍を付けて連れてきた黒王の背に、まだ治りきらぬ傷を武装の下に隠したお身体を、そのようなことは微塵も感じさせぬほどの覇気で包んで、堂々と駆けていかれたのでございます。

ちなみにトキ様とバランは、ここまで車でやってきたそうで、バランが運転して聖帝十字陵へ向かうようです。

ええ、わたくしは勿論お留守番ですわ。

・
・

……数時間後、なんだか納得いかない表情で戻ってきた拳王様は、兵士の方々を集めると『うぬらは遅くとも3日のちにはここを出立し、居城に戻れ』と命令されました。

拳王様御本人は、ザク様をはじめとする側近数名を連れて翌日に発ち、道々数件の用事を片付けながら向かうとの事です。

なんでも聖帝サウザーが倒された直後に、これまで互いに不干渉という約束を交わしていたUD軍が現れ、『これより我らは南斗軍の傘下に入る』という宣言をかましたそうで、その辺の対策を早急にとらねばならないそうですが……はて？

物語では、ケンシロウとサウザーが戦った時には、既にユダはレイに倒され、彼の組織もそれと共に壊滅していたと思うのですが？

ていうかそもそも南斗軍って何!!?

……ともあれ、この砦は進軍の為の中継地点としてまだ使う予定です
が、あくまでも廃村というカムフラージュが必要との事で、最低限の

物資しか残さずあとは撤収するそうです。

という事は、少なくとも明日1日は撤収準備に忙殺されるものと覚悟して、とりあえず明日発つという拳王様の衣類や装備、その他身の周りのお世話をするのに必要な一式を纏めておきましょう。

わたくしは他の兵士さん達との同行となりましょうが、それらをザク様に託しておけば、拳王様が道中、不都合を感じる事態にならずに済む筈ですから。

…と思い末端兵士の皆さんと作業をしておりましたら、突然現れた拳王様に、部屋へ強制連行されました。

「あの、わたくしは拳王様の明日の出立の準備を…」

「それは兵士どもに任せておけば良い。」

うぬにはうぬの仕事があろう」

そう言われて、寝台に座らされて…ひよつとして、^{いっせいのやう}膝枕所望という事でしようか。

「拳王様は明日はお早いのですし、そのままお休みになられた方が…」
あれをやると大体夜更かしになってしまうので、さすがに今夜は止めた方がよいのでは。

そう思いやんわりと断ろうとすると、何故か拳王様の腕の中に引き寄せられます。

「うぬも同じだ。いいから横になれ。」

…こここのところ、うぬの身体が傍にあるのが普通になって、離れると何やら落ち着かぬ」

「はっ。」

そして気がつけば、わたくしは押し倒されるように寝台の上に横たえられ、拳王様のむき出しの固い胸筋と腹筋に、身体をびったりと押し付けられておりました。

この世界では見たことがありませんが、抱き枕状態というやつです。

「しかも目を離すとすぐに男に言い寄られる上に、おのれにはその自覚もないときた。」

リュウガも、他の者には任せられぬと自らこちらに連れてきたそう

だが、確かにこれでは危なくて、手元から離しておけぬわ」

ええと。拳王様がなんのことを仰られているのかさっぱり判らないのはさておき…要するに。

「…明日、わたくしもお供させていただけられるのですか？」

てつきり他の兵士の方々と一緒の移動になると思っておりますので、驚いて訊ねてしまいました。

わたくしの問いに拳王様は、何故か苦笑いのような表情を浮かべます。

「そつちか。…いや、そう言った。だからもう寝ろ。」

…もつとも今からおれに抱かれて、腰も立たぬ状態のまま黒王の背に揺られたいと言うのであれば、おれは構わぬが」

「おやすみなさいませ、拳王様」

拳王様の不穏な台詞に、まるで子供の頃母親に『早く寝ないとおぼけがくるよ』と言われた時のように、わたくしはその腕の中でぎゅつと目を瞑りました。

「新血愁を突いた者は、3日のうちに死に至る筈…何故、あの男は生きていた？」

南斗軍とは…南斗最後の将とは一体…!？」

互いの吐息すらかかる距離で、拳王様がそう呟いた事など、既に眠りに落ちていたわたくしには、知る由もありませんでした。

…ここにきていきなり台頭してきた南斗軍とは、『南斗最後の将』と呼ばれる者が率いる軍で、どうやらK I N Gを吸収して(!?) それまでザンクロスと呼ばれていた街を『南斗の都』と改名し、そこを拠点として活動している新勢力だそうです。

そこに更にU D軍が傘下に加わり、聖帝軍が瓦解した今、この拳王軍に対抗しうる最大勢力と言えるでしょう。

……ええと。

ユダの軍がまだ機能している点も気にはなりますが、『南斗の将』つて、つまりあの方ですわよね？

わたくしと名前は似ておりますが、わたくしのようなモブとは違う、真正銘この世界のヒロイン、ユリア様。

五車の星を従え、北斗と結ぶ事で世に平和をもたらす宿命を持って生まれた、慈愛の女神。

その慈母の魂は、愛を知らぬ霸王の心に愛と涙を刻み、けれどその肉体を病に冒された彼女は、真の平和を見る事なく、その短い一生を、愛する人の腕に抱かれて終える。

…タイミング的には、その存在がクロースアップされるのはもう少しあとではないかという気がしますし、それ以前に細かい部分が、わたくしの知っているお話とは違ってきております。

これは一体どういう事なのでしょう？

…というような事を考えつつの旅程は、わたくしが砦に連れられてきた時よりもゆったりとしたものでした。

「こやつは、おれの傍に侍っておる状態が一番安全だ」

はじめのうちはそう言う拳王様と一緒に、黒王の背に乗せられて移動してりましたが、途中でわたくしが振動に酔ってしまった為、ザク様が拳王様を説得して、今は車に乗せられているからです。

朝食べたものをもどしてしまい、ぐったりしたわたくしを、何故かザク様が甲斐甲斐しくお世話してくださいます。

「落ち着かれましたら水をどうぞ、リア殿。」

ああ、そのまま。無理をなされませぬよう。
今が一番大事にせねばならぬ時ですからな。

周りが男ばかりで心許ないでしょうが、居城に着けば直ちに女官たちを付かせますゆえ、今しばらくは御勘弁を。

何かございましたなら、どうぞ私にお申し付け下さい。

私の妻も最初の子を宿してすぐの頃は、吐いては寝込むを繰り返しておりました。

私ならばその時の経験がある分、少しはお心に添えましょう」

：なんか変なこと言われてる気がいたしますが、今は追求する元気もございません。

日中は移動、夜は野営という行程で進んできたふた晩め、ザク様付きの兵士の方が設営してくださったテントの中で（だいぶ調子が戻っていたのでなにかお手伝いしようと思し出たところ必死に止められました。人手も少ないのに何故なのでしょう）与えられた食事をとって就寝の支度をしておりましたところ、昨日車に乗せられて以来顔を合せていなかった拳王様が入っていらつしやいました。

：わたくし一人入れるにはこのテントだけ随分広いとは思っておりましたがそういうことでしたか。

それはさておき拳王様は、よく見れば着ているものに、血のような染みがついております。

わたくしが怪訝な顔をした事に気がついたのでしょうか、拳王様は口元にどこか渴いた笑みを浮かべながら、言い訳のように言葉を続けました。

「案ずるな、返り血よ。傷は癒えた。

それをはかれる相手のところに行ってきただけだ」

「つまり、少し離れております間に、どこぞで一戦交えてこられたわけですね…」

：てゆうか、ええ。

今のその『傷は癒えた』のフレーズで思い出しましたわ。

そう、確かサウザーが斃れた直後くらいタイミングで、先代の北斗神拳の継承者で、北斗四兄弟の師父でもあるリュウケン様に何かし

らの縁のある方を、倒しに行くエピソードがあった気がします。

多分今がその直後ということなのでしょう。

だとすれば次はトキ様との、宿命の兄弟対決が行われる頃かしら。

それは拳王様にとつては弟との、更に balan にとつても師との永遠の別れの時が、近づいているという事に他なりません。

「うぬには、兄弟姉妹はおるのか？」

「え？」

そんな事を考えていたら、まるで心を読まれたようなタイミングで、拳王様にそんな事を問われました。

唐突な問いこのタイミングでのラオウのこの質問は、コウリユウさんを倒した後、彼の2人の息子に対して言った言葉（『兄弟ならば違う道を歩むがよい』ってやつ）に、自分自身が打ちのめされていたからです。に間抜けな声が出てしまいましたが、すぐに気を取り直して答えます。

「…故郷の街に、年子の弟がひとり。

正確にはその下に妹がいたそうですが、生まれた直後の赤子の頃に、同時期に子を亡くしたという母方の遠縁に養子に出され、わたくしも弟も、妹とは会った事もございませんわ」

…これ、実はわたくしが居城に召し上げられる前日、母がこっそり教えてくれた話なのですが。

その妹というのは、わたくし達姉弟がまだ幼く手のかかる頃に、父が商会の女性従業員に手を出して生ませた子でして。

そもそもその関係自体が合意ではなかったそうで、本人は誰にも相談できぬまま月齢だけが過ぎてしまい、墮ろせなくなった頃に母が気がついて問い詰めたのだそうで、最初は激怒していた母も、事情を知ることにつけ彼女に同情するしかなくなったらしいですわ。

結局、出産後すぐに彼女を父から逃がして、生まれた子供は一旦引き取り、片田舎の村にある母の遠縁の家に養子に出したのですが、聞いたところによればほんの幼児の頃になにやら予言めいたことを口にするようになって、そこからまた別なところに引き取られたそうで、今どこにいるかはわからないそうです。

…まあ、そんなことはどうでも良いですわね。

「…妹、か」

わたくしの話を聞いて、思いのほかしみじみと、拳王様がそう呟きます。

「…おれの末の妹も、別れた頃は赤子であった。

兄と共に居る故、生命の心配はなからうが、おれの事は存在すら知らぬであろう」

「え!？」

「ん?」

ちよつと待つて。今何か、衝撃的な事実がサラツと告げられた気がいたしますが？

「拳王様に、お兄様と妹さまがいらつしやつたのですか?」

「何をそんなに驚く?」

うぬの家族と状況は似たようなものよ。

おれと弟が養子に出され、長兄と赤子の妹が故郷に残った。それだけの話だ。

…ああ、言っておらんのだが、先日バランが連れて訪ねてきたあのトキが、おれの実弟だ。

あやつも、上の兄や妹の存在は、臆げにしか覚えておるまい」

それだけの話つて!

というか、『ラオウ』つて完全に長男だと思つてたんですけど実は次男だったんですのね!!

…というか、ここまで来ると疑いようもなく、わたくしが読めなかった『北斗の拳』の、残りのストーリーのどこかに書かれていたお話なのでしよう。

ぐぬぬ、今更どうしようもないことですが、最後まで読めなかったことが悔やまれますわ。

それに…そうであるならば、今こうして懐かしく思い返したであろうお兄さんと妹さんとは、再会することなく拳王様は天に還られるという事になります。

物語の展開上仕方ないとはいえ、登場人物全員が身内の縁が薄いと

か、なんだかとても切なくなりますわ…。

「…それで、子ができたというのは本当か？」

「はい？」

…と、またもや身内の縁とか考えていたタイミングで問われ、一瞬わたくしは機能停止いたしました。

拳王様はわたくしの心でも読んでおられるのでしょうか…？つてそうじゃなくて！

待つて今なにかとんでもない事言われてません!?

「……………いやいや違いますわよ！

一体、誰がそんなことを!？」

本当か、という訊きかたをしてきたということは、どなたかから聞かされたということでしょう。

そう判断できる程度には冷静さを取り戻して、なんとか再起動を果たして頭をぶんぶん横に振り…ちよつとくらくらしつ爆弾を投げ落としてきた実行犯を見上げますと、その顔はなんだか困ったように微笑んでおります。

「…………ザクめ、早とちりしおって。

確かにおかしいとは思ったのだ。

おれがうぬに手を出したのはあの日の一度のみであるし、それで孕んだにしても、兆候が出るには早すぎるであろう」

ああ、そういうことでしたか！

黒王の振動で酔ったわたくしを、ザク様が過剰なほど心配してお世話してくださいましたのは、わたくしが拳王様のお子を身籠っていると思ひ込んだからでしたのね！

確かに居城でわたくしは事実上、拳王様のお手付きとして扱われてはおりましたし、石抱k…膝枕を所望された翌朝、拳王様のお部屋を出たところでザク様と顔を合わせた事も、何度か、確かにございましたが…拳王様が実際にはわたくしに手をつけられていなかったこと、確かりユウガ様はご存知でしたから、幹部の皆様は全員知ってらっしゃると思っておりますわ。

なんですよ、拳王様のザク様への扱い、最近ちよつと雑過ぎません

こと!?

てゆーか、今思えばあれも、わたくしが拳王様のお部屋を出たのと同じタイミングでザク様がいらっしやっていたのではなく、わたくしのお召しがあった次の朝だけは、間違っても寝台で肌を晒しているわたくしを目にする事のないよう、衣服を整えて出てくるまで、扉の外で待つてらっしやったという事なのでは？

……って、そうと判ったらメツチャ気まずいわ！

次ザク様に、どんな顔して会ったらいいか判らんわ!!

…コホン。失礼いたしました。

「そもそもおれが手をつけた時、うぬは確かに生娘であつたからな」
「……っ!!」

わたくしが恥ずかしさに悶絶しておりますと、拳王様が更にわたくしの羞恥心を煽るような事を言い始めます。

居た堪れなくなり、反射的にその場から逃げ出そうとするわたくしを、拳王様の腕が捉えました。

「どこへ行く。」

おれの傍以外に、うぬの居場所などあるまい」

抵抗など意味をなさず、あっさりとわたくしを閉じ込めた両腕は、そのまま押し潰さんばかりに、わたくしの身体を締めつけてきます。

「このラオウの横におるなら、その心の裡で誰を愛そうが、どんなに汚れようが構わぬ。」

だが、おれから逃げることだけは許さん。

……逃げるならば、殺す。

それだけは、肝に銘じておくが良い」

…思いのほか余裕なく耳に囁かれたそれは、確か物語では、ユリア様への想いを語った際に、言った内容の言葉ではなかったでしょうか。

かつては紙の上で『見て』、今は自身の耳で聞いたその言葉に、天を握る男の抱えた孤独が、ある意味、集約されている気がしました。

愛を知らない男は、優しく抱きしめることも知らない。

恐怖で支配するか殺すしか、心が求める温かいなにかを、繋ぎ止め

る手段を知らないのです。

…そして、その言葉が恐らく、真にわたくしに向けられたものではない事も、その瞬間に理解してしまいました。

…だから。

それ以上聞きたくなくて、気付けば思わずわたくしは、自身を抱きすくめる拳王様の腕の下から手を伸ばすと、その大きな手に自身のそれを重ねます。

「わたくしは、貴方様から離れません。」

…むしろ、いずれわたくしを捨てるのは貴方様の方ですわ」

…次の瞬間、自身の口から出てきた言葉に、わたくし自身、内心で驚いてしまいました。

たとえ死が分かつ運命であるとしても、わたくしはその瞬間まで、この方のお側に仕える事になるでしょう。

そもそもわたくしは拳王様への貢物としてお側に上がった身。

仰る通り、行き場所など他にないのです。

けれど、拳王様の御心はユリア様のもの。

今はまだ『南斗最後の将』の正体が判明しておらず、かの方が亡くなられたと思っているから、その面影をお忘れになろうとわたくしに縋っているに過ぎず、先の未来でご本人が登場された際には、諦めるために抑えつけていた恋心が、一気に蘇ってしまうのは目に見えております。

…考えておりましたら、鼻の奥が痛くなってきました。

泣きません。判っていたことですもの。

わたくしはできた女官なのです。

わたくしの言葉を聞いた拳王様は、少し考えるようにそのまま固まっておりますが、やがて締めつける腕の圧を緩めると、わたくしの身体を裏返して自分に向けさせました。

「…何ゆえ、おれに捨てられると?」

「……拳王様は、わたくしを見てはおられませんから。」

わたくしの名を呼びながら、心は遠く、他のどなたかを見ていらつしやる。

…わたくしはただの女官ゆえ、己の分は弁えております。

拳王様がわたくしを要らぬと仰った暁には、潔く身を引く覚悟は…」

…全てを言い切る前に、後頭部を掴まれるように引き寄せられたかと思うと、熱い唇が、噛みつくようにわたくしのそれを塞ぎます。

引き抜かれんばかりに舌を絡められ、ようやく唇が離されたのは、呼吸困難で意識を奪われる寸前でした。

「どうして……」

拳王様の腕のなかから、わたくしはなんとかその顔を見上げて、問いかけます。

少し咎めるような口調になってしまった事は、わたくしの今の心境的には、仕方ない事と思えますわ。

わたくしの問いかけに、拳王様はその場に腰を下ろし、わたくしを膝の上に、横抱きに座らせる形で抱えました。

「煽ったのはうぬであらう」

「わたくし、煽ってなどおりません」

「あれで煽られぬ男がおるなら、お目にかかりたいほどだがな。

自覚がないのがまた始末に負えぬ。

うぬが何を憂いておるか、おれには判らぬが……もう泣くな」

…なにを言っているのでしょうか、この方は。

ですが、我慢した筈の涙が、気がつけばわたくしの頬を濡らしており、反射的に拭おうとした手が、拳王様の大きな手に阻まれたかと思うと、分厚い胸に頬を引き寄せられました。

「…うぬが嫌なら、これ以上触れはせぬ。

……が、こうあつてもうぬが決して、おれを拒まぬと思っているのは、ただのおれの願望か」

腕に再び閉じ込められて、熱い吐息と共に囁かれた言葉に、わたくしは首を横に振ります。

「……………嫌ではございませんが、怖い、です」

「怖い…今更？」

「…貴方様をこれ以上、好きになつてしまうことが。」

貴方様の愛を、望んでしまう自分が。

その御心の渴いた愛の器を、わたくしが満たしたいと思つてしま
う、浅はかなこの心が、何よりも」

「……もう黙れ」

自分で聞いたくせにと反論する暇も与えられず、わたくしの身体
の上に、大きな身体が覆い被さつてきました。

腰紐がしゅるりと音を立てて解かれ、袖のない女官服の肩を落とさ
れて、とりたてて小さくはないものたいして大きくない胸が露わに
なります……つてやかましいわ。

……わたくしは、そこからは一切抵抗しませんでした。

ただひたすらにこの肌を求めてくる、その熱い腕に身を任せたので
す。

☆☆☆

………次の日。

「背比べの跡か……」

……ええ、もうこの状況、これから何が起こるか、わたくしには判つ
ております。

判つております、が……

なんでわたくし今、この場面に居りますの？

明らかに場違いではありませんこと!?

「拳王様……この場所は」

共に迎えた朝も早く、珍しくわたくしより先に目覚めた拳王様に
外出そとでの支度を急かさされ、身支度を整えたその背を見送ろうとしたら、
まるで拉致されるように黒王に乘せられて、なんだかわからぬまま連
れてこられたこの場所を、わたくしは思い出しました。

一応確認の為に訊ねましたが、そこは確かラオウとの決着をつける
覚悟を決めたトキが、ケンシロウ（と、バットとリン）を連れてきた
場所の筈ですわ。

先程通り過ぎたところから見えた、なにか壊れた石造りの寺院のよ
うな建物の前に墓碑が4本、些か詰めすぎではないかと思うくらい
の間隔で並んでいたのが、原作でトキが両親と自分と兄の墓だと説明し
たものでしょう。

いまわたくし達がいるのは、そこを見下ろせる崖沿の道を登った先
です。

切り立った岩壁に、子供が背比べの為に刻んだらしい傷がうっすら
と見えており、黒王の背から降りた拳王様は、そこに指先を当てなが
ら、見たことがないような切なげな表情を浮かべておりました。

わたくしの問いに、拳王様は視線を上げ、ゆっくりとそれをわたく
しに移しながら答えます。

「……ここはおれと弟トキが、故郷への思いを葬った地よ。

あちらに墓碑が建ててあるが、実際にはここにあって、それらしい
折れた石柱を並べて埋めただけで、その下に誰の亡骸も埋まってお
らぬ。

おれ達が海を渡り、この地に連れられて来た時、おれはともかく弟
はまだ幼く、ここに来た意味も理解できてはおらんのだ。

ゆえに師父リュウケンに、故郷から共に連れてきた赤子ケンシロウを託し、我らも養子と
して引き取られた後、泣き暮らしていたあやつのために、故郷を懐かし
む代わりに、ここを我らの新たな故郷とする事を、おれがやつに言い
聞かせたのだ。

そして兄弟ふたり、いずれはこの地に眠るのだと誓い合った。
幼心を守る為とはいえ…今思えば、戯言よな。

或いはやつは本当にここを、己が育った地と思い込んでおるやもしれぬ」

自嘲するように呟いたその言葉は、かつてのわたくしが読んで知っていた話とは、些か異なるものでした。

…けど同時に納得もいたしましたわ。

原作のトキはこの場所を、自分たち兄弟が両親とともに暮らしていた場所だと言っていました。こうして見る限りこの地には、あの壊れた寺院以外の建物も、生活の基盤となるものも、本当に何もないのですもの。

所々にある洞窟は、雨露をしのぐ事はできるかもしれませんが、煮炊きのできるかまども水を汲む井戸もなく、すぐそばに切り立った崖のあるこんな場所で、まともな夫婦が子供2人、育てていけたとは思えません。

ここはあくまでも幼い兄弟の、いわば秘密基地のような場所であったのでしよう。

たとえ偽りでもその思い出は、幼い2人を守ってくれた、大切な心の砦だった筈。

けれど今からここで拳王様は、大切に守って来たその思い出を、血の色に塗り替えねばならないのです。

「来るか、トキ……!!」

あの日リュウケンに教えを乞い、北斗神拳の道に踏み込んだのが、この宿命の始まりなのだ!!」

…兄弟として生まれた互いの体に流れる、その同じ血で。

……それはともかく、なんでわたくし、ここに連れてこられたのでしょうか？

☆☆☆

「リアさん？」

「まあ、バラン？」

「やはりここに足が向いたか、トキ！」

「フ…父と母が、わたしたち兄弟を引き合わせてくれたらしい」

「…と言っているということは、互いに示し合わせてここで落ち合ったわけではないらしいな」

「トキ先生は、こういう勘はやけに鋭いのだ。」

「けど、拳王様がリアさんを連れてきているとは、オレも思わなかった」

「わたくしも、ケンシロウ様はいらっしゃるかと思っておりましたけれど、まさかあなたまで来ているとは思いませんでしたわ、 balan」
「何故だ？師が命懸けで挑むという戦い、弟子として側で見届けねば話になるまい？」

「まあ…そうでしょうけど」

「ごこのほかに、あなたと戦う場所はない」

「早いものだ、あれから何年になるか…」

「ところで、わたくし達個人の関係性はともかく、立ち位置的には互いに敵対する陣営に属していることは、あなた、理解しているのかしら？」

「流れるにそうなたただけだろうか？」

オレは今でも、拳王様の事も師と思っているし、リアさんに認められる事も諦めてはいないのだから

「まったく…仕方ありませんわね」

「フ…お互い、大きくなったものだ。」

「覚えているか、あの時のことを」

「よくー！」

「では改めまして、御挨拶させていただきます。」

わたくし、拳王様付きの女官を務めさせていただいております、リアと申します。

「どうやらトキ様だけではなくケンシロウ様にも、わたくしの弟分であつた balan が、お世話になっておりますようです」

「ああ…おれはケンだ。その……」

「……つてうぬら少し黙っておれ！調子が狂う!!」

…ようやく顔を合わせた兄弟を、取り囲むように見守るメンバー

は、わたくしは勿論ですがあちら側も、原作とは些か違っております。

トキ様がケンシロウを連れて来てらっしゃるのは変わりませんが、その側にいるのはバットとリンではなく、何故か balan。

言われてみれば balan はトキ様の弟子なので、別段不自然なことではありませんが、その balan は最初明らかに、『なんで居るんだお前』みたいな目でわたくしを見ておりました。

それはわたくしも聞きたいことですが今はいいでしょう。

「まあ良い。 balan よ。」

万が一、おれがトキに敗れたならば、こやつはうぬが連れていくが良い。

その為に連れてきたのだからな」

と、まるでそんなわたくしの心を読み取ったかのようなタイミングで拳王様が言葉を発しました。

説明を求める前に答えてくださるなんて、昨晚のことといいなんだか最近わたくし達、心が通じ合っておりますわね……じゃなくて！

「なに勝手に話を進めてらっしゃいますの?!」

主人あるじが何やら勝手な事をほざきやがりましたのについてっこむと、 balan の横にいたケンシロウが、なんか知らないけどビクツとしました。

なんなのよ。

「始めるか!!」

「って完全無視ですの!?!」

けど、そんなわたくしのつつこみに答えず、拳王様はトキ様と向き合おうと、身につけていたマントを脱ぎ捨て……それをわたくし、つい反射的に拾ってしまいましたわ。

けどよく考えたら、それは拳王様の身体を足元まで覆うほどの量の布、言ったら布団一式抱えているようなもので。

持っているうち段々と重く感じてきて、拾い上げた事をわたくし、段々後悔し始めております。

だからといって放り出すわけにもいかず途方に暮れておりました

ら、バランスがそれをわたくしの手から取って、黒王の背にかけてくれました。

さすがに、頼りになる弟分ですわ。ふう。

…だからなんですのその呆れたような目は。と、

「……あなたの声を、覚えている」

わたくしとなんとなく睨み合ってしまったバランの、その頭の上を越えるように声がかかり、2人同時にその方向を向けば、ケンシロウの目は明らかに、わたくしをとらえております。

「サウザーのもとから救い出され、満身創痍だったおれを手当てしてくれたのは、あなただろうか？」

ありがとう…お陰で、こうして生きている」

その言葉は、淡々と紡がれてはおりましたが、声にはどこか感情がこもっております。

表情もほとんど動いてはいないのに不思議と冷たさは感じない、むしろ温かみすら覚えるという、これが主人公の魅力というものなのではないでしょうか。

「…いえ。拳王様の御命令でしたので」

「そのラオウに言い返していた、先ほどの声を聞いて思い出したのだ。夢うつつの中で聞いた女性の声が、必死におれを庇ってくれていた事を。」

…済まない。あの時は色々…混乱していた」

あら？もしかしてこの方、わたくしに抱きついて拳王様にげんこつ落とされた、あの時のことを覚えていらつしやるのでしょうか？

あの時はすっかり意識が混濁しているものと思ひ込んでおりましたのに。

…少し気まずそうにわたくしに頭を下げるその男は、声のトーンこそ落ち着いたものでありつつも、雰囲気はわたくしが読んだ物語の彼よりもどこか柔らかく、表情にも感情が見えています。

…言い方は悪いですが、どこか甘さすら感じるほどに。

それでいて、慈しみと強い意志、そして哀しみを湛えた瞳は、まさしくこの世界の救世主たらんとするもので。

そこは物語上変わってはいけない部分なので、少しホツといたしましたけれども。

…あと、ケンシロウって3行以上喋らないイメージを勝手に抱いておりましたが、意外とそうでもありませんのね。

「お互いの立場として、この言葉が適切かはわかりませんが…その後、お元気そうで何よりですわ」

「そうだな…:では、伝えるべきことは伝えた。」

この先は互いの立ち位置で、この戦いを見届けるとしよう」

ケンシロウはそう言って、少しだけ哀しげに微笑むと、次に視線を balan の方に向けて、表情を引き締めました。

「…balanよ。この戦いを止めることはできぬ。」

ふたりの血の間に、誰も入ることは。

師の戦いとその生き様、死に様、おまえ自身の目に、しかと焼きつけるのだ」

そう言って、balan の両肩に手を置いて視線を合わせます。

「…わかっている、ケン」

ケンシロウの言葉に頷く balan の目には、うつすらと涙が浮かんでおります。

さもあらん。

彼にとつては、そこで戦っているのは、2人とも師なのですものね。

立ち位置は変わってしまつて、結果としてわたくし達は敵対する立場となつてしまつておりますが、先ほど彼自身がそう言った通り、彼にとつての拳王様の存在は、出会つた頃と変わらない。

そしてわたくしにとつて、今も balan は弟のようなものです。

…そんな顔を見ると、やはり胸が痛みますわ。

☆☆☆

「ええい黙つて聞いておれば！」

おれはユリアのフルートを舐めた事など断じてないわ！

風評被害にもほどがある!!」

「フツ、そうだったな。」

フルートではなくリコーダーだった。

「こんな重要な事を間違ってしまったって申し訳ない」

「しておらんと言っておるであろうが!!」

…一体なんでこんなことになっているのでしょうか。

いえ、最初のうちは原作通り、互いの拳の応酬がありましたのよ？

ただ…ええと。

「そうそう、いつだったか、ユリアの机に虫の入った箱を入れたものの、それが休前日だった為に、発見された時には箱の中が蠱毒状態になったあの時には…」

「それはおれではなくシンの話だ!!」

「そうだったか？何せ死期が近い故、記憶も定かではなくてな」

「明らかに故意に記憶をすり替えておるだろうが!」

今ここにいるトキ様が、わたくしの知るお話に比べて若干元気、と
いいですか。

そのせいなのかなんなのか、原作にはなかった煽りスキルみたいのを、なんでか身につけていらっしやいましてですね……

「大体兄に向かってその態度はなんだお兄ちゃん悲しい!!」

それはさておき相変わらず優しい拳よ!

このラオウを超えんとするなら、なぜ剛の拳を選ばなかった!!」
「激流を制するは清水せいすいですけど〜?」

はい、ここテストに出ます!

ラオウくん居眠りしてちゃダメですよおう?」

「貴様ああ〜!!!」

…てな感じの、主にトキ様のキャラ崩壊が甚だしいことになってま
して。

加えてうちの拳王様がまた、煽り耐性低い方でいらっしやるもの
ですから、拳の応酬の合間に繰り広げられる舌戦が、次第に泥沼化して
きますして。

「幼き日には兄ちゃん兄ちゃんどちよこまかつて歩くうぬの、おね
しよのシーツまで洗ってやったというのに!」

「そんな昔のこと忘れちゃった、てゆーか、幼児がおねしよするのは割
と普通の事なんで恥ぢずかしくも何ともありません〜」

「くあwせdrftgyふじー1p」

……ああもう、見るに耐えません。

本来なら白熱と感動と悲哀に満ちた名シーンが、どうしてこんな悲惨なことになってしまったのでしょうか。

というかトキ様、こないだお会いした時は原作通り穏やか（でも押しは強め）な雰囲気でしたのに、一体貴方に何が起きたんですの!?

なんだか居た堪れなくなってふと隣を見ると、 balan やケンシロウもちよつと困ったような表情になっており、更に、目があったbalanに小さく首を横に振られました。

…事態の收拾をこいつらに期待することはできそうにないですね。そして。

「いい加減になさいませ——ッ!!!」

我慢できなくな^切ったわたくしは、考える間もなく叫んでおりましたわ。

男どもが静観を決めた生死をかけた戦いに、水を差す馬鹿女がいるとは思わなかったであろう兄弟が、目を睨いてこちらを向いたまま固まっておりませんが、もう知ったこっちゃありません。

頭に血がのぼったわたくしは、そんな2人に臆する事なくつかつか歩み寄ると、間に入って両腕を広げ、彼らの間合いを無理矢理広げました。

「リア……!?!」

「そこまでですわ！拳王様、帰りますわよ！

これ以上は時間の無駄ですわ!!」

「い、いやしかし、これは我々が兄弟の宿命の…」

「こ・れ・の!どこら辺が宿命の対決ですの!?!」

どこからどう見ても、大人げない兄弟喧嘩じゃありませんの!!」
ビシッと指差してそう言っていると、拳王様はちよつと喉の奥で唸るような声を発しました。

多分自分でもちよつと、そう思っただけなのでしょう。

上手く軌道修正ができなかっただけで。

ええ、途中ちよいちよい流れを元に戻そうと頑張ってた事には、わたくしも気づいてはおりましたのよ。

けどその度にトキ様に煽られて逆上してまた流れを明後日の方に持つていかれてる。

舌戦に持ち込まれては、脳筋の拳王様がトキ様に、勝てる道理がございません。

「トキ様は勿論ですが、拳王様もいちいち反応しすぎですわ！」

こんな修羅場を見届けさせる為にわたくしをここに連れてきたんですの!?

せつかくの屈指の名シーンが台無し！

二次創作うすいほんだったにしても酷すぎる！

誰であろうと、わたくしの最愛の拳王様を、穢すことはこのわたくしが許しません！

やりなおしを要求する——!!」

「待てリアー！一旦落ち着け!!」

割と何を言っておるのかわからん!!」

言ってるうちに感情が昂ってきたわたくしは、拳王様の胸板を拳でぽかぽか連打いたしました。

女の細腕などでダメエージがあるとも思えませんが、拳王様は困ったようにその拳を、身体ごと腕に抱え込み、わたくしの動きを封じます。

「うむ…申し訳ない、リアさん。

確かに大人げなく、少し悪ノリをしすぎたようだ。

ここに来る前に、知り合いから受けたアドバイスをもとにして、先に精神的な揺さぶりをかけるつもりだったのだが、途中からちよつと楽しくなってきたってしまった。今は反省している」

「誰ですのそんな無責任なアドバイスをした方は!?

責任者出ていらっしやい!!」

そしてそんな状況の中、やはり困ったような顔でトキ様が、若干気まずそうに声をかけてきましたが、そんな言葉でこのやり切れない気持ち収まるわけもなく。

気づけば涙まで出てきたのは、感情の昂りによるものか、それとも拳王様の腕の中に抱え込まれて、若干の呼吸困難を起こしているせいなのか、自分でもわからなくなってきました。

と、視界に影が差したかと思うと、真正面に何故かケンシロウが立っております。

その伸ばされた指先が何故か、わたくしの顔に触れ……

そこから先の記憶は、ございません。

☆☆☆

「む……」

「リアさん!!」

「経絡秘孔のひとつ、定神を押しした。」

目が覚めた時には落ち着いているだろう」

「うむ、助かったぞケンシロウ。」

……ラオウよ、ここはお互い一旦退くこととしよう」

「そうするしかあるまいな。興が削がれたわ」

「……フ、フフツ」

「……?」

「……ラオウ、気づいていたか?」

我らは、いわゆる兄弟喧嘩というものを、一度もしたことがなかった事を。今、この時が初めてだ」

「……!!?」

「この齢になって大人げなく、恥ずかしい話だが……フツ、悪くはないものだ。そう思わぬか?」

「……うむ。だが、次はない」

「そうだな。」

再びまみえた時こそ、我らが宿命の幕を下ろす時」

「……それまで、身体を労えよ、トキ……!」

「………にいさん」

「ケンシロウ。 balan。」

拳王恐怖の伝説は今より始まる。

この命、奪いたくば、いつでも来るが良い！」

・・・

「バラン？」

「師よ。改めて今より、教えを乞います。」

あなたの全て、オレに受け継がせてください。

知や力、そしてただひとりの兄を超えんとする、その心も、全て」

「……何故？」

「拳王様は、己が斃れた後は、オレにリアさんを託すと言った。」

だがきつとこのままでは、拳王様が斃れた時、リアさんは…リアは、必ずその後を追う。

妹が、オレより神を選んで、その命を召された時のように。

リアを死なせぬ為に、オレが拳王様を…ラオウを超えねばならぬのです。

失礼ながらあなたには残されていない時間が、オレにはある」

「フ……判った。」

ケンシロウ。バラン。

わたしの魂はおまえたちに残そう。

そしてラオウとの戦いに捨てるつもりであった命もまた、おまえたちの未来への灯火として燃やそう」

「にいさん」

「…先生」

☆☆☆

さて。

気がついた時、わたくしは拳王様の胸に凭れた状態で、黒王の背に揺られておりました。

泥沼と化した宿命の対決はあのまま強制終了となり、トキ様とは念の為、再会を約束はしたものの、生きて再びまみえる事は恐らくないだろうと、呟いたその言葉が、やけに寂しげに耳に響いて、わたくしの胸にいつまでも残っておりました。

・・・

「お帰り、お待ちしております」

結局、わたくしと拳王様は黒王で居城へと向かい、その途中で立ち寄った村で、リュウガ様と合流いたしました。

どうも直前まで地元ヒヤツハーの暴走があつたらしく、大柄な男性のあちこち抉られたような遺体が散乱する割と死屍累々の有様な男ですが。

そんな中で、なんでか柵の中でひとかたまりになった女性達が、場にそぐわないキラキラした目でリュウガ様を見ておりますがそれはさておき。

「変わったことは」

「あなた様の伝説を汚すであろう枝を払っておきました」

「うむ、ぐ(苦勞)」

…変なのですわ。

確か物語ではこれ、拳王様が居城に戻られたタイミングで為される会話だった筈です。

居城を占拠していたリュウガ様が玉座から腰を上げ、戻ってきた拳王様にそれを返すという、一連の流れで。

篡奪者然としていた彼が、拳王様の足元に跪くというシチュエーションは変わりませんが、どうして居城ではなくこの村なのでしょう。端的にはリアさんがいたからです。ここ、地元ヒヤツハーが女の子を目隠して追いかけて戯れて、あろうことかラオウに抱きついて張り手からの首ちよんぱされたあの村なのですが、原作と違いラオウがリアさんを連れていた事で、彼らがここにたどり着いたタイミング、実は原作より遅かったりします。その間にこのヒヤツハーの所業がリュウガの耳に届き、肅正に出向いたタイミングでの合流になりました。

「リュウガ…褒美はなにを望む」

…けど、ここでこの会話が為されたという事は、リュウガ様とトキ様が、この後命を落とされる事になるわけですね。

元々リュウガ様はラオウとケンシロウ、どちらが乱世を支える巨木となるか、見極めることを目的として、拳王様に仕えているわけで、物語では戦いを通じてケンシロウにその可能性を見出し、未来を彼に託

してトキと共に天に還るというストーリーでした。

……正直、そこに至るまでの展開、ケンシロウの怒りを引き出す為に行なった殺戮とか、必要だったのかなと思わなくもなかったわけですが。

ええ、何しろ漫画としてこの物語を読んでいた時のわたくしは高校生男子。

細かな洞察など思い至るわけもございませんでしたもの。

それはさておきこの先に待つ悲劇、わかっているけど、わたくしには止める事などできません。

拳王様のこの問いに、リュウガ様は迷わず、ケンシロウとの戦いを

…

「許されるのであれば…リア殿をこのわたしに」

願い出る筈ですが今なんつったこの兄ちゃん？

「…それで、わたくしはリユウガ様に下賜されるということでしょうか」

「おれはうぬを手放さぬと、何度言えはわかる。」

奴がああ言ったのは恐らく、別の要求を通すための駆け引きといったところであろう。

だが、その目的がわからぬ。

…その狼の目でなにを見ておる？」

一旦は居城に戻らせたリユウガ様の騎馬の背を眺めながら、拳王様が誰にもなく眩きます。

それはわたくしも思うことですが。

だって、拳王様の近くに居ないとわたくしが危険だと判断して、わたくしを『拐った』態ていで居城から連れ出し、拳王様のもとに連れてきて下さったのは、他ならぬこのリユウガ様なのですから。

☆☆☆

「まだ手向かうやつあいるか？」

「いっいっいえいえ、どうぞで!!」

「おりこうだ!!」

へっへへ、もちきれねえぜ!

おい、残りは後についてこい」

突然現れた1人の男が、村から女性たちを拐ってきた野盗の、リーダーの巨漢を奇妙な技で倒したあと、戸惑って立ち尽くす女性のうち3人ほどを、まとめて軽々と抱えてスタスタ歩きながら、残りの女性たちに声をかけるのに、わたくしも半ば惰性で従います。

後ろで生き残りの野盗たちが『とんでもねえ悪党だあいつ』とか言って半泣きになってますが、別に同情はいたしません。

つかこの場面、既視感があるというか、多分わたくし知っておりますわ。

というか、どうして今わたくしがこんな状況に混じっているかというと……

拳王様と共に居城に戻ったあと、再びわたくしの女官としての生活に戻って……きませんでした。

戻ってみれば女官部屋のわたくしのスペースからは私物や衣類が引き払われており、わたくしは移動させられていた荷物と共に一室に押し込められた上に、何故か護衛まで付けられたのです。

前回わたくしがリュウガ様に拐われた事についての事情は、全軍に周知が為されたのですが、その後リュウガ様がわたくしを所望した事で、今度は本当に拐われる可能性を考慮しての事なのだそうです。

いやいやいや！

最初にGORANに連れていかれそうになりバランと出会ったあの時と、前回のリュウガ様の篡奪劇の時と、わたくし既に2回も拐われておりますのよ。

いくら何でも人生で3度も拐われませんわよ！

………と、そんなふうを考えていた時期がわたくしにもありました。

「すまぬが、ラオウという男を見極めるに、今は貴女が邪魔なのだ。

後日必ず迎えを寄越すゆえ、待っていて欲しい」

そう言って拳王様が付けた護衛を一瞬でのして、今度こそ本当にわたくしを拉致したりリュウガ様は、拳王様療養月間の間に暴走ヒヤッハーを撲滅して平定した小さな村のひとつに、わたくしを預けて去りました。

………あの子、拳王様を呼び捨てにしやがりましたわね。

確かに彼は心の底から拳王様に従っていたわけではなかったのでしょうか。

てゆーか、わたくしは邪魔ってどういう事なのでしょう。

よくわからないまま預けられたその村で数日を過ごし、なぜかやたらと子供の多いその村で、子供たちの遊び相手や若いお母さんたちのお手伝いをする事にも慣れてきた頃、リュウガ様が戦いで命を落とす

たという噂が流れてきました。

つまりはトキ様も…と、あの日のちよつとはじけたトキ様の姿を思い出してしんみりしてしまいましたが、このことがこの村に与えた影響は、その程度では済まなかったのです。

多分リユウガ様の守りがなくなつて、警護の手薄になつた村が野盗の襲撃にあい、命が惜しければ若い女を差し出せという要求を仕方なく呑んで、村の若い母親たちとともに、わたくしも拐われたのです…ええ。

そうして先ほどのお話に戻るのですわ。

わたくしたちを今度は野盗から奪つた男の名は、ジユウザ。

南斗最後の将を守護する五車星の『雲』の宿命を持つ男で、この世界のヒロインであるユリアの、腹違いの兄でもある。

つまり、先日亡くなられたりユウガ様とも兄弟であるわけですけど、この方の登場がリユウガ様が亡くなられた後だったこともあり、その辺の絡みは原作には出てこなかった筈です。

…

「全員、子持ちだとおくく!?!」

「はい、ですからどうしても村に…お願いです、村に帰してください」
連れてこられた廃村の一番大きな家の中で、女性たちが一番最初にした事は、ジユウザ様に夫や子供たちのいる村に帰してほしいと懇願する事でした。

どうやらここまでのそう長くもない道行きで、ジユウザ様は少なくとも先ほどの野盗たちに比べたら、遥かに話がわかると判断されたのでしょうか。

なにしろ彼女たちの子は小さく、まだまだ手がかかるのですから。

母は強し、ですわね。

…ふと、母から聞いただけの、妹の母親というひとの話を思い出します。

愛してもいないわたくしの父の子を生まされたその女性は、生んだばかりの妹を躊躇いなくわたくしの母に託して、父の手の届かない自身の故郷へと帰つたといえます。

前世では少年、今世でも子を産んだ事のないわたくしに、母親の気持ちはわかりません。

けれど、曲がりなりにも自分が産んだ子を手放す事に、本当に躊躇はなかったのか。

それとも望まぬ関係を結ばされた憎い男の子供など、そもそも愛する事はできなかったのか。

いま目の前の彼女たちの必死な姿に、なんとはなしにそんな事を思っていましたら、ふと我に返ったあたりでジユウザ様は、あんどりと口を開けて、しばらくそのまま固まっております。

が、やがて硬直が解けたように深く息をつくど、とてもわかりやすく脱力なさいましたわ。

「は——……いい、もいい、行け。」

それ持って、どこへでも勝手に行きやがれ!!」

ジユウザ様はそう言うと、取り囲んでいた若いお母さんそれぞれの手に、先ほどの野盗から奪ってきた食料を持たせます。

お母さん達は戸惑ったように顔を見合わせ、やがて口々に「ありがとうございます」と頭を下げて、出口に向かおうとしますが、わたくしはそれを制しました。

ジユウザ様は先ほど座っていた椅子に再び腰掛けて「何やってんだおれ：」とか小さく呟いて項垂れておりましたが、わたくしが歩み寄るとその足音に気がついて、めんどくさそうに顔を上げました。

「まだグズグズしてんのか、さっさと」

「そういうことではありませんわ!」

「はあ?」

何を言われているのかわからないとばかりにわたくしを睨みつけたジユウザ様ですが、この程度の眼力など、わたくし怖くもなんともございません。

案の定、全く怯まずに睨み返してきたわたくしに、ジユウザ様の瞳が一瞬揺れたのを確認して、わたくしは息をひとつ吸って、大切なことを告げました。

「ここからわたくし達全員に、歩いて村まで帰れと仰いますの?」

このご時世、女たちだけで固まって移動しては、結局先ほどのようなならず者たちに、あっさり捕まってしまうすわ。

移動手段と、できれば護衛。

彼女たちが訴える『村に帰して』というのは、そういう事も含めての訴えですよ！」

「待てコラ。なんでオレがそこまで…食料だって恵んでやったろうが！」

「元はといえばこれだって彼女たちの村から、野盗たちが奪ってきたものです！」

彼女たちに返すのはむしろ道理ですわ!!

あなた様とて、先ほどまでわたくし共を囲う気満々でしたでしょう！

手放すならアフターフォローくらいきちんとしていただかなくては困ります！

それが男の甲斐性というものでしてよ!!」

ふんす、と鼻息荒く言い放つてやると、ジユウザ様は何やら驚いたように目を瞠いて、しばらくわたくしを見つめていらつしやいました。

それから息をひとつ吐いて椅子から立ち上がると、何故かわたくしの髪をひとふき、指ですくい上げながら問いかけてきます。

「どうも他の女どもとは雰囲気が違うと思ったら、村の女じゃねえって事か。」

「テメエ…名前は？」

「…リアと申します。」

とある方に、しばらく待つようにと村に預けられておりましたところ、彼女たちと共に略奪に遭いました」

「リア？」

「…ふうん、中途半端な名前だな」

「余計なお世話ですわよー」

それ多分アタマのどこちよつと足りないってことですよわよね！

この方は腹違いの妹であるユリアをそれと知らずに愛してしまい、

苦しんだ末に今の無頼の道に走った経緯を持つ方ですから。

けど、それとわたくしの名前は関係ございませんわよ！

あと勝手にひとの髪の毛くるくるするのやめてもらっていいですか!!

「そんな事よりも、彼女たちを村まで送っていただけますの!?! いただけませんの!?!」

好きでもない男にこのように触れられる事が我慢ならず、弄ばれていた髪の毛の先を奪い返しながらそう言い放つと、

「ギャンギャンうるせえ！

よりもよって、その声でおれに説教すんな!!」

バンツ!!

耳元で何か打った音と、背中に若干の衝撃を感じたと同時に、気づけばわたくしは壁に背をつけた状態で、ジユウザ様の両手に囲い込まれておりました。

…所謂、壁ドンという体勢ですわね。

わたくしとジユウザ様のやりとりを、ハラハラしながら見ていた村の女性たちから、息を呑むような小さな悲鳴が上がりました。

「リア…っていったな。

女だてらにいい度胸だ。

ひよっとしたら、おれに殺されるかも知れねえってのによ」

先ほどよりも近い距離からわたくしを見下ろし、ジユウザ様は悪そうな微笑みを浮かべます。

「か弱い女相手にそのような所業に出るほど、下衆な方ではないとお見受けしましたが、わたくしの見込み違いでしたかしら」

その笑みを見上げながら、精一杯の虚勢を張るわたくしは、『あー雲のジユウザ、近くで見ると色気凄く』と、若干現実逃避気味な事を考えておりました。

…少なくとも、わたくしがまったく怯んでいないことだけは理解したのでしよう。

ジユウザ様は諦めたように壁から手を離すと軽く肩をすくめて、大袈裟に息をつきました。

「どこまでも口の減らん女だ。…いいぜ。

この女たちはおれが村まで送っていつてやる。

だが、リア。テメエは残れ。それが条件だ」

「はい？」

何やら不穏な言葉が聞こえ、反射的に問い返すと、そのわたくしの顎を、無骨な手が掴みます。

危うく舌を噛むところでした。

ちよつとだけ恨みがましい視線を向けると、どうも何かのスイッチが入ったらしいジユウザ様が、ほぼ息がかかるほどの距離に顔を近づけてきました。

「このおれにあんなクチきいて、ただで助けてやると思ってたやがったのかよ？」

リア、テメエは今からおれの女だ。

声だけは好みだがそれ以外、この生意気な口もその目つきも何もかも、全部おれ好みに躡けてや…」

「そのような真似は、この私がさせぬ」

と、その瞬間、やけに聞き覚えのある声が、その場の空気の色を、一瞬にして塗り替えます。

そちらに顔を向けようにも顎を掴まれたままのわたくしの代わりに、その声に反応してそちらに顔を向けたジユウザ様が、息を呑んだように、そのひとの名を呼びました。

「……………リュウガ？」

テメエ、なんでここに…？」

は……………リュウガ様？

亡くなられたのではなかったんですの!?

「久しぶりだな、ジユウザ」

ツカツカと聞こえてくるブーツの足音が近づいて、わたくしの顎を掴むジユウザ様の手が引き剥がされます。

わたくしの顔が自由になると同時に、わたくしとジユウザ様との間に踏み込んで体を割り込ませたその方は、次の瞬間わたくしの前に、片膝をついて首を垂れました。

「リア殿、約束通り、お迎えに参上 仕 った。

これより先、貴女に一切の身の危険がない事、改めてこの身にかけて誓う」

そう言つてわたくしの手を取り、騎士の誓いよろしく指先を額に押し当てたその姿は、なんとというか、実に様になっていらつしやいます。

出入り口に固まってこちらを見守ってらした女性たちから、感極まった溜息が漏れました。

ううむ、イケメン無双というやつかしら。

と、その後ろから兵士が数人現れて何やら声をかけると、女性たちは笑顔になって、彼らについて外に出て行きましたが……んん？

「心配無用。

村で状況を確認した後、車を数台用意させてこちらに向かわせたので、御婦人方にはそれに乗って村まで帰っていただく手筈になっている。

私の部下たちが護衛として同行するゆえ、御安心召されよ」

「良かった……ありがとうございます、リュウガ様」

先ほどまでずっと心配していた状況が一瞬にして改善されて、わたくしは目の前の人に頭を下げます。

「なんの。単に、約束を守っただけの話。

むしろこのような事態となったのは私の責だ。

…戦死の報は、思惑あつて故意にそう流したものであつたが、よもやそれが貴女の身を、危険に晒すことになるとは。

私の読みが甘かつた為に、貴女に怖い思いをさせてしまい、誠に申

し訳ない」

そう言うと彼：リュウガ様は、跪いていたその場から、足取りも確かに立ち上がりました。

…どうやら幽霊ではなさそうですわ。

「…待て待て待て！」

テメエ、半分とはいえ血の繋がった、数年ぶりに顔合わせた弟に対する挨拶を、久しぶりだなの一言でサラッと流すんじゃねえよ！」

と、ここで先ほどまで確かにこの場の主役だった筈の、今は空気にされてしまったジユウザ様が、わたくし達の会話に割り込む形でツツコミを入れて来られました。

それに対し、リュウガ様は氷点下のまなざしで彼を睨むと、憎々しげに言葉を返します。

「…貴様がこの方に、先ほど以上の無体を働いていたならば、もはや二度と兄弟などとは呼ばせぬところであつたわ。

むしろこの兄自らの手で引導を渡し、その首と共にこの方をラオウのもとに返す以外、奴の怒りを鎮めることはかなうまい。

さすれば、我が将が目指す平和への道が、今よりさらに遠のく事となろう。

それでは困るのだ」

……ん？

リュウガ様がまた拳王様を呼び捨てにした事も気になりますが、それよりももっと気になることが。

「将…？いつまでラオウの奴の下にいる気なんだと思つてたが、テメエ、ひよつとして鞍替えしたか？」

と、わたくしの気になっていた一言に、代わりにジユウザ様が食いついてくださいました。

「誰の配下にもならねえのが、天狼の宿命つてやつじやなかったのかよ。」

狼が聞いて呆れるぜ。

すっかり飼い犬に成り下がりがつて」

「なんとでも言う方がいい。」

貴様こそ、いつまでそうして無頼を気取っているつもりだ」

「……おれの勝手だろ」

「そうはいかぬ。」

五車の星はそれぞれ動き出している。

ならば『雲』もまた動くべきであろう。

……まあ、今はまだ良い。

まずはこの方を、在るべき場所へと返さねばならぬ」

言いたいことは言ったとばかりに、リュウガ様はこちらに向き直ります。

エスコートのように手を差し伸べる彼に、わたくしはふと、気になった事を問いかけました。

「リュウガ様。お怪我などはございませんの？」

……先ほど、戦死の報は故意に流されたと仰ってましたが、その噂がまことしやかに伝わる程度には、危険な状況だったのではありませんか？」

確かリュウガは、ケンシロウと戦う為に、彼の怒りを引き出すべく、一般の村人たちの大量虐殺を行なった上で、トキに瀕死の重傷を負わせましたが、それらを行なう前に陰腹を割っていた筈なのです。

……今のリュウガ様は返り血も浴びてはおらず……まあ服は着替えればいいとしても、先ほどの立ち上がる様子から見ても、陰腹を割っている感じではなさそうでした。

それは良かったと思うと同時に、なぜそうなったかという疑問も生じます。

明らかに、物語からは離れた展開ですもの。

リュウガ様はわたくしの問いに、少しばかりの自嘲を含ませた笑みを浮かべて答えてくださいました。

「……そのままでは取り返しの付かぬ選択をしていたところを、あるお方に助けられた。

身も、そしていつしか凍てついていた心までも。

ラオウの寵姫である貴女にそのお方の名は言えぬが、今の私の命はその方に捧げている。

ゆえにラオウから離れることを決意したが、その為には私は死んだことにするのが、一番血を流さずに済む方法だった。

そのせいで貴女には迷惑をかけてしまったが…」

あ、お話が最初の地点に戻ってきてしまいましたわね。

ともあれ、状況は少しだけわかったような気がいたします。

先ほど『将』という単語を出されたことからして、リユウガ様が新たに与する事となったのは、南斗軍なのでしょう。

何故かはわかりませんが、この時空においての南斗の将は、恐らく『天狼』が動く前に、何らかの形で彼と接触したのだと思われます。

『南斗の将』であるユリアは、彼にとっては実の妹。

彼女が生きていると明かし説得すれば、或いは兄の、そして『天狼』の心も、動かすことができたのかもしれない。

実際、原作の『雲』はそれで動きましたし。

「…なあ、おれの耳が変になったか？」

今、そいつがラオウの女って聞こえた気がするんだが？」

「何をもつて変とするかの貴様の基準は知らぬが、そう聞こえたならその通りだ。」

リア殿はあのラオウが、我が妹以外に唯一、心を傾けた稀なる女性」

「…冗談だろ？ アイツがユリアにゾッコンだった事なんて、あの当時

近くにいたやつなら全員知ってることじゃねえか。

それこそ、奇跡でも起きねえ限り…」

「その奇跡が起きたのだ。」

確かにうちの妹からこちらへと考えると、実に不可解なことではあるろうが」

「さりげに失礼ですわよね！」

わたくしが考えに浸っている間に、なにやら勝手な事をほざいていた兄弟に、思わず声を荒げます。

ヒロインであるユリアに、わたくし如き逆立ちしたって敵わない事くらい知っておりますわよ！

けど本人の前でそれ言います!?

「…さすがに、おれはそこまで言っておえぞ。」

確かにタイプは全然違うが、この気の強さは言われてみれば、あのヤローにはむしろ似合いかもしれないねえ。

今のアイツの立場で、死んだ女をいつまでもグジグジ思ってる訳にもいかんだろうしな」

わたくしが不機嫌になったのを見て、ちよつと気まずそうにジユウザ様がフオロー入れてきますが：それを聞いてちよつとだけ、勝手に落胆するわたくしがおりました。

拳王様は、ユリア様をお忘れになったわけではありませんもの。

というか、それはあなた様だって同じですわよね？

：…というか、先ほど『ユリア』の名を出した時のジユウザ様の言い方、それほど苦しいニュアンスを含んでいなかった気がするのですが、わたくしが見落としただけなのでしょうか？

「……けど……は——。」

よく見りやそこいらじゃ見ねえいい女が、うまいこと手に入ったと思っただけがなあ」

けど、なんだかチラチラわたくしを見て、ちよつと残念そうにするジユウザ様が意外で、ついツツコミを入れてしまいます。

「あなた様が気に入ったのはわたくしの声だけだと、先ほどおうかがいしましたが？」

「あ？」

：…ああ、それな。細かいこと気にすんな。

ちよつと……その、似てんだよ」

と、わたくしが入れたツツコミに対し、ジユウザ様は思いのほか動揺されたようでした。

なんだか視線が揺れていますし、答える言葉もどこか頼りなげです。

：…わたくしと声の似ている方が、ジユウザ様の知り合いにいらっしやるという事でしょうか。

……ユリアではないと思います。

多分ですけど、なんとなく。

「……………どなたに？」

「それは……いいだろそんな事あどうだつて！」

おいリュウガ！さつきと連れてけ!!

コイツがラオウの女つてんなら、これ以上ここに置いとけば、おれがラオウに殺されるじゃねえかよ！」

…どうやらこの話題はジュウザ様の地雷のようですわね。

誤魔化すように声を荒げ、殊更にわたくしから顔を背けるその背中に、一応はフォローの声をかけます。

「その点はご安心ください。」

拳王様は話のわからぬ方ではございませんので。

わたくしは拐われた先から救い出され、あなた様に保護されたのですもの。

そうですわね、リュウガ様？」

ここで話をリュウガ様の方に振ったのは、先ほどジュウザ様が動揺を見せたあたりで、なんとなく話に加わりたそうなそぶりを見せていたからでした。

わたくしから水を向けられたリュウガ様は、心得たとばかりに頷くと、ジュウザ様に歩み寄り、その肩に手をかけました。

「うむ。ではリア殿を保護してくれた事には私から礼を言おう。」

世話になった、ジュウザ」

「礼なんざ要らねえよ、クソ兄……!?!」

……ジュウザ様の言葉が途中で止まったのは、一瞬にして繰り出されたリュウガ様の当身が、綺麗に決まったからでした。

なにが起きたかわからぬまま意識を刈り取られたジュウザ様の身体を、リュウガ様の一見細く見える腕が支えます。

驚いて思わず『ヒュツ』みたいな、息というか声が出してしまったわたくしに、リュウガ様が振り返って薄く笑いました。

「よいタイミングを与えてくれて感謝する、リア殿。」

……悪いな、ジュウザ。

おまえを連れて戻ることも含め、全て我が将の指示なのだ。

『あの方』は、まるで未来が見えているかの如く動く。

おまえも……『あの方』にお会いすれば、必ずその心は動くであろう

う。

その時こそ、我ら兄弟が共に戦う時。

決して来ないと思っていた未来が、すぐそこに見える。

これも……悪くはないものだぞ。弟よ」

崩れ落ちたジユウガ様を抱えながらの、先ほどまでは欠片も見せなかつたリユウガ様の優しい表情に、『身内との縁が薄い』この世界の法則が少しずつ崩れているような、そんな不思議な感覚を、わたくしは覚えていたのです。

☆☆☆

結局のところ。

『ラオウ』と『ケンシロウ』。

どちらの北斗が巨木に相応しいのか決めかねていたりユウガ様は、当初はケンシロウに戦いを挑むことを考えていたそうです。

つまりは、原作通りの展開ですわね。

その計画を練りつつ、暴走ヒヤツパー狩りを行っていた時に、リユウガ様曰くの『あるお方』が接触してきたそうで。

それまでは己が命を、如何に役立てる方向に捨てるかに向けられていた意識を、180度転換させられるほどの何かを、その出会いによって叩き込まれたというリユウガ様は、『死ぬ覚悟をしていた私に、この身を擲なげつよりずっと、厳しいが実りのある道を、私に示してください』と、わたくしを送る道中で、熱っぽく語ってくださいました。

わたくしを拐さらつたのは『時間稼ぎ』と仰っていましたが、何に對してのものとは教えていただけませんでしたわ。

「今の私は死んだことになっている故、ここから先は部下に送らせよう。」

彼はあの村の村人に扮して貴女を送り届けるから、出来れば貴女を保護していたその褒美として、私が平定した時と同様の庇護をあの村に与えるよう、貴女から拳王に働きかけて欲しい」

そう仰って途中で別れたリユウガ様が仰った通り、わたくしは居城に帰され、言われた通り数日滞在した村への庇護もお願いして、よう

やくいつも通りの日々が戻ってまいりました。が…

故意なのか、それともうっかりなのかは存じ上げませんが。

別れる時リユウガ様はわたくしに、彼が生きている事に対しての口止めはされませんでしたの。

わたくしは拳王様の女官ですので、拳王様に問われれば、差し支えないことは答えるしかないので。

「おれのもとから離れることこそ、やつの真の目的であつたというところか。」

彼奴め、おれがうぬを手放さぬと踏んだ上で、賭けに出おつたな。

天狼がこの拳王より選んだ南斗六星最後の将、どうしても会いたくなつたわ!!」

色々と脇道には逸れたようですが、結局は本筋通りに物語は進むようです。

…尚、わたくしが居城から離れている間、拳王軍と五車星の軍が何度か交戦していたらしいのですが、いずれも死者が出ない、けど精神的な何かはゴリゴリ削られるような戦いが繰り広げられていたそうです。

その場面を見てはいないはずなのに、なぜか妙な既視感を覚えるのは、わたくしの気のせいでしょうか。

「…いいぜ。この『五車星』雲のジユウザ。

この命、おめえにくれてやる！」

「命は要りません!!」

…私の為に、生きてほしいのです」

五車の星は風・雲・炎・山・海。

彼らは南斗の将に仕え、その星の輝きの為に天を舞い、地を駆けるという。

その五車星が本格的に動き出して、KINGを吸収しUD軍を傘下に加えた南斗軍の活動が、更に活発になってきており、拳王軍としてもそろそろ無視できないほどに、彼らの勢力が大きくなっています。

…何が起きているのか、正直わたくしにはわかりません。

ですがここ数日、何度か拳王軍と交戦している、主に風と炎の旅団は、ほぼ小競り合いくらいの衝突で共に人的被害はほぼないものの、むしろ戦いが終わったあとに、主にこちらに結構な精神的ダメージを残して去っていくという、明らかに物語にはない戦い方をしておりました。

「おのれ…ただでさえの『風』評被害を、更に『炎』上させおつて」

…ということとは、あの例の『宿命の戦い』の際に、トキ様に言われたような内容のことが、今は不特定多数に晒されているという事ですね。

「それにしてもトキのやつめ、どうせあの世に逝くなら、兄の黒歴史など秘したまま、共に持って逝けば良いものを、今生の最後によりにもよって、南斗軍などに暴露しおるとは!!」

あー…ええと、それ多分、前後の事情が違うと思いますわ。

どうしてそんな事になっているのかは判りかねますが、例の、トキ様に入れ知恵をしたという『知り合い』という人物、恐らくこの状況を作り出した黒幕？と同一人物であろうこと、ここにきてわたくし、確信しております。

そしてトキ様が、その方のアドバイスを受けられていたという時点で、彼が南斗軍と協力関係にあり、またそうなると共に来ていたケンシロウやバランも、そうであると考えの方が自然ですもの。

故に、原作とは違い既に、ケンシロウと南斗の将も、コンタクトをとっていると考えるべきですわ。

…というか、ええ。

今現在、南斗軍を指揮しているのは、絶対に南斗の将『ユリア様』ではありませんわね。

あの聖女のようなヒロインが、こんなえげつない戦い方を指揮するはずがございませんもの。

或いはやはり『黒幕』にアドバイスを受けているのか。

誰なのかはわかりませんが、とんだ原作クラッシュャー自分もそうだという自覚は、残念ながらリアさんには欠片もありません。ですわね！

許すまじですわ!!

☆☆☆

そんなある日のこと。

「黒王様が……奪われたのですか？」
「はい。」

今回初めて対峙した五車星『雲』のジュウザに。

同時に『山』の部隊の策により他の馬も、騎手を振り落とす形で逃がされ、車も大部分潰された次第。

幸い1台助かっておりましたので、拳王様におかれましては一度居城に戻ることを申し出たのですが、『己が体を預けるのは黒王号のみ』と仰り、あの場を動かれませぬ。

故に、我らがひと足先に居城へ戻り、伝令を。

リア殿。どうか拳王様の元へ、我らと共にご同行いただきたく
「はっ。」

思わず素で聞き返してしまいました。

確か黒王がジュウザに奪われるという展開は、原作にあったことか
と思いません。

確かにあの方は原作通りでも充分に、拳王様を煽っていたと思えますし。けど。

「…あの。わたくしが参りましたところで、事態が変わると思われませんか？」

「いいえ。リア殿が迎えに来られたとあらば、拳王様とて帰らぬとは言えぬ筈。

我らを助けると思って、どうか！」

…要するに、コレってアレですわよね。

この状況、部下たちに『ママが迎えに来なきや帰らない』的なやつと同じようなものととらえられてますわよ拳王様!!

違いますのよ皆様！

これは拳王様の、黒王に対する信頼というか、たとえ敵の手にあつても必ず戻ってくるとの、信頼を示したシーンなのです！

決して我儘を言ってるわけではありませんのよ!!

というかまあ、拳王様がお帰りにならないければ、共に付き従う兵士の方々も居城に戻れず、今宵は野営するしかなく。

此度は遠征をするつもりはなく、その為の準備などもほぼなかった筈ですので、あの図体の拳王様はともかく、他の方々には少々お辛いのでしようね。わかりました。

「…承知いたしました。

恐らくは御期待に添えぬと思いますが、拳王様の女官としてできるだけのことはさせていただきます。

わたくしを拳王様のお側に送り届けてくださいませ」

…どちらにしろ他の方々の移動手段が奪われた以上、代わりの車や馬を連れていかねばならないでしょう。

野営の為の幾ばくかの物資もそれに積んでいけば、拳王様がどう判断したとしても、現状よりはマシな筈ですわ。

・
・

「…ジュウザの事は昔から知っておるが、今更奴が南斗の為に動くとは思わなかった」

結局。

黒王がジユウザ様を連れて戻られると踏んだ拳王様は、居城に戻る提案を受け入れてはくありませんでした。

むしろわたくしがお側につくことで、野営にても不自由がなくなつたと、わたくしを連れて戻った兵士の方が褒められておりまして、なんとも複雑な表情をしておられましたわ。

簡単な食事を済ませ、いつかのような大きなテントの中で、わたくしと2人きりになると、拳王様は少し懐かしげにぼつぼつと、昔語りを始めました。

ジユウザ様と拳王様。

少年期のおふたりは、特に相性が良かったわけではないものの、漠然と友としての感情は抱いていたようで、大人になって敵味方に分かれた今、さすがの拳王様もどこか複雑な思いがあるようですわ。

「あの男にはかつて、妹とも思い世話をした女がいた」

はい、存じております…とも言えず、わたくしはいつもとは逆に、拳王様のお膝に座らされた状態で、黙ってお話を聞いております…これが固くてメツチャ座りにくいのですけどね!!

「その女とは結局、実の妹を引き取る為に引き離されたが、女は南斗の巫女の1人として、美しくも賢しく成長し…奴はいつしか、その女に惹かれた」

……ん？なんか、わたくしの知っているお話と違いますわね？というか…

「だが、奴は成長したその女にとっては兄ですらなく、女は奴の後に出会い共に成長した、幼馴染の男に心惹かれた。

それでも女の成長を見守り続けた奴は、女が見つめ続けるのが誰であるか、否応なく思い知らされる事となった。

そして、女の想う男が、奴の妹を連れて逃げた時、女はあろうことか、それでもその男のもとに走ったのだ。

絶望した奴は、それ以来無頼に走り…五車としての拳もその魂も腐り果てた…筈だった。

あの男が心と拳を蘇らせたのであれば、おれも騎馬では勝てぬと踏んで、黒王の背から降りたのだが…」

やっぱり！

登場人物、明らかにひとり多いですわ!!

そういえばこの前、ジユウザ様の口から『ユリア』の名が出た時、苦しい恋心を抱いた女性の名を口にしたにしては、辛そうな感じではなかったと思っていたんでした。

むしろ、わたくしと声が似ているというひとのことを訊ねた時の方が…とそこまで考えてハッとしましたわ。

なるほど。その方がジユウザ様の、真の想い人という事でしたのね。

…と、わたくしがほんの少しの間、考えに沈んでおりますと、気がつけば拳王様がわたくしの頭の上で、なにやらブツブツとひとりごち始めました。

「……待てよ。南斗軍は元々、K I N Gを吸収して台頭したと聞いたが……もしやして、事実は逆か？あの女が……まさか。

だがジユウザの魂を蘇らせることのできる者など、この世にただひとり…なるほど。

あの日、殊更に無害な形なりをして、惚れた男と静かに暮らすなどと言っておきながら。

この拳王を謀たばかったばかりか、我が覇道の前に立ちはだかるとはな。あの時、ただの無力な女と思つて見逃さず、せめて奪い取つておけば、このような事にはなつておらなんだということか。

フ：龍を蛟と見誤つたこの表現はラオウ編3話にも出てきます。念の為。は、どうやらこのおれの方であつたようだ」

…あの、いつもとは違う意味でちよつと恐いですわ。拳王様。そうして。

結局一昼夜、その場で足止めを食らつたあと。

遙か遠くから響く蹄の音に、その場の全員が、身体に緊張を疾らせます。

「命を捨てに戻つたか、ジユウ……!」

主人あるじのもとに駆け戻ってきた黒王の、その背から飛び降りたその男に、かけた拳王様の言葉が途中で止まったのは、呼びかけるその名が

違う事に、直前で気がついたからでしょう。

「ケンシロウ……何故、うぬがここに」

「ラオウよ。」

暴凶星は今日ここに燃え尽きる。

天に帰る時がきたのだ!!」

ビシツと肘を曲げ、天を指差しながら拳王様を見据えるケンシロウは、かつて本で見た通りの冷徹な暗殺者の顔でしたが……いや待って！なにこの展開!?

「あああ!!りやあ!!」

「あたあ!」

「ぐはあ!!」

「ほああ!」

「ぬおおおっ!!」

拳王様とケンシロウの戦いは、実に真つ当な感じに行われました。

……正直、ケンシロウまであの感じだったらどうしようかと思っておりますので、わたくし場違いにも安心いたしましたわ。

まあ、以前お話しした時のケンシロウは常識的……という概念はこの世界にはほほほ無いでしょうが、よくいえば生真面目、悪くいえばアドリブかなそうな印象を受けました。

彼はあの手の事は苦手なのかもしれませんわね。

その辺は、一見真逆のタイプである拳王様と似ていらっしやいます。

ほんとうの兄弟ではないはずなのに、兄弟として育つと似るところも出てくるのでしょうか。

ちなみにわたくしの弟は、子供の頃は双子かっつてくらいわたくしとよく似ておりましたが、ある程度大きくなってからは『あ、言われてみれば確かに』程度しか似たところがなくなりました。

バランの時ほどの急成長ではなくとも（あの子はずつと栄養不足だったのが、ちょうど成長期に差し掛かったタイミングで、急に栄養状態が良くなったせいだと思いますが）、やはり男の子は大きくなる可愛くなくなるし、そもそも可愛いという言葉に喜ばなくなりませんから。

ちなみに子供の頃の弟は割とイタズラ好きで、わたくしがいつもそれを嗜める立場だったのですが、大きくなってからは可愛い、綺麗と言われ続けて調子こきまくっていたわたくしを、何度となく弟が嗜めるという感じに立場が逆転しておりました。

今思い出すと黒歴史ですわね。

本当にお恥ずかしい限りですわ。

…と、そんな現実逃避的なことを考えておりましたらば、数人の兵士の方々が大きな盾のようなものを手にして、わたくしのそばに駆け寄ってらっしゃいます。

「リア殿、ここは危険です！」

どうぞ、我らの後ろに避難を!!」

…ああ確かに、やつらお互いの拳でいちいち吹っ飛び、その度に身体が激突した岩壁の方が砕けて、その破片が離れて見ているわたくしの方まで降つてきますものね。

ちよつと大きいものもありますので、確かに避難した方が良さそうです。

「うぬがどれほど強大になろうとも、このラオウを倒すことはできぬ！」

そう言つて繰り出す脚も拳も、対峙していないわたくしにすらとてつもなく大きく見えるほど、拳王様の闘気が高まつてらっしゃいます。

ですがケンシロウはそれらを腕一本でいなすと、一度間合いを離して構えをとりました。

そうしてから、一般の人類としては充分に長い脚で、拳王様に向けて蹴りを放ちます。

「甘いわーどああ!!」

拳王様はその脚を片手で受け止めてそれを払い、バランスを崩して地面に倒れ込んだケンシロウの、顔面に向けて巖のような拳を落としました。

次の瞬間。

拳王様の拳が、今この瞬間まで、確かにケンシロウが倒れていた地面を砕きます。

拳王様がその拳を引き抜いた時には、まるでその肉体ごとすり抜けたかのように、本来ならば砕けているはずのケンシロウの肉体が、全くの無傷のまま、拳王様の背後に立っていたのです。

「でえい!!」

背後を取られ動揺しつつも、拳王様も止まらずに、裏拳でケンシロウに攻撃をしますが、ケンシロウはまたも滑るよう移動して、なんならその激しい闘気ごと受け流してしまわれました。

「……この動きは……トキ!!?」

激流を制するは静水。

それを体現するが如く、本来なら全てを押し流す奔流のような拳王様の闘気が、ケンシロウの身体をすり抜けていくのです。

北斗神拳の奥義には、戦った相手の技をコピーできるといふものがあつた筈です。

恐らく今はタイミング的に、既に亡くなつていらつしやるであろうトキ様と、手合わせなどして伝授されたのか……。

「ぬく!!お、おのれ……」

ですが、全てを打ち砕く剛の拳を誇る拳王様にしてみれば、威力をこのようにして受け流される事は、その誇りを傷つけられる事に他ならないのでしよう。

それも、己を凌駕するかもしれない素質を持つと認めていた実弟ではなく、侮っていた末弟に。

「北斗剛掌波!!」

それでも拳王様は、動揺しながらも次の一手を繰り出してしました。

それは直撃すれば、その闘気のみで文字通りその身を砕く筈の拳。かつてバランと出会ったあの略奪劇、それを内部から手引きしていた大男を、物言わぬ塵と化したあの技ですもの。

ですが、そこから転じて動いたケンシロウは、拳王様に向かって無造作に歩き出したかと思うとその左脇をすり抜け、次の瞬間、拳王様の左脇腹から血が飛沫しぶきました。

「おほう!!……これは!南斗水鳥拳!!」

この脇腹のダメージはさすがの拳王様にも大きかったものか、その傷を押さええて膝をつきます。

「既にやつの肉体は二度砕けているはず……」

そうして、まるで今の状況が信じられないとでも言うようにケンシ

ロウを見つめてから、何かに気がついたように目を睜きました。

「無より転じて生を拾う、究極奥義・無想転生…哀しみを知る者のみ
がなし得るといふ…うぬが哀しみを背負い、北斗千八百年の中で、
最強の男になったというのか。」

だが万人が認めても、このラオウだけは認めん！」

言つて拳王様は、その目だけで30人は殺せそうな睨みを効かせ
て、ケンシロウを見据えながら立ち上がります。

…どうでもいいですが先ほどからずっと、この場で拳王様しか喋つ
てませんわね。

と、その時、立ち上がり次の攻撃の構えをとった筈の拳王様が、次
の一步を踏み出せずにその場に固まりました。

…よく見れば、その膝が小刻みに震えています。

「それが恐怖というものだ、ラオウ！」

あ、ここにきてやっとケンシロウが喋りましたわ。

「認めぬ!!おれは北斗の長兄！」

おれに後退はない!!あるのは前進勝利のみ!

無想転生など微に碎いてやるわ！」

「おれにも後退はない！」

ラオウ、今こそ野望果てる時だ!!」

そうして、互いの身体から噴き出す闘気が、今にもぶつかり合うと
いうその瞬間……

「ケ——ン!!!」

…それはまるで、天上の調べのように美しく響く声でした。

その場の全員が反射的に、その方向を振り返ると。

風に靡く、艶やかな長い黒髪。

透き通るような白い肌。

咲きたての薔薇のように赤い唇。

すらりと伸びた長い手足と、完璧なバランスの曲線を描く嫵やかな
肢体。

居城に集められた美人揃いの女官達の中にすら、これほど美しいとはいないであろう、女神のような女性が、涙を溜めて立っているではありませんか。

「な…何故来たんだ、ユリア…！」

思わずといった感じで呟いたケンシロウの言葉で、わたくしはその方の正体を知りました。

いえ、そうかもしれないと薄々は感じておりましたが、あまりにも眩しく神々しくて直視できず、確信が持てなかったのです。

いや…さすがはこの世界のヒロイン。

こんなん、もはや人外の美しさやん。

などとわたくしは呆けておりましたが…

「ふ…ふははー！そうか、あの女！」

よくぞこの拳王を謀ったものと思っていたが、あの時の涙どころか、言葉全てが嘘八百だったか!!

ユリアを死んだ事にして、己が身代わりになる事で隠していたとは、さすがのおれも思いもよらなんだわ!

更に、南斗軍を率いてこの拳王に楯突いておるであろうあの女が、そこまですて必死に守ろうとしているユリア!

うぬこそが、本物の将まじとというわけだ!!

天はやはり、このラオウを望んでいるのだ——!!!

…よくわからない台詞を叫んで、歓喜の表情でユリアに突進していく拳王様を、誰も止める事はできませんでした。

なんとなれば先ほど戻ってきた黒王が、すぐさま拳王様のもとに駆け寄っていつて、拳王様は捕らえたユリア様を抱えたまま、軽々とその背に飛び乗ると、居城に真つ直ぐ駆けて行ってしまわれたのです。

わたくしを含め、その場に残された誰もが、その後ろ姿を呆然と見送るしかできませんでした。

☆☆☆

あの後。

我に返った兵士の皆さんに連れられ、居城に戻ったわたくしが、駆け寄ってきたザク様に告げられたのは、拳王様がお倒れになったとい

う報告でした。

正確には居城にたどり着いた途端に、倒れるようにお休みになってしまわれたとの事です。

ケンシロウとの戦いで手傷を負っておりましたし、ユリア様連れ去った時は、はたから見てもテンション上がりすぎてましたから、後からドツと来たのでしょね。

問題はまだ傷の手当ても何もできていなかったとの事で、それはこれからのなので、できればわたくしにも手伝って欲しいとのこと。

つか起きているうちは手当てをしても何かと文句を仰いますし、意識がないというのであれば却ってうるさくなくてやりやすいのではないかと思うのですが、まあ言わないでおきましょうか。

それはそれとして：実はわたくしにはこの瞬間、ひとつ思い出した事がございました。

確か、ユリアを奪って居城に戻ったラオウが、直前のケンシロウとの闘いの傷を負ったまま眠りについて、その手当てをユリアがした事で『羨ましい』的な発言をした部下が1人、犠牲になるシーンがあったはずです。

この居城にはいつかの厩番の男のような、なんているかわからない人材もそこそこ在籍しておりますが、バランが去った後に戦場での拳王様の雑用を任された、確かウサ殿という方のことを、『口数ばかり多いがろくな仕事をせぬ』と以前、拳王様がこぼしておりました。

：バランはわたくしが仕込みましたから、彼に比べたら行き届かない面が目立ってしまうのは仕方のない事でしょうけども、元々弁を弄する小者がお嫌いな事もあり、拳王様は最初から、彼を良くは思っておられぬ筈。

で、今考えるとあのウサ殿、あのシーンでラオウに本気の裏げんこつ落とされた部下にそっくりだった気がいたします。

つまり、あの場にユリア様が残されていて、手持ち無沙汰で拳王様の手当をしていたなら。

更に拳王様の寝所の支度を、その側でウサ殿が整えていたなら。

ただでさえケンシロウとの闘いでその身に恐怖を刻みつられ苛

立っていた寝起きの拳王様に、あのひとが余計なことを口走って神経を逆撫でする展開になる事必至なわけです。

手当てするのがユリア様でなくわたくしならば、その光景などいつものことですし、ぶつちやけウサ殿ができることであれば、わたくし一人で事足りますから、2人とも拳王様が目を覚まさぬうちに追い出しておきましょう。

ええ、これは人助けなのですわ。

単に空気が読めないだけのとりたてて罪のないひとが、これから理不尽な暴力に晒される事がわかっていて、見殺しにするわけにはいきませんもの。

……拳王様のお部屋にわたくしが参りますと、案の定ユリア様が、拳王様の傷の手当てをされようとしていた、まさにそのタイミングのようでした。

彼女に簡単な挨拶をしたあと、ひとまずわたくしの部屋で休んでいただくようザク様にお任せし、ただニヤニヤ見ていただけのウサ殿を部屋から追い出して、わたくしはケンシロウにつけられた拳王様の傷の手当てを、ひとりで行なったのでした。

「……リア？」

手当てがひと通り完了し、拳王様のお身体に毛布をかけようとしたところで、突然名前を呼ばれました。

「…お目覚めになりましたか、拳王様」

「これは、うぬが？」

起き上がりながら、布を貼り付けただけの脇腹に手を当てて、拳王様がわたくしに問いかけます。

一瞬、起きて大丈夫かと思いましたが、先ほど見た時、不思議なことに脇腹の、結構深いと思っていた切り傷が、もう塞がりかけていました。

いくら拳王様が化け物だとしても、前回の戦いの時に負った傷は、結構治るまでに時間がかかったのに。

「……はい。」

ほかの方々も手伝いを申し出られましたが、わたくしの一存でお断

りいたしました」

ユリア様が手当てしようとしていた事は、言わずにおいた方がいいでしょう。

心惹かれた女の情けは屈辱であるという、よくわからない怒りポイントがある筈ですものこの方。

「…拳王様の弱っているところなど、見ていいのはわたくしだけだと…今だけは、自惚れたかったですわ」

ふと、自嘲的な言葉が思いがけず口から出て、そんな自分自身に驚きます。

拳王様は溜息をひとつ吐くと、怪我人とは思えない力で、わたくしを寝台の上に引き寄せました。

「…まだ、おれに捨てられると思っているのか？」

「ユリア様…かねてから想いを寄せられていた方なのでしよう？」

手に入れた今、代わりはもう要らない筈ですわね？」

「まだわかっておらぬようだな。」

おれは、うぬを代わりとして扱った事などないわ」

うそつき。口から出ようとしたその言葉を、危ういところで押し留めていると、拳王様の頭が、いつも通りわたくしの膝に乗ってきます。

「…手放さぬと言ったであろう。」

誰が来ようが、うぬはこれまで通りおれの女だ」

呆れたことを平気で口にする拳王様に、わたくしも溜息混じりに答えました。

「…欲張りでいらっしやるのですね、拳王様は」

☆☆☆

「…拳王様、これからどうなさるおつもりですか」

「これから、か…。」

まずは、この肉体に生じた恐怖を拭い去らねば…。」

「そんな事ではございませぬ！

リア殿のことを、この先どうなされるおつもりですか！」

「…リア？どうするとは、どういう事だ」

「ユリア様というあの方は、確かに美しい女性です。」

ええ、奪つてでも手に入れたいくなる、そのお気持ちも、男としてよくわかります。ですが！」

「これまであれほど献身的に、拳王様に尽くしてきたリア殿をあつさり捨ててまで、拳王様が得なければならぬお方であるとも、我らにはどうしても思えぬのです！」

「聞けば、あのユリア様の世話を、リア殿にお命じになったとか！」

それは、身も心も捧げ尽くしてくれた女性にょしょうに対し、あまりに酷い仕打ちと思われませなんだか!？」

「拳王様が要らぬのであれば私にください！」

一生かけて幸せにします!!」

「……最後何かおかしな事言ったやつがおるがそれはさておき。

リア本人だけでなくなぜ貴様らまで、おれがあやつを捨てる前提で話をしておる」

「……………は？え？で、ではなぜユリア様を……」

「無論、ユリアが天を握った男にふさわしい女だからだ」

「で、でも、それではリア殿は」

「うぬらの言う通りリアもまた、おれにとっては得難き女よ。

ユリアを手に入れたとて、おれはリアを手放す気はない」

「えええくく……………?」

「ウツヒヨヒヨ、両手に花じゃないですか拳王様。

このウサもあやかりたいもんですな」

「貴様は黙ってる！」

「ぶぎやー！」

…上層部でそんな会話がなされていたなどとわたくしが知るよしもなく、けれどユリア様を居城に迎え入れて以来、幹部の皆様や他の女官さん、はては一般兵士の方々の、拳王様に対する視線がやけに冷たくなった事だけは、臃げながらわたくしにも感じ取れておりました。

あとウサ殿は、拳王様ではなく幹部の皆様からの袋叩きにあったそうですわ。

変えられない運命ってあるものですね。

「ユリア様」

「えっ……っ？」

わたくしが拳王様のお部屋でひと晩過ごした翌朝。

一旦はわたくしの部屋で休んでいたユリア様は、今朝はちやんとお迎えの支度を整えた、別のお部屋に案内されたとの事で、わたくしはザク様に連れられてそちらにお伺いしました。

わたくしがユリア様を『拳王様の大切な方』とご紹介し、最上級のおもてなしをとお願ひして用意していただいたお部屋は、拳王様のお部屋にほど近い、その次に広いお部屋です。

実は先日わたくしがお部屋を移動した際、一度こちらを使うように言われたものの、一介の女官には豪華すぎると固辞したお部屋でもあります。

わたくしが伺った時には、ユリア様は広い寝台に腰掛けた状態で俯いており、声をかけると弾かれたように立ち上がりました。

「ああ、どうぞそのままおくつろぎになって。」

昨日はたてこんでおりましたもので、改めまして御挨拶に伺いました。

わたくし、拳王様付きの女官のリアと申します。

今より、ユリア様のお世話も兼任させていただくことになりましたので、どうぞよろしくお願ひいたします」

ユリア様にも身の回りのお世話をする頼りになる女官をつけて差し上げるべきと、進言したのはわたくしです。

それに対し拳王様は、『うぬ以上におれが頼りに思う女官などおらぬ』と仰つてくださいましたので、恐れながらわたくしが少しの間は拳王様のお世話と兼任し、徐々に良いと思うかたを差配させていただくことにしました。

女には女同士にしかわからぬこともございます。

ましてやユリア様は捕らわれてきた身、むくつけき男ばかりのみにいて、怖いと思わぬはずありません。

ひとまず自己紹介をしながら女官としての礼をとりますと、ユリア様はどこか戸惑ったようにわたくしを見つめております。

それはそれとして生で見たユリア様の、伏せ気味の長いまつ毛に縁取られた、潤んだ黒目がちな瞳に妙な既視感を覚えたのですが、よく考えたらこの目、色味はまったく違いますが、お兄様であるリュウガ様とそっくりでした。

おふたりにあんまり似た印象はなかったのですが、やっぱり血のつながりって出てくるものですね。

「拳王様から、ユリア様にはくれぐれもご不自由のないようにと、重々仰せつかっておりますので、なんなりとお申しつけくださいませ」
彼女にしてみればここは敵地。

わたくしのこともすぐに信用はできぬでしょうが、それでも安心させるよう、できる限り穏やかに言葉をかけます。

ですが、ユリア様はわたくしを見つめたまま、何故か固まってしまいました。

え、これは、まさか……

「…ユリア様?」

あ、昨晚はよくお休みになれなくてまだお疲れですか？

それとも、お食事がお口に合いませんでした？

ああまさか!

よもやとは思いますが、わたくしが来る前に、他の者が何か不届きな事でも……

「い、いいえー!いいえ違います!!」

お食事は手のかかった温かいものを美味しくいただきましたし、昨晩休ませていただいたお部屋はなんだかちよつといい匂いがして大変居心地が良く、思いの外ぐっすり眠ってしまいましたし、今朝こちらに案内してくださいました方々も、捕虜に対してとは思えないほど丁寧に扱って接してくださいました!

…ごめんなさい、不躰に見てしまって。

あなたが、なんだかわたしのお友達に、すこし似ていたものだから
「お友達…?」

「ええ…なんとというか雰囲気と…それに、声がとても」

…どなたかに声が似てると言われたのは二度目ですわね。確かジユウザ様の想いびとのかた（推定）だったかしら。

拳王様によれば、南斗の巫女のひとりだったとか？

だとすれば、ユリア様と交誼があつてもおかしくはないのかもしれないかもかもしれません。

そういえば先ほど声をかけた時の、ユリア様が顔を上げた一瞬、笑顔を浮かべる直前のように瞳が輝いて、それが次の瞬間に悲しげな表情に変わったのを、わたくし確かに見ておりました。

あれはわたくしの声に反応したのですわね。

とりあえず睡眠も食事も取れたようで良かったです。

今朝方から幹部の方々や兵士の皆様の、ユリア様について訊ねた時の反応が微妙だった為、何かあつたのかと実は少し心配しております。

どうやらきちんともてなされていらつしやつたようで安心いたしましたわ。

それはそうと昨晚ユリア様がお休みになられたのはわたくしの部屋だった筈ですが、いい匂いがしたってなんででしょうか。

拳王様がお好みになられませんのでわたくし、香りのものは特に使つてはおりませんのに。

「…だからでしょうか。

今、あなたに声をかけていただいたら、少し不安が和らいだのです。

…リアさん、とおっしゃるのね。

心配してくださり、ありがとうございます」

そう言つて少し寂しげに微笑んだユリア様が、なんだかとても健気に見えて、わたくしちよつと抱きしめたくまりました。

勿論、そんな衝動は危ういところで押しとどめました。

悔れませんわ、ヒロイン。

この世界の様々な男たちの心を奪うばかりか、同性のわたくしにまで、このような感情を抱かせるなんて。

「…いいえ。

状況が状況だけに、不安になるのも仕方ありませんわ。

改めまして、主人あるじに代わってお詫び申し上げます。

怖い思いをさせてしまい、申し訳ございません。

ですが、拳王様は恐ろしい方ではございませんが、女を無理無体
に手籠めにするような真似は、その誇りにかけて、決してなさいませ
んわ。

その点だけは御安心くださいませ」

大事な事なので、そこは強調しておきます。

：わたくしの時は若干アレでしたけれども、『駄目だとは言つて
いたが嫌とは言わなかった』という事で、本人的にセーフだったら
しい
ですから。

というか、わたくしが本気で拒否する事はそもそも想定してい
な
かったようですし。

「わかりました。あなたを信じます。」

少しの間ですが、お世話になります」

わたくしがうっかり遠い目をしていましたら、ユリア様が先ほどよ
りもしつかりした声で、わたくしを見つめ頷いてくださいました。

：そういえばユリア様は、昨晚はわたくしの部屋で、ぐっすり眠つ
たと仰っていました。

実は見た目より神経図太いのかもどひそかに思ったりもしました
が、もしかしたら、この『大きな寝台』のあるお部屋に移されたあと
の方が、不安が大きかったのかもしれない。

「…ところで、ユリア様は昨日、何故あの場に？」

ケンシロウ様のあの様子を見た限り、元々は来られる予定ではな
かったとお見受けいたしました。

恐れながら、主人あるじの気性もお気持ちも、ユリア様はご存知でいらつ
しやるのでしょうか？」

持つてきた着替え一式をさりげなく示しながらクローゼットに入
れ、ずっと気になっていたことを訊ねます。

原作では確か2人は、南斗の居城で落ち合う約束になっていて、ラ
オウがやはりユリアに向かっていると知ったケンシロウが、先にラオ
ウと対決することを選択し、仕方なく待ってたら、海のりハクが余計

なこととして、待つてるユリアの上からラオウが降ってきて……の筈でした。

今回は本来なら雲のジウウザとの対決だったところに、この兄弟対決が前倒しで割り込んできたわけで。

そもそも確実に南斗軍とケンシロウは既に接触しているのだから、今更落ち合うも何もないし、だからこの状況でユリアがいるのは不自然なのですわ。

それで原作通りに、狂喜した拳王様に拐われちゃったわけで、もしかしたらこれが前世でラノベとかで読んだ、強制力とかいうやつなのでしようか。

「……ただ待っていることができなかったのです。

あの人が、ケンがわたしに黙って、ラオウとの決着をつけに行くと、決心して出ていった時に。

ケンがまたわたしの為に、命を捨てようとしているのではないかと……そう思ったらどうしても、我慢ができませんでした」

……聞いてみれば、割と考えなしだったようです。

これだと『待ち続ける事がわたしの宿命』と仰っていた原作との行動と明らかに違いますけど、女としての感情は、もしかしたらこれが正しいのかもしれないね。

そういえばこれより後に、ユリアは死病に冒されている事が明らかになるのですが、ユリアが常に流されるまま生きていたのも、この短い命を受け入れて、己の命と幸せを諦めていたからだ、わたくし勝手に思っているのですけれど。

なんというか、今わたくしの目の前にいるユリア様からは、そういう諦めというか、悪い意味での悟った感というか、そういうものは一切感じられません。

むしろこれから生きる決意というか、運命と戦う覚悟のようなものが、瞳に現れている気がしてならないのです。

わたくし、これでも拳王軍の女なので、『死への恐怖に怯えながらも、一方で生を諦めている』男たちをたくさん見てきておりますのでね。

そういう感じは、なんとなくですがわかるのですわ。

…というか、物語序盤での、シンに連れ去られる前の反応を思い出すと、この煽やかでも芯の強い、戦う目をした彼女の方が、実は本来のユリア様なのではないでしょうか。

そんな事を思っていたら、ユリア様は少し俯くと、再び言葉を紡ぎはじめました。

「…わたしの、南斗の将としての宿命は、遍く愛で世の人々に平和をもたらす事。

けれど、わたしも心の中では、わたし自身が幸せになることを望んでいました。

愛するひとと共にある、ただそれだけの幸せを。

そんなわたしの、身勝手な思いを肯定してくれたのが、先ほどリアさんに似てると言った、彼女なのです。

彼女はずっとひそかに、わたしを守ってくれていました。

ずっと親友だとは思っていましたが、その一方で、彼女が守っているのは『南斗の将』なのだとも、その時までは思っていたのです。

…けど、彼女はケンに言ってくれた。

『命に代えても守るなんて言うな。あなたがいなければユリアちゃんは幸せになれない』と」

「それは…」

「彼女はわたしをただの『ユリア』として、一人の女としての幸せを、当たり前前に願ってくれたのです。

それをわたしが掴む事を、当たり前前に肯定してくれたのです。

だから…わたしは諦めたくない。

ケンがいて、わたしがいる…ただそれだけの幸せを」

考えてみれば当たり前前のことです。

ユリア様とて、ひとりの女。

たとえこの世界を救う鍵のひとつとして、天の配置したパーツであったとしても、泣いて、笑って、時には怒って、ひとを愛して、生きていく生身の女なのです。

そもそも作中、ユリアを欲する男たちは数多いても、その幸せにま

で言及した男がどれだけいたでしょうか。

シンは身勝手な愛を押しつけ、トキは傍観し、ジユウザは絶望し、ラオウはただ手に入れることだけを望んだ。

彼女の求める幸せが『ただ、愛するひとと共に在る』、それだけのことであったのは、今もそして作中のユリアにも、一貫して変わらないことだった筈なのに。

「そう……だから、ケンシロウ様を追いかけたのですね。

彼にもう一度、お友達の言葉を伝える為に」

『お友達』というひとの言葉はもはや、ユリア様の生きる根幹として、彼女を支えているのでしょう。

たとえこの先の命が短くとも、ユリア様はご自分の幸せを諦めることはないのだろうと思うと、それは良い変化であるように思えました。

「そのような方にわたくしが似ていたのでしたら、光栄なことですね。

ユリア様とは名前も似ているので、わたくし勝手に親近感を抱いておりましたものですから」

…多分その方が、ここ一連の原作クラツシャーなのでしょうけれど、今それは考えないことにいたします。

わたくしがそう言うと、ユリア様は俯いていた顔をあげ、ゆっくりと口角を上げました。

「まあ……ふふっ」

…ああ良かった。少しですが笑っていただけましたわ。

…

…このあと、こちらの部屋に立ち寄った拳王様が、相変わらず恐ろしい顔でユリア様に、

「おれの女官を手懐けたつもりだろうが、この女はおれとの二択となれば必ずおれを選ぶ。」

うぬに残された選択は従順か死、それだけだ。

いつまでも自由にはさせておかぬゆえ、選ぶべき答えを用意しておくのだな」

と、愛している女性にかける言葉としては最低な事を言つてのけましたので、去り際にうっかりを装って足を踏んでおきました。

せつかくユリア様に心を許していただいたのに、これでは台無しですわ!!

☆☆☆

「リアさんは……単なる女官ではありませんのね」

「リア殿は拳王様の、ただ一人の寵姫です。」

御本人は弁え過ぎるほど弁えられた方ゆえ、そう呼ばれる事を好まず、一介の女官でしかないと仰られておいでですが、我らの知る限り拳王様は、あの方以外他のどの女性も、これまで傍には置かれなかつたのです。

拳王様の伴侶となる方をお迎えする為に整えていたこの部屋も、これまで誰にも使われていなかったものの、いずれあの方のものとなる事を、この者誰もが信じていた事でしょう。

…貴女が御自分の意志でここにおられるわけでない事は存じております。

それでも貴女の今の立場を快く思う者が、ここには居らぬと思つていただいて間違いございません」

ユリア様に付ける女官を3人ほどに厳選し（途中ややトラブルが生じましたもののなんとか穏やかに収束させて）本当はこのエピソード書いてたんですが、この話の中に入れてしまうと非常にバランスが悪くなるため、ラオウ編完結後に幕間として入れる予定です。何日か監督して問題ないと判断したところで、わたくしは拳王様の選任に戻されました。

拳王様の事は別として、なんだかやけに懐いてくださったユリア様のお世話は、結構楽しかったので残念なのですが、

「いつまでも女同士でイチャついておるでないわ。

人選が固まったならば、さっさとおれの側に戻ってこい」

と、事あるごとに言われましたので仕方ありません。

いくら意中の女性が靡かず、わたくしとばかり仲良くするからといって、そんなに妬かずともよいではありませんの。

：というか、出陣の際に拳王様のお世話をする方がいらつしやらなくなつたので、今度は居城内だけではなく戦場にも同行させられています。こらウサ殿どこ行った。

そして今。

「フドウよ！鬼神となりて我と戦え!!」

「めんどくせえなお前！いきなりなんだよ!!」

：わたくしはまた、一体何を見せられているのでしょうか。

☆☆☆

ことは、五車星『山』のフドウが大勢の子供たちと住み暮らしていると情報を得ていた村から、見張っていた兵たちが縛られた状態で、馬に乗せられて居城に戻ってきた事から始まります。

その後、調査に向かったその村からは、彼と子供たちの姿が忽然と消えており、何故か一番大きな家の扉に、

拳王の

クソバカ☆ヤロウ

とデカデカと書かれた布が貼り付けてあったとかで（しかも裏返し

てみたら拳王軍の旗だったそうで、その報告を受けた拳王様がフドウの搜索を命じたわけです。

「この肉体より恐怖を拭い去り、魔王となるにはフドウ、あの男の拳と命が必要だ!!」

何か変なこと言い出したこの子。

幹部の皆さんが明らかにそんな目で拳王様を見ていますが、多分知ったこつちやないんでしょう。

拳王様はいい意味でも悪い意味でも空気が読めませんので、その手の細かいことはいちいち気にしませんもの。

というか、こここのところ毎晩わたくし、拳王様と同衾させていただいております、夜中に拳王様が魘されているのに気がつき、その度に宥めておりますので(なので色っぽいことはしていかないにもかかわらずちよつと最近寝不足気味です)、先の言葉も嘘ではないと思いませんが…本音はその一連の出来事に、相当ムカついてるんだと思われま

す。

結局フドウは5日間の搜索の末、もとの村で1人でニワトリと戯れているところを発見され、その報告を聞いた拳王様が、なんでかわたくしだけを連れて黒王に乗って駆けつけ、先程のやりとりになったわけです……が。

「万人に慕われる善のフドウ。」

だが、うぬが如何に善人の皮をかぶろうと、その身体には鬼の血が流れておる!」

「おいおい。皮被るとか、別嬪さんの前で下品な話してんじゃねえよ」

「誰もそんな話はしとらぬわあつ!!」

下品な方向に持っていったはうぬの方であろうが!!

てゆーかうぬのキャラそんなだったか!」

「いいんだよ、どうせ今は子供ら見てねえし」

「見てなければいいというものではない!」

普段の生活態度というものは、咄嗟の時に出るのだぞ!」

親ならば子供の見ておらぬところでもキチンとせんかつ!!」

…ああ、この精神攻撃、まだ続いていますのね。

フドウ様の反応が予想とあまりに違いすぎた為か、シヨツクのあまり拳王様まで、キヤラ崩壊起こしていらつしやいます。

わたくしはその光景を見て、フドウ様でつかいなと思いました。おわり。

……………はっ。

いけませんわ、わたくし意識を一瞬異世界に飛ばしておりました。しつかりしなくては。

「そもそもひとの黒歴史、先に突つついたのはお前だろ、ラオウよ。

おれが言うのもなんだがな、いい加減落ち着いた方がいいぞお。

その年齢としで未だに童貞キヤラとか、さすがに見てるほうが痛い、つか辛い。

そりやあ確かに、昔はおれだつて荒んでたが、心入れ替えたの、今のお前よりずっと若い頃だからな？」

「童貞ちやうわ!!」

…最初の方こそ口調が荒かったフドウ様ですが、徐々に穏やかな口調に戻ってきております。

『山のフドウ』といえば北斗の拳において、北斗の次兄トキや、南斗白鷺拳『仁星』のシユウと並ぶ聖人キヤラのはず。

それが一体何があつてこのようなことに。

いえ、そのトキ様があれだけのキヤラ崩壊を起こしていた事を考えたら、不思議ではないのかもしれないですが、やはり違和感が半端ないので、戻ってきてくれて嬉しいです。

しかしながらフドウ様の、今度は不良少年を諭すような言葉に、怒りゲージがどんどん上がってきた拳王様のキヤラが、またちよつと怪しくなつて来ました。

「確かにきつかけつてのも大事だがなあ。

…そうそう、そのきつかけについて、おれは割と最近まで勘違いしてたことがあつて、失礼なことしたなつて、今もそのことでちよつと落ち込んでな。

まあそんな事はどうでもいいやな。

ほら、幸いしつかりしてそんな別嬪さんも側に置いてることだし、

身を固めるにやいい頃合いなんじゃないか？

：それはさておき、マジでうちの将返してくれんか。

でない、下手すりゃ若い頃のおれなんぞより、もつと恐ろしい人を本気で怒らすことになるし、そうなると正直おれらも恐る

「いいから話を聞け——っ!!!」

どっかんといい幻聴が聞こえるくらい、怒りで真っ赤になった拳王様が、フドウ様の言葉を遮ります。

「うぬがさつきから何を言っておるかわからぬが、おれはその恐怖に打ち勝つ為に来たのだ！フドウよ！

御託並べるのも大概にしておれと戦え!!」

ここでようやく主導権を取り戻した拳王様は、そう言っただけで地面に手を振りかざしました。

瞬時に、その拳圧だけで地面に、深さ4センチほどの溝ができます。

それから、黒王の鞍の横から何かを取り出すと、それをわたくしの方に、突き出すように渡してきました。

：それはクロスボウと呼ばれる武器。

専用の矢を装填すれば、わたくしのような素人、そして非力な女でも扱える、充分に殺傷力の高い武器です。

：この世界では、達人級の拳士の実力を測る為の、ダメージを与えるに及ばない武器として使われることが多いですけど。

「リアよーこのラオウの身体、一歩でもここから退いたら容赦はいらぬ！」

この背に向かい撃ち放てい!!」

「ええっ!!」

いやいやいや!

なんてことを命じてくれやがりますの、このオッサン!!

てゆるか思いましたわ。

コレ本来の流れなら、子供たちの命を盾にして、ラオウがフドウに勝負を挑む場面でした。

その為、拳王軍の兵士が村を取り囲んでおり、それを命じられるのも彼らなら、ラオウが撃つと命じるのも、彼ら数人がかりで引くバカ

でかい弓と、槍みたい以太い矢であつた筈。

今は盾にとる子供達も取り囲む兵士もおらず、側にわたくししか居ないから、当然のようにわたくしに命じるわけですのね！

…そして、わたくしは拳王様が本気で下した命令には逆らえません。

撃てと言われたなら、撃つしかないのです。

拳王様ご自身は、己が退くことしりぞなどなく、ただ覚悟の為だけのおつもりです。

ですが、その必要が生じること、わたくしはもう知っております。

「…よかろう。しばし待っている、ラオウ」

フドウ様は暫し考えていらつしやいましたが、頷いて家の中に一度引つ込むと、防具と見るには必要な部分がまるで覆われていない戦装束を身につけて出てこられました。

それを見て、満足そうな笑みを浮かべた拳王様は、先ほど己が引いた死線デッドラインの、向こう側へ一歩踏み出します。

そして…

戦いは、始まってしまったのです。

☆☆☆

それは、壮絶な拳の打ち合いから始まり、拳の当たる面積の広さから、最初は拳王様が有利な感じで進んでいきました。

ですが、フドウ様は闘気の扱いに長けており、掌の触れた面に一瞬にして闘気を流して、拳王様にもダメージを与えてきます。

2人の身体から激しく血が飛沫しぶき、互いの息が上がっていきます。と、先にフドウ様が距離を詰めて、拳王様の身体をホールドしました。

そのまま筋肉を膨らませ、締め落とそうとしているようです。

ですが拳王様はフドウ様の秘孔を素早く突くと、その拘束を解き、なんとか間合いを離しました。

それから…何かに魅入られたように動きを止めます。

「死ねラオウ!!!」

瞬間…

「いかん、止せっ!!」

「!？」

拳王様に向かつて拳を振り落としていた筈のフドウ様が、その横をすり抜け、わたくしの前に立ちはだかりました。

わたくしが放ったクロスボウの矢が、厚い胸板の中心に突き立ちます。

「な……貴様、何を……はっ！」

なんと、まさか……こ、この拳王が、しりぞ退いていた!!」

自身の横をすり抜けた巨体を追いかけた視線が、己の足元に留まり、拳王様は驚愕の表情を浮かべました。

それから、何が起こったのかを徐々に把握して、拳王様は、立ち尽くしたままのフドウ様の背に向けて、声を張り上げます。

「何故だ……何故、おれを庇った！」

負けて敵の情けを受けてまで、命を拾おうとは思わぬわ!!」

「貴様を庇ったのではない！」

おのれは、自分が何をしたかわかっておらんのか!!」

「な……」

一度振り返って、拳王様があげた以上の怒号を響かせるフドウ様に、拳王様が明らかに慄きました。

そして、わたくしは。

「あ……ああっ」

「ははっ、よくしよし。」

大丈夫だより別嬪さん。

よく見ろ、この身体。大きいだろう？

おれは、この程度の矢では死なぬよ。

落ち着きなさい」

矢を放った後のクロスボウを、ゆつくりと歩み寄ってきたフドウ様にさりげなく奪われて、優しい声をかけられ、更に指先で頭を撫でられております。

なにかはわからないけど何か、喉の奥に詰まった感じで、息が苦しくて、その場に座り込みます。

「わた…わたくし、は……」

「うん、いい子だ。」

さあ、息を吸って、吐いて。

どうだね、少し落ち着いたかね？」

言われた通りに深呼吸すると、息苦しさは無くなりました。

その代わり、別の何かが込み上げてきて…

「ひっ…えっ……」

「そうだね。泣きなさい。」

頑張り屋さんなのはとても素敵だが、ちよつと我慢すぎたね」

トドメとばかりに頭の上から、優しい声が降ってきて、ついにわたくしは決壊いたしました。

「うっ…わあああくん!!!」

拳王様のばかっ！極悪人！

鬼！魔王！！本命童貞——！！」

何が何だかわからなくなつて、わたくしは我儘な子供のように泣き喚きました。

涙がとめどなく溢れてきて、感情の奔流が止められません。

「今なんか最後に物凄く失礼なこと言われた気がするがそれはさておき…どういうことだ、リア…」

「どういうことも何も、貴様が命じたのだろう？」

『愛する男を、その手で殺せ』と。

彼女は、言われた通りにそれを実行した。

それがどれほど酷いことか、愛を知らぬ貴様にはわからぬか」

「!!」

拳王様の右脚が線を越えた瞬間、わたくしは絶望しました。

けれど、わたくしの『生きていてほしい』というただの願いの為に、拳王様の誇りを穢すこともできませんでした。

ばかなひと。ばかなひと。ばかなひと。

けどほんとうにばかなのは、こんなおとこのことを、それでもすき

なこのわたくし。

だから、せめて。

わたくしの放った矢が、拳王様の命を奪うなら。

わたくしは次の矢をフドウ様に向けて、彼に討たれようと思いましたが。

なのに、まさか助けられるなんて。

「愛……だと。そんなもの……」

「……ラオウよ。」

今は、その女を連れて戻るがよい。

言ったらう。おれは、この程度では死なぬと。

勝負ならば、後日いくらでも受けてやる。

……それで良からう?」

「……っ」

「その女は、貴様の『きっかけ』になり得る存在。

大切にすることが良い」

そう言つてフドウ様が去つた後。

泣き喚き続けるわたくしを胸に抱きしめて、拳王様はその場から、しばらく立ち上がらずにいました。

わたくしが力任せに、拳王様の胸を叩き続けるのも構わずに。

やがて。

「……リア」

「……はい」

ようやく落ち着いたわたくしに呼びかける拳王様の声に、少し躊躇いながら顔を上げます。

拳王様は、やはり少し躊躇った後、意を決したように問いかけてきました。

「うぬは……おれを愛しているのか?」

この期に及んでなんて訊きかたをするのでしよう、この男は。

「……知りません」

そしてその問いに、拗ねてそんなふうには答えてしまう自分も相当で

すけど。

「そうか……」

ただ一言、そう呟いた拳王様は、わたくしをもう一度抱きしめたあとは、兵士たちが迎えに来るまでの間、もう一言も言葉を発しませんでした。

「もう……なんでラオウの挑戦を、まともに受けたりしたんですか！

下手したら死んじゃってたかもしれないですよ!？」

「悪い悪い。そんなに怒らんでくれよ。

アイツもあの子も必死の覚悟決めちゃってたから、なんかちよくつと逃げられない雰囲気だね。

口八丁で誤魔化すのが失礼に思えてきて、おれも本気で立ち合わなきやくって。

というか……ん、あれだな。

ホラ、あの日の人違いが判っておれ、死ぬほど恥ずかしい思いをしたからさ」

「……………はっ？」

「二度は死なないだろうなって思ったんだよ。なんとなくだけど」
「なんですかそれ!？」

…もう。とにかく、無事に帰ってきてくださって良かったです。

傷の手当が済んだら、子供達が待っていますから、元気な顔を見せてあげてくださいいね?。」

その夜。

初めて拳王様の枷を拒否したわたくしは、居城内のバルコニーに佇んで、空に輝く稲妻を見つめておりました。

この世界、雨など殆ど降らないというのに、雷は割と落ちるのですわ。

別にそんな事はどうでも良いですけど。

わたくしにとつて、拳王様は『推し』の筈でした。

ただ見つめて、その存在を崇める。

それで幸せだった筈でした。

それが。いつからこんな欲張りになってしまったのでしょうか。愛を返してくださいださらないのは仕方ない。

あの方は、愛など知らないのですもの。

それでも……

ああもう、気持ちがぐちゃぐちゃで、考えると涙が出て。

最近少々すぐれなかった胃の調子まで本格的に悪くなってきて、先ほどは食べたものを戻してしまいましたし、枷を断って正解だったかもしれない。

今夜すっかり眠って、体調も戻れば、いつも通りのわたくしにきつと戻れます。

だから今は……こんな醜いわたくしを、拳王様に見られたくない。

コツン……

背後に足音が聞こえて、反射的に振り返ります。

「リアさん……？」

そこには、月光と見紛うばかりの美女が……ユリア様が、立っておられました。

「……ユリア様。

こんな夜更けにどうなされましたか？」

「なんだか眠れなくて。あなたも？」

……まあ、顔色が良くないわ。

どこか、具合が悪いのではないですか？」

ユリア様はそう仰ると、わたくしの額に手を伸ばしました。

…その手が、何か薄桃色の光を纏っているように見えたのは、空で輝く稲妻のせいでしょうか。

ですが、その掌が額に触れた瞬間、少し重だるかった身体が、なんというか、スツキリしたというか、少し楽になりましたの。

「え…今の」

「…秘密ですけどわたし、少しですが傷とか病とか、治す力があるので

す。
余程の重症ともなればさすがに無理ですけど、自身の病も初期段階のうちに、これで克服しましたし」

なんか今サラッと、すごい秘密を打ち明けられた気がいたしますけど。

つまりいまのユリア様は、死病を患ったお身体ではないということ
?

それができるのであれば、何故原作ではそうしなかったのでしょうか
?

…ああ、そうでした。

これもきつと例の『お友達』の存在。

原作のユリアは、心のどこかで生に絶望していたのでしよう。

けど今、ここにいるユリア様は違いますのね。

たとえひととき愛する人と引き離されても、いつか再び出会えることを信じて、幸せを諦めなかつたのですね。

「? 顔色は…戻りませんね。」

原因さえわかれば、根本治療も…」

「少し寝不足なだけですの。」

御心配いただきありがとうございます。

おかげさまで、だいぶ楽になりましたわ」

わたくしが言うのと、ユリア様は少し、不得要領な顔をなされます。

ですが、それを追求する前に、やたらと聞き覚えのある重い足音に、わたくし達はそちらを振り返りました。

「……ラオウ」

一瞬で色を失ったユリア様が、そのひとの名を呟きます。影になつていたそのひとの顔が稲妻に照らされ、険をはらんだその表情に、強い決意と僅かな躊躇いが同時に浮かんでいます。

あ…これ、まさか。

「哀しみを知らねば、ケンシロウに勝てぬ。

愛を知らねば、悲しみが見えぬ。

……知る術はひとつ！

ユリア！おまえの命をくれい！！」

…瞬間、再び雷鳴が轟くと同時に、強い雨が降り始めました。いや天！

こんな時にそんな演出しなくてもよろしくてよ！！

てゆーか言いやがったこのオツサン！！

…そして、わたくしの心を知ってもなお、この方はユリア様を選ぶのだと、そんなどうしようもないことで、わたくしの心は咽び泣きました。

………けど、そんなこと言ってる場合じゃありませんのよ！！

「……おやめください、拳王様！！」

「退け、リアー！

退かねばうぬも……殺す！！」

突き出された拳王様の拳に必死で縋りつくくと、拳王様はどこか辛そうなお顔で、強い言葉を放ちます。

けど、わたくしもここで引くわけにはいきませんわ。

ですが、そこにユリア様の、悲痛な声がかかりました。

「いけません、その方を手にかけては！

…リアさん、わたし、覚悟を決めました。

わたしのこの命で、この世に光がもたらされるのであれば……」
ちよつと！なんかユリア様までこの雰囲気呑まれて変なこと言い出しましたけど！

「ダメですわ！

ユリア様は仰っていたではありませんの！

大切なひとが悲しむから、決して生きることが、幸せになることを諦めないと！」

感情が昂り、また涙が出てきたわたくしが必死にそう叫ぶと、ユリア様はハツとしたように立ちすくみました。

その間に、ユリア様を隠すように彼女の前に立ちはだかつて、わたくしは両腕を広げ、拳王様と向き合います。

「拳王様も、げんこつ引っ込めてくださいませ!!」

推しは見守り続けて愛でるものなのです！

殺してしまつてはそれができなくなります!!」

「また何か、おかしな事を言い出したなうぬは…」

「ひとのこと言えますか！」

そもそも、想うひとを失う哀しみは、サザンクロスまで出向いておいて目当てのユリア様が亡くなったと聞かされた時に、いいだけ味わつたではありませんの！

哀しみを知らねばつて事であれば、あれを思い出してなんとか出来ませんか？

あれほどの絶望的な哀しみすら、本人を前にした途端、忘れてしまふほどの鳥頭ですの、拳王様は!？」

泣きたいのを必死に堪えて、わたくしの膝に縋り付いて、そのまま眠つてしまわれたあの日のことは、足の痺れの恨みとともに、わたくしはまだ忘れておりませんことよ!!」

「いやそれは忘れろー」

「どうかあの夜の事を、うぬは恨みに思つておつたのか!？」

「ほんの少しですけどー」

「どうかあんな衝撃的な出来事、忘れられるとお思いのですの!？」

「わたくしは拳王様と違って、鳥頭ではございませんのよ!!」

「ぐぬぬ……!!」

…拳王様の顔が恐ろしげに歪み、歯を食いしばるギリギリという音が聞こえてきますが、知ったことではございません。

「ぐぬぬではございません。」

……わたくしがどれほど、あなた様をお慕いしているとお思いです

の？

昼間の問いの答えがお望みなら、今はつきりと申し上げますわ。愛しております、拳王様。

あなた様の強さの裏にある悲しみ、弱さ、そして優しさ。

他の誰でもないわたくしの前でだけ、隠さず見せてくださったそれら全てが、わたくしの心に刻み込まれた、大切な宝物。

…忘れることなど、できはしませんわ。

それが消えるのは、わたくしの命が消える時だけです！」

拳王様の目を見据えて、はつきりと言います。

こんな言葉だけで伝え切れる想いではありませんが、このかたは口にして伝えなければわからないのです。

フドウ様の仰る通りでした。

わたくしは己の『分』というものにばかり囚われて、我慢して心を殺しておりました。

ほんとうは、わたくしを愛してほしい。

ユリア様ではなく、わたくしを選んでほしい。

ユリア様が仰るように、互いが共にある、それだけの幸せが、わたくしだって欲しいのです。

…愛の告白って、こんな睨みつけながら、挑むみたいな気持ちで行なうものではないと思うのですけれども。

「リア……!!」

「ラオウ。」

…本当はあなた自身、判っているのでしょうか？

あなたが本当に愛しているのは、わたしではなく、このリアさんなのだ」と

…と。

わたくしの肩に後ろから手を置いて、ユリア様が優しげにそう仰います。

その言葉の意味が瞬時に理解できず、わたくしは数秒固まりましたが、拳王様は驚愕の表情を浮かべて、ユリア様を見つめました。

「な………」

「この乱世を導くのは、力と愛。

ラオウ、今のあなたは、既にどちらも持っている筈。

どうか、その猛き心に愛を受け入れてください、ラオウ。

リアさんの、そして、リアさんへの愛を」

そう訴えながらユリア様は、そつとわたくしの肩を押して、拳王様の方に突き出します。

拳王様は一瞬、わたくしに向けて手を伸ばしましたが、次の瞬間その手を、拳の形に握りしめました。

「……出来ぬ！これは宿命!!」

天を望み、北斗を砕くのはおれの宿命なのだ！

全てを望むことはできぬ!!」

……わかつております。

それが、拳王様のプライドです。

今の拳王様の心には、ケンシロウとの決着しか見えておりません。

女の……わたくしの愛など、邪魔なだけなのです。

ですから……わたくしは拳王様の足元に、ゆっくりと膝をつきました。

「………ならば、殺してください。」

ユリア様ではなく、このわたくしを」

先ほど、このシーンが原作にもあったものだど気がついた時、わたくしは、拳王様が手にかかる決意をしたのが、やはりユリア様であったことが、とても悲しかったのです。

それは、彼が愛しているのが、やはりユリア様であるという証左でありましたから。

でも、もしも。

そのお心が一片でも、わたくしに向いているのであれば。

「自ら手にかける事こそ愛だと仰るのであれば。

わたくしが愛した拳王様の、その激しく熱いお心のままに、どうぞ、この命をお召しください。

既にこの身も心も、あなた様に捧げておりますもの。

最後に残ったわたくしのこの命が、あなた様の糧となれるのです。

ら、わたくしは本望ですわ」

そう言つて笑いかけると、拳王様は一瞬息を呑み……やがて意を決したように、大きな拳をこちらに向かつて振り上げました。

「……リア、恨んでもかまわぬ！」

我が心に哀しみとなつて生きよ!!」

「やめて——っ!!」

そして。

みたびの雷鳴が、一際強く輝きました。

「うっ……!!」

「リアさん!?!」

…同時に、唐突に込み上げてきた吐き気に、わたくしは必死に口を押さえました。

これ多分ですが、推しの過剰供給で胃が圧迫されたのでしょね。

これこそまさに、仰げば尊死とくとし…うえつぷ。

……はあはあ。失礼いたしました。

…ふと気がつけば、ユリア様がわたくしの背中をさすつており、拳王様は固まったまま、何が起きたかわからんという表情を浮かべて、わたくしを見つめております。

これはいけません。

なんとか、場の雰囲気を読まなければ。

「も、申し訳ございません。空気を読まず。

どうぞどうぞ、ここはわたくしに構わず続きを…」

「…ラオウ。リアさんの中に、新たな命が」

「なに……!?!」

「………ほへっ!?!」

唐突に告げられた、あんまりにも突拍子もない冗談に、つい変な声

が出てしまいました。

思わず目を合わせたユリア様は、一向に『なんちゃって』とは仰つてくれず、むしろ真剣な目で、わたくしに向かつて頷きました。

「ほ……本当か？」

「リアさん。お腹の子は、ラオウの子ですね？」

え、待って。理解が追いつきませんわ。

とりあえず2人同時に質問すんのやめて。

「お、お腹の子!？」

いえその、いきなりそう言われましても」

「…念の為聞ぐが、おれ以外に他に心当たりでも？」

「い、いえ！わたくしが身籠っている可能性があるとするれば、子の父親は、確かに拳王様しかいらっしやいませんけども!!

で、ですが……そんな事、ある、筈が」

言われて、わたくしは反射的に、膨らみどころかなんの兆候も顕れていない、自分のお腹に手を当てます。

その手の上に、ユリア様の柔らかな手が重なって、その唇が美しい弧を描きました。

「間違いありません。わたしには見えるのです。

ふたりが互いに愛し愛された証の、ちいさな生命いのちの脈動が。

そして、この世に待ち望まれて生まれてくる、その輝かしい未来が」

…ああ、けどそういえば確かにこここのところ、なくんか胃の具合が悪かったのですわ。

てつきり夜も満足に寝られなかった時の疲れが、今になって出ているのかと思っておりますのに！

というか以前ザク様の仰っていた事、一周まわって当たっていたんじゃないやありませんこと？

「まさか、子ができるなんて……わたくしと拳王様の間にだけは、絶対にそれはあり得ないと思っておりますのに」

「…確かに驚いたが、健康な男と女が、やる事はやっていたのだから当然の結果であろうが。

むしろそのできないという自信はどこからきた」

「ぐぬぬ」

「ぐぬぬじゃない」

なんかさつきとは逆のやり取りになっており、理不尽ですがちよつと悔しくなつて、わたくしは拳王様の顔を見上げ…ん？

なんだか距離が近くありませんこと？

そう思った次の瞬間、視界が大きな壁に塞がれて、わたくしの身体は拳王様の腕の中に、すっぽりと包まれておりました。

「……負けたわ。」

おれには捨てられぬ。捨てる事はできぬ。

うぬの存在全てが、今や我が血肉と同様。

誰もうぬの代わりにはなれぬ。

このラオウ、もはや拳王の名は要らぬ！

リアよ、いつぞやの約束、果たしてもらうぞ。

そんなことがあつても、おれから離れることは許さん。

そのかわり、このラオウの全てをうぬにやろう」

抱きしめる腕はいつもよりも優しく…その温もりに精一杯の『愛』を感じ取ったわたくしは、涙に濡れた頬を、その熱い胸に預けたのです。

☆☆☆

「……本当に、良かったのですか？」

大海原を往く船の上。

わたくしは広く逞しい胸に寄り添つて、その顔を見上げながら、

そつと呼びかけます。

海風は少し冷たいけれど、寒さを感じる事はありません。

わたくしの肩をずつと抱いたままの大きな手が、とても温かいから。

「この天地はケンシロウとユリアにくれてやるわ。」

もとよりおれが最後に目指すのは、この海のむこう、我が故郷よ。

こうなれば故郷にこのラオウとうぬの血を、この名と共に永遠とわに根付かせてくれようぞ。

これが生まれても、うぬの腹があく暇などないかもしれぬゆえ、覚

悟しておくのだな」

なんかとんでもなく恐ろしい事を言っつて、悪そうな笑みを浮かべながら、そのひとはもう片方の掌で、わたくしのお腹にそっと触れます。まだなんの膨らみも感じられませんが、心なしか内側から温かくなつた気がして、この子も父の愛を感じているのだと、何故かそんな事を思いました。

同時に、あの地を発つ前に、一度だけ遠くから様子をみた、よちよち歩きの幼子の姿を思い出して、ほんの少しだけ胸が痛みました。

「…せめてリユウ様と、この子を会わせたかったですわ」

「養父母おやから引き離すのは哀れと言つたのはうぬではないか。

…案じずとも、やつもおれの子。

いずれはこの血に導かれて渡つて来よう」

あなたのお父様を奪つてしまったわたくしを、あなたは許してください。さるかしら。

けれど、もしいつかお会いできた時、それでも胸を張れるよう、せめてあなたのお父様は、わたくしが幸せにいたしますわ。

「ラオウ様…」

「なんだ？」

まだ馴染まない呼び名に、それでもそのひとは、自然に問いを返してきました。

ただ名前を呼び、応えが返される。

そんな当たり前のことが、どんなにこの胸を満たすものであるか、本来辿るべきだった物語を知らないこのひとには、きつとわからないでしょう。

だから、伝えるのです。

この胸に溢れる想いを、真つ直ぐに。

「わたくし……幸せですわ」

「ユリアちゃん！」

「迎えに来てくれたのですね。」

…けど、駄目でしょうか？

南斗の将が2人とも、街を離れてしまっは…」

「だって心配だったんですよう。」

ユリアちゃんは、いざとなったら自分のことは二の次になってしま
うから。

本当に…本当に無事でよかった。

…ああ、影武者はマミヤさんとアイリさんをお願いしてきました。

旦那さん方に『貸してください』とお願ひしたら、どっちにもすご
く嫌な顔されましたけど、本人たちはノリノリで引き受けてくれまし
たしー！」

「済まない。おれも止めたのだが。」

ユリア……………ラオウはどこに？」

「彼は旅立ちました。」

……………胸に、ただひとつの愛を携えて」

「あの女性か……………そういえば、彼女は」

「…ケンシロウくん？」

「……………いや、なんでもない。帰ろう、ユリア」

「ええ…」「はい……………あ」

修羅の国にて。

「フハハハハ、嬉しくて肌が粟立つわ！

この世に命のやりとりほど面白いゲームはない!!

さあ、シヨーを続けよう！続けねばならん!!」

「去ね変態」(瞬殺)

「最後に生き残るのは愛ではなく悪！リア充滅べ!!」

「誰がうまいことを言えと」(瞬殺)

…この世界線では本当にラオウが戻った事と、原作より修羅編の開
始が早まった事でカイオウが仕上がっておらず、割とあっさり修羅の
国平定されました。

かくして伝説成就(爆)

ヒヨウとサヤカも無事結婚式を挙げ、のちに北斗宗家の血を再びひとつとする子が、この2人の間に誕生します。

尚、この時のリアのお腹の子は女の子で、リオと名付けられました。父親の最初の意気込みの割には、彼女の後に子は生まれず、彼女は長じてのち修羅の国の女性たちの地位の低さを憂い、女性解放運動を起こす事となります。

スローガンは『北斗を生んだのは女性』。

幕間く15十(プラス)

ユリア様にお付けする女官の人は、実は少し難航しております。元からいる女官の方には、悉く断られてしまったからです。

なので、わたくしより後に、下働きから女官にスカウトされた数人に声をかけて、まずは専任になったら任される仕事を前もって指導してから、見込みがありそうな数人を付ける事にしたのですが。

『リアさんがそこまで頼むのでしたら』と引き受けてくれた皆さんも、何故かやる気が足りないといいますが、本腰を入れてくださらないのです。

ある程度のところまでは真面目に仕事してくださるのですが、貴人女性に対してはどうしても必要になる着替えや入浴のお世話などは『あの女性にそこまで必要ですか？』みたいな流れになってしまい、せっかく指導し始めた人材が候補から外れてしまうので、ちよつと困っているのですわ。

何故でしょう。ユリア様はあんなにお優しく素敵な方なのに。

その中で、なんとか最後まで教授し終えた数人がユリア様と顔合わせを終えて、3日ほどわたくしがついて指示した後、なんとか合格と安心したので、次の日から2人ずつ交代で、ユリア様の専任につけることにしました。

拳王様がここのところ、出陣することもなく居城にとどまっていられしやる上、夜には大概わたくしをお召しになるので、指導に長く時間が割けず、ある程度からは信用して任せるしかないのです。

それでも時々不定期に顔を出して、監督するようにはしておりますけど、2日ほどそれもできずにおりまして。

ようやく顔を出せるようになって、不在のお詫びの挨拶にお伺いしようとして、ユリア様のお部屋に向かっていたところ、今日の担当に付いていた筈の2人の女官と、何故か休憩室の前ですれ違いました。

「あらっ。」

「えっ……あ、リアさん!」

「えっ? どうしてここに……」

「…少しの間、顔を出せなかったので、ユリア様に御挨拶をと思つて伺つたのですけど…あの、間違つていたらごめんなさい。」

わたくしの思い違いでなければ、今日のユリア様の担当は、あなた方ではなかったかしら？」

指摘すると2人とも、何やらしどろもどろになり、やがて1人がおずおずと、

「…あの、リアさん。」

今は、ユリア様のもとには、いらつしやらない方が…」

とか言つてきまして、これは何かあるなどピンとききました。

「今、ユリア様のもとにはどなたが？」

「そ、それは…」

再びしどろもどろになる2人の答えを聞いてはおられず、わたくしはユリア様のお部屋に向けて駆け出したのです。

…

「いくら美人でも、他の男と2人きりで部屋に閉じこもっているような女、拳王様だつて呆れて、すぐお捨てになるわよね〜」

「もしかしたら今頃自分から誘つてたりしてね。」

何せ、リアさんの目の前で拳王様に色目使うような女でしょ？

カラダ使つて男を手玉に取るなんてお手のものじゃないの？」

「ありそ〜」

その部屋の前の廊下で、何やら不穏な話に興じているのは、わたくしより前からこの居城に務めている、確かりユウガ様推しだった女官たちでした。

専任ならば話は別ですが、本来なら交代制である筈の幹部のお世話係の任で、他の女官を押し退けてまで推しのお世話を率先して行なっていた為、リユウガ様が去つた後の今はやや干され気味で、それでもお仕事はできるので、忙しい時にはわたくしが声をかけて手の足りない部分を手伝っていたいていましたが、ユリア様のお世話係として声をかけた時は、確か被せ気味に断られていた筈です。

「それは、どういうことですか？」

「リアさん!?!拳王様のお世話に戻つた筈じゃ…」

「そちらのお仕事を立て込んで少しの間来られなかっただけですわ。ユリア様に御挨拶しなければならぬので、そこを退いてください！」

「あ、待って…」

引き留めようとする2人に構わず、部屋の扉の前に進みます。

扉の把手を通すように太い鉄の棒が、門のように差し込まれており、わたくしは力任せにそれを引き抜くと、この際ノックもせず扉を開けました。

「ご無事ですかユリア様！」

殊更に声を張り上げて足を踏み入れますと、足元に多分鏡台の前にあった猫足の椅子だったであろう木片と残骸が散らばっており、驚いたように目を瞪るユリア様と、若い兵士の姿がありました。

「やはり、あなたが助けに来てくださったのですね、リアさん。」

大丈夫、わたしは何ともありません」

入ってきたのがわたくしだとわかると、ユリア様は安心したように微笑みました。

それでもやはり閉じ込められて不安だったものか、そばまで駆け寄ってきて、ぎゅつとわたくしに抱きついてこられます。

ちよつと汗ばんだ匂いがあるのは、精神の動揺からでしょうか。

とりあえずユリア様の肩越しに、立ち尽くしている兵士を睨みつけますと、彼はハツとしたように、床に両手と膝をつきました。

「申し訳ありません！」

女官の方にユリア様の着替えを、代わりに届けて欲しいと頼まれ：引き受けて手渡し、帰ろうとしたら外から鍵をかけられていて…！

で、ですが僕は指一本、ユリア様には触れておりません！

そもそも僕が好きなのはリアs」

「それを頼まれたこと自体、おかしな話だと思わなかったのですか!？」
本来ならばそれは女官の仕事であり、近くに行く用事があったからとて、兵士に頼むような事ではない筈です。

百歩譲ってそうなった場合でも、みたところ下位の兵士である彼の立場ならば直接手渡すなんて真似はせず、部屋のあるじと共に本来な

らいる筈の女官に事情を説明して、そちらに渡すのが正しい手順の筈。

何故ならこの部屋は、拳王様の伴侶となる方のために整えられたもの。

末端の兵士ごとき、その尊顔を拝むことすら、許されるはずがないのですから。

「手渡すという理由で、女人ひとりの部屋に、ずかずか足を踏み入れたことは確かなのでしょう!？」

ここにまんまと閉じ込められたこと自体が、あなたがこのかたの存在を軽く見ていた証拠ではありませんの！

それがどういふことかわからないと仰るのであれば、今からバルガ將軍に願ひ出て、新兵の訓練からやり直すべきですわ！」

それでも閉じ込められたとわかった時、それなりに脱出をはかろうとはしたのでしよう。

この壊れた椅子の残骸がそれを物語っています。

：けどこの部屋のもの全部、多分結構な物資と引き換えに手に入れたものだと思うのですがね。

この兵士の一生分の勤務ではたして贖えるのかというくらい。

とはいえ、今ここでちびりそうなくらい萎縮している彼を、これ以上追いつめるのも何ですし、彼の立場としては、たまたまそこにいてまき込まれたというか、ある意味陥れられた被害者でもあるわけ。

「いつまでそこにへたり込んでいるつもりですの!？」

わかったらとつとつと、拳王様の伴侶の部屋から出て行きなさい!!」

「!?は、はい~~~~!!」

若い兵士はぴよんと立ち上がると、逃げるように…というよりは間違いなく逃げ出しました。

まあ、多分新兵の訓練なんて受け直さないでしょう。

バルガ將軍は厳しく、悪くいえば融通の効かない方です。

この事を報告すれば新兵レベルの降格以前に、彼を拳王軍から放り出すでしょうから。

あの様子じゃあの兵士が自分から報告するなんてできそうにない

ですから、ユリア様の名誉の為にも、わたくしも口をつぐんだ方が良いでしょうね。

…と、彼が走り去った廊下に、さつき扉の前にいた女官2人が、逃げ出そうとしているところを、別の女官数人に逃走経路を阻まれておられます。

グツジョブですわ。

「…説明してくださいな。」

これがどういう事なのか」

「わ、私たちはリアさんの為を思つて…！」

「そうですか。」

わたくしは拳王様に最も信頼のおける者であるとして、拳王様が己が伴侶にと望んだユリア様を、くれぐれもと申しつけられた女官です。

そのわたくしが差配した者が、かの御方に危害を与えたとなれば、拳王様のお怒りに触れるは必定で、その責任を問われるのはこのわたくしなのですが。

その事を踏まえた上で、わたくしが納得できる説明をお願いします」

「…つーも、申し訳ありませんでした!!」

恐らく彼女たちは、同じ女官仲間から拳王様の手がついたわたくしが、その伴侶に収まることで、なんらかの益があると期待したのでしょう。

突然現れてその席に収まった(としか彼女たちからは見えない)ユリア様を追い落とせば、再びわたくしにその席が戻ると考えたに違いありません。

この事で、わたくしが逆に拳王様の怒りに触れる事など、心の片隅にもなかつたようです。

…少し考えたらわかりそうなものですけどね!

そもそもわたくし、拳王様の御寵愛を失ったわけではありませんし!

他の方々がどう思おうと、拳王様はユリア様を得てもわたくしを手

放すおつもりはないと仰り、変わらず信頼を寄せてくださっております。

そんな状況で、わたくしがユリア様を疎ましく思う理由は全くといってありませんのよ！

「リアさん…どうか、叱らないでさしあげて。」

この方々なりに、リアさんを思ってしまった事に違いありません。そうですね？」

怒りの感情もさることながら、自身の責任問題も加えて、わたくしがこの件をどう落とそうかと考えておりましたら、ユリア様が意外にもしつかりとした声で言葉をかけてきます。

そして最後には自分たちのした事によって青くなっている主犯の女官たちに、まるで女神のような微笑みを向けました。

…え、なんか後光が見える気がいたしますが、わたくしの気のせいなのでしょうか。

「ユリア様…！」

「…本当に、本当に申し訳ございません」

「私どもが浅はかでした。」

あなたが、リアさんの立場を奪ったのだと思うと、憎らしく思う気持ち止められなくて…」

「ごめんなさい！」

「ごめんなさい…！！」

ですが、その微笑みにあてられた2人は、涙を流しながらユリア様の前に跪くと、何故か拝むように両手を組み合わせております。

なんでかその周囲だけ、スポットライトのような光に照らされるのにこの光景。

「…もうよろしくですよ。」

ユリア様がお許しになられるならば、わたくしに否やはありません」

なんだか見ているのが辛くなって、わたくしがそう声をかけますと、幻視の光は何事もなく消えました。

いやなんだったのアレ。

「ですが皆さん、今日はもうこちらにはいらっしやらないで結構です。

「この後のユリア様のお世話は、わたくしがいたします」

「リアさん…」

「元々、ユリア様の女官選定の件は、わたくしに一任されておりますので。」

ユリアさまが問題にせずとも良いとおっしゃるのを幸いに、わたくしの権限にて片付けることにいたしますわ。

ですが、これまでに築き上げたと思っていた信用が裏切られましたので、わたくしが指示するまで、しばらくはこちらに近づかぬようお願いいたします」

あの兵士が部屋に踏み込んだのも、お側に控えている筈の女官が、1人も仕事をしていなかったからという事。

わたくしの目が離れた途端、あの2人が指示をして、ユリア様のお世話を放棄させたのでしょうか。

そもそも、わたくしが人選を間違えたことが原因なのですもの。

責任をとつてもうしばらくは、忙しい思いをするしかありません。

・・・

下働きの方々にお願いして、隣のお部屋のバスタブにお湯を用意していただき、ユリア様の少し脂ぎってしまった御髪とお身体を丁寧に洗ってマツサージも施し、新しい下着と動きやすさと優美さを備えたドレスを選んでお召し替えいただくと、多少汚れていても美しかったユリア様はピツカピカになって、直視できないほど眩しくなりました。

わたくしできる女官！ナイス!!

…ですがユリア様に、この2日間の状況を説明していただいて、わたくし憤慨いたしましたわ。

結局、あの門もあの時だけのものではなく、わたくしが顔を出さずにいた間、あの部屋にユリア様を閉じ込めて、水や食事を定期的に運び込むだけの世話しかしていなかったようなのです。

ドアの外から聞こえてくる話を聞く限り、あの2人が他の女官を、この部屋に来させないよう脅していたようで、思ったよりずっと悪質

だったことに頭を抱えます。

ユリア様が許してくださったからと、安易にお咎めなしにしてしまつてはいけなかったのかもかもしれません。

「申し訳づきありません、ユリア様。

わたくしの監督不行届で、お辛いめにあわせてしまいました。

：それなのに彼女たちを庇かばつて下さったこと、本当に感謝いたしますわ」

「いいえ。彼女たちの気持ちもわかりますもの。

皆さん、あなたを慕あこがっているのですね。

だから、わたしの存在が許せなかったのでしょう。

：ここに案内された日に、そういった感情をぶつけられる可能性がある事を、あのザクという方からうかがつておりましたし。

わたしが彼女たちの立場なら、きっと同じように意地悪をしてしまつたと思います」

「まあ、ユリア様が意地悪をなさいますの？」

「あら、おかしいですか？」

わたしだつて女なのですよ？」

そんなふうに通かつて、悪戯いたづらが成功したような微笑みを浮かべた彼女は、前世で読んだ物語の『ユリア』とは、やはり微妙に性格が違ちがうようです。

もつとも、わたくしが読んだのは究極に男性視点の少年漫画であり、そこに登場する女性たちの内面全てを、描写しきれていたわけではないのでしようけれど。

：女心おんなこころつて、ひとつではありませんものね。

女として生きてみなければ、決してわからなかった事のひとつですわ。

「：けれど、ただの意地悪とみるには悪質あくしつすぎますので。

女官の選定については、今一度人材を厳選せんせんさせていただきますわ。

わたくし一人ではご不自由ごふじゆうをかける事と存ぞんじます、もうしばらくご辛抱ごしんぱうを…」

「それなのですけど、いまの方々、明日もう一度、顔を合わさせていた

だくわけにはいきませんか？」

「え？それは…」

「お願いします。」

…もしかしたらですが、仲良くなれそうな気がするのです。

わたしの目が曇っていなければ、ですが」

…曇ってるだなんてとんでもない。

眩しいほどキラツキラの瞳で見つめられてそう言われれば、わたく

しは領かないわけにはいきませんでした。

あざとい！あざといですわユリア様！！

判っているのに逆らえない！何故！！

☆☆☆

次の日。

渋々ながらもユリア様のごいつけ通り、主犯の女官の2人をユリア様の前にお連れして、しばらく様子を見ておりました。

ですが、わたくしが拳王様の御用で呼び出され、仕方なく護衛を監視につけて席を外し、大急ぎで用事を済ませて戻った時。

なんだかすっかり打ち解けた様子の子の女官達とユリア様が『特殊な掛け算のお話』とやらで盛り上がっておりました……ってだからなんなんですかのそれ!!? 教えて！

その時、彼女たちは
真・そして私の覇業への道へ1

私の涙ながらの嘘八百を信じたラオウにより、拳王軍が退却していき、もう戻つてはこないであろう場所まで小さくなつた背を見送つた時、急に膝の力が抜けた。

地面に頽れる寸前で、もはや感触に慣れた腕が私を支える。

そのまま私を抱きかかえたシンと顔を見合わせると、途端に濁いた笑いがこみ上げた。

それがそのまま、なにかしゃっくりのような嗚咽のような、よくわからない声になる。

臓腑を押し潰すような気迫と、今の今まで真正面で対峙していたところから解き放たれ、私は少し感情の動きがおかしくなっていたらしい。

笑いたいのか泣き出したいのか、それとも叫びたいのか暴れ出したのか、自分でもまつたくわからないまま、私はシンの首筋にしがみついた。

…瞬間、自分が震えているのがわかった。

ああそうか。私は恐怖していたのだ。

シンはそんな私を一度抱え直すと、自ずと近くなつた耳元に、息を吐くように囁いた。

「よくやったな。【マツリ】」

…それは久しぶりにシンの口から聞いた己の名前だった。

...

「……シン、ちゃん」

「…いい、立ち上がるな。」

こんな時くらい、おれに甘えろ」

『KING』の居城内の、私とシンの寝室で、私の世話をしようとする女官を追い出したシンは、ベッドに座らせた私の靴を脱がせながら、こちらを見上げて微笑んだ。

「…マツリ。なにか、欲しいものはないか？」
「ん？」

唐突に問われた言葉の意味を、一瞬理解できなかつた私は、反射的に問い返す。

普段は目にしない、見下ろす角度のシンが、何故だか新鮮に私の目に映って、もう慣れた筈なのに一瞬ドキリとした。

「今、おれはおまえを、滅茶苦茶に甘やかしたい。

おまえは怒るかもしれないが…何というか、惚れ直した。

あのラオウを前に一步も退かず、嘘八百並べて追いついておきながら、直後に腰抜かしてる今のおまえが、おれは愛おしくてたまらんだ。

なんでもいい、強請れ。

どんなものも、おれの力の及ぶ限り手に入れてやる。

愛している、マツリ。

おれの最愛、おれの女王。

…言つたらう？

おれは、惚れた女には尽くすタイプだと」

…欲しいものと言われても。

私たちが『K I N G』を立ち上げて周囲の街や村を取り込み、またエネルギーの有り余っている野生のヒヤツハーを取り込んで有能な労働力としたことで、巨大な街となった『サザンクロス』は、シンが私を女王と仰ぐ、私のための街だった。

シンは最初は物語の通り、武力だけで組織を大きくしようとしており、街を作ると決めた時も、近隣から攫ってきた住民を、取り込んだヒヤツハーに管理させて労働力にするつもりだったらしい。

『おまえの為だ』という言葉であくまでも押し通そうとするシンに対して、この時はさすがに私も怒り、『ユリア』として彼と共に出奔して以来、初めての喧嘩に発展した…いやその話は今はいいが、結局は前述した通りの運営をすることで、『サザンクロス』は人やモノが安全に行き来する街となって、今や大抵のものはここで手に入るのだ。

だから、私の身の周りには必要なものは全て揃っているし、シンは

私が欲しいと言わないうちからドレスも靴もアクセサリーも最高級品を揃えてくれて、つまりはこれ以上欲しいものと言われても、すぐには思いつかないということだ。

ああ……でも。

「…強いて言うなら、シンちゃんが欲しいわ」

「……………っ!？」

その言葉は割と考えることなく、するりと口から出てきた。

驚いたように私を見つめるシンに、その瞳を見つめ返しながら、更に言葉を紡ぐ。

「私も愛してる、シンちゃん。

あなたがそばにいてくれれば、私にそれ以上欲しいものなんてないの。

だから、あなたが一番欲しい。

これまではどこに居ても私は『ユリア』でいなければならなかったから、これからは『マツリ』に、『シン』をちょうだい」

『KING』の伴侶であり『サザンクロス』の女王である私は、『誰が聞いているか判らないから』とこれまでずっとボロが出ないように、シンには私のことを『ユリア』と呼ばせてきた。

そしてそれに従ってくれたシンの、私に童貞臭い愛の言葉を囁きながらの『ユリア』呼びに、そう言ったのは私であるにもかかわらず、少しずつ傷ついていたのも事実だ。

…心の底でずっと不安だったのだ。

シンは私を通して、やはりユリアちゃんを想っているのではないかと。

私は彼にとっても、ユリアちゃんの身代わりでしかないのではないかと。

だからさつき、シンの口から『マツリ』の名を呼ばれた時、もっと聞きたいと思った。

本当の名前を呼んで、愛していると何度も囁かれたかと思ってしまった。

「……………それは反則だ、マツリ。

可愛すぎて、我慢できそうにない」

：だから、そんなささやかな望みを口にした後の、シンの行動は予想外だった。

腰かけていたベッドに私を唐突に押し倒し、覆い被さってきたシンは、突然のことに戸惑う私に、熱い吐息と共に告げる。

「おれが欲しいと言ったのはおまえだぞ、マツリ。」

この後最低まる1日は、寝室から出られると思うなよ」
「へっ?」

いや待って、そういう意味じゃ…!

いや言っただけど!確かにそう言っただけど!!」

この後めちやくちy【以下自主規制】。

しばらく おまちください

：恐らくシンは、私が秘めていた心の揺れに、ずっと気がついていたのだろう。

寝台に引き倒されてのあんな事やこんな事の間、シンはこれまで呼べなかった分の埋め合わせとばかりに、何度も私の名を呼んでくれた。

最後に私をきつく抱きしめて、名を呼びながら私の裡に達した時には、私の中から、これまで抱いていた不安は、全て溶けて消えていた。

……ただ、御丁寧に私の名前付きで、その瞬間瞬間の私の状況や身体反応を、いちいち実況されるという拷問のようなオプシオンは別に要らなかった。

人形を作らなくても、シンはやっぱり変態だと思う。

☆☆☆

あの恐怖の邂逅から半刻ほどまえ。

今は無理でもいつかはこの街に、核戦争前には当たり前前にあった、花と街路樹をたくさん植えたいと、2人で話しながら歩いていたら、彼らは不意に現れた。

「おまえたちは…!」

警戒を頭に私を後ろに庇おうとするシンの、服の袖を軽く引つ張つて、先制攻撃を封じてから、私は彼らに向かって頭を下げる。

「大丈夫よ、シン。」

「…お久しぶりにございます、リハク様、トウ姐さん、フドウ様」「うむ、マツリ。そなたも息災のようで何より」

彼らを代表して、最年長であるリハク様が私に言葉を返してください、私はもう一度頭を下げた。

何せ、厳密な階級自体は存在しないものの、ユリアちゃんの影として育てられた私にとっては、彼らは一応上司に当たる方々なのだ。

私の態度と言葉に、彼らの正体を悟ったシンが目を瞠く。

「…では、この者達が、本物のユリアを守る五車の…」

「山のフドウ」

「海のリハク」

「その娘トウ」

…正確にはトウ姐さんだけは、南斗の巫女としての私の先輩というだけで五車の1人ではないけど、どちらにしろ南斗六聖拳伝承者の1人であるシンから見れば、同輩の部下くらいの位置付けになるだろう。

「…その五車星が何の用だ。」

見ての通り、ここに『貴様らの』ユリアはおらぬ」

「わかっております。」

ユリア様とケンシロウ様は、我らのもとで既に保護しておりますゆえ」

「あちらの城門の方に、炎のシュレン様と風のヒューイ様もいらっしやいますね。」

多分門の外の見張りをしてくださっているのでしょうか。

つまり…：…とうとう、その時が来たと?」

「さすがに察しが早いな、マツリ。」

そうだ。恐怖の暴凶星が近づいている」

割と子供の頃から知っているフドウ様が、普段あまりしない顔でそう告げる。

…まあこの方、初めて会った時はもつと恐い顔してたから、今の顔はキリツとしてるだけで、全然恐いとは思わないけども。

「なに…まさかラオウが？」

「いつかはこの日が来る事を見越して、『シン』が『ユリア』を奪って逃げたと、噂をわざと流したのはあなたの方でしょう？」

お陰で、本物のユリア様は全くのノーマークで、着々と表舞台に立つ準備を進めているけれど、それでもサザンクロスの『ユリア』が本物でないことは、実際にラオウと顔を合わせてしまえばすぐにわかっ
てしまう」

心配そうに、主に私に向かって言うトウ姐さんは、以前と比べてちよつと痩せた気がする。

確か私たちが出奔する頃、体調を崩して巫女の仕事もお休みしていた筈だから、もしかしてまだ本調子ではないのかもしれない。

「ここまできて、この『ユリア』が偽物であると、奴に知られるわけにはいきません。」

シン様。どうかマツリを、我らにお引き渡してください」

そしてリハク様が、私ではなくシンにそれを告げると、シンはハツとして、反射的に私を腕に抱きしめた。

「…そうですね。頃合いかもしれませぬ。」

そろそろ逃げ回るにも限界を感じていたところですよ」

「なんだと…?!？」

リハク様を睨みつけるシンの腕の中から私がそう言うと、シンは一瞬、信じられないものを見るような目で私を見下ろした。

ので、慌ててフォローを入れることにする。

まったくもう。可愛いやつだよ。

「勿論、その提案には頷きませんが、シンと共にこのサザンクロスを築き上げた時から、ずっと考えていたのです。」

サザンクロスを、一旦『ユリア』の墓標にしてしまおうと」

「それは…まさか」

「シンに連れ去られてすぐに『ユリア』は病を得、更に愛する人と引き離された絶望も加わったことで、旅の途中にて儂くなったのです。」

ここにいる私は、その亡霊。

シンが『ユリア』を亡くした事を受け入れられずに『ユリア』だと思ひ込んだ、そんな彼をずっと恋慕ってここまでついてきた、幼馴染の女なのです」

それは、本来の物語に倣った壮大な嘘。

詳しくは描かれなかった話だが、サザンクロスを急襲したラオウが、シンの口からユリアが死んだと聞かされた時に、シンが腹いせに殺されなかったことは、その後のケンシロウとの再会と戦いがあったことでわかっている。

つまりは、私たちがラオウと対峙して生き残る為の、一番確かな道筋である筈。

ただ、今それを知っているのは、多分私しかいないけれど。

「……リハク様。私は、シンから離れません。」

たとえ暴凶星の怒りにこの身を引き裂かれたとしても、最後まで身も心も、シンと共に在りたいのです」

言いながら、私を背中から抱きしめるシンの腕に、そつと手を添える。

見上げて合わせた視線に微笑むと、仕方ないな、と唇だけがそう動いたのがわかった。

「……『ユリア』。」

おれも覚悟を決めたぞ。

死ぬ時は共に。おまえ一人を死なせはせん」

「シン……」

この期に及んで呼ばれた名前がそれだったことに、少し心が傷んだけれども、それを悟られまいと私はシンに向き直り、その胸に顔を埋める。

シンは改めて私を抱きしめ返し、私の耳に口づけを落とした。

くすぐったいけど嬉しい。シン、大好き。

「……盛り上がっているとこ悪いんだが。」

ラオウの軍勢が、本当にもうすぐそこまで来ている」

……と、ちよつと言いつらそんな感じでシュレン様が入ってきて

て、私たちは慌てて身体を離し、居ずまいを正す。

なんか先にいた3人から、ほっとした空気が流れたのは気のせいだろうか。

「…2人とも、本当にそれでいいのだな？」

一旦咳払いした後、リハク様が確認をするのに、私とシンは頷いた。

「ああ。我ら2人、ユリア殺しの汚名、敢えて被ろう！」

「ユリア様とケンシロウくんにお伝えください。」

私たちはたとえ星となっても、きつと心はあなた方と共にあると

…そして、話は冒頭に戻る。

いや戻らんでいいんだが、一応。

☆☆☆

こうして、拳王軍の来襲という禍をやり過ごし、生き延びた私たちは、この顛末を見届ける為に残っていた風の旅団と繋ぎをつけて、ユリアちゃんに言伝ことづてを頼むことにした。

(本当は手紙を書きたいところだったけど、この時代文字を書けるような紙が結構貴重であることと、文書として残した場合、万が一拳王軍やその他敵対勢力の手に渡れば、ユリアちゃんが危険になると考え、敢えて言葉で伝えてもらうことにした)

私たちが生きていることと、今後『K I N G』は南斗の将に恭順するということ。

ついでに『サザンクロス』を南斗の将に譲渡する意志があること。

ユリアちゃんが今後、将としての活動をするにあたり、既に拳王軍の襲撃を受けたあとのサザンクロスを拠点とすれば(元々サザンクロスの女王は私が名乗る『ユリア』であると周知されているから)私を影武者として立てることができ、今まで通り本物のユリアちゃんの存在を隠せるという提案を。

そして、再会の日はやってきた。

「ユリアちゃん！」

「マツリさん…よく、無事で」

運命が…激しく動き始めた事を、この時の私はまだ知らない。

真・そして私の覇業への道々2

サザンクロス。

新興勢力である『K I N G』が作り上げた、まだ歴史の浅い街だが、近隣の街や村との間に街道を整備した事もあり、今では物流の要としてだけではなく、実は密かにこの世界で、一番安全とまで言われる街である。

：うん、まあ私たちがそう作ったんだけど。

だってせっかく街なんだからガワだけじゃない、人々が行き交う場所にしないと意味ないじゃない？

なので今日もそこに様々な旅人が行き来しているが、そんな日常的な光景が、今日の私たちにとっては特別になった。

「ユリアちゃん！」

「マツリさん…よく、無事で」

五車の旅団が旅の商人とその護衛一行様にカムフラージュして連れてきたユリアちゃんが、私のハグに応じて涙ぐむ。

私とシンが拳王軍と相對した顛末は、当然五車から聞いている筈で、私は守らねばならない人に随分と心配をかけてしまったのだと、改めて感じた。

それは申し訳ないと思うと同時に、嬉しいと言う気持ちも呼び起こした。

やはりユリアちゃんは変わらないなあと。

自惚れて良ければ、私はユリアちゃんの中でまだ、ケンシロウくんと同じくらい特別なんだと思っけていいんじゃないかなと。

ちなみに私の隣にいる（筈の）シンに対しての扱いはガッツリ空気である。

核戦争前の学舎で色々と意地悪をされた恨みは消えていないらしい。

「ユリアちゃんが五車を派遣して拳王軍の動きを警告してくれたから、こちらの被害が最小限で済んだのですよ。

本当にありがとうございました。

おかげで生きた街の姿を保ったまま、こうしてあなた達をお迎えできます。ね、シン？」

「そうだな。少なくとも一般市民の被害がゼロで済んだのは、事前情報のお陰で避難誘導の時間が取れたことが大きい。

…そんな目をするな。

本当に感謝しているのだから」

さりげなく空気を変えようとしてシンに話を振った私の作戦は、どうやら失敗に終わったようだ。

シンが口を開いた瞬間、ユリアちゃんがなんなら養豚場のブタを見るような目でシンを見たのを、私は見てない。絶対に見てない。

それはさておきあの日、拳王軍の来襲を聞かされた私たち『K I N G』は、かねてより用意していた避難所（元々この地区にあつた核シエルトターを改装したもの）に彼らを隔離してから、この日の為に訓練してきた『一見』迎撃の体制を整えることができた為、若干建物等に被害が出た以外、一般市民の死傷者は皆無という結果を出すことができた。

とりあえず一旦戦闘となつて敢えて拳王軍に負けた上で、ここにはあなたの求めるものはないとわからせて軍を退かせる作戦だったから、本気で事を構えるわけにはいかなかったのだ。

だからといって全くの無抵抗で迎え入れてもそれはそれでラオウの怒りスイッチを連打することになるので、そのさじ加減が難しかったけど、一見血の気の多そううちの四天王が、意外にも私たちの意を汲んでくれて、うまい具合に流れに導いてくれたので助かった。

もつとも約1名、本人の抱えた地雷（北斗剛掌波）により途中から目的を忘れて冷静さを失った挙句、ラオウの闘気（北斗剛掌波）ひとつで道端のゴミを焼却するよ
うな勢いで始末されたが、アイツのおかげでこちらが攻撃に手を抜いていることがバレなかったともいえるので、ある意味尊い犠牲と言えよう。

なので、一応は街を守つて死んだ英雄として扱い、近いうちに中央広場に銅像を建てる予定ではある。

え？誰か今やめろって言った？空耳かな？

『英雄』の存在は、隠したい裏事情を誤魔化す為にも必要なんだよ？

……話が逸れた。

とりあえずシンには五車の旅団の皆さんを、落ち着ける場所に案内する側に回ってもらおう事にし、私はユリアちゃんをこれから過ごしてもらおうお部屋に案内しながら話を続ける事にした。

一応ここからはトップ会談となるのでちようどいいだろう。

この先、『KING』は南斗の将に恭順する形をとるので、南斗の将であるユリアちゃんが、このサザンクロス（街の名前も後日改めるつもりだ）の主となる。

「ところでケンシロウくんは？」

「一緒には来ていないのですか？」

「伝令は出しているのですが、いつになるかは未定ですが、この街で落ち合う予定になっています」

しばらく会えていないので楽しみなのです、と少しだけ寂しそうに笑ったユリアちゃんにどういふことかと問うと、思ってもみなかった話を聞くこととなった。

☆☆☆

あの日。

シンがジャギの策略に踊らされずに私との未来を選び、ユリアちゃんとケンシロウくんが、無事に旅立った日の翌朝。

ケンシロウくんは不思議な夢を見たそうだ。

それは触れるほど確かな、そして壮大な夢で。

ケンシロウくんはその中で、もうひとつの人生を追体験したのだと。

シンにユリアちゃんを奪われて傷を負い、彼らを追って旅に出たこと。

その旅路で出会った、小さくとも大切な存在に、僅かに、けど確かに心癒され。

やっと見つけたかつての友との戦いと、告げられた最愛のひとの死。

そこからの旅路と戦い、友情、そして再び巡り合った愛と、今度こそ本当の別れ。

そこから新たに始まる戦い、その中で紡がれる友情、絆、そして宿命。

それはまさしく私の知る、彼が本来進むべき未来の物語だった。

その激しく哀しい人生を巡って目覚めた朝。

ケンシロウくんの胸には、夢でシンにつけられたのと同じ、北斗七星の七つの傷が浮かび上がっていたのだという。

まるで聖痕のように。

否、それはまさしく聖痕であったのだろう。

ユリアちゃんの治癒能力をもつてしても、その傷を消すことはできなかったのだから。

そんな驚きもありつつ、道中まるで何かに守られているかの如く何事もなく、ふたりが目的地であったユリアちゃんの故郷に着くと、待っていた五車の男たち（といっても、当然のようにジユウザ様は居なかつたらしいが）によりその身を保護されると共に、ケンシロウくんには夢で巡った場を現実でも巡り、苦しむ弱き人びとを救う旅をすべきと、『海』のリハク様に送り出された。

こうして彼は一度ユリアちゃんとは離れ、原作通りこの世の救世主として立ち、様々な出会いと別れを経験することとなる。

・
・

「救世主などと呼ばれても救えぬ者の方が多い、哀しみも多い旅だったが、それでも立ち止まる事は思いもよらなかつた。

別れの時のあなたの言葉がおれを：俺たちを支えてくれた。

立ち止まれば、それは死に繋がる。

おれは決して死ぬわけにはいかぬ。

おれの為す全てのことが、未来のユリアの幸せをつくるのだと。

おれが生きて在ることが、今のユリアの幸せであるのだと。

そう信じて前を向けるほど強く、あの言葉が今も、おれとユリアを支えてくれているのだ」

後日、サザンクロスに拠点を置いたユリアちゃんのもとによろやく

戻ってきたケンシロウくんは、涙ながらに胸に飛び込んできたユリアちゃんを腕に抱き、微笑みながら私にそう言った。

そんなケンシロウくんの姿は、かつてのどこか頼りなげな友人の面影はなく、この世の哀しみと涙を一身に背負った、まさに聖人のように、私の目に映った……が。

別れの時の……って私、なに言っただけ？

少なくとも、彼らの人生の指標になるほどたいそうな事言った覚え、マジでないんだけど？

あと、私にそれらのことを語ったあと、『夫婦揃ってひとの女を口説くな』とシンに冗談混じりに小突かれたケンシロウくんが、ちよつと複雑な表情をしていたのは見なかったことにしておく。

その上で私もあくまで心の中だけでつつこんだけど、『オマエが言うな』と。

真・そして私の覇業への道く3

…さて。

時間はユリアちゃんとの会談の席に戻る。

なんというか、ちよつとすごい話聞いちゃった後、何となく圧倒されていたら、うちの女官さんのひとり冷たいお水を持ってきてくれたので、一旦2人とも喉を潤す事にした。

「ではユリアちゃん、今、身体の調子は…?」

ひと息ついてから、ずつと気になっていた事を訊ねてみる。

実のところ、ケンシロウくんの夢の話聞くまでは、この話題をどのように切り出すべきか迷っていたのだが、今ならば不自然な流れではない筈だ。

案の定、そう問われたユリアちゃんは怪訝な顔をすることもなく、微笑みながら頷くと、私が欲しかった答えを返してきてくれた。

「ええ。ケンがわたしの病を教えてくれたお陰で、症状もない段階ですぐに治癒を施しましたから、今はもう何ともありません」

「良かった。ユリアちゃんの不思議な力はわかってるつもりでしたが、それをちゃんと自分に使ってくれるかだけが、本当に心配だったのですよ」

…今思えばこの時の私、ユリアちゃんが病を克服したと聞いた瞬間、安心して気を抜いたのだと思う。

流れ的に不自然というわけではなかったものの、注意して聞いていれば明らかに、今聞いたことに対するコメントにしては、実感がこもりすぎていた。

…そしてユリアちゃんはその、『注意して聞いていた』人だった。

「…つまり、ケンの夢の話聞く前から、マツリさんにはわかっていたということなのですね」

「えっ!?!」

伏せ気味の長いまつ毛に縁取られた瞳が真っ直ぐに私を見つめ、睨んでいるわけでもないその視線の圧に、瞬間たじろいだ。

ついでに飲んでいた水がちよつと変なトコ入って咳き込む。

ユリアちゃんはそんな私の反応に、困ったような笑みを浮かべた。そうして次に紡がれた言葉は、南斗の巫女の一人でありながら、ユリアちゃんの影として育ってきた私には、衝撃的な話だった。

「……マツリさん。」

わたしの未来視は、今は揺らいでいます。

幾つかの星の、確かに見えていた筈の未来が、今は遥かに遠く、臃げです」

…それは、『南斗の将』の証である筈の能力を、喪失しかけているという告白だった。

ユリアちゃんにとってある種のアイデンティティだった筈のものだ。

単に物語を知っていただけの私がそうであると誤解されて、南斗に育てられるに至ったことから、それがどれほど『南斗』にとって重要な事であるか、推して知れるというもの。

もっとも、それはあくまで将の宿命のもとに生まれた者が、副次的に持つ能力であるというだけで、その能力の喪失がユリアちゃんの将たる資格に、即時影響するというわけではないのだけだ。

それでも下手すりゃ先ほどのケンシロウくんの夢の話よりよほどショッキングな事実には、覚えず身体が震えるのがわかった。

「そんな……！」

そんな私に、ユリアちゃんは身を寄せて、膝に置かれた私の手の甲に、その滑らかな手を重ねる。

優しく握られたその手から、何か温かいものが流れてきた感じがして、その温かさが何故か私の動揺を押し流し、身体の震えが止まるのがわかった。

「…逆に、治癒の力だけは以前よりも強くなりましたが、何故なのかはずっと判らずにいました」

先ほどよりも近い距離から、ユリアちゃんの穏やかな声が耳に届き、一拍遅れて、言葉の意味が頭に入ってくる。

………過去形？

「今は…判っているというのですか？」

それは、私が聞いていい話ですか?」

私が顔を上げて目を合わせると、ユリアちゃんは微笑んで頷く。

「わたしの中では、ケンとマツリさんにしか聞かせられない話です。

ケンが旅に出た後、シンが『ユリア』を攫った事になっているという噂があると、五車がわたしに伝えてくれました」

そう言うってから一旦息をつき、『ただの噂でも不愉快でしたが』と小さく呟いたユリアちゃん言葉は聞かなかったことにする。

今は私がいるとはいえ、初恋の人にここまで嫌われているシンがとて不憫に感じた。

うん、あとで頭でも撫でてやろう。

理由も言わずそんなことをしても、『なんだ?』って反応するだけだと思うけど、アイツ私にそうされても嫌がりはしない、筈。

「どういう事だともちらも少々混乱しましたが、すぐにシンの隣にいる『ユリア』がマツリさんだと気がついて、ああそういう事かと腑に落ちたのです。

マツリさんが、わたしの名を背負う決断をした事によって、本来なら起きていた悲しい運命を塗り替えたのだと。

それはつまり、わたしの宿命を、マツリさんが共に背負ってくれたという証」

.....はい?

私がちよつとシンのことを考えて意識を飛ばしている間に、ユリアちゃんの話がなんかとんでもないところに行っていた。

いや絶対違うと思いつつ、ユリアちゃんは私に、口を挟む隙すら与えず語り続ける。

「わたしは『南斗の将』としての己の宿命を、今はすべて受け入れていきます。

けど、わたしも、一人の女ですから。

遍く愛で世の人々に平和をもたらす。

皆が幸せになる世界をつくる。

けれど、そこにわたし自身の幸せは?

愛するひとと共にある、ただそれだけを望むことが、わたしにとって罪なのか。

そう考えて、本心では何故わたしだけがと、その宿命を恨んだ事もあるのです。

…でも、『南斗の将』は一人ではなかった。

それがわかったから、こんな宿命も受け入れることができました」

「あ、あの……ユリアちゃん？」

「もはや『南斗の将』はわたしとマツリさん、ふたりでひとりなのだと思います。」

ならば、あなたが生きていく限り、わたしもまた死ぬわけにはいかない。

北斗と南斗を結び、この時代の涙を微笑みに変えて、それを更なる未来に繋げていく為に。

わたし一人では不安でしたが、マツリさんと一緒なら、必ず成し遂げられます！」

「え、えええ……？」

「ふふ、逃がしませんよ？」

…マツリさん。南斗の将は何をすれば良いですか？

あなたの思う通りに、わたしを使ってください。

あなたに見えている、新しい未来のために」

…かつて少女だった日の学舎で、うっかりあの黒歴史ノートを見られて、先が知りたいと頼んできたあの日と同じくらいキラキラした目で、私の手をしっかりと握ったユリアちゃんに、私は逆らえずに反射的に頷いていた。

☆☆☆

「なんとなく、そういう事になるんじゃないかと思っていた。

おまえはなんだかんだで昔から、何事にもユリアが一番だったからな」

ユリアちゃんとのトップ会談を終えた後、シンに状況を説明したら、どこか呆れたような口調で頭を撫でてくれた。

それは私がする予定だったのに……と残念に思いながら、今だけは猫

になったような気持ちで、私は彼の膝に、頭だけでなく上半身を預けた。

「否定はしないけど。

けど、ユリアちゃんが私の『一番』なら、シンちゃんは私の『唯一』ね。

私がこんなふうには、疲れた身体を預けられるのはシンちゃんだけだもの」

猫ならゴロゴロ喉を鳴らしてるくらい、シンの膝は硬くても何故か居心地がいい。

シンはそのまま、私の頭から背中を撫で続けてくれ、その手の温かさと心地よさに、いつしか私はそのまま眠りに落ちていた。

「…マツリ。おれの女王。

おまえの望むままに。

おれはただ、この愛に殉じるだけだ」

夢うつつに、シンの声がそう言った気がした。

☆☆☆

…というわけで。

ただ好きなひととの幸せを求めただけの私が、なぜか南斗の将の人として、最終的にはこの世界の覇権を目指すことになってしまった…いや待って無理ゲーでしょコレ！

愉舵・いつか迎える最高の晩餐〜1

ある日の午後。

わたしの夫の血迷った発言から、全ては始まった。

「拳王軍と、同盟を結ぼうと思っている」

「……………は!?」

「か、勘違いするな!」

レイを裏切るつもりでは断じてない!!」

ユダの纏めたヒヤツハー集団は、現在UD軍という名(本来の綴りは“Judass”のだが、ユダ的にはヒヤツハーにもわかりやすいようにとの命名で、敢えて頭文字じゃなく真ん中使ったらしい……余計判りにくいわ!)で、この地域の町や村を支配している。

……などと言うと些か聞こえは良くないが、同じ小さな村でもある程度大きな組織の庇護下にあるそれと、そうでない場合を比べたら、住民の生活の安全度は雲泥の差なわけで。

わたしやレイの実家のある村や、レイがママヤさんと暮らす村などは特に嚴重に、UD軍の兵士たちが常駐して守っていてくれるので、野盗たちの被害を受ける可能性は確実になくなったと言っている。

もつとも、二村とも最大の危機は既に回避された後ではあるのだが、だからこそその予期しない事態には、できるだけ備えなければならぬのだ。

……ところで、わたしも前世の記憶を取り戻して初めて気がついた事なのだが、一杯の水を巡って殺し合うくらい水が不足しているこの世界とはいえ、水は決してなくなったわけではない。

単に地下に潜ってしまったそれを、掘り出す技術も道具もないというだけなのだ。

何せ、かつては上水道がごく一般的に使われていた世界、いちいち汲み上げなければならぬ井戸などは、余程の田舎でもなければとうに廃れてしまっていたし、それに必要な重機など、数えるほどしか残っていない。

それを扱える人材も言わずもがな。

地下に水があると判つても、それを掘り出す作業を人力で行なうしかないのであれば、最低でも数十人の男手が必要になる。

が、そんな井戸を掘るといふ大掛かりな工事も、力を持って余している屈強な男たちを派遣すれば、ものの数日で片がつく。

ヒヤッハーも人の子というか、感謝される事で悪い気はしないらしく、最初の頃こそ怯えていた村人との関係も、今は良好らしい。

僅かながら、ロマンスが芽生えた事例もあるとかないとか？

本人たちが幸せならばそれでいいけど。

今レイが暮らしているマミヤさんの村は、核戦争後に奇跡的に、使える状態でまだ残っていた重機を見つけたマミヤさんのお父さんが、やはり奇跡的にそれを使える技術の持ち主であった事で、そこから井戸を掘る事を思い立ち、それがひいては村づくりのきっかけとなったのだそうだ。

：そんなひとを、本来の話の流れなら、自分の夫が殺してしまっていたのだと思うと、背筋が寒くなるが。

原作と違い今もご夫婦共に健在であるその方は、レイとマミヤさんに村長の仕事はすっかり任せて、やはり近隣の町や村に夫婦で出向いて、井戸を掘るお仕事の監督責任を任されていると聞いた。

勿論出張の際は、我がUD軍から腕利き数人を、護衛兼重機運搬係として随行させている。

ユダの妻であるわたしの縁者(わたしの兄の義両親)である以上、この待遇は当たり前なのだそうだ。

ありがたいことである。

閑話休題。

先だつて行われた南斗サミットに於いて、和平派が多数を占めたにもかかわらず、本来は南斗の最大戦力である筈の南斗鳳凰拳のサウザーが、聖帝を名乗って進軍に乗り出し、その威信を示す為の聖帝十字陵の建設に、子供たちを集め始めたのは、それからすぐの話だった。

それより少し前から拳王軍が勢力を拡げており、今はそのふたつの勢力が睨み合う事で、均衡を保っている状況だ。

「時流というものがあるのだ。」

ある程度はそこに迎合していかねば生き残れん」

「同業大手大企業による吸収合併を苦渋の選択で受け入れる中小企業主みたいな言い方すんな」

一応つつこみはするものの。

わたし達のUD軍も、そこそこの武力で近隣地域を支配してはいるが、確かに奴らの勢力と比べたら、それはグレートデーに吠えかかるポメラニアンのようなもの。

潰されない為にも、少なくとも敵対しない方向に持っていくのは、決して間違つてはいないのだが。

「といふかなんで拳王軍？」

南斗的には、聖帝軍の方が都合が良くない？」

「…サウザーは、同盟など受け入れまい。」

アイツはひとの話を聞かない性格だ。

そもそも個人的に、俺がアイツを好かん」

「その理由!？」

確かに正史の物語において、南斗の乱れた原因が、ユダが拳王軍に与した事だった筈だが、それがそんなしょうもない理由だったなんて。

いや、でもこれはまずい。

ここでユダの言う通りに拳王軍と同盟なんか結んだ日には…まあ今更、ユダとレイが戦うような事態になりはしないだろうけど、何かの拍子に物語の強制力で、結局は南斗を崩壊に導く結果になりかねない。

「ほら、とりあえず同盟よりも、今は互いに不干渉って約束を取り付けた方が良くない？」

下手に傘下に入つて、要らない戦いを呼び込むのは避けたいし」

とりあえず、そう提案してみる。

わたしの兄レイにとって、ラオウは死神だ。

できることなら関わらせたくない。

というか、わたし同様この時代で幸せを見つけた兄を、そもそもケンシロウと知り合わせたくない…というのは些か言い過ぎだろうか。

そつちはきつかけのひとつは潰してあるし、大丈夫だとは思うけど……

「確かにそうか。」

だが拳王の方にはそれでなくとも一度、挨拶には出向かねばならん。

：俺たちの結婚式の前に、村に襲撃をかけてきた賊どもを覚えているな？

あやつらの頭リーダだったあの仮面の男が、調べたところどうも拳王の縁者：義弟だったようだな。

このまま何も言わずにおけば、俺たちUD軍が、拳王軍と敵対する意志を示したと誤解されかねん」

あー：と、ユダの言葉を聞きわたしは納得する。

物語の中でのラオウは、ここで仮面の男と称されるジャギに対して、弟としての情は抱いていなかった筈だから、それを知るわたしには及びもつかなかった考えだが、彼ら兄弟の関係を知らないユダからすれば、確かにその結論に至らざるを得ないだろう。

だから、ユダ的にその話を糸口とすることで、拳王軍に恭順するか、うっかり手にかけてしまった弟のことは目こぼししてほしい、という方向に持っていくつもりだったらしい。

だが、それだとしてもこちらが下手に出る事になり、結局は傘下に入らざるを得ない。

今だけならそれで生き残れても、物語終盤で台頭してくるのは、『南斗の将』率いる勢力。

対して、UD軍の将は南斗紅鶴拳の継承者であるユダと、その妻たるわたしは南斗水鳥拳継承者であるレイの妹で。

バリバリに南斗のバックボーン背負ってるわたし達が、将来的に南斗の将と敵対する勢力に与するとか、控えめに言ってもかなり避けたい事態だ。

……よし。かくなる上は。

「…ユダ、わたしの事を愛してくれているわよね？」

「ん？突然なんだ？」

そんな事決まっているだろう。

俺はアイリを、心から愛しているぞ？」

「だったら何故、わたしを奪おうとした男を返り討ちにした事くらいで、その男の兄なんかに対して、下手に出ようとするの？」

あなたにとつてのわたしの価値はその程度なの？」

「……っ、それは」

「……そうね。わかっているわ。

UD軍全体とわたし一人の価値なんて、比べようがないものね。

わかっているけれど……少し、残念だわ」

「そんなことはない！

俺にとつてアイリはこの世界の太陽！

アイリを失ったら俺は生きていけん！！

……そうだ。

拳王の弟が俺のアイリを奪おうとして、こちらにもそこそこの被害が出たのだ。

やつに対して、どう責任を取るつもりだと、詰め寄ったところでおかしな話ではない」

「むしろその件をきっかけとして交渉に持ち込み、こちら側への不干渉を勝ち取れば、傘下に入る事なく今後、少なくとも拳王側に対しての警戒を、当分はせずに済む事になるわ。

勿論、そこはあなたの口八ちよ……交渉術次第という事になるけど」
「フツ、忘れたか？」

俺は妖星、智略の星の男。

その程度の交渉、難なく進めてみせよう！

アイリ、おまえへの愛の証明の為に！！」

「ユダ……！！」

わたしはうつすらと涙を浮かべながら、ユダの胸に飛び込んだ。
ちよろい。

……ユダは後日、拳王の遠征先に乗り込むと、『拳王軍とUD軍は互いに不干渉』という契約を、見事に勝ち取ってきた。

「確かにこの時代、他人の女を奪おうとするなら、殺される覚悟で挑む

のが筋。

それで殺された弟のことに、おれが責任を負う義理もないが、同時にその件で、うぬに対する遺恨も別段、感じぬわ。

望みはその程度で良いのであれば、その口車、敢えて乗ってやろう。だがこれより後、二度とおれの前に姿を見せるな」

交渉は成功したものの、ユダは拳王には嫌われたようだ。

騎乗のままそう言ってユダに背を向けた拳王の姿とそのオーラは、『…正直、メツチャ怖かった』らしい。

それでも立派にお仕事をしてきた夫を、とりあえず褒めちぎって撫でておいた。

…この後、何事もなければそれでいい。

けど、もしもこの後、物語の通りに拳王が動くのであれば、先にこの契約を破る事になるのは拳王の方だ。

そうなっても、兄とラオウが会うことにさえならなければ、兄の死の運命は回避できるはずだが…さて、この後わたし達はどうか動くべきか。

愉舵・いつか迎える最高の晩餐く2

居城をユダの副官のダカールさんに任せ、2人で向かったレイの暮らす村に、何故か懐かしい人の姿があった。

「やあ、久しぶりだねアイリ」

「え……シユウ様?!」

わたしは思わず駆け寄って、子供の頃によくそうしていたように、その人の胸に抱きついた。

年齢の離れたまだ若かった奥様が、数年前に核の病で亡くなられたあと、ひとり息子であるシバと共に旅に出てしまって、それ以来の再会だ。

「ユダか。南斗サミット以来だな」

「そうだな。」

というか、いつまで抱きしめておるのだ。

アイリは今は俺の妻なのだから、旧交を温めるにしても、ほどほどのところで手を離せ」

「ちよつと!」

シユウ様は兄の友達で、わたしも子供の頃にはずいぶんお世話になった方なの!

失礼な言い方しないでちようだい!!」

シユウ様はレイの親友…ではあるが、年齢は結構離れている。

何せ2人が知り合った頃にはシユウ様はもう結婚していて、一人息子のシバも生まれていた。

わたしとレイも7歳離れているので、わたしにとってのシユウ様は、今思えば感覚的に、親戚のおじさんくらいのイメージだったと思う。

レイがシユウ様と話がてら、こちらの地方の南斗の修業場で、手合わせなりなんなりしている間、わたしとよく遊んでいたシバは、別れた時はまだ10に満たない子供だったが、彼もそろそろ思春期に差し掛かる頃だろうか。

……そうだ、そういえば。

「あの、シバは元気ですか？」

「ああ、勿論だ。」

あいつも小さい頃、君に鍛えられたからね。

今日は連れてきてはいないが、帰って、アイリに会ったと言ったら、きつと羨ましがらるだろう」

「帰ったら、ダイナマイトは火をつけたら投げろと、アイリが言っていたと伝えてください！」

「…今際の際の妻と同じ事を言うのだな。」

それは一体どういう意味なんだ？」

え？奥様も同じこと言ってたの？今際の際に？

…ひよつとしてシユウ様の亡くなった奥様って。

「いいからさつきと離れぬか！」

俺は踏まれるのと罵られるのは好きだが、放置と寝取られは好まないので！」

と、わたしの夫が割とんでもない事言いだして、一瞬沈んだ思考の海から、強制的に引き上げられる。

「それ真面目な顔で言うなド変態!!」

「くろこっぷ!!!」

反射的に繰り出したわたしの左ハイキックをもちろに受けて、何故か嬉しそうな表情で倒れるユダは、やっぱり変態だと思った。

☆☆☆

「フフツ。」

どうやら夫婦仲はいいようで安心したぞ」

さつきのやりとりから何故そういう結論が出るのかが全くわからないが、村の長老の家に運び込まれてすぐに意識を取り戻したユダにシユウ様が声をかけ、ユダが何故か自慢げにそれに答える。

「当然だ。俺とアイリは互いに深く愛し合っておるのだから」

「あーうん、その事には敢えて異は唱えないけどね」

最初は打算で結んだ関係ではあるが、今はわたしの事を誰よりも大切にしてくれるユダを、なんだかんだでわたしも好きになってしまっている。

夫への純粋な愛情に、懐いてくる大型犬に対する感情みたいなのが少なからず混じってるのも否定はしないが。

：唐突になんか背中からしつかりハグされたその頭の上から『見るな、減る』とか聞こえた気がするが気のせいだろう。

そもそもシユウ様は目をご不自由な上、わたしはただでさえスレンダー体型なのに、これ以上減ってたまるか。

：…というか、原作で初登場した際の、デコルテ露わな薄いドレスに身を包んだアイリは、どことは言わないがそこそこ豊かだった気がするのだが、なぜ今のわたしはこんなにスレンダーなのだろう。

やっぱりあの場面に到達するまでの間に数多の男たちの手でm：止そう、これ以上考えたら吐く。

「…そうか。」

「どうやら、あの噂は嘘だったらしいな」

「……………噂？」

「ユダが居城に何人もの女性を囲っていると。」

アイリは、わたしにとつても妹の、更には娘のようなもの。

その夫が不実な真似をしているのであれば、少し口を出させてもらおうかと思っていた。

今日、この村を訪れたのも、まずその事をレイに訊ねようと思つたの事だったけど、先に君たちに会えて、結果的には良かったようだ」
レイとマミヤさんは今、何やらの用事で村の外に出かけていて留守で、帰ってくるのは早くて明日の昼過ぎになるらしい。

わたし達の訪問には、マミヤさんの弟のコウ君が対応してくれて、とにかく今日は泊まっていくように強く勧められ、今はマミヤさん達と暮らす家に、滞在する部屋を用意してくれているらしい。

初めて会った時はまだ子供だったのに、彼も今では随分しつかりしてきて、男の子の成長は早いなあと、なにげにしみじみ思ってしまった。

：…まあ、コウ君は最初に会った時から、時折どことなく言動がおっさん臭いところがあるのだが。

そんなコウ君が、わたし達が今話をしている部屋に入ってきて、水

の入ったコップをそれぞれの前に置いてくれ、ついでにわたしの方に視線を向けて、心配げに言葉をかけてくる。

「あの、城の女の人達って…もしかして『自衛団教室』の?」

「あ、うん。多分そう」

「ちよ、ユダさんものすごい風評被害受けてるじゃないですか。

そろそろちゃんと訂正してあげないと」

「そうなのよねえ」

わたしとコウ君のやりとりに、シユウ様の彫りの深い眉間に皺が寄る。

「…アイリは、何か知っているのか?」

その問いに、夫への誤解を解くべく、わたしは弁明の答えを返した。

「知っているも何も、居城に女の人を集めているのは、ユダではなくわたしなので」

「えっ?」

「…俺は反対したのだがな」

直前まであらぬ疑いをかけられていたユダが、少し不機嫌そうにそう呟く。

女性、特に美しい女性にとって、この暴力が支配する世界は地獄だ。

強い者の庇護がなければ、その尊厳も命も簡単に蹂躪されてしまう。

本来の生であればわたし自身が辿ったであろうその運命から、少しでも多くの女性を救いたいというわたしの、ほんのささやかな我儘だが、彼女たちには庇護されるだけでなく、自らの手で生活を切り開いていく技術や、自分や家族の命や尊厳を自分たちで守る為の、集団自衛的な知識を学んでもらっている最中なのだ。

(最初の頃はダカールさんに教官をお願いしていたのだが、どうもわたし達の最初の説明を誤解したらしい彼が、『殺られる前に殺れ』という理念で女性たちに『護身術』ではなく『暗殺術』を仕込もうとし、また女性たちに対しての態度も高圧的だったらしく若干評判が悪かった為、彼にはユダの副官の任に集中してもらおう事にした。やはり適材適所というものがあるのだろうか)

ちなみに今ここにいるコウくと、そしてわたしの義姉となったマ
ミヤさんも、何度か講義を聞きにきてくれており、村の自衛を『強い
1人』だけに頼らない考えを、積極的に村全体に広めてくれてい
る。うだ。

危険に備え、取り乱さず、皆で力を合わせることを。

人命最優先で行動し、無茶をしないこと。

弱い者には、弱い者なりの戦い方があるのだ。

…もつとも現時点では、強い男に愛されて生き残る心得的なことが
一番知りたいたと、わたしに訊ねてくる人が大部分なだけで。

…わたしの場合、生きるため幸せになるために、ただ必死だったと
しか言いようがないんだけどね！

ほんの僅かな運命の綻びを破り、わたしを攫いに来てくれたユダに
は、マジで感謝してもしきれない。

避けてきた運命の事を考えると、身体が冷たくなるけど、そんな
時、震えそうな身体を抱きしめてくれるのは、いつだってこの両腕。

わたしにとっては、世界で一番安全な場所だ。
だからこそ。

ユダに救われたわたしだからこそ、これからはその強さに頼るだけ
ではなく、彼の強さを支え補えるようにならなければ、この先もユダ
に愛され守られる資格なんかはない。

…：そんな事を思いながら隣の夫を見やり、目が合って微笑みかけ
てくれたのを皮切りに、その装飾過多な胸に凭れる。

「どうしたのだ、アイリ？」

「…考えたら、わたしの我儘を最初は反対しても、最後には聞いてくれ
て、そのサポートまで抜かりなくしてくれて、わたしは最高の夫を
持ったなと思って」

「そのような事は当然だ。

アイリがしたいと思うことはなんでも叶えるのが、この俺の愛の証
明なのだから」

そう言っただけをわたしを抱きしめたユダが、一瞬シユウ様に向けてもの
すごいドヤ顔をしたのをわたしは見えてない。絶対に見なかった。

「…そうか。」

かつて、わたしの妻が生前行なっていたのと、同じ理念なのだな」
何故かくすくす笑いながら言うシウ様の、亡くなった奥様は核戦争前、2人が暮らした村の村長を務めており、野盗の被害を受けて婚姻の機会を奪われた女性たちの自立支援の為に、彼女たちが働く場としての村おこしの産業を立ち上げたのだそうだ。

また早い段階から核シエルターの設置を提言したのも彼女であり、そのお陰で『審判の日』に亡くなった村人は居なかつたとも。

：今となつては確認する手段はないけど、きっと彼女、転生者だつたんだろう：『オレ』と同じように。

そしてシバのあの最期に関しては、彼女にしてみれば我が子のことだけに、思うところがあつたに違いない。

わたしにとつても、シバは弟同然。

彼女の最期の願いは、わたし自身の願いでもある。

だとすれば、彼や勿論その父親であるシウ様のことも、彼らがなんとか死なずに済むよう、先を読んで動いていかないと。

などと決意を新たにしたところで、最初の頃と比べて、望むことがどんどん拡大していることに気づく。

最初に物語を思い出した時はひとまずはわたしの、そしてレイの幸せを願っていただけだったのに、今は『その手段』として選んだはずのユダヤ、レイの奥さんになつてくれたマミヤさんと、その弟のコウ君。

そして今はシウ様もシバも、みんな幸せに、そして何よりも生きてほしいのだ。

コウ君の死亡フラグを折つた時のように、未来を先回りして変えることができるならば……

☆☆☆

あの日。

レイの執拗な情熱的なプロポーズにようやく頷いてくれたというマミヤさんの、二十歳の誕生日を祝う為に3人で向かつた村への道中、わたしが運転する車の助手席で、後部座席に向けて声をかけた夫

は、普段わたしに向けるのとは全く違う鋭い視線を周囲に向けた。

「…気付いたか、レイ？」

あの岩山の陰から、尋常じゃない数の気配がする」

「ああ…だが妙だな。」

あちらの岩陰からも、あの岩の大きさからは、到底有り得ない人数の気配がする。

一体どういう事だ？」

答えた兄も首を捻りつつ、周囲に警戒の目を向けるのに、わたしは心の中だけで納得していた。

マミヤさんの村を臨むこの岩山付近は、恐らくは『牙一族』のテリトリ（あくまでヒヤツハー基準）。

あの集団は1人の男とその子らによって結成された組織であり、確か雑兵的な存在として、やたらこまかいのが大勢いた筈だ。

…あんまり考えたくないし、勿論原作では語られてない部分だけど、恐らくあれは度重なる近親交配の果てに生まれた存在じゃないかと思う。

長である『牙大王』が、最初に子を産ませたのは攫ってきた女性達なんだろうが、産ませてはまた孕ませを繰り返して、母体女性たちが使い潰されて早々に亡くなっていった後で、単純計算で1/2の確率で生まれているであろう女兒たちが、ある程度成長した後は同じ運命を辿ったと思われるので。

つかそう思わないと、血族集団である『牙一族』が、男ばかりである説明がつかない。

多分『岩の大きさを越える気配』は、その雑兵的存在の奴らだろうと思う。

「アイリ、席を代われ。俺が運転する。」

おまえは、身を低くして隠れている」

車を走らせながら運転手交代とか、サラツと難易度高い事を要求してくる夫に、とりあえず逆らわずに頷く。

ここが文明が破壊される前の普通道路であるなら相当な危険行為だが、いま走っているのは荒野。

多少のハンドルの乱れで、周囲に迷惑をかける事にはならない。

「レイは周囲を警戒して、奴らが襲ってきたらすぐに対応できるようにしておいてくれ。」

「できる限りそうならぬように、なんとしてでも振り切るつもりであるが」

「わかった、ユダ。」

おれ達2人だけなら車を停めて戦ってもいいが、アイリを危険に晒すわけにはいかないからな」

「そういうことだ」

もうすっかり意志の疎通ができている兄と夫が、視線すら合わせぬまま頷きあうのを見て、わたしは安心して助手席の下の方に身を潜めた……筈だった。